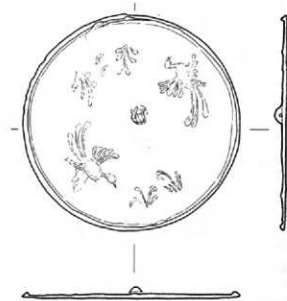


大宰府条坊跡 43

—大宰府条坊跡第 193・210・210-2・283・284 次調査、山ノ井遺跡第 1 次調査—



210ST010 淡紫色土出土 草文双鳥鏡

平成 25 年
2013
太宰府市教育委員会

『大宰府桑坊跡43』正誤表

修正した文字をゴチック体で記載している

頁・箇所	誤	正	
215頁 S-9	S-9	S-6	
	土師器	埴(4) 小皿(4) 人形? 破片	
	瓦類	平瓦(瓦文)	
	石製品	緑色片岩(1) 玉輪帯	
216頁 S-20 明黄茶色土	S-9 明黄茶色土	S-20 明黄茶色土	
	土師器	小皿a	
	須原陶器	壺	
	須原陶器	壺V (1)	
215頁 茶色土	茶色土	茶色土	
	明安窯系青磁	碗・皿(1)	
	土師質土器	漆器 火鉢	
	須原質土器	漆鉢	
	肥前系陶磁器	染付皿(玉花系スチフ) 碗(スチフ) 角皿 皿 柄 染付皿(見込み地/日ハ) 磁利	
	須原陶器	須 柄 壺 磁利 筒形 小型土師 漆鉢 行平(近世)	
	須原陶器	壺 白磁陶 磁片(白磁)	
	青白磁	樽類(1)	
	瓦類	平瓦(瓦質、調目) 丸瓦(瓦質、調目) 丸瓦(土師質、無文) 瀬川瓦 サツ瓦	
	石製品	緑色片岩(42) 玉輪帯(阿蘇郡民部)	
	215頁 黄色土	黄色土	黄色土
		土師器	埴(4)
		土師質土器	火鉢
肥前系陶磁器		染付皿(近代)	
須原陶器		壺	
須原陶器		陶 青磁等形壺	
白磁		壺; 耳壺II	
瓦類		平瓦(瓦質) 平瓦(須原質、無文) 瀬川瓦 平瓦(須原質、無文) 丸瓦(須原質、無文) サツ瓦	
石製品		玉輪帯(阿蘇郡民部) 緑色片岩(4)	
215頁 灰茶色土		灰茶色土	灰茶色土
		土師器	埴(4) 小皿(4) 破片(須原系)
		明安窯系青磁	碗・皿(2) 皿-M2 皿-M1 破片(1) 壺; 壺
		高麗青磁	漆鉢; 碗(1)
	土師質土器	火鉢	
	瓦質土器	漆鉢 破片	
	肥前系陶磁器	染付; 柄 皿 須原系陶磁器 須 柄(内裏行平文) 壺 壺 漆鉢; 破片	
	須原陶器	壺; 壺(厚口)	
	白磁	樽類(1)	
	青白磁	樽類(1)	
	中国陶器	壺; A-2(1) 皿(未分類)(1)	
	瓦類	丸瓦(瓦質、無文) 平瓦(須原質、無文) 瀬川瓦 平瓦(土師質、調目) 平瓦(須原質、調目) 瀬川瓦	
	石製品	阿蘇郡民部 緑色片岩(6) 石斧?	
216頁 黄土	黄土	黄土	
	須原陶器	壺	
	土師器	小皿(4)	
	明安窯系青磁	碗・皿-M(1)	
	土師質土器	漆	
	肥前系陶磁器	染付; 柄 壺 磁鉢; 碗 鉢	
	須原陶器	陶 漆鉢 壺(文字有神社; 見込み籠入り) 鉢? 瓶? 壺?	
	須原陶器	埴(真人) 柄 碗(ワシ小; 近代) 染付小坏(近代)	
	白磁	壺; B-1(1)	
	中国陶器	壺; A-1(1)	
	瓦類	丸瓦(瓦質、無文) 平瓦(須原質、二重格子) 瀬川瓦	
	石製品	緑色片岩(1) 玉輪帯(阿蘇郡民部)	
	土製品	シロコシ焼?	

大宰府条坊跡 43

—大宰府条坊跡第 193・210・210-2・283・284 次調査、山ノ井遺跡第 1 次調査—

平成 25 年
2013
太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の北側に位置する四王寺山の東南裾に展開する大字山ノ井、朝日地区で行われた、大宰府条坊跡に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書です。

今回、報告する地域は「府の大寺」として知られている観世音寺の北東部にあたります。ここには観世音寺に付随して四十九あったと伝わる小～中規模な寺のあつまりがあり、これを観世音寺子院群と総称しています。また、朝日地区の南には少弐氏に関係するとみられる御所ノ内地区の中世遺跡群、北東方向には仁治2年(1240)に随乗坊すいじょうぼう湛慧たんゑによって創建された臨済宗大徳寺派の横岳崇福寺跡があるなど、歴史的に貴重な遺跡が点在しております。

本書は平成9年度と22年度におこなった国庫補助事業による個人住宅建築に伴う緊急発掘調査と、平成12年度におこなった宅地造成に伴う発掘調査と同年度に公園整備に伴う国庫補助事業による範囲確認調査、平成23年度におこなった国庫補助事業による重要遺跡範囲確認調査を収録しており、古代から中世にわたる貴重な遺構と遺物を紹介しております。

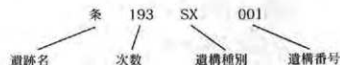
本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々から心からお礼申し上げます。

平成25年3月
太宰府市教育委員会
教育長 木村 基治

例言

1. 本書は太宰府市観世音寺5丁目で行われた大宰府条坊跡、山ノ井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.(座標北)を示し、本文中に記載される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SA欄列跡、SB掘立柱建物跡、SD溝、SE井戸、SF道路状遺構、SI住居跡、SK土坑、ST墳墓、SXその他の遺構などであり、略号として以下のように記載している。

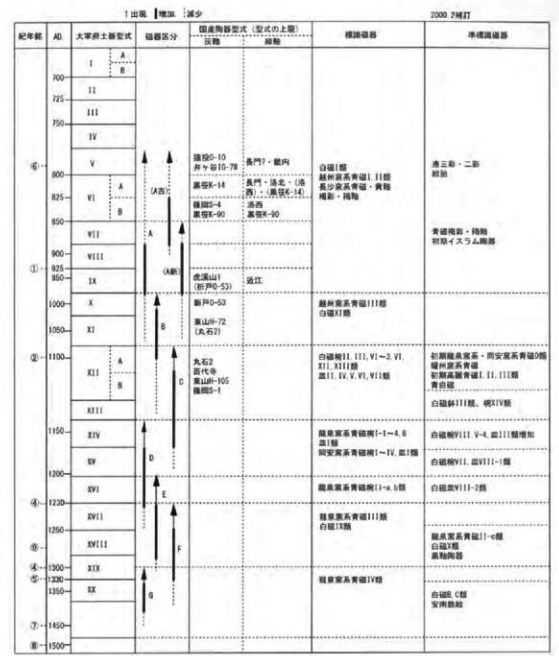


4. 遺構の実測は、発掘調査担当者および、調査補助員平島義孝(現株式会社埋蔵文化財サポートシステム)が行った。航測測量についてはアジア航測株式会社にて、平板地形図測量は埋蔵文化財サポートシステムに委託をした。
5. 調査の空中写真撮影は(有)空中写真企画(代表藤山広宣)並びにアジア航測株式会社が行った。
6. 遺物の実測は山村信榮、宮崎亮一、高橋学の他は、福井門、吉富千春、今岡一恵、西野元勝(現小城市教育委員会嘱託)が行った。
7. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。金属製品の整理接合・復元作業・保存処理業務は株式会社タクトに委託した。
8. 遺物の写真撮影はフォトハウス岡、山村が行った。
9. 表入力・写真整理は瀬戸口みな子、市川晴美、中原順子、吉村有紀が行った。
10. 遺物の整理作業全般に、遠藤西、白石溪淳(現大野城市教育委員会嘱託)の助力を得た。
11. 図の浄書は調査担当者および遺物実測者が行った。遺構図のデジタルトレースについては、一部株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託をした。
12. 本書に用いた分類は以下のとおり。
須志惠・・・『宮ノ本遺跡II一窯跡篇一』(太宰府市の文化財第10集)1992
陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV一陶磁器分類一』(太宰府市の文化財第49集)2000
土器・・・『大宰府条坊跡III』(太宰府市の文化財第7集)1983
瓦・・・『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覽』九州歴史資料館 2000
『宝満山遺跡4』(太宰府市の文化財第79集)太宰府市教育委員会 2005
瓦質・土師質土器・・・山村信榮『太宰府出土の瓦質土器』『中世土器の基礎研究VI』1990
13. 第210次・210-2次調査の現地と整理作業時には、狭川真一氏(財)元興寺文化財研究所)にご指導ご教示をいただいた。また、条210表土出土の層塔については、井形進氏(九州歴史資料館)にご指導ご教示をいただいた。
14. 執筆は目次に示すとおりである。編集は高橋が担当した。

目次

I. 調査地周辺の地理的・歴史的環境	(高橋) 4
II. 調査体制	(高橋) 6
III. 調査および整理方法	(高橋) 8
IV. 調査報告	
1. 大宰府条坊跡第193次調査	
(1) 調査に至る経過	(山村) 9
(2) 基本層位	(山村) 9
(3) 検出遺構	(山村・高橋) 11
(4) 出土遺物	(高橋) 33
(5) 小結	(山村) 83
2. 大宰府条坊跡第210次調査	
(1) 調査に至る経過	(高橋) 111
(2) 基本層位	(高橋) 111
(3) 検出遺構	(高橋) 111
(4) 出土遺物	(高橋) 138
(5) 小結	(高橋) 186
(6) 大宰府条坊跡第210次調査隣接地調査について	(高橋) 193
3. 大宰府条坊跡第210-2次調査	
(1) 調査に至る経過	(高橋) 195
(2) 基本層位	(高橋) 195
(3) 検出遺構	(高橋) 196
(4) 出土遺物	(高橋) 201
(5) 小結	(高橋) 210
4. 大宰府条坊跡第283次調査	
(1) 調査に至る経過	(宮崎) 217
(2) 基本層位	(宮崎) 217
(3) 検出遺構	(宮崎) 217
(4) 出土遺物	(宮崎) 221
(5) 小結	(宮崎) 229
5. 大宰府条坊跡第284次調査	
(1) 調査に至る経過	(宮崎) 235
(2) 基本層位	(宮崎) 237
(3) 検出遺構	(宮崎) 237
(4) 出土遺物	(宮崎) 239

(5) 小結	(宮崎) 243
6. 山ノ井遺跡第1次調査		
(1) 調査に至る経緯	(山村) 247
(2) 基本層位	(山村) 247
(3) 検出遺構	(山村) 247
(4) 出土遺物	(山村) 249
(5) 小結	(山村) 252
V. 特論	(高橋・西野) 256
VI. 総括	(高橋) 264



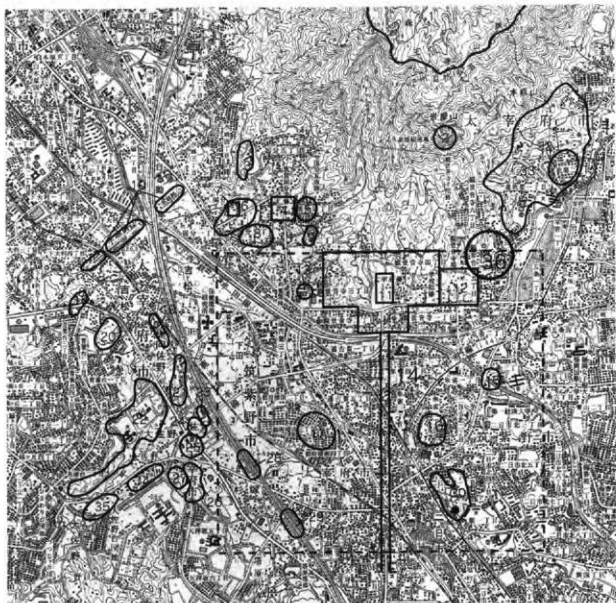
紀年表資料

①A. D. 927 延喜5年 大宰府74次92506A遺
 ②A. D. 1091 寛治5年 平安京東山141258井戸
 ③A. D. 1174 長治2年 大宰府32次92505遺
 ④A. D. 1204 嘉元2年 大宰府109 111次9250200遺
 ⑤A. D. 1330 元禄2年 大宰府40次91200遺
 ⑥A. D. 1748 延享2年 幕府422次92501200遺
 ⑦A. D. 1458・1465 長祿2・寛治5年 福原市井原部511・5216土
 ⑧A. D. 1601 文禄元年 大宰府70次9250505遺
 ⑨A. D. 1695 文久2年 博多62次713土遺

文献

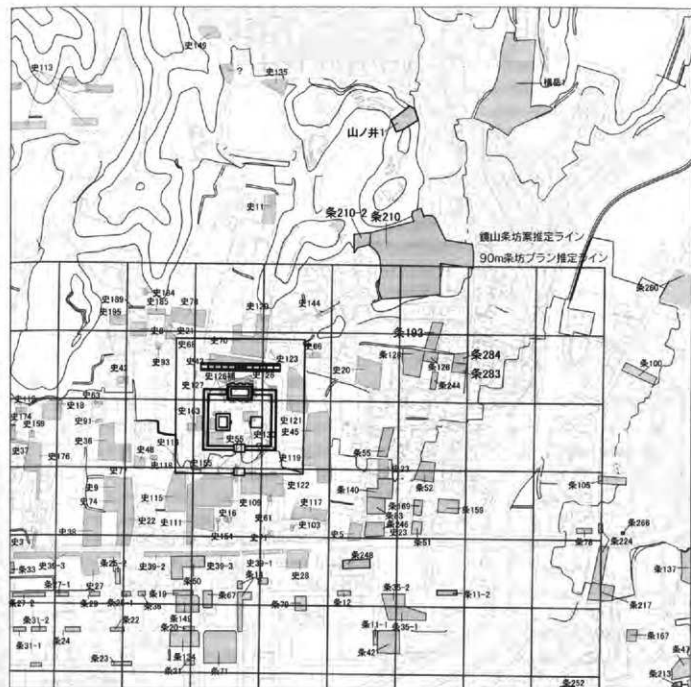
①九州歴史資料館「大宰府史跡856年度発掘調査報告」1982
 ②田辺昭三、西川義康「平安京東山141258井戸」1975 平安京研究会
 ③九州歴史資料館「大宰府史跡856年度発掘調査報告」1975
 ④九州歴史資料館「大宰府史跡853年度発掘調査報告」1979
 ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡852年度発掘調査報告」1977
 ⑥福岡市教育委員会「山ノ井遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告第1集) 1989
 ⑦福岡市教育委員会「井原部遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告第7号) 1998
 ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡855年度発掘調査報告」1987
 ⑨福岡市教育委員会「博多43」(福岡市埋蔵文化財調査報告第37号) 1995

Fig.1 大宰府出土土器型式と国産陶器・貿易陶磁編年



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 厚口遺跡 | 28. 剣原遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 篠原遺跡 | 29. 唐人家遺跡 |
| 3. 庵ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 基・善相遺跡 (●は軍火庫跡) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀国印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 客館跡推定地 (西跡跡庫庫跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府桑坊跡(破綻内) | 23. 藤川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 若瀬遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 備笠印出土地 | 18. 神ノ前遺跡 | 27. 殿蔵戸遺跡 | 36. 報告現場一帯 |

Fig.2 太宰府市周辺遺跡分布図 (1/30000)



●○次…大宰府桑坊跡第○次調査 [大宰府市教委 調査分]
 史○次…大宰府史跡第○次調査 [九州歴史資料館 調査分]

Fig.3 調査地と周辺調査地点 (1/5000)

I. 調査地周辺の地理的・歴史的環境

地理的環境

太宰府市は福岡県の中央部に位置し、福岡市の南東約16km付近に立地する。北は四王寺山、東に宝満山があり、市を縦貫する御笠川は、宝満山に源を発して市街地を通り、途中霧田川、大佐野川と合流し、特別史跡水城跡を越えて、末は博多湾に注いでいる。地形的には福岡市から久留米に抜ける交通の要所に位置し、南北の山稜に挟まれた峽間地である。調査地点は平野部、平野と丘陵の接合部、丘陵部と多岐にわたっているが、おおむね四王寺山から南へ派生する舌状丘陵と、その突端部に接合するなどらかな平坦面に遺構が点在している。

歴史的環境

調査地は、字名でいうところの「山ノ井」、「朝日」の範囲に点在している。山ノ井の地名は南北朝期にはすでに確認されている。永和2年(1376)に、二条良基が九州探題今川了俊にあてた歌謡書「九州問答」に「宰府山ノ井ニテ 山ノ井ノ陸サヘシゲル木ズ工哉」と周阿の作を載せており、連歌師周阿が大宰府の山ノ井の地で、連歌を催したことが知られている。朝日の地名は、『筑前國續風土記拾遺』によると以下の通りである。

「朝日山 横岳に境へる小山の名なり。太宰少貳貞経入道妙恵の弟に朝日但馬守資治(鎮西要路に資信に作る。)其子資真經法等世に朝日氏と稱す。此地より出たる家名なり。大内家筑前を押領せし後は子孫富國を去て肥前國にあり。今の崇福寺の内に朝日地蔵とて有ハむかしここに在りしを崇福寺を箱崎の松原に移されしときかして地蔵も移せり。依て名づく。」また同じく『筑前國續風土記拾遺』によると、朝日地蔵付近はもと崇福寺の境内で、佛性寺という塔頭の址であったという。佛性寺はおそらく「ブッシュウジ」と発音するのであり、これは観世音寺49子院の1つ「仏蘭寺」と同じ寺をさしていると推測できる。

現地の位置関係から朝日地蔵の付近は、横岳崇福寺の境内域と観世音寺子院群の境となっており、両方の勢力がぶつかる拠点のため、このような伝承の混在が生まれたものと思われる。「太宰府横岳山諸伽藍図」には朝日地蔵、朝日山としか記されていないため、横岳崇福寺の伽藍内に「ブッシュウジ」という寺があったかどうかは不明であるが、このあたりの古寺址の伝承が江戸期まで伝わっている点を重要視しておきたい。また、象坊第193次調査地点の道路を挟んだ北側の丘陵までの平坦地に建てられている家の屋号を、地元ではブッシュウジと呼んでいることも大きな証左となろう。また字朝日の南側には少貳氏の居館があったと推定される字御所ノ内もあり、重要な政治拠点にも近接していることは注目される点である。

この地域の歴史を語るときに観世音寺と横岳崇福寺の二つの大寺の歴史の展開は欠かすことができない。まずは観世音寺に注目してみたい。観世音寺の創建は、『統日本紀』和暦2年(709)の元明天皇の詔から、天智天皇が母斉明天皇のために発願し建立したのが始まりとされる。天智天皇在命の詔であるならば、遅くとも671年以前には建設の計画が建てていたことになる。伽藍造営の段階は複数に分かれていたと推測されるが、天平17年11月に僧玄昉が大宰府に派遣された後、天平18年(746)6月に観世音寺は完成したと記録されている。(『元亨釈書』)観世音寺は大宰府政庁から東へ4町ほどしか離れておらず、後に府(太宰府)の大寺と称されるほど大宰府と緊密な関係が立地の上からうかがえる。古代の観世音寺は、大宰府という巨大な権力の後ろ盾があったうえに、荘園経営が頭固にす

み発展を続けた。しかしながら、古代末になると、その威光に陰りが見受けられる。1つはたび重なる災害が要因となる建物の被災によるもの。2つには後ろ盾となる大宰府自体の衰退。3つには信仰の変容。また、康和2年(1120)には奈良東大寺の末寺となっている。これも衰退の原因の1つとしてあげられよう。そうしたなか中世以後は武家に庇護をもとめていく。とくに建久7年(1196)に太宰少貳を任じ鎮西守護職となった資頼を祖とする少貳氏一族は観世音寺に対して積極的に保護をしている。中世段階でのこうした武家による庇護の表れが、観世音寺子院と伝えられる49院の伝承に繋がっていると考えられる。

観世音寺子院群のはじまりは、武藤資頼が観世音寺の近くに安養院、華嚴院以下2院を建てたことが契機となった可能性が高く、その具体的な時期は1196～1228年の間と考えられている。これ以後、観世音寺の周辺には子院とよばれる寺院が点在することとなる。おそらく、子院の規模は大小あり、それぞれ成立の背景が異なることも影響してか、子院それぞれの伝承が現在までほとんど伝わっていない。そのため子院の位置を推定できるものもおおよそ半数に過ぎない。少貳氏が太宰府を追い抜いた後は、大内氏が筑前に進出してくる。以後、高橋、豊臣、小早川などの武家勢力により寺額が没収され、没落し拍車がかかった。近世になると博多商人の尽力で講堂が再建されるが、黒田藩による積極的な修繕はなかったと思われる。その後、元禄16年(1703)には戒壇院が分離独立して律宗の寺院となった。さらに寛政2年(1790)には宗旨改めによって観世音寺は安樂寺延寿院の支配下となり、府の大寺と称せられた威光は見られなくなった。近現代の人々も、観世音寺復興会を始めるなど地域の方々の努力と、国、県、町(のち市)の援助により往時の姿を取り戻してきているといえよう。

横岳崇福寺は仁治元年(1240)に圓乗坊湛慧によって建立された禪宗寺院(臨濟宗)である。建立の翌年、湛慧は中国の宋から帰国した師である聖一國師(円爾弁円)を迎えて開堂した。聖一國師は、1年の在寺の後、都に上り、仁治3年(1242)には、博多に承天寺を建立して、禪の普及に努めることとなる。崇福寺は、文永9年(1272)には、湛慧の要請に応じて、南浦紹明(後の大応國師)が開山することとなる。大応國師は中国の元軍が襲来した文永・弘安の役に当たって、大宰少貳武藤資頼のもとで、元軍との折衝役としても活躍している。そのため武藤少貳氏との結びつきは強かったと推測できる。開山以後、太宰府の地に33年にわたってとどまることとなり、禪寺として発展していく。崇福寺は、武藤氏の庇護のもと、大応派の名僧の活躍とともに名声を高めていき、隆盛時には、現在の太宰府市の白川(旧小字横岳)辺りから東観世田地一部に広がる広大な地に伽藍が展開した。史料や伝承によれば禪宗様式の七堂伽藍他に、十三塔頭、十七庵を擁した立派なものであり、天正年間の豊原摩津氏の岩屋城攻めの際に、兵火に巻き込まれて伽藍の大半を焼失するまで三百数十年法灯は絶えることがなかったとされている。

注目されるのは朝日地蔵に伝わる説話で、「観世音寺の節分の行事に巻き込まれ、鬼と叩かれた湛慧禪師は、自らを嘆き朝日山の東麓に穴を掘り、読経を唱えそのまま息絶えた」というものである。朝日地蔵のある場所は元々、「開基崇慧禪師塔 延寛二年 吉塚宗世建」と記された碑が建てており、明治30年11月まではその存在が追える。延寛二年は西暦1674年。また、大野城太宰府田蹟全國北文化3年(1806)成立かりにも現地付近に「タンエトウ」と記載されているため、江戸時代に碑もしくは塔はあったと考えられる。

この湛慧の話は、旧来の宮寺であった観世音寺と新しく台頭した横岳崇福寺との対立関係を表していると思われる。実際には湛慧の学徳ゆえか、横岳崇福寺は公の寺(官寺)として認められ、その後隆盛を誇った。このように今回報告する地域は、歴史的にも古代から中世にかけて政治の中心地に近く、宗教施設が展開する重要な地域となっている。

考古学的所見

大宰府条坊跡第193次（以下、大宰府条坊跡については条と略す）の周辺にあたる字朝日地区では、数回の埋蔵文化財の発掘調査が行われている。条193次の南側で条126次調査。南東側で条128次調査。条126次の南側では条244次調査。条128次調査から観世音寺方向に向かうと、九州歴史資料館が調査した大宰府史跡第20次調査がある。（以下、大宰府史跡については史と略す）条126次は11～14世紀代の遺構で構成され、井戸や溝、土坑などが検出されている。特に南北方向の2条の溝（SD050、SD095）については、調査担当者は11世紀前半に埋没した大宰府条坊関係のものとしている。条128次は遺構面が3面検出されており、8世紀～13世紀後半までの遺構が確認されている。第1面で調査している12世紀中頃～13世紀後半の遺構としては、壁溝を有する構築物、桶組井戸、底裏土坑などが確認されている。条244次調査は、8世紀代～14世紀初頭の遺構で構成されているが、鎌倉時代以降は削平により確認できない状態だった。史20次調査では、南北方向の落ち込みと東西方向の石垣を検出している。土器は土師器の坏、皿で底部切り離し技法が条切りのため12世紀以降の可能性が考えられる。調査担当は鎌倉期後期～室町期と推定している。

参考文献

『筑前國續風土記拾遺』

『大宰府市史考古資料編』1992年 太宰府市

高倉洋彰『大宰府と観世音寺』1996年 海鳥社

『大宰府史跡 昭和47年度発掘調査略報』1973年 九州歴史資料館

II. 調査体制

各年次の調査体制は以下の通りである。

（平成9 / 1997年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一（9年10月1日～）
	主任技師	狭川真一（～9年9月30日）
	技 師	城戸康利、山村信榮（調査担当）、中島恒次郎、井上信正
	技師（嘱託）	高橋 学（調査担当）、宮崎亮一
		下川可容子、森田レイ子

（平成12 / 2000年度）

総括	教育長	長野治己（～12月24日）
----	-----	---------------

庶務	教育部長	關 敏治（12月25日～）
	文化財課長	白石純一
	文化財保護係長	木村和美（4月1日～）
	文化財調査係長	和田敏信
		山本信夫（～10月23日）
		神原 聡（11月1日～）
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	野寄美希
	嘱 託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮、中島恒次郎、井上信正、高橋 学（調査担当）、宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子、森田レイ子、佐藤道文

（平成22 / 2010年度）

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	山田純裕
	文化財課長	井上 均
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	池本義彦
	主任主査	吉原慎一
	事務主査	橋川史典
調査	主任主査	城戸康利（都市整備課併任）
		山村信榮、中島恒次郎、井上信正
	技術主査	高橋 学、宮崎亮一（調査担当）
	技師	遠藤 茜
	技師（嘱託）	白石溪芽

（平成23 / 2011年度）

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	齋藤廣之
	文化財課長	井上 均
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	池本義彦
	事務主査	橋川史典
	主 事	古川あや
調査	主任主査	山村信榮（調査・整理担当）、中島恒次郎、井上信正
	技術主査	高橋 学（整理担当）、宮崎亮一（整理担当）
	主任技師	遠藤 茜
	技師（嘱託）	白石溪芽

(平成 24 / 2012 年度)・・・報告書発行

総括	教育長	關 敏治 (～12月1日)
		木村基治 (12月25日～)
庶務	教育部長	古野洋敏
	文化財課長	井上 均 (～6月30日)
		菊武良一 (7月1日～)
	文化財副課長	城戸康利 (7月1日～)
	保護活用係長	菊武良一 (～6月30日)
		友添浩一 (7月1日～)
	調査係長	山村信榮
	事務主査	橋川史典
	主事	古川あや
調査	主任主査	中島恒次郎 (～6月30日)
		井上信正
	技術主査	高橋 学 (整理担当)
		宮崎亮一
	主任技師	遠藤 茜
事務取扱	景観・歴史のまち推進係長	中島恒次郎 (文化財課併任) (7月1日～)

III. 調査および整理方法

太宰府市教育委員会では、1979 (昭和 54) 年から現在まで市の事業の一環として、埋蔵文化財包蔵地区内の埋蔵文化財発掘調査を行ってきた。調査方針や整理方法については、詳しくは参考文献を参照していただきたい。この調査方針ならびに太宰府市発掘調査整理指針を元に、太宰府市の調査・整理方法については熟成が為されてきた。その特徴としては、担当職員が複数存在しても、同じ調査・整理の質を保てるように、調査、整理、報告の各作業において遵守すべきルールを作成している点にある。もちろん、各担当者の裁量の範囲内で多少、弾力的な運用は行っているが、骨子の部分が共通していることが資料の信頼性の向上につながっていると考えている。

今後は担当者の退職などで未整理のままとなっている多くの発掘調査現場の報告書の刊行が課題となってくる。増え続ける出土品の保存場所と共に解決していかなければならない問題である。

【参考文献】

- 『太宰府条坊跡』太宰府市の文化財第 5 集 太宰府市教育委員会 1982
 『太宰府・佐野地区遺跡群 II』太宰府市の文化財第 14 集 太宰府市教育委員会 1989

IV. 調査報告

1. 大宰府条坊跡第 193 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市観世音寺 5 丁目 7 (旧大字観世音寺字仏願寺) に所在する畑地で、専用住宅の建築に先立ち、平成 9 (1997) 年 4 月 17 日から 9 月 29 日にかけて国庫補助事業で発掘調査を実施した。調査の途中で観世音寺寺院に係わる可能性のある建物群が確認されたため、地権者と交渉をおこなったところ遺跡の保護に同意があったため、調査は基本的に検出面で止め、1 面目の遺構が深かった調査区南東側の F5 区周辺の一部を掘削し 2 面目の遺構の確認をおこない、その後に埋め戻しをおこなった。調査は高橋学と山村信榮が担当した。開発対象面積は 700 m²、調査面積は 570 m²である。

(2) 基本層位 (Fig.4)

遺構は耕作土直下の現地表面から深さ 0.2m で確認された。面は四王寺山のある北側に高く御笠川のある南側に向かって緩やかな傾斜を持ち、調査区北側の遺構検出面のレベルは標高 45m、南側では 44.5m を測る。掘削深度の深い SE030 壁面での土層観察では最初の遺構確認面から無遺物層と思われる層までの深さは 1.4m を測り、その間に 7 面の層面が確認されている。

調査区東壁土層図



調査区 2 面西壁土層図

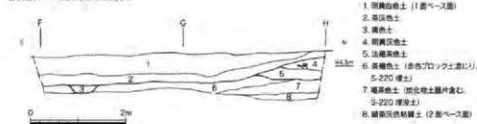


Fig.4 第 193 次調査調査区東壁土層図、調査区 2 面西壁土層図 (1/80)

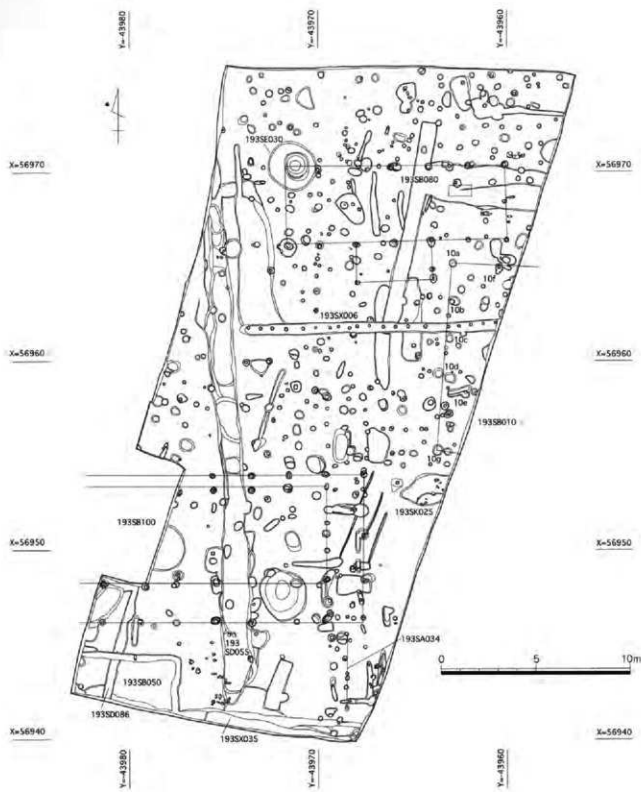


Fig.5 第193次調査遺構図 (1/200)

(3) 検出遺構 (Pla.1-1)

1面遺構

構

193SA034 (Fig.7)

調査区南東で確認された間以上の南北の柵で、振れはN-1° 42' 35" -Wを測る。柱間は北から1.2、1.2、1.5mの南北3.9mを測る。この南側は地形上の段落ちとなっている。連続する土坑群 SX036、037、086に並行しており、関連性が指摘される。また、この遺構の北にある掘立柱建物 SB100とも方位を同じくして近接しており、どちらとの関係も考慮する必要があるが、先の土坑群とSB100は重複して前後関係があり、掘削先により性格が大きく異なることになる。12世紀後半以降の遺構 SK073を切って形成されており、それより新しい時期のものと言える。

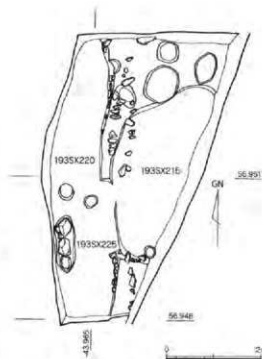


Fig.6 第193次調査2面遺構図 (1/80)

掘立柱建物

193SB010 (Fig.7)

調査区中央東側で検出された遺構で、1間×5間以上の南北棟の建物で東側の調査区外に広がって展開するものと考えられる。振れはN-1° 21' 50" -Eで、建物の規模は東西3.5m以上、南北10m以上、柱間は東西2.5m、南北2.0mを測る。柱の太さは柱痕から約20cmに復元される。築地壁の基礎地盤跡の可能性のあるSX006と交差するため、それと関連するとみられる掘立柱建物 SB080とは時期差があると考えられる。調査区内では唯一の南北棟である。柱穴からは13世紀中頃までの遺物が出土しており、築地壁 SX006は14世紀後半までの遺物を持っており、この間に建てられたか、それ以降に成立したかは物理的な先後関係からは判断できない。

193SB050 (Fig.8)

調査区南西側で検出された遺構で、溝が矩形に掘られた上から径15cmほどの柱が約1.2~1.5m間隔で打ちこまれている。柱痕は6つ確認されている。掘り方を伴わず形状がやや先細っているため、上から杭のように打ち込まれたものと考えられる。条坊88次や南条坊で先行事例があり、工房などに利用された壁建ちの建物と評価されている遺構である。振れはN-2° 23' 9" -Eを測る。溝中に掘り返した痕跡や柱間に礎盤のような石が置かれていることから、建て替えや補修があった可能性がある。溝からは銅鏡のほか13世紀中頃までの土器類が出土している。西側は13世紀前半までの遺物を持つ溝 SD086を切り、南側は16世紀の遺物を持つ段落ち SX035により切られる。

193SB080 (Fig.9)

調査区北側で検出された東西棟の掘立柱建物で、東西6間、南北2間、東西11.5m、南北4mを測る。柱間は西端の1間(1.6m)を除けばほぼ2m間隔で施工されている。平板な花崗岩の角柱礎を礎盤とし、柱材は柱痕から15cm程度に復元される。東西中央の2間分の南側に幅4m、長さ2mの庇が設けられる。建物の振れはN-0° 51' 34" -Wを測る。柱掘り方からは13世紀中頃までの遺物が出土している。

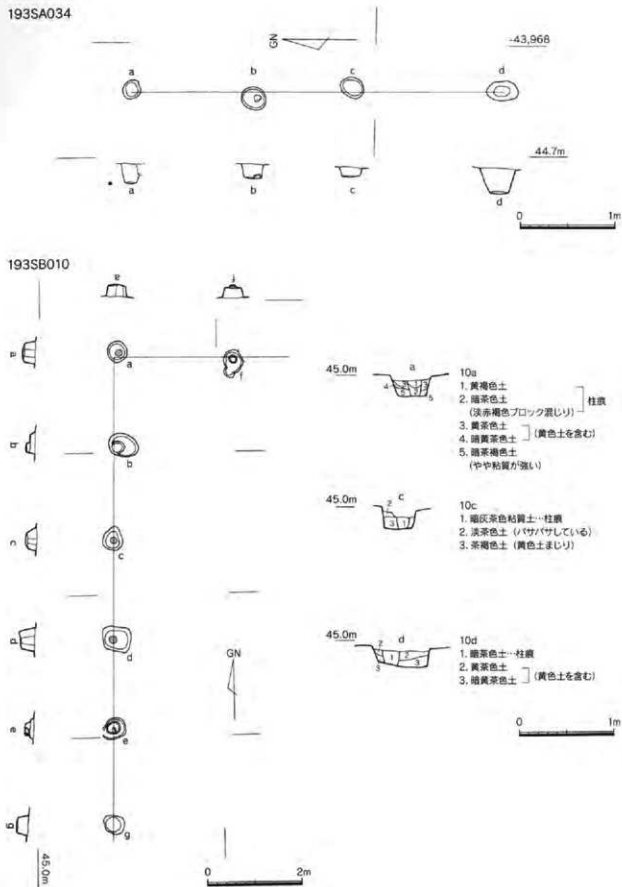


Fig.7 193SA034・193SB010 (1/40, 1/80, 土層図は1/40)

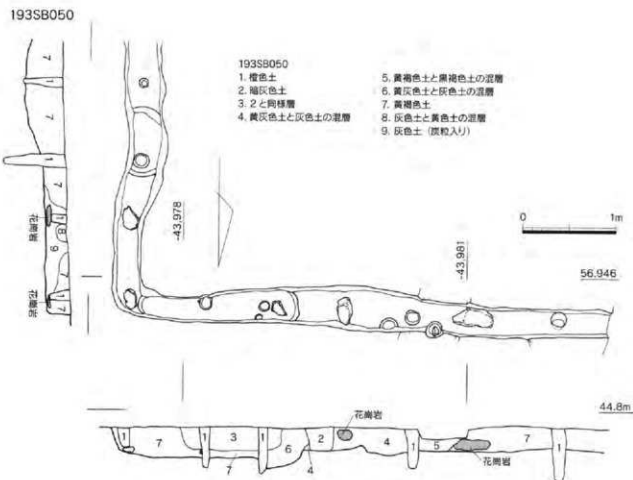


Fig.8 193SB050 遺構図 (1/40)

建物の北西角は13世紀中頃までの遺物を持つ井戸 SE030 に切られており、それに先行する時期に位置付けられる。南に延びる連続する土坑群 SX036、037、086の正面にあたるため、そらちとの関係があるのかもしれない。

193SB100 (Fig.10)

調査区南側で検出された東西棟の独立柱建物で、東西7間以上、南北4間、東西13.9m、南北7.75mを測る。南北と東側には庇があり、身舎は6×2間となる。検出された柱29に対して19個に花崗岩の小礫による礎盤が入られている。柱材は柱痕から15~20cmであったことが知られる。建物の振れはN-0° 30' 47' -Wを測る。本調査区中では最大で、3面以上に庇を持つ主観的な建物といえる。14世紀前半までの遺物を持つ193SK098、15世紀までの遺物を包含する溝SD055の埋土を穿って建てられており、それ以降の時期の建物といえる。柱ap、aq、bd、などに繰り返した不整合な土層が観察され、建物解体時に柱が掘り取られたものがあつた可能性がある。庇を持つ建物の構造から、居館の主屋か仏殿のような性格が考えられる。建物の正面にはこの建物に先行した時期に小堂の基礎と考えられるSX224があり、仏殿であった可能性も想定される。

溝

193SD055 (Fig.11)

調査区の西端を穿つ、検出長30m、幅1.2~1.6m、深さ0.2~0.3m、振れがN-2° 23' 35"

193SB080

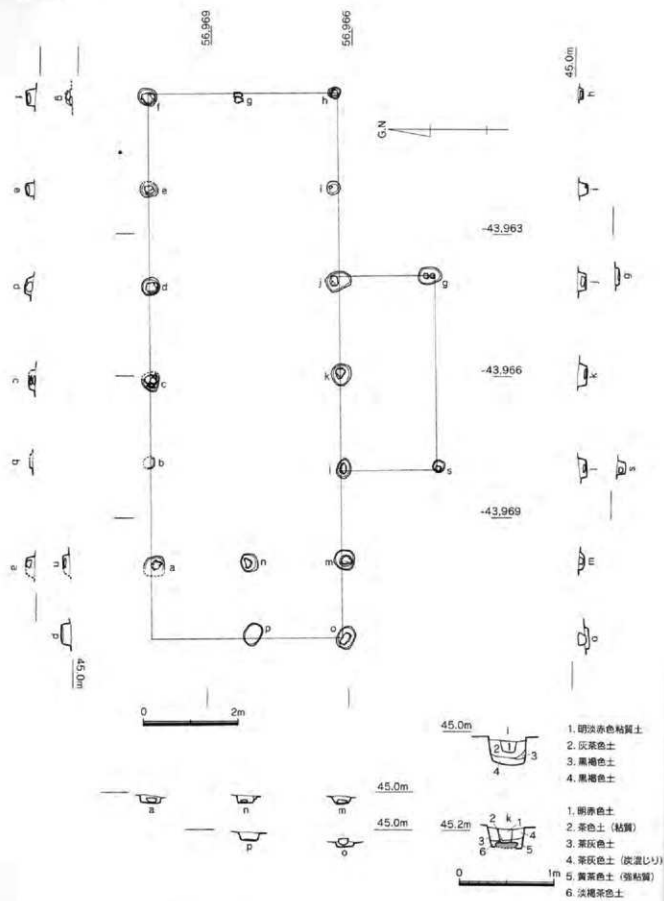


Fig.9 193SB080 遺構図 (1/80、土層図は 1/40)

193SB100

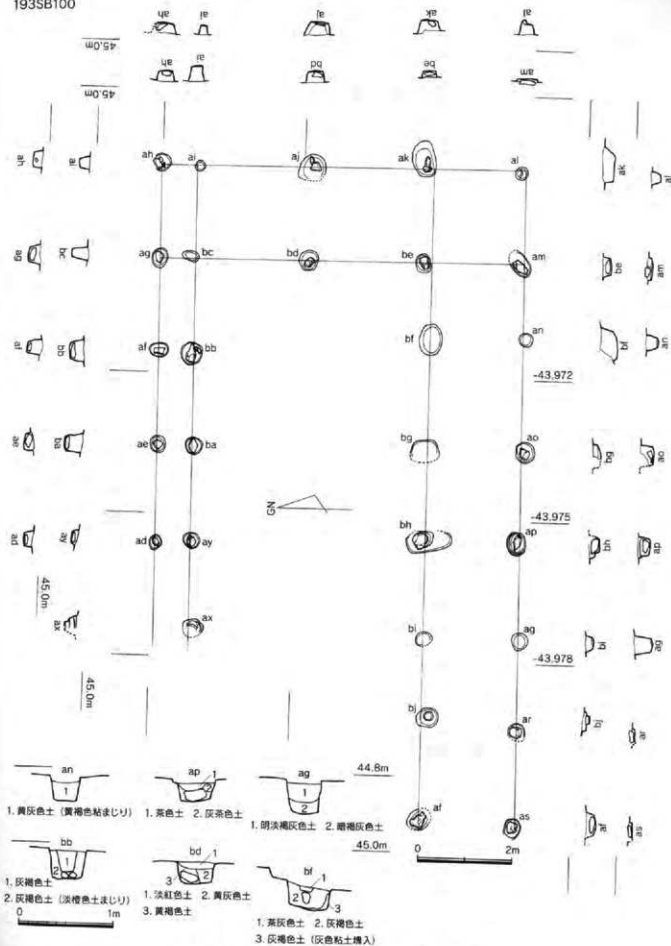


Fig.10 193SB100 遺構図 (1/80、土層図は 1/40)

-Wを測る南北溝である。溝底は一時的な水流により特に北側で凹凸が見られる。埋没土である最上層の明茶色土には15世紀代までの遺物を包含している。それ以下の層には13世紀後半までの遺物が見られる。掘立柱建物SB100に先行する遺構である。掘立柱建物群よりもやや東に傾いた方向を持っている。

193SD078 (Fig.11)

調査区の南中央付近にある遺構で、検出長2.7m、幅0.5～0.2m、深さ0.05m。振れは東西の正方向に乗る溝である。埋土は13世紀中頃までの遺物を包含している。この溝の西延長部分のSD055の溝の東側のラインが東側に膨らんでおり、本来はつながって一体であった可能性もある。

193SD086 (Fig.11)

調査区の南西角にある遺構で、検出長6m、幅0.6～0.3m、深さ0.1m。振れはN-11° 27' 30"-Eを測る。13世紀前半までの遺物が出土している。SB050に先行する遺構である。

193SD121 (Fig.11)

調査区の中央付近西寄りにある遺構で、検出長4m、幅0.35～0.2m、深さ0.05m。振れはN-10° 13' 37"-Eを測る。遺構の時期を示す顕著な遺物は出土していない。

193SD143 (Fig.11)

調査区の北西にある遺構で、検出長6m、幅0.6～0.3m、深さ0.1m。振れはN-3° 48' 50"-Wを測る。SD055に並行し、帯状で13世紀中頃までの遺物を持つ整地SX040を穿って形成される。13世紀中頃までの遺物が出土している。

井戸

193SE030 (Fig.12)

調査区の北西にある遺構で、深さ3.1m、掘り方は2.5～2.6mの楕円形、井戸枠は径1.2mの円形を呈す。調査途中で遺構が崩壊したため十分な土層観察ができなかったが、枠内の埋土は黄色系、掘り方の裏込めは茶色系の土壌で分離される。層の上位は掘り込みがあり層が乱れている。土坑などの2次用途があったものと考えられる。掘り方外側の地山部分では検出面から約1.4mの深さで遺物包含層が6層観察され、それ以下の無遺物層と考えられる6層の層が観察された。遺物は枠内埋土、裏込めともに13世紀中頃までのものが出土している。

土坑

193SK008 (Fig.13)

調査区の中央東側で検出された。長さ1.3m、幅0.4m、深さ0.4mを測る。

193SK015 (Fig.13)

調査区の中央東側で検出された。長さ0.4m、幅0.3m、深さ0.2mを測る。淡黄灰色土で埋没する。

193SK021 (Fig.13)

調査区の中央東側で検出された。長さ0.5m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。13世紀後半までの遺物が出土している。

193SK025 (Fig.13)

調査区の中央東側で検出された。長さ2.6m、幅1.7m、深さ0.3mを測る。黒茶色土から褐色土で埋没する不整形な形状を呈す。13世紀後半までの遺物が出土している。

193SD055

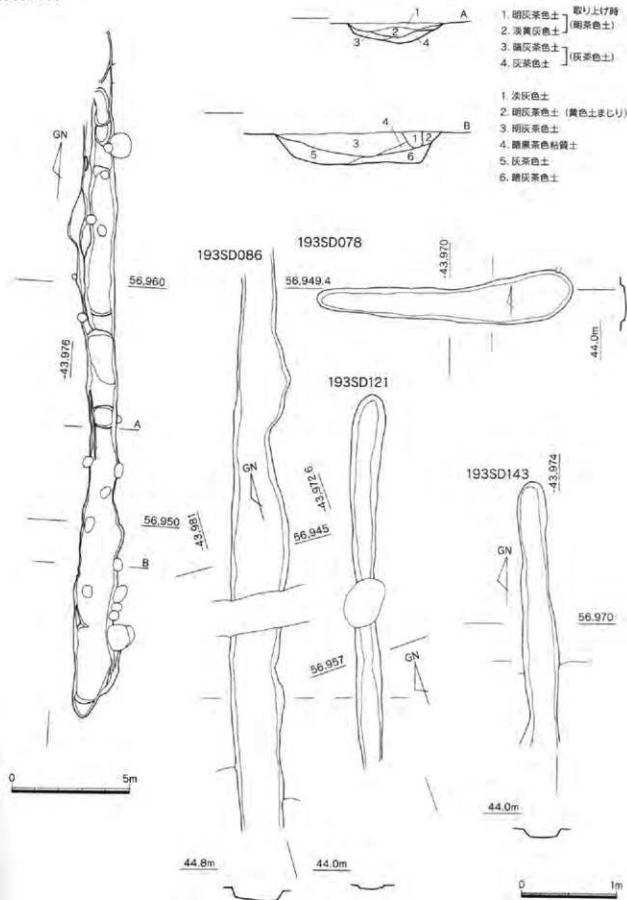


Fig.11 193SD055・078・086・121・143遺構図 (193SD055は1/160,他は1/40)

193SE030

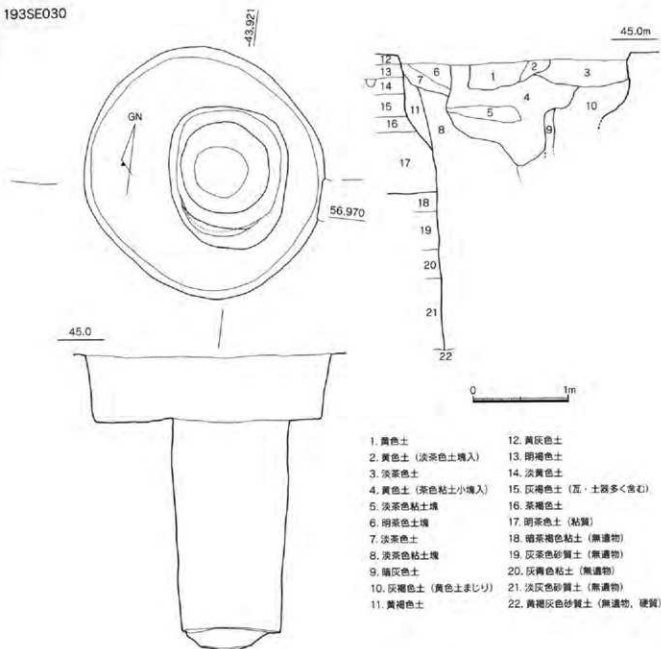


Fig.12 193SE030 遺構図・土層図 (1/40)

193SK043 (Fig.13)

調査区の北辺で検出された。長さ0.8m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。茶色土で埋没する。12世紀までの遺物が出土している。

193SK044 (Fig.13)

調査区の北辺中央で検出された。長さ1.1m、幅1.0m、深さ0.1mを測る。茶褐色土で埋没する。SK046を切る。12世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK046 (Fig.13)

調査区の北辺中央で検出された。長さ0.6m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。茶灰色土で埋没する。SK044に切られる。12世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK008

193SK015

193SK021

193SK043

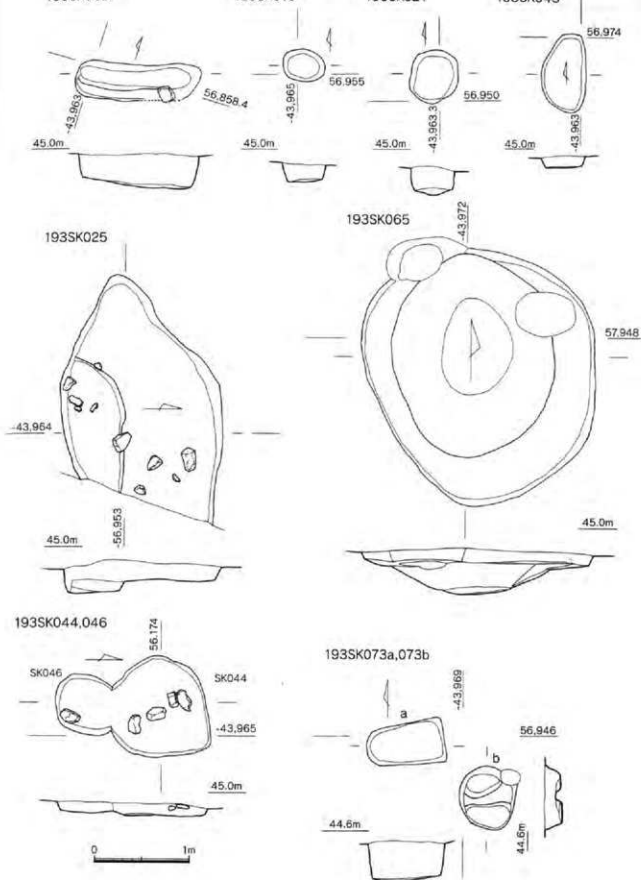


Fig.13 193SK008・015・021・025・043・044・046・065・073a,b 遺構図 (1/40)

193SK059

調査区の北部や東よりで検出された。長さ1.0m、幅0.4m、深さ0.14mを測る。埋土は明灰色土。
193SK038 (12世紀中頃～後半) に切られる。12世紀後半までの遺物が出土している。

193SK065 (Fig.13)

調査区の北辺で検出された。長さ2.7m、幅2.4m、深さ0.5mを測る。真中が深いすり鉢状を呈する。
12世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK073 (Fig.13)

調査区の南東で検出された。aは長さ0.8m、幅0.4m、深さ0.4mを測る。bは長さ0.7m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。明茶色土で埋没する。12世紀後半までの遺物が出土している。

193SK077 (Fig.14)

調査区の南側東寄りで検出された。長さ1.8m、幅1.1m、深さ0.2mを測る。灰黄色ブロック土で埋められている。平面形は方形を呈する。13世紀後半までの遺物が出土している。

193SK079 (Fig.14)

調査区の南側中央付近で検出された。長さ1.1m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。暗茶色土で埋没する。平面形は楕円形を呈する。近世までの遺物が出土している。

193SK088 (Fig.14)

調査区の南側東寄りで検出された。長さ1.6m、幅0.4m、深さ0.3mを測る。明茶色土で埋没している。平面形は溝状を呈する。

193SK098 (Fig.14)

調査区の中央で検出された。長さ1.1m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。下層は茶灰色土、上層は淡茶黄色の埋土である。平面形は方形を呈する。14世紀前半までの遺物がまとめて出土している。楕圆柱建物SB100はこの遺構を切って形成される。

193SK104 (Fig.14)

調査区の中央で検出された。長さ1.8m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。長楕円形を呈する。13世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK128 (Fig.14)

調査区の北西で検出された。長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。茶褐色の埋土である。楕圆柱建物SB080はこの遺構を切って形成される。

193SK137 (Fig.14)

調査区の北西で検出された。長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は暗灰茶色土である。13世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK186 (Fig.14)

調査区の北西で検出された。長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.5mを測る。埋土は茶色土である。13世紀前後～前半の遺物が出土している。

193SK227

調査区南東部で検出された。193SX220の下層にあたる。遺構のプランは調査区外に延びる。長さ3.3m、幅0.95m、深さ0.32mを測る。埋土はバサバサした明赤灰色土混じりの暗黒色粘質土。出土遺物は、12世紀前半～中頃までの遺物が出土している。

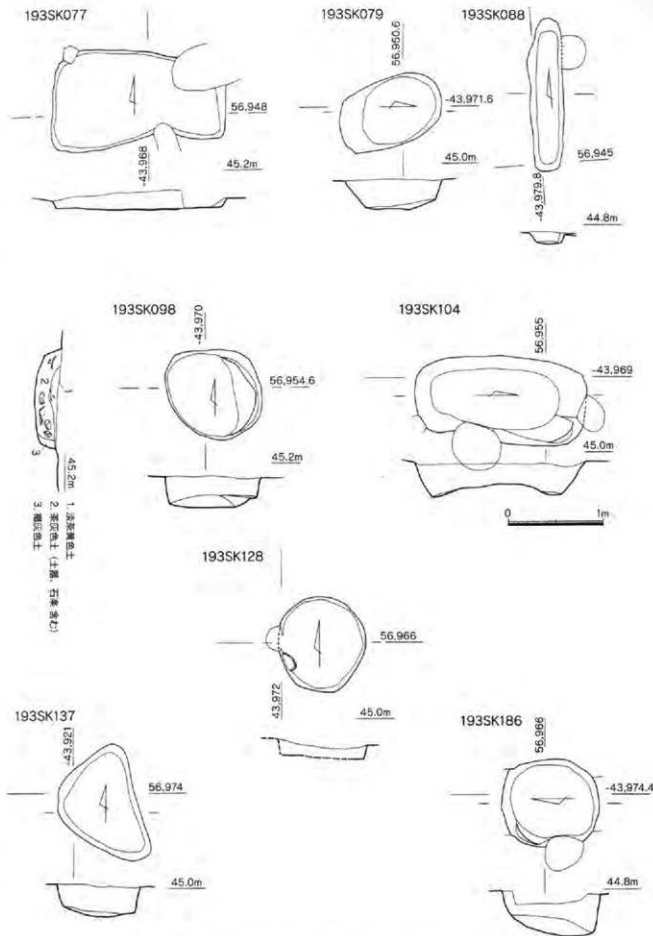


Fig.14 193SK077・079・088・098・104・128・137・186 遺構図 (1/40)

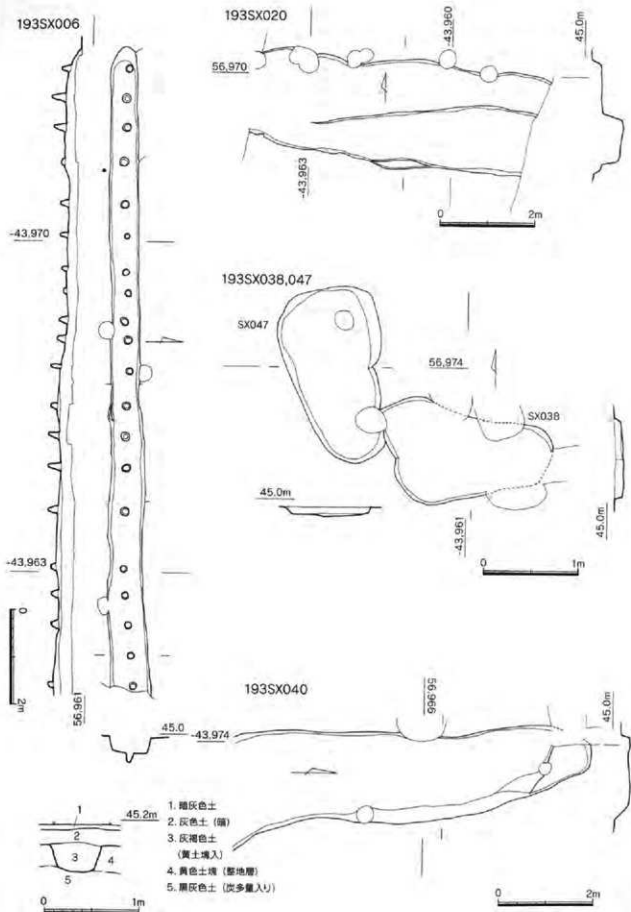


Fig.15 193SX006・020・038・040・047 遺構図 (006・040は1/80、土層は1/40、他は1/40)

その他の遺構

193SX002

調査区中央東側にある小穴群。埋土は茶灰色土。鉋澤が出土している。出土遺物から12世紀以降の埋没。193SK008 (13世紀代埋没) を切っているため、埋没時期は13世紀以降と考えられる。

193SX006 (Fig.15)

調査区の中央を東西に渡る溝状を呈す遺構で、検出長14.5m、幅0.8~0.6m、深さ0.2~0.4m、振れがN-1° 0' 40" -Eを測る。黄色土ブロックが入る灰褐色土の人為的埋土で、0.4~1.0m程度の不統一な間隔で15~20cmの太さの杭状の柱が建てられている。芯柱を持つ築地遺構と考えられる。埋土から14世紀後半までの遺物が出土している。土地区画や建物配置にとって重要な構造物である。

193SX007

調査区北部やや東よりに位置する小穴群。小穴の1つは193SB080の柱穴と推定している。出土遺物から埋没時期は12世紀以降と考えられる。

193SX011

調査区北東部にある小穴群。埋土は茶灰色土。出土遺物から埋没は12世紀以降と考えられる。

193SX014

調査区北東部にある小穴。埋土は赤褐色土。釘の破片が出土している。

193SX016

調査区北東部にある小穴群。埋土は淡黄茶色土。193SX020を切る。出土遺物から埋没時期は13世紀中頃以降。

193SX020 (Fig.15)

調査区北東にある長さ6m、幅2.2m深さ0.3mを測る溜まり状、ないしは整地遺構である。埋土は、黒色粘質土→黒色土→褐色土→炭層 (193SX023) の順番で堆積している。埋土からは13世紀後半までの遺物が出土している。陶磁器区分ではF期。SB080に先行する遺構である。

193SX023

調査区北東部に位置する東西方向の溝状のたまり。193SX005に切られている。埋土は炭混じりの暗黒色土。出土遺物から13世紀後半以降の埋没と考えられる。

193SX027

調査区北部東よりに位置する小穴群。出土遺物から12世紀以降に埋没している。

193SX035 (Fig.16)

調査区南端いっぱいにある東西方向の段落ちで、茶色土が堆積し、16世紀までの遺物が出土している。この南側は現在でも段差のある土地境となっている。

193SX036, 037, 068, 086 (Fig.16)

調査区南東にある長さ9m、幅1.5mに亘って連続して形成された溝状、土坑状の遺構で、それぞれの深さ0.2~0.3mを測る。13世紀前半までの遺物が出土している。西のSX068, 036のラインにはところどころ杭の痕跡が重複しており、これも築地状の遺構の基礎部分の可能性もある。南から北に至る遺跡内での動線に関する遺構と考えられる。掘立柱建物SB100に先行して存在する。築地遺構SX006や掘立柱建物SB080との関係が想定される。

193SX038 (Fig.15)

調査区北東にある長さ1.8m、幅1.1m深さ0.1mを測る溜まり状で、12世紀中頃までの遺物が出土している。

193SX036.037.068.086

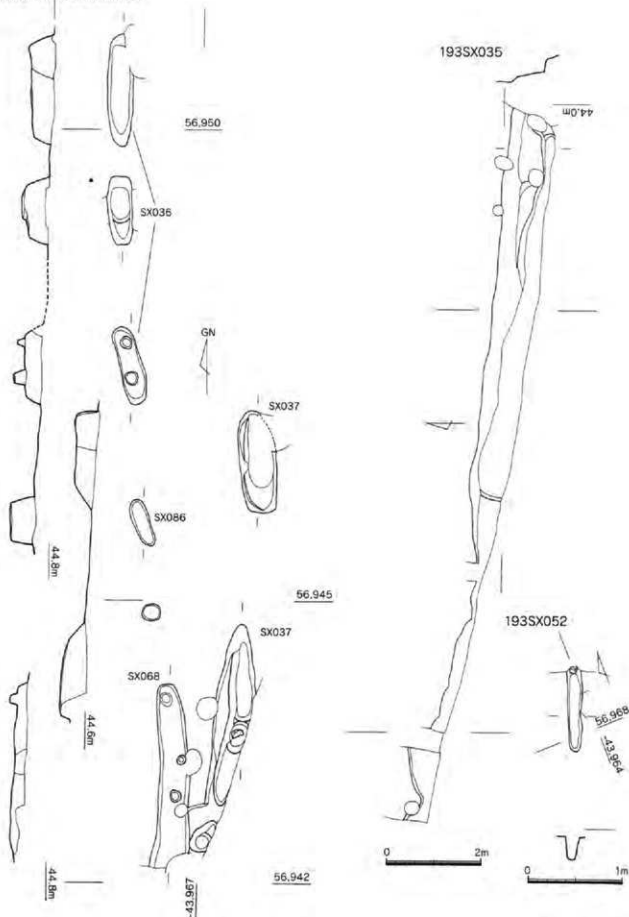


Fig.16 193SX035・036・037・052・068 遺構図 (1/40, 035は1/80)

193SX040 (Fig.15)

調査区北西にある長さ10m、幅4m深さ0.3mを測る南北に長い帯状の整地で、13世紀中頃までの遺物が出土している。掘立柱建物SBO80の南西側を埋めるような形で存在する。

193SX042

調査区北部中央に位置する小穴群。埋土は淡茶色土。出土遺物から埋没時期は12世紀中頃以降と考えられる。

193SX047 (Fig.15)

調査区北東にある長さ1.8m、幅1.1m深さ0.1mを測る溜まり状で、炭混じりの暗茶色土で埋没する。13世紀までの遺物が出土している。

193SX048

調査区北部中央に位置する確認(試掘)調査時の南北方向のトレンチ。

193SX049

調査区北部に位置する小穴群。49a、49b、49cそれぞれは柱穴と認定され、193SB080に編入した。出土遺物から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX052 (Fig.16)

調査区北東にある長さ5.0m、幅0.6m深さ0.2mを測る東西に長い帯状の溜まり遺構で、下層は灰色粘質土、上層は暗茶色土で埋没し12世紀までの遺物が出土している。

193SX053

調査区北部東よりに位置する小穴群。埋土は茶色土。出土遺物から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX057

調査区中央部東よりに位置する小穴群。埋土は明茶色土。出土遺物から12世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

193SX060 (Fig.17)

調査区北東にある長さ0.8m、幅0.1m深さ0.3mを測る溜まり状で、灰色土で埋没し12世紀までの遺物が出土している。

193SX061 (Fig.17)

調査区南東にある長さ4.5m、幅1.5mの3条からなる溝群で、深さは0.1mを測り、茶灰色土で埋没している。鋤による耕作痕跡と考えられる。建物遺構崩壊後に形成されたもので、近世遺構の所産と考えられる。

193SX067

調査区南東部に位置する小穴。長さ0.6m・0.45m、深さ0.24mを測る。滑石製石鏡片が出土している。

193SX069

調査区中央部に位置する小穴群。一部、193SB080の柱穴に編入する。埋土は茶色土。出土遺物から12世紀前半以降に埋没したと考えられる。

193SX071

調査区南東部に位置する東西溝状のたまり遺構。埋土は茶色土。長さ1.53m、幅0.3m、深さ0.32mを測る。出土遺物から12世紀以降の埋没と考えられる。鉄釘が出土している。

193SX081

調査区中央部に位置する小穴群。埋土は茶色土。出土遺物から埋没は13世紀中頃以降と考えられる。

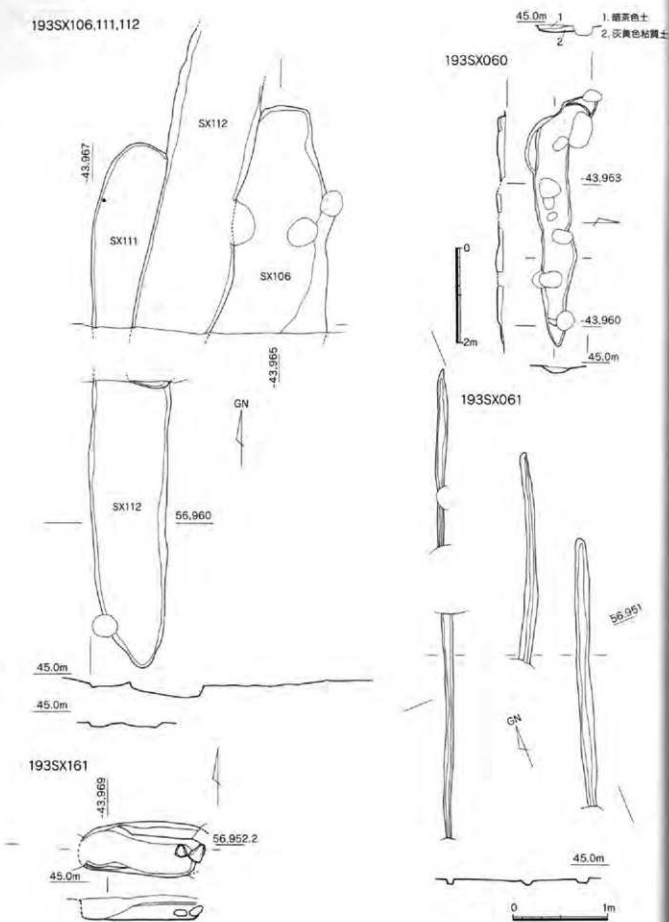


Fig.17 193SX060・061・106・111・112・161 遺構図 (1/40, 060 は 1/80)

193SX087

調査区南部やや西よりに位置する溜まり状遺構。東西3.3m、南北4.9mを測る。埋土は黒色土。193SB050や193SD086に切られる。出土遺物から13世紀後半以降に埋没したと考えられる。

193SX091

調査区北部中央に位置する小穴群。埋土は茶色土。出土遺物から13世紀中頃以降には埋没したと考えられる。

193SX093

調査区北部中央に位置する小穴群。埋土は茶色土。出土遺物から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX093a

調査区北部中央に位置する小穴。埋土は茶色土。直径0.4m、深さ0.24mを測る。穴の東壁に沿って平たい石が検出されている。出土遺物から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX096

調査区南部西側に位置する溜まり状遺構。調査区外に延びている。埋土は茶色土。南北長3.6m、東西長1.9mを測る。平面形は北東から南西方向に延びる溝状態を呈している。

193SX106, 111, 112 (Fig.17)

調査区中央東寄りにある長さ6.0m、幅2.5mの範囲に3つの南北に長い帯状の溜まり遺構が重複する形で検出された。112を106と111が切って形成される。深さ0.1m前後のごく浅いもので、SX106は黒茶色土、SX111は灰色土、SX112は淡茶色土が埋没する。12世紀までの遺物が出土している。SX112の近世の遺物はトレンチが重複することによる混入か。

193SX108

調査区南部中央に位置する小穴群。193SD055を切っている。出土遺物から13世紀中頃以降に埋没したと考えられ、切られている方の193SD055の出土遺物傾向(15世紀までの遺物群)を見ると、15世紀以降に埋没したと考えたい。

193SX113

調査区中央部西側に位置する小穴群。埋土は淡茶色土。出土遺物から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX114

調査区中央部に位置するたまり状遺構。長さ3m、幅0.83m、深さ0.06mを測る。埋土は茶色土。出土遺物から13世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

193SX118

調査区中央部西側に位置する小穴群。埋土は灰色土。出土遺物から埋没時期は12世紀以降と考えられる。

193SX136

調査区北部中央に位置する小穴群。埋土は茶灰色土。出土遺物から埋没は13世紀前半以降と考えられる。

193SX138

調査区中央南部に位置する小穴。埋土は黄茶色土。193SK65に切られる。出土遺物より12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX149

調査区中央西部に位置する小穴群。193SX151を切る。出土遺物より13世紀代に埋没したと考えられる。

193SX151

調査区中央西部に位置するたまり状遺構。193SX149に切られる。出土遺物より13世紀代に埋没したと考えられる。

193SX152

調査区北部西側に位置する小穴。193SD055を切る。埋土は茶色土。出土遺物より12世紀以降に埋没したと想定でき、遺構の切り合い関係上で切られている193SD055が15世紀代に埋没しているため、この小穴もそれ以降に埋没したものと考えられる。

193SX161 (Fig.17)

調査区中央やや東よりに位置する東西方向に長いたまり状の遺構。S-62、97に切られている。長さ1.3m、幅0.55m、深さ0.43mを測る。埋土は淡灰色土。出土遺物より14世紀前後の遺物が出土している。

193SX167

調査区中央に位置する小穴群。出土遺物から12世紀以降に埋没したものと考えられる。鉋洋が出土している。

193SX169

調査区北部西側に位置する小穴。直径0.35m、深さ0.18mを測る。193SD055の溝の底から検出された。出土遺物が小片のため埋没時期は不明だが、遺構の切り合い関係から15世紀以前と考えられる。

193SX173

調査区中央部に位置する小穴群。出土遺物から13世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX178

調査区南部に位置する小穴。193SD055の溝底より検出した。南北長0.5m、東西長0.4m、深さ0.07mを測る。出土遺物より12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX188

調査区北部中央に位置する小穴。S-211を切る。出土遺物から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX192

調査区北部中央に位置する小穴。193SX091に切られる。193SB080の柱穴080cにあたと考えている。出土遺物から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX193

調査区北部中央に位置する小穴。出土遺物より埋没時期は12世紀以降と考えられる。

193SX196

調査区北部西側に位置する整地状遺構。埋土は淡灰色土。出土遺物から埋没時期は13世紀後半と考えている。

193SX197

調査区南部東側に位置する整地状遺構。埋土は茶色土。プランは調査区外に延びる。出土遺物から埋没時期は14世紀以降である。

193SX198 (Fig.18)

調査区南東に位置するたまり状、もしくは整地の遺構。SK025(13世紀後半以降埋没)と、SX197(14

193SX198.202.220.227

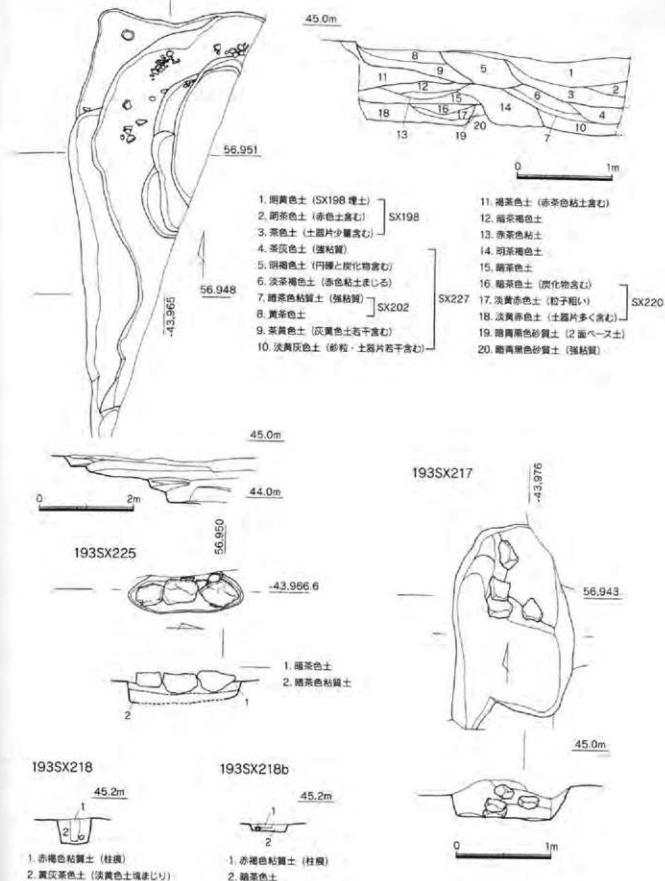


Fig.18 193SX198-202-217-218a-218b-220-225-227遺構図(198-202-220-227は1/80,他は1/40)

世紀以降埋没)の遺構に切られる。埋土は明茶色土。

193SX202 (Fig.18)

調査区南部東側に広がる整地状遺構。193SK227の上層にあたる。埋土は淡茶褐色土。出土遺物は13世紀後半～14世紀前半までのものが出土している。

193SX204

調査区北部西側に位置する整地状遺構。S-206の上層で、193SX040の下層にあたる。土色は灰青褐色土。

193SX205・

調査区北部西側に位置する小穴。193SK040に切られる。鉄釘が出土している。

193SX212

調査区南部中央に位置するたまり状遺構。193SD055を掘り下げると、溝底で検出された遺構。埋土は茶色土。出土遺物から13世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX214

調査区北部中央に位置するたまり状遺構。193SX060を切っている。埋土は暗茶色土。出土遺物は少なく時期を積極的に認定できないが、切り合い関係から考えると遺構の埋没は、12世紀以降と考えられる。

193SX215 (Fig.19)

調査区南部東側に位置するたまり状遺構。調査面としては2面目となる。赤褐色土のベース面に切

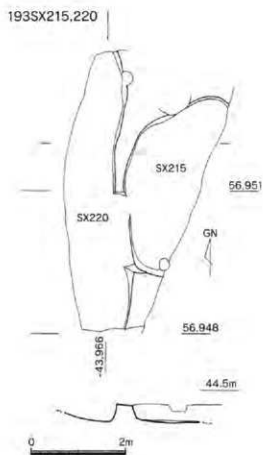


Fig.19 193SX215・220 遺構図 (1/80)

り込み、長さ4m、幅1.2m、深さ0.15mを測る。埋土は明茶色土。出土遺物から13世紀後半以降に埋没したと考えられる。

193SX216

調査区南部中央に位置する整地状遺構。193SX224と同じ範囲にあたるため、下層の遺構の落ち込み土の可能性もある。埋土は褐色土。出土遺物から埋没は13世紀前半以降と考えられる。

193SX217 (Fig.18)

調査区南部中央に位置するたまり状もしくは溝状遺構。埋土は黄色土。193SX231に切られる。出土遺物から12世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

193SX218a・218b (Fig.18)

調査区中央部に位置する小穴群。掘立柱建物の柱穴となる可能性もある。埋土はaが赤色土、bが茶色土であった。ともに出土遺物量が少なく時期は不明。

193SX220 (Fig.19)

調査区南部東側に位置するたまり状遺構もしくは溝状遺構。第2遺構面。長さ6m以上、幅1.2m以上、深さ0.23mを測る。これは全面を掘っていないので検出した範囲での数値である。東側の壁に石が列状に検出されたが、この遺構に伴うものかは判断できなかった。埋土は暗茶色土。出土遺物から13世紀中頃から14世紀初頭以降に埋没している。

193SX221

調査区南部に位置する整地遺構。南端の段落ちを埋めており、193SX035の下層にあたる。埋土は茶色土。出土遺物より13世紀後半以降に埋没している。

193SX224 (Fig.20, Pla.1-2)

調査区南部中央に位置する倉庫基礎もしくは、仏堂等の基礎跡と考えている。平面形はおおよそ方形で、北西隅がすこし突出している形をしている。東西長3.8m、南北長4.0m、高さ0.6mを測る。東西南西の3方向に平べったい縦0.4m×横0.3m×厚さ0.2m程度の大きさの石を積み並べ土留めとして、その内部に硬凝じりの土を敷き詰めて、上面にも砂を並べている。中央に南北方向の確認トレンチを入れて土層を確認したところ、北から南へ傾斜堆積をしている土層が3層確認できた。おそらく、このように硬凝じり土を敷くことによって、建物の基礎地盤としているのだろう。出土遺物から13世紀前半以降に構築されて、13世紀後半～14世紀初頭以降に埋没していると考えている。

193SX225 (Fig.18)

調査区南部東側に位置する石組み遺構。前述の193SX220を掘り下げたときに底面で検出された。長さ1.2m、幅0.4m、深さ0.1mの溝状の堀方に、平坦な石を3つ南北方向に並べている。石の大きさは、長さ0.4m、幅0.3m、厚さ0.22m程度のものである。部分の掘り下げの範囲で検出されたものであり、遺構の性格については不明である。出土遺物からは12世紀以降に埋没したと推定される。

193SX227 (Fig.18)

調査区南部東端に堆積する土層をSX227として取り上げた。193SX202の下層にあたる。ばさばさした明赤灰色土混じりの黒茶色粘質土。鉄釘が出土している。

193SX228

調査区南部中央に位置する土層をSX228として取り上げている。193SX224の南部断ち割り時の土層。滑石製石鏡の破片が出土している。

193SX229

調査区南部に位置する193SX224の東側を検出したときの土層。整地か。埋土は黄色土。出土遺物

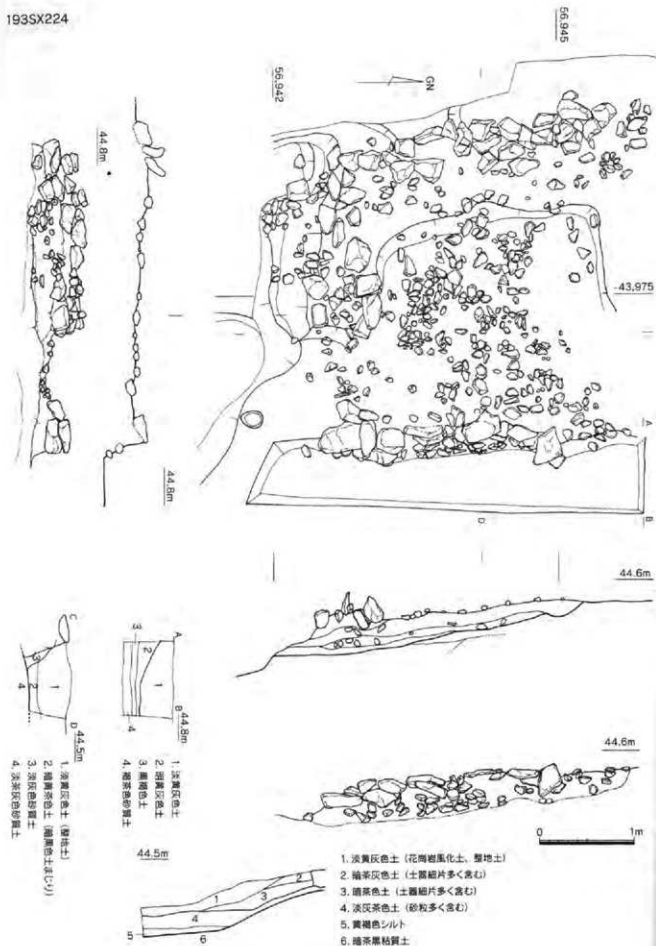


Fig.20 193SX224 遺構図 (1/40)

から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX231

調査区南部に位置するSX216に切られるたまり状遺構。埋土は黄灰色土。出土遺物から12世紀中頃に埋没したと考えられる。

193SX232

調査区南部に位置する193SX224の東側を検出したときの土層。整地か。埋土は黒色土。出土遺物から13世紀中頃に埋没したと考えられる。

193SX237

調査区南部東側に位置する小穴。遺構面は2面目。193SX215に切られる。長さ0.8m、幅0.65m、深さ0.18mを測る。埋土は淡灰色土。出土遺物から13世紀前半以降に埋没したと考えられる。

193SX238

調査区南部東側に位置する小穴群。遺構面は2面目。埋土は淡灰色土。出土遺物から、13世紀中頃に以降に埋没したと考えられる。

土層

明黄灰色

1 面目の遺構面のベース土の上層。出土遺物は13世紀中頃を中心としている。

暗灰色土

1 面目の遺構面ベース土の下層。出土遺物は13世紀中頃を中心としている。

茶色土

1 面目遺構の検出面での人工層位。出土遺物は弥生時代から明治時代まで及ぶ。

(4) 出土遺物

第1遺構面出土遺物

建物出土遺物

193SB010a 黄茶色土出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (1) 復元口径8.4cm、器高1.1cm、復元底径6.4cm。底部切り離し技法は回転へら切り。

193SB010b 出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 b (2) 復元口径7.2cm、器高2.15cm、底径3.2cm。底部切り離し技法は器壁摩耗のため不明。杯 b (3~6) 3は口縁部を欠損する。器高2.6+cm、底径4.9cm。底部切り離し技法は回転糸切り。4は復元口径13.4cm、器高3.4cm、底径5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。5は復元口径12.8cm、器高3.85cm、底径5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。内面見込み部分に穴を開けようとしたのか、3~4mmの範囲の窪みか4カ所確認できる。6は口縁部を欠損。器高3.0+cm、底径6.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。3~6いずれも色調は淡暗褐色。

193SB010c 暗灰茶色粘出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (7) 小破片。器高1.3+cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

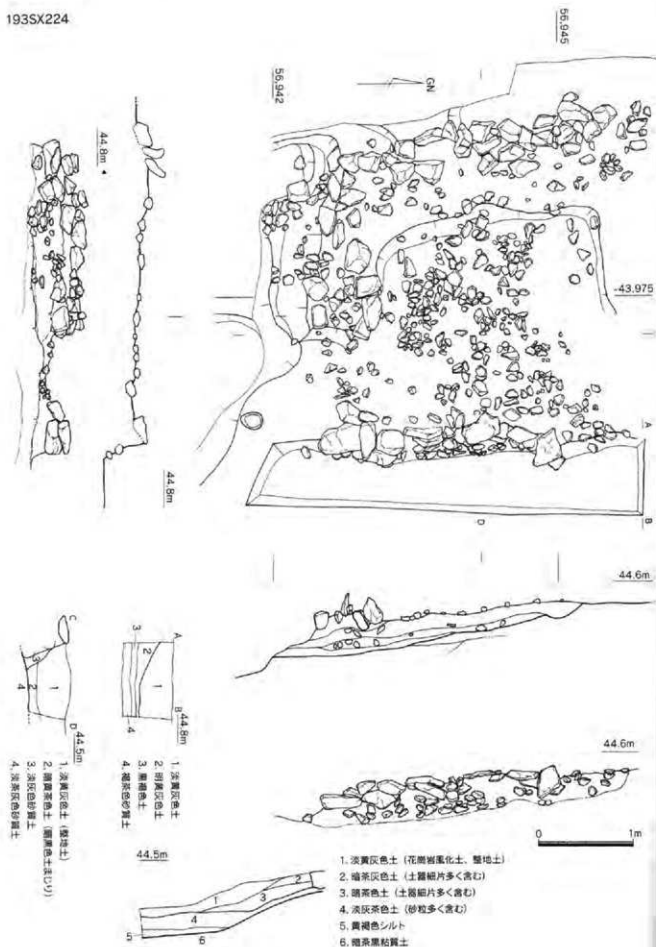


Fig.20 193SX224 遺構図 (1/40)

から12世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX231

調査区南部に位置するSX216に切られるたまり状遺構。埋土は黄灰色土。出土遺物から12世紀中頃に埋没したと考えられる。

193SX232

調査区南部に位置する193SX224の東側を検出したときの土層。整地か。埋土は黒色土。出土遺物から13世紀中頃に埋没したと考えられる。

193SX237

調査区南部東側に位置する小穴。遺構面は2面目。193SX215に切られる。長さ0.8m、幅0.65m、深さ0.18mを測る。埋土は淡灰色土。出土遺物から13世紀前半以降に埋没したと考えられる。

193SX238

調査区南部東側に位置する小穴群。遺構面は2面目。埋土は淡灰色土。出土遺物から、13世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

土層

明黄灰色

1面目の遺構面のベース土の上層。出土遺物は13世紀中頃を中心としている。

暗灰色土

1面目の遺構面ベース土の下層。出土遺物は13世紀中頃を中心としている。

茶色土

1面目遺構の検出面での人工層位。出土遺物は弥生時代から明治時代まで及ぶ。

(4) 出土遺物

第1遺構面出土遺物

建物出土遺物

193SB010a 黄茶色土出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (1) 復元口径8.4cm、器高1.1cm、復元底径6.4cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。

193SB010b 出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 b (2) 復元口径7.2cm、器高2.15cm、底径3.2cm。底部切り離し技法は器壁摩擦のため不明。坏 b (3~6) 3は口縁部を欠損する。器高2.6+cm、底径4.9cm。底部切り離し技法は回転糸切り。4は復元口径13.4cm、器高3.4cm、底径5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。5は復元口径12.8cm、器高3.85cm、底径5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。内面見込み部分に穴を開けようとしたのか、3~4mmの範囲の窪みが4カ所確認できる。6は口縁部を欠損。器高3.0+cm、底径6.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。3~6いずれも色調は淡暗褐色。

193SB010c 暗灰茶色粘出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (7) 小破片。器高1.3+cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

193SB010d 暗黄茶色土出土遺物 (Fig.21)

土師器

坏 b (8) 口縁部を欠損する。器高 1.8+cm、復元底径 5.6cm。底部切り離し技法は回転系切り。

坏 b (9) 復元口径 12.4cm、器高 3.1cm、底径 5.9cm。底部切り離し技法は回転系切り。通常の坏 b の器形からすると、器高が低いため坏 a に近い器形である。

193SB050 出土遺物 (Fig.21)

石製品

不明製品 (10) 工具による加工痕跡が部分的にあり、図上下部は平滑な加工をほどこされている。滑石製石鏝の二次利用製品の一部か。

193SB050a 茶褐色土出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (11) 復元口径 9cm、器高 1.2cm、復元底径 6.4cm。底部切り離し技法は回転系切り。板状圧痕あり。

須恵質土器

鉢 (12、13) ともに捏鉢の口縁破片。口縁端部外面に重ね焼き時の痕跡で、暗灰色～灰黒色に変化しているのが確認できる。

瓦質土器

鉢 (14) 小破片。口縁部を内側に屈曲させる。口縁部外面は重ね焼き時の痕跡で、帯状に灰黒色変化している。

瓦類

平瓦 (15) 破片。凹面には布目痕、凸面には格子目印。端部をへら切り調整。

石製品

石鏝 (16、17) 滑石製石鏝の破片。16 は底部破片。17 は外面に煤が付着している。

193SB050j 出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (18) 小破片。器高 1.2+cm。底部切り離し技法は回転系切り。板状圧痕あり。

193SB080a 出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (19) 復元口径 8.6cm、器高 1cm、復元底径 7.2cm。焼成不良。摩擦のため調整不明。

瓦質土器

鉢 (20) 口縁部の破片。

石製品

不明品 (21) 縦 2.45cm、横 1.5cm、厚さ 0.9cm。滑石製。二次加工品と思われる。

193SB080e 出土遺物 (Fig.21)

須恵質土器

鉢 (22) 口縁端部。

瓦質土器

匜 (23) 口縁部破片。内面はミガキ c、外面は口縁端部から 2cm ほど下部までをミガキ c を施す。

口縁端部は内側に沈線が 1 条入る。

瓦類

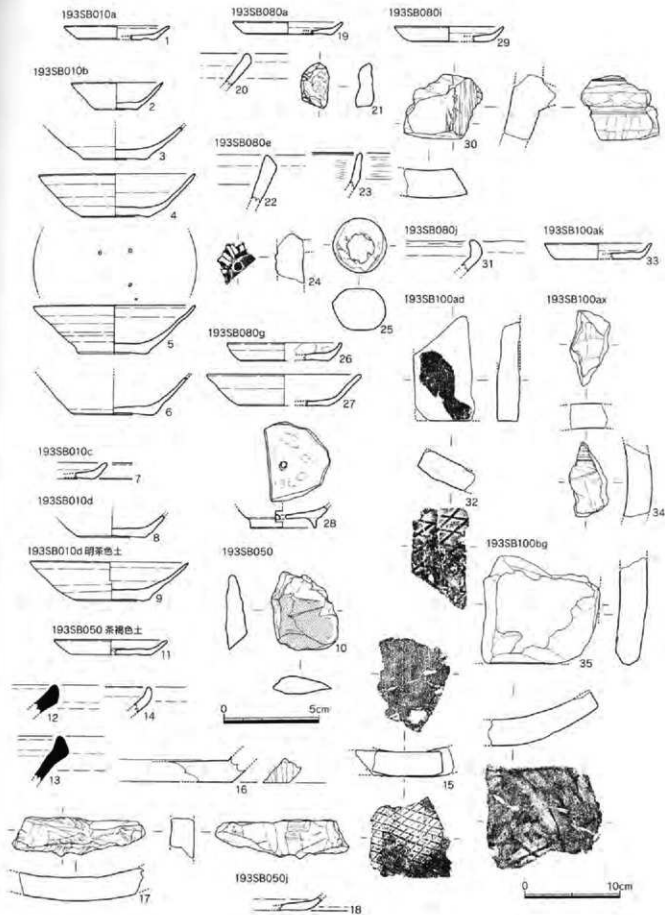


Fig.21 第193次調査建物出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)

軒丸瓦 (24) 瓦当面の小破片。覆弁。焼成は良好で須恵質。

土製品

瓦玉 (25) 縦 2.9cm、横 2.8cm、厚さ 2.2cm。焼成は良好。土師質。

193SB080g 出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (26) 復元口径 9cm、器高 1.4cm、復元底径 7.2cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

坏 a (27) 復元口径 12.2cm、2.5cm、復元底径 7.2cm。底部切り離し技法は回転糸切り技法。板状圧痕。口縁部はやや外反する。

小皿 c× 椀 c (28) 底部破片。器高 1.7+cm、復元口径 5.2cm。内底面中央部に外面まで抜ける穿孔がある。直径 4mm 程度。

193SB080i 出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (29) 復元口径 8.6cm、器高 1.2cm、復元底径 6.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

石製品

石鍋 (30) 滑石製石鍋。外面の鈎部。二次加工されている。外面には使用時の煤が付着している。

193SB080j 出土遺物 (Fig.21)

瓦質土器

鉢 (31) 口縁部破片。

193SB100ad 出土遺物 (Fig.21)

瓦類

平瓦 (32) 端部破片。凹面は細かな布目痕。凸面は格子目叩き。端部はヘラ切り。焼成はやや良好。瓦質。

193SB100ak 出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿 a1 (33) 復元口径 8.4cm、器高 1.25cm、復元底径 6.8cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

193SB100ax 出土遺物 (Fig.21)

石製品

不明製品 (34) 滑石製石鍋の破片。二次加工品か。

193SB100bg 出土遺物 (Fig.21)

瓦類

平瓦 (35) 端部破片。凹面は布目痕がわずかに残る。凸面は格子目叩き後に、ナデを強く施す。焼成はやや良好。土師質。端部は凹面側からも凸面側からもヘラ切りされており、このことから、この端部は鉄端部の可能性がある。表面が灰赤色を呈しており、2次焼成を受けた可能性もある。

溝出土遺物

193SD055 出土遺物 (Fig.22)

土師器

坏 b (1~3) 1 は復元口径 11.4cm、器高 2.7cm、底径 5.8cm。底部切り離し技法は回転糸切り。2 は底部の破片。3 は底部破片。内面見込み中央部に外面まで貫通する穿孔が施される。穿孔の直径は 3mm。

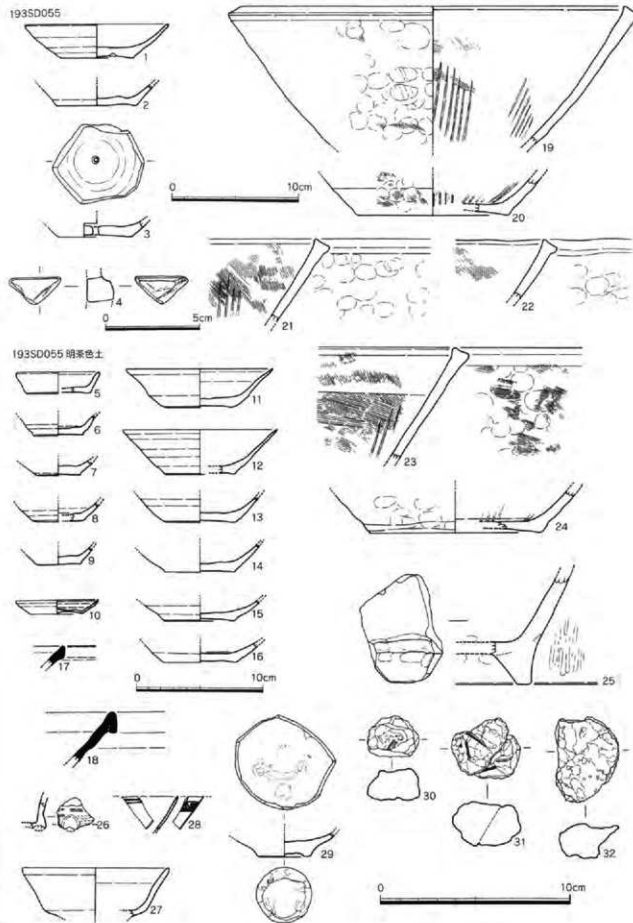


Fig.22 第193次調査溝出土遺物実測図その1 (1/2、1/3)

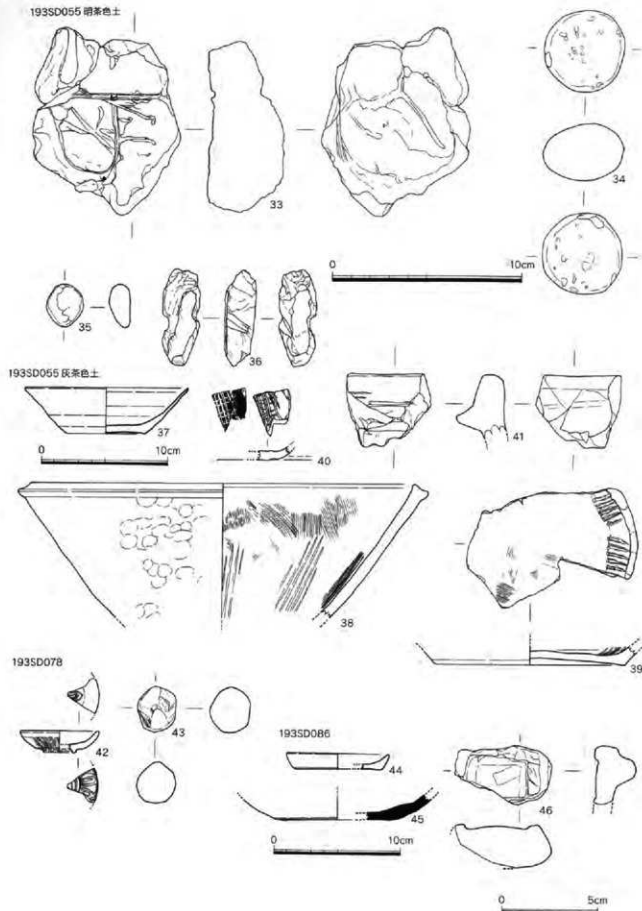


Fig.23 第193次調査溝出土遺物実測図その2 (1/2, 1/3)

石製品

不明品 (4) 破片。滑石製石鐮の二次加工品か。

193SD055 明茶色土出土遺物 (Fig.22, 23)

土師器

小皿 b (5 ~ 10) 5 は復元口径 6.6cm、器高 1.7cm、復元底径 5.2cm、口縁部が黒色化、灯明皿か。6 ~ 9 は口縁部を欠損する破片。10 は器壁が 2mm 程度の非常に薄いつくり。ロクロ挽き。

杯 b (11 ~ 16) 11 は復元口径 11.6cm、器高 3.05cm、復元底径 5.8cm。底部切り離し技法は回転糸切り。口縁部は少し外反している。12 は復元口径 12.2cm、3.55cm、復元底径 5.6cm。底部切り離し技法は回転糸切り。口縁部は体部から直線的に伸びる。13 ~ 16 は口縁部を欠損する破片。

須恵質土器

鉢 (17, 18) 口縁部破片。東播系。

土師質土器

振り鉢 (19 ~ 24) 19 は口縁部 ~ 体部破片。復元口径 34cm、器高 11+cm。内面は細かい刷毛目調整を施し、それをナデ消した後に 5 本の振り目を施す。外面は指頭圧痕が目立つ。色調は内外面ともに淡白橙色。焼成は良好。ただし、器壁はサンドイッチ状態で内部に黒灰色の塊が見える。このことから瓦質土器の焼成不良の可能性も考えられる。20 は底部破片。復元底径は 12.1cm。振り目が底部と体部の接合付近から施されているのが観察できる。21, 22, 23 は口縁部 ~ 体部破片。24 は底部破片。外面には指頭圧痕が残る。

瓦質土器

火鉢 (25) 底部破片。脚付き。内面は横ナデ。外面は縦方向の丁寧なミガキ c。脚は貼り付け。

龍泉窯系青磁

椀 (27) 復元口径 11.6cm、器高 3.9+cm、内面の口縁側に文様を彫っている可能性あり。未分類。IV 類の系統か。

香炉 (26) 器高 2.45+cm。八卦文。脚付き。仏具。III 類系か。

染付

碗 (28) 口縁部の破片。青い呉須により、内外面に文様を付ける。内面は線。外面は雷紋のような記号が巡る。明染付か。

高麗青磁

椀 (29) 口縁部を欠損する底部破片。器高 1.9+cm、底径 4.3cm。高台の畳付と内面の見込み部には乳白色の目跡が残る。軸はこくわずかに灰色がかった透明軸が内外面にかけられる。畳付部の軸は雑に削り取られている。

土製品

焼土塊 (30, 31, 33) 一面ないし二面方向に平坦な面を持つ焼けた土の塊。平坦な面には藁の痕跡が認められる。

炉壁 (32) 表面に黒灰色の鉱物が溶解して付着している。やや光沢がありガラス質。それ以外の面は灰色の器壁が露出している。

石製品

叩き石 (34) 縦 4.25cm、横 4.3cm、厚さ 3cm。表面は打痕が残る。

棒石 (35) 縦 2.25cm、横 2cm、厚さ 1.15cm。色調は白色。石材は長石。全面をなめらかに研磨して丸みを帯びている。

不明製品 (36) 滑石製石罎の二次利用品か。

193SD055 灰茶色土出土遺物 (Fig.23)

土師器

坏 b (37) 口径 13cm、器高 3.65cm、底径 6.2cm。焼成は良好。色調は赤褐色。底部切り離し技法は回転系切り。

土師質土器

搦鉢 (38、39) 38は口縁部から体部の破片。復元口径 32.4cm、器高 10.8 + cm。内面は横ナア後に細かな刷毛目調整。その後に、6条の摺り目を、間隔を開けて刻む。色調は内外面ともに淡白褐色。焼成はやや不良で、器壁断面を観察すると中心部に帯状に灰色を呈す生焼け部がある。39は底部の破片。器高 1.5 + cm。復元底径 15.1cm。見込み部から体部の立ち上がり摺り目を施している。見込み部には摺り目を施していない。焼成はやや不良。器壁断面には生焼け部がサンドイッチ状になっており、灰黒色を呈す。底面は一定方向の刷毛目調整をして平滑に仕上げている。

国産陶器

卍皿 (40) 底部破片。内面に格子状の卍目を施す。底部外面は回転系切り。色調は淡黄褐色。瀬戸美濃産か。

石製品

石罎 (41) 口縁部破片。滑石製。断面三角形罎。

193SD078 出土遺物 (Fig.23)

青磁

小皿 c (42) 復元口径 6.2cm、器高 1.7cm、復元底径 2.5cm。内外面に蓮華文を彫る。未分類。

土製品

土玉 (43) 縦 2.4cm、横 2.05cm、厚さ 2.1cm。全面をナテ調整して丸みを帯びている。

193SD086 出土遺物 (Fig.23)

土師器

小皿 a1 (44) 口径 8.1cm、器高 0.75cm、底径 7cm。底部切り離し技法は回転系切り。

須恵質土器

鉢 (45) 底部破片。器高 2+cm、復元底径 10cm。内面は使用により摩滅している。搦鉢か。

石製品

不明製品 (46) 縦 3.1cm、横 5.1cm、厚さ 2.1cm。滑石石罎の二次利用品。内側に枠を作るように溝を彫り、やや丸みを帯びた平坦面を作り出している。

井戸出土遺物

193SE030 茶褐色土出土遺物 (Fig.24)

瓦質土器

鉢 (1) 口縁部破片。

瓦類

平瓦 (2) 端部破片。凹面には布目痕。凸面には格子目叩き。端部は半分まではへら切りしているが、残りは分割した後、未調整である。

193SE030 黄色土出土遺物 (Fig.24)

須恵器

蓋 (3~7) 3~5は蓋a。口縁部の返りの位置が多様だが、時期差と考えられる。6は蓋3、7は蓋4。須恵器蓋の時期としては7世紀末から8世紀後半まで存在する型式である。井戸自体は伴件遺物からもっと新しい段階に構築されたものであるため、この須恵器群は周辺に存在してたであろう遺跡からの混入と考えられる。

土師器

蓋 3 (8) 口縁部から体部の破片。復元口径 15.6cm、器高 2.55 + cm。口縁端部に沈線状の溝が施される。焼成は不良。器形が特殊なため皿の可能性も残る。

小皿 b (9) 口径 7cm、器高 1.75cm、底径 4.6cm。底部切り離し技法は回転系切り。

瓦

平瓦 (10) 破片。凹面は摩滅が激しく不明。凸面は縄目叩き。指頭圧痕による窪みがある。端部調整はへら切り。焼成は良好で瓦質。

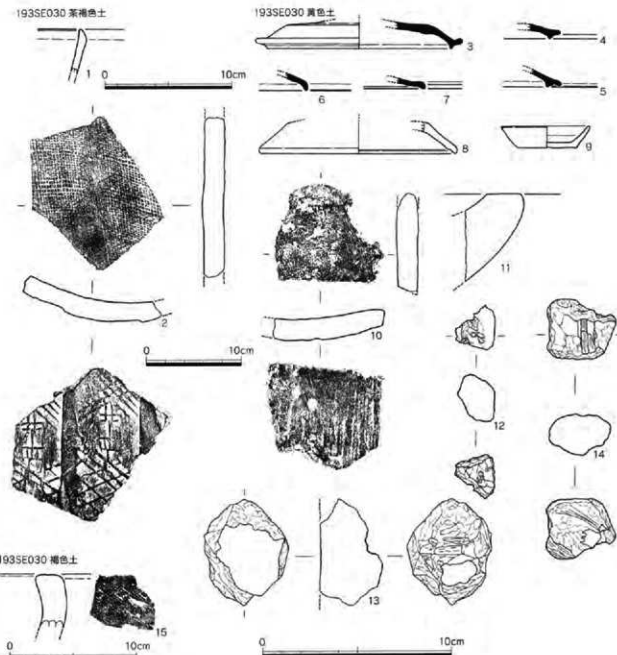


Fig.24 第193次調査井戸出土遺物実測図その1 (1/2、1/3)

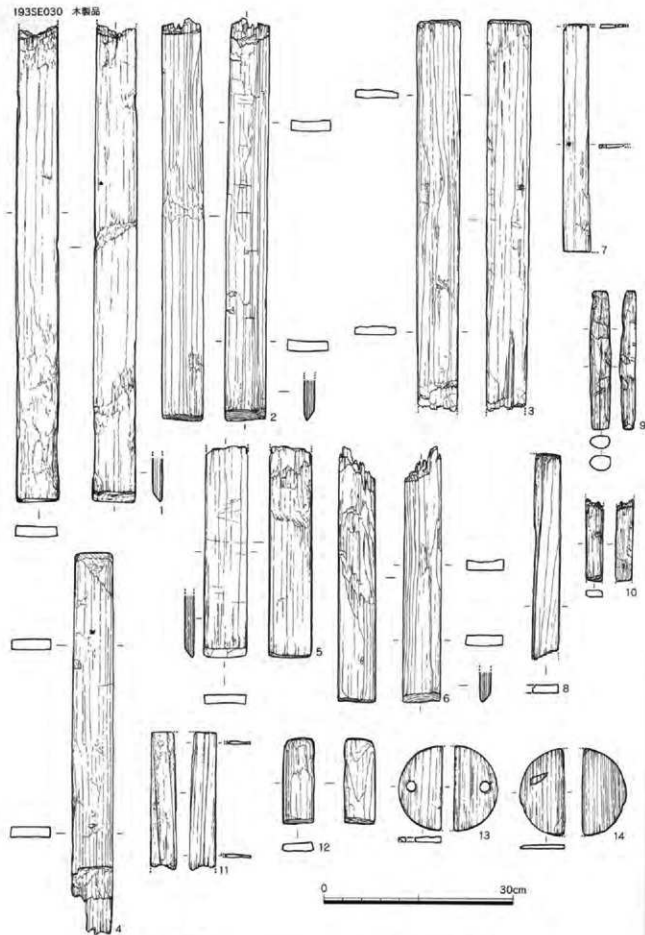


Fig.25 第193次調査井戸出土遺物実測図その2 (1/6)

石製品

石鏃 (11) 口縁部破片。色調は淡灰褐色。石材は砂岩。

金属製品

鍔浮 (12) 小破片。色調は暗灰褐色～暗茶褐色。

土製品

炉壁 (13) 胎土の基本的な色調は淡橙褐色だが、内面は灰色に変化している。外面には藁などの痕跡がみえる。

焼土塊 (14) 小破片。内外面とも藁の痕跡が認められる。

1935E030 出土遺物 (Fig.25)

木製品

井戸枠材 (1～6) 縦板。5は破片。縦33.9cm、横6.9cm、厚み1.5cm。横方向の両端部は切断して、縦方向の平面は若干加工をして平坦にしている。縦方向の下部は斜めに切断して突出させている。全体として縦は64.6cm～76cm。長横幅は5～7cm羽で両面を鋭利な器具で切断している。下部は斜めに切り落として鋭く加工している。こちらが井戸枠の底部に突き刺す側と考えられる。12は小破片。縦13.7cm、横5.1cm、厚み1.4cm。両端は加工されている。

板材 (7, 8) 7は縦36.5cm、横4.3cm、厚さ0.6cm。中央部と上部に穿孔が認められる。ほかの井戸枠に比べると厚さが薄い。8は片側が割れた破片。横方向の端部は切断して加工されている。縦33cm、横4.3cm、厚さ1.4cm。

横棧 (9, 10) 9は、縦22.1cm、横3.4cm、厚み2.6cm。両端は加工している。板材ではなく丸木を加工している。横棧か。10は小破片。横棧か。

蓋 (13, 14) 13は縦14.0cm、横7.2cm、厚み0.7cm。本来円形だが現状は1/2。14は縦13.55cm、縦6.9cm、厚さ1.05cm。中央から外側に近い部位に穴が開けられている。穴の直径は1.6cm。13と同じく残存率は半分。13と14は接合しない。

土坑出土遺物

1935K008 出土遺物 (Fig.26)

土製品

取皿 (1) 器高3.5+cm。内面は器壁が還元化しており、青灰色を呈し焼締まっている。胎土の色調は明灰色。

1935K021 出土遺物 (Fig.26)

土師器

杯b (2) 底部～体部の破片。器高2.0+cm、底径6.1cm。色調は淡紅灰色。底部切り離し技法は回転系切り。

1935K025 出土遺物 (Fig.26)

土師器

小皿a1 (3, 4) 3は復元口径8.7cm、器高1.2cm、復元底径6.8cm。色調は黄灰色。底部切り離し技法は、回転系切り。器形はやや歪んでいる。4は器高1.0+cm。色調は赤褐色。底部切り離し技法は回転系切り。

杯a (5, 6) 5は口径13.7cm、器高2.8cm、底径9.4cm。底部切り離しは回転系切り。黄灰色。6は復元口径13.7cm、器高3.2cm、底径8.8cm。底部切り離し技法は回転系切り。色調は茶褐色。器

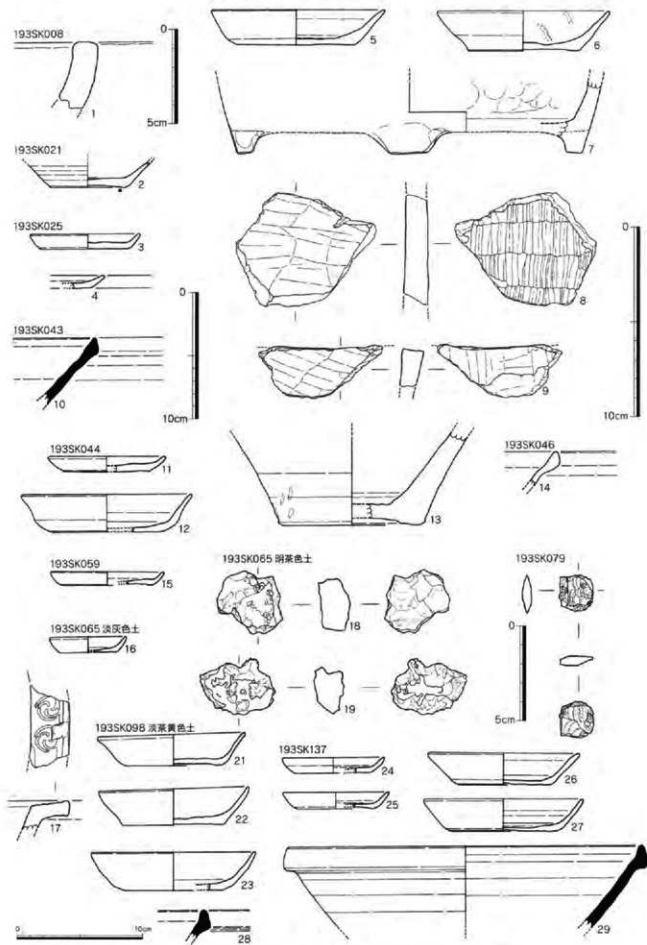


Fig.26 第193次調査土坑出土遺物実測図その1 (1/2, 1/3)

形から坏bの可能性もある。

瓦質土器

火鉢(7) 底破片。器高5.7+cm。復元底径27.2cm。台形の脚が付く。底部は未調整で粗い砂目となっている。焼成はやや不良。器壁断面がサンドイッチ状になって、中央部が灰黒色を呈す。外面にわずかに瓦質化しており、薄黒色をしている。

石製品

滑石製石鍋(8, 9) 8は縦6.0+cm、横7.4+cm、厚1.2cm。外面に縦方向の細かい単位での整削り痕跡あり。9は縦2.75+cm、横6.5+cm、厚1.1cm。

193SK043 出土遺物 (Fig.26)

須恵質土器

鉢(10) 器高5.3+cm。焼成はやや不良。色調は明茶褐色。

193SK044 出土遺物 (Fig.26)

土師器

小皿a1(11) 復元口径9.4cm、器高1.25cm、復元底径6.9cm。色調は褐色。底部切り離し技法は回転系切り。

杯a(12) 復元口径13.6cm、器高3.0cm、復元底径9.1cm。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転系切りか。

国産陶器

壺(13) 底破片。器高7.0+cm、復元底径11.6cm。内外面に青灰色の釉垂れが認められる。底部外面の外側に、離れ砂的な帯が円形に認められる。底部外面から内面に向かっておされて、わずかに上げ底状態になっている。

193SK046 出土遺物 (Fig.26)

瓦質土器

掬鉢(14) 口縁部破片。器高2.7+cm。焼成はやや不良。

193SK059 出土遺物 (Fig.26)

土師器

小皿a1(15) 破片。口径復元9.0cm、器高1.1cm、復元底径7.4cm。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転系切り。XVI期。

193SK065 淡灰色土出土遺物 (Fig.26)

土師器

小皿b(16) 復元口径6.1cm、器高1.25cm、復元底径4.6cm。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転系切り。

瓦質土器

土鍋(17) 口縁部破片。器高2.4+cm。焼成はやや不良。色調は赤黄灰色～薄黒灰色。口縁部上部に、左三つ巴文が連続スタンプされている。

193SK065 明茶色土出土遺物 (Fig.26)

鉄製品

鉄滓(18, 19) 18は縦3.3cm、横3.5cm、厚1.6cm。19は縦3.0cm、横4.0cm、厚1.5cm。

193SK079 出土遺物 (Fig.26)

石製品

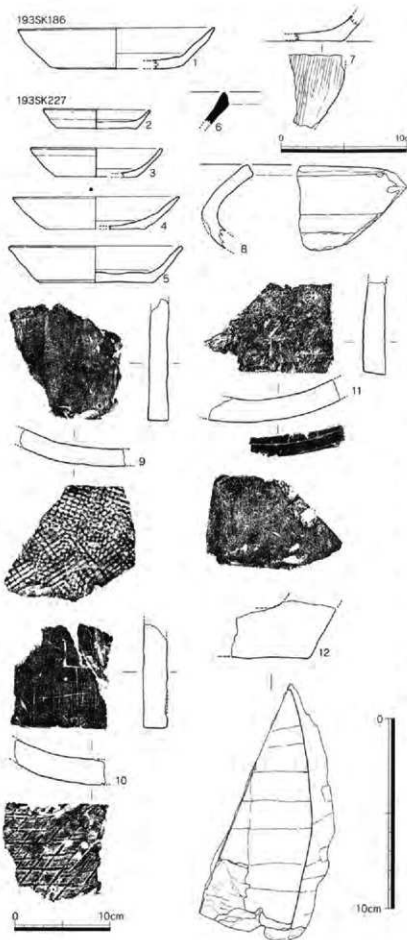


Fig.27 第193次調査土坑出土遺物実測図その2 (1/2, 1/3)

剥片 (20) 縦1.8cm, 横1.9cm, 厚0.5cm。石材は黒曜石。

193SK098 淡茶黄色土出土遺物 (Fig.26)

土師器

杯 a (21, 22, 23) 21は復元口径11.65cm, 器高2.45cm, 底径7.65cm。22は口径11.9cm, 器高2.85cm, 底径8.0cm。21, 22は共に底部切り離し技法は回転系切り。23は復元口径13.0cm, 器高3.05cm, 復元底径8.0cm。底部の残存が少なく底部切り離し技法は不明。

193SK137 出土遺物 (Fig.26)

土師器

小皿 a (24, 25) 24は復元口径8.0cm, 器高1.25cm, 復元底径5.9cm。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転系切り。25は復元口径8.4cm, 器高1.3cm, 復元底径6.0cm。底部切り離し技法は風化のため不明。

杯 a (26, 27) 26は復元口径12.0cm, 器高2.5cm, 復元底径7.5cm。色調は黄灰色だが、一部淡赤灰色を呈す。底部切り離し技法は回転系切り。その後に板状圧痕。27は復元口径12.6cm, 器高2.55cm, 復元底径8.4cm。底部切り離し技法は回転系切り。その後に板状圧痕。

須恵質土器

掬鉢 (28, 29) 28は口縁部破片。器高2.0+cm。東播系。29は口縁部から体部の破片。復元口径27.8cm, 器高6.5+cm。東播系。

193SK186 出土遺物 (Fig.27)

土師器

杯 a (1) 復元口径15.5cm, 器高3.2cm, 復元底径9.5cm。底部切り離しは回転系切り、後に板状圧痕。色調は黄灰色。

193SK227 出土遺物 (Fig.27)

土師器

小皿 a (2) 復元口径8.4cm, 器高1.5cm, 復元底径3.1cm。底部切り離しは回転系切り。
小杯 a (3) 復元口径10.4cm, 器高2.3cm, 復元底径6.4cm。底部切り離しは回転系切り。
杯 a (4, 5) 4は復元口径13.2cm, 器高2.55cm, 復元底径8.0cm。底部切り離しは回転系切り。
5は復元口径13.7cm, 器高2.9cm, 底径8.8cm。底部切り離しは回転系切り。板状圧痕あり。XVII期。

須恵質土器

掬鉢 (6) 口縁部破片。器高2.5+cm。

瓦質土器

鉢 (7) 底部破片。器高2.1cm。焼成はやや不良。瓦質。底部に並行のカキメ調整。

甕 (8) 器高6.6cm。口縁部破片。焼成は不良。

瓦類

平瓦 (9~11) 9は縦12.7+cm, 横11.1+cm, 厚2.1cm。焼成はやや不良で瓦質。凹面は布目痕跡をナデ消している。凹面は格子目吹き痕跡。端部はヘラ切り。広端部の可能性が高い。10は縦10.9+cm, 横9.6+cm, 厚2.6+cm。焼成はやや良好。瓦質。凹面は布目痕跡。凸面は格子目吹き痕跡。端部はヘラ調整。11は縦9.7cm, 横13.8cm, 厚2.6cm。焼成はやや良好。瓦質。淡黄灰色。凹面はナデ調整。凸面は工具をつかったナデ調整。側端部はヘラで切れ目をいれたあと折っている。端部はヘラ調整。凹面側の端部縁をヘラで調整している。端部に二条の刻線はいる。

石製品

滑石製石鏝 (12) 底部破片。器高3.0cm。二次利用をしようとして底面を上下方向から切っていることが断面で確認できる。最後はへし折ったようだ。底部から体部にかけては煤が器壁にしみこんでおり、鏝を火にかけたことがわかる。

その他の遺構出土遺物

193SX002 出土遺物 (Fig.28)

金属製品

鉈澤 (1) 縦3.8cm, 横4.7cm, 厚1.15cm。片側の面上に銅質の器壁のようなものが残存しているので、そちら側が甲に接していたと考えられる。

193SX006 出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿 a (2, 3) 2は復元口径8.6cm, 器高1.1cm, 復元底径6.8cm。底部切り離し技法は回転系切り。3は復元口径8.8cm, 器高1.2cm, 復元底径7.0cm。

国産陶器

鉢 (4) 底部破片。器高2.2+cm。上げ底状の底部。内面は器壁が摩擦減して平滑になっている。

石製品

滑石製品 (5) 縦2.1cm, 横1.6cm, 厚0.8cm。外径5mm, 内径2mmの穴が穿たれている。再利用品か。

193SX007 出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿 a1 (6) 復元口径 9.7 cm、器高 0.9 cm、復元底径 7.7 cm。摩耗のため調整不明。

杯 a (7) 復元口径 11.2 cm、器高 2.4 cm、復元底径 8.0 cm。摩耗のため調整不明。

瓦質土器

捏鉢 (8、9) 8は口縁部破片。器高2.3cm。焼成は不良。9は口縁部破片。器高2.4cm。焼成は不良。色調は明灰色。

193SX016 出土遺物 (Fig.28)

石製品

滑石製石鏝 (10) 破片。縦 2.85 cm、横 4.6 cm。

193SX020 出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿 a1 (11) 復元口径 9.3 cm、器高 1.35 cm、復元底径 7.4 cm。底部切り離し技法は不明。板状圧痕あり。

杯 a (12) 復元口径 12.2 cm、器高 2.55 cm、復元底径 8.6 cm。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転糸切り。

193SX020 褐色土出土遺物 (Fig.28)

弥生土器

壺 (13) 口縁部破片。器高 2.5+ cm。色調は黄赤色。

須恵質土器

鉢 (14~16) 14は器高3.1+cm。15は口縁部破片だが、端部を欠く。器高3.2+cm。16は器高2.8+cm。14~16は捏鉢の口縁部。東播磨系か。

国産陶器

甕 (17) 口縁部破片。器高 3.2+ cm。常滑産か。

中国陶器

鉢 (18、19) 18は口縁部破片。復元口径24.9cm、器高3.7+cm。鉢1-1a。19は復元口径24.4 cm、器高11.1cm、復元底径8.6cm。内面に6条の摺目を施す。鉢1-1a類。

石製品

紡錘車 (20) 破片。縦 5.9+cm、横 2.4+cm、厚さ 1.5cm。底面は平坦に仕上げ、上部はやや丸味を帯びている。中央に直径 1cm 以上の穴を穿っている。色調は暗灰色。石材は滑石。

193SX020 黒色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿 a1 (21) 復元口径 9.4 cm、器高 1.3 cm、復元底径 7.4 cm。胎土は 2mm 以下の黄金色雲母片を大量に含む。色調は赤褐色。底部切り離し技法は回転糸切り。

杯 a (22) 復元口径 13.0 cm、器高 2.45 cm、復元底径 8.8 cm。色調は赤褐色。底部切り離し技法は回転糸切り。

杯 c (23) 高台部の破片。器高 2.2+ cm、高台径 6.0 cm。貼り付け高台。

須恵質土器

鉢 (24) 器高 3.3 cm。

193SX020 黒色粘出土遺物 (Fig.28)

須恵器

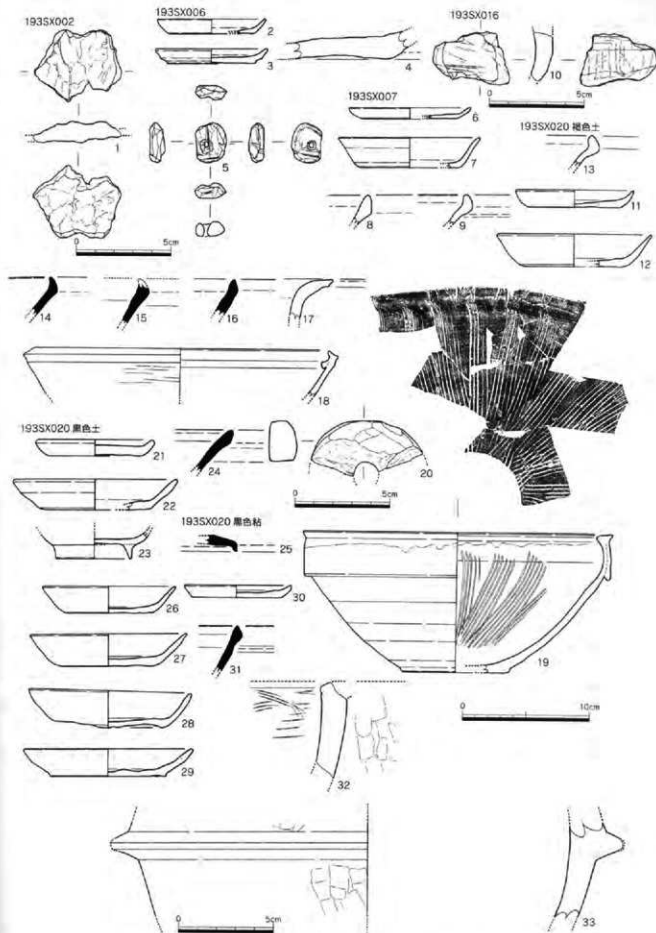


Fig.28 第193次調査その他の遺構出土遺物実測図その1 (1/2、1/3)

蓋 3 (25) 口縁部破片。器高 1.3+cm。口縁端部をやや外につまむ。

杯 a (26 ~ 29) 26 は復元口径 10.6 cm。器高 2.15 cm。復元底径 7.0 cm。色調は灰白色。底部切り離し技法は回転系切り。器壁がやや薄手。27 は復元口径 12.4 cm。器高 2.55 cm。底径 7.3 cm。底部切り離し技法は回転系切り。胎土は、1mm 以下の金色雲母を少量含む。28 は完形。ただし、器形は歪んでいる。口径 12.8 cm。器高 2.95 cm。底径 8.6 cm。底部切り離し技法は回転系切り。29 は復元口径 12.2 cm。器高 2.55 cm。復元底径 8.6 cm。色調は淡褐色。底部切り離し技法は回転系切り。

小皿 a1 (30) 口径 8.4 cm。器高 1.0 cm。底径 7.0 cm。底部切り離し技法は回転系切り。その後板状圧痕を施す。

須恵質土器

鉢 (31) 口縁部破片。器高 3.7+cm。口縁部外側に強いナデが入って屈曲している。

石製品

滑石製石鐮 (32、33) 32 は体部の破片。器高 5.1+cm。厚さ 1.3 cm。33 は跨部の破片。器高 5.05 cm。復元跨部最大径 27.1 cm。32、33 ともに外面に煤が付着している。

193SX023 出土遺物 (Fig.29)

土師器

小皿 a1 (1、2) 1 は復元口径 9.0 cm。器高 1.3 cm。復元底径 7.2 cm。底部切り離し技法は不明。板状圧痕が確認できる。2 は復元口径 9.5 cm。器高 1.35 cm。復元底径 7.4 cm。底部切り離しは不明瞭。

杯 a (3) 復元口径 14.2 cm。器高 2.2 cm。復元底径 9.2 cm。底部切り離し技法は回転系切り。

193SX027 出土遺物 (Fig.29)

須恵器

杯身 (4) 口縁部破片。器高 1.3+cm。

埴輪陶器

杯 c×皿 c (5) 器高 1.2+cm。復元高台径 6.0 cm。硬質。貼り付け高台。高台登付まで施軸するが、外面高台内部は露胎しており、漬け掛けと思われる。見込みのヘラミガキ単位は太い。内面見込みにトチンのような痕跡がある。胎土の色調は青灰色。釉調は濃緑色。東海産か。

193SX035 出土遺物 (Fig.29)

国産陶器

鉢 (6) 底部破片。器高 6.3+cm。復元底径 10.4 cm。内面は強い回転ナデ調整。外面は叩き調整の跡、刷毛目調整をして最後にナデ調整をしている。焼成は良好。色調は明赤褐色~黒褐色。常滑産。

瓦類

丸瓦 (7) 縦 11.6+cm。横 10.6+cm。厚さ 2.7 cm。玉縁部の破片。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。焼成はやや良好で瓦質。側端部はヘラ切り調整。

平瓦 (8、9) 8 は縦 12.0+cm。横 7.6+cm。厚さ 2.2 cm。焼成はやや不良で瓦質。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。側端部はヘラ切り調整。9 は縦 8.65+cm。横 7.7+cm。厚さ 2.2 cm。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。焼成は良好で、須恵質。

金属製品

鉦洋 (10、11) 10 は縦 3.15 cm。横 2.6 cm。厚さ 1.8 cm。11 は縦 4.4 cm。横 3.8 cm。厚さ 2.7 cm。

193SX038 出土遺物 (Fig.29)

瓦類

丸瓦 (12) 縦 7.2 cm。横 6.6 cm。厚さ 1.4 ~ 1.6 cm。焼成は良好で須恵質。側端部は半分ヘラ切

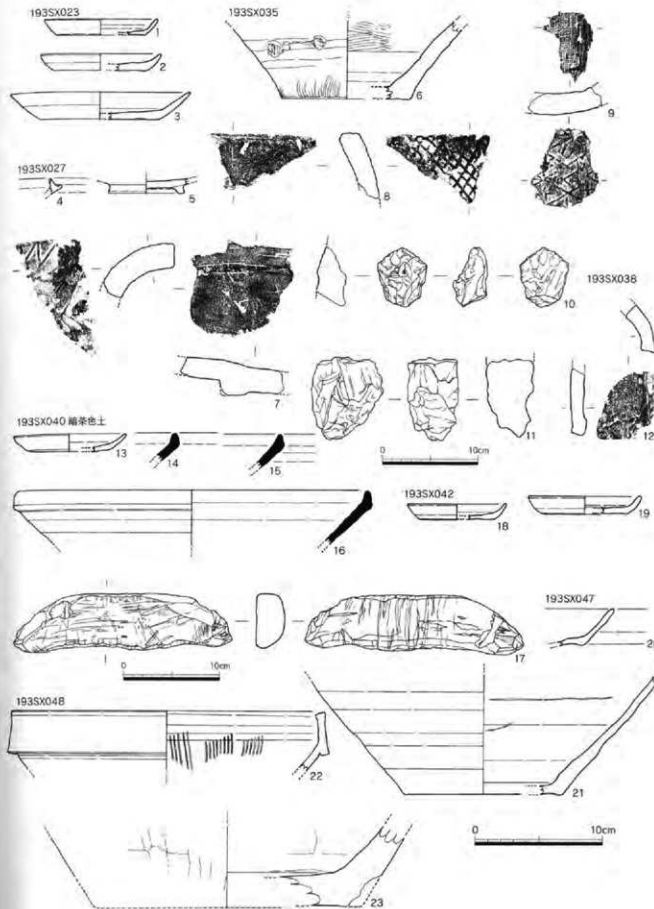


Fig.29 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 2 (1/2、1/3、1/4)

りの後に折る。

193SX040 暗茶色土出土遺物 (Fig.29)

土師器

小皿 a1 (13) 復元口径 9.0 cm, 器高 1.4 cm, 復元底径 6.6 cm。底部切り離し技法は不明。

須恵質土器

程鉢 (14~16) 14~16 は口縁部破片。すべて東播系と考えられる。14 は器高 2.2+ cm, 15 は器高 2.8+ cm, 16 は復元口径 27.7 cm, 器高 4.3+ cm。

石製品

滑石製石鏝 (17) 縦 3.1 cm, 横 11.5 cm, 厚さ 1.5 cm。石鏝の再加工品ではあるが、利用目的は不明。

193SX042 出土遺物 (Fig.29)

土師器

小皿 a1 (18, 19) 18 は復元口径 7.8 cm, 器高 1.25 cm, 復元底径 6.1 cm, 19 は復元口径 8.9 cm, 器高 1.4 cm, 復元底径 7.0 cm, 18, 19 共に底部切り離し技法は回転糸切り。19 は切り離し後に板状圧痕を施す。

193SX047 出土遺物 (Fig.29)

土師器

坏 b (20) 器高 2.9+ cm。底部切り離し技法は回転糸切り。焼成は良好。

須恵質土器

程鉢 (21) 底部から体部の破片。器高 9.5+ cm, 復元底径 12.5 cm。焼成は不良で瓦質。

193SX048 出土遺物 (Fig.29)

輸入陶器

鉢 (22) 復元口径 25.0 cm, 器高 4.7+ cm, II-1a 類。

石製品

滑石製石鏝 (23) 底部破片。器高 4.3+ cm, 復元底径 14.0 cm 程度か。内面は使用痕が多く残っている。

193SX052 出土遺物 (Fig.30)

瓦質土器

片口鉢 (1) 口縁部破片。器高 1.2+ cm, 焼成は不良。瓦質。

193SX053 出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿 a1 (2) 復元口径 8.2 cm, 器高 1.1 cm, 復元底径 6.3+ cm。色調は赤褐色。底部切り離しは回転糸切り技法。

193SX056 出土遺物 (Fig.30)

石製品

砥石 (3) 縦 3.1 cm, 横 1.65 cm, 厚さ 1.0 cm, 4 面が使用痕により平滑になっている。

193SX057 出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿 a1 (4) 復元口径 7.2 cm, 器高 1.2 cm, 復元底径 5.4 cm。色調は黄白色。底部切り離しは回転糸切り技法。

金属製品

銅洋 (5) 縦 4.6 cm, 横 3.5 cm, 厚さ 2.6 cm。表面が金属質でなめらかな面と、土師質の部位が存在する。

193SX060 出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿 a1 (6) 復元口径 9.0 cm, 器高 0.8 cm, 復元底径 7.2 cm。色調は黄灰色。底部切り離しは回転糸切り後に、板状圧痕。

坏 a (7) 口径 13.0 cm, 器高 2.55 cm, 底径 8.8 cm。色調は淡赤褐色。底部切り離し技法は、回転糸切り技法。

瓦類

平瓦 (8) 厚さ 2.3 cm。焼成はやや不良。土師質。色調は黄灰色。凹面は布目痕跡、凸面は格子目叩き。記号として格子目内に「×」が確認できる。側端部はヘラ切り。

193SX067 出土遺物 (Fig.30)

石製品

滑石製石鏝 (9) 縦 2.8+ cm, 横 6.7+ cm, 厚さ 1.2 cm。外面は炭素が吸着している。煮炊きの痕跡と考えられる。

193SX069 出土遺物 (Fig.30)

石製品

滑石製加工品 (10) 縦 5.7 cm, 横 6.3 cm, 厚さ 2.1 cm。楕円形を呈す。石鏝の二次加工品。

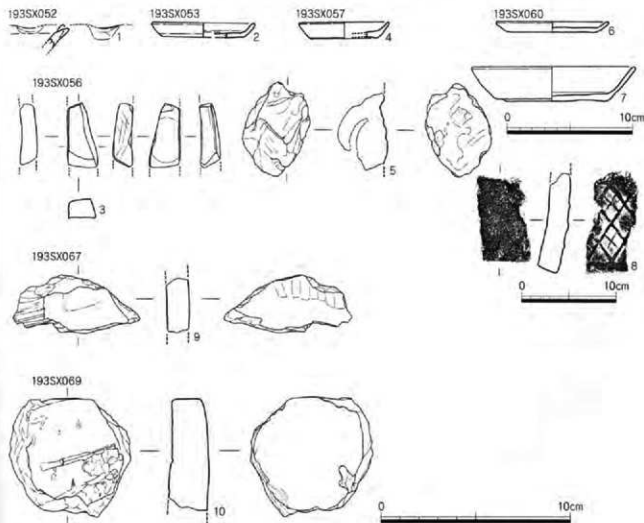


Fig.30 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 3 (1/2, 1/3, 1/4)

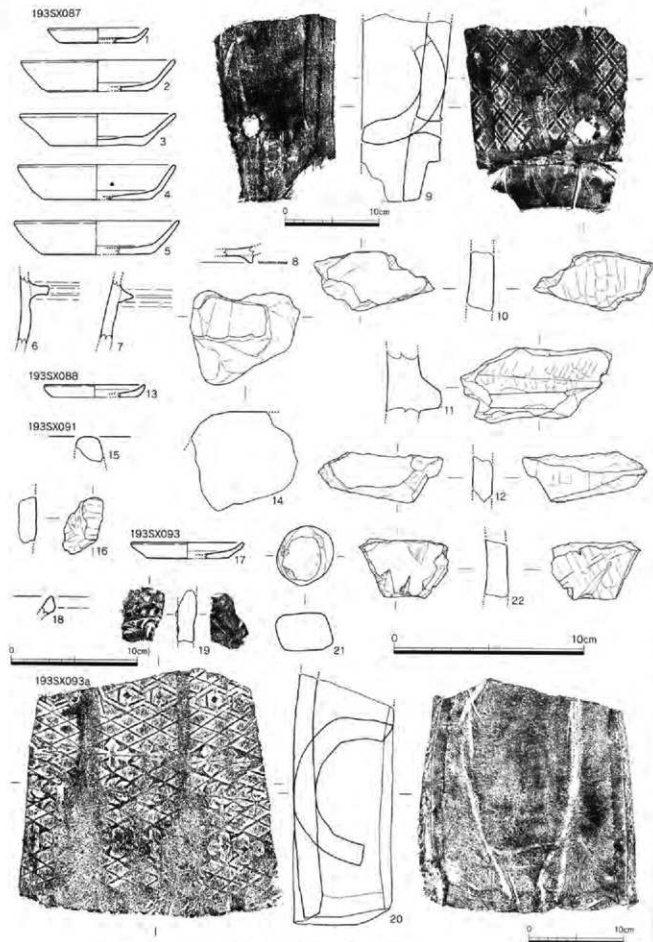


Fig.31 第193次調査その他の遺構出土遺物実測図その4 (1/2, 1/3, 1/4)

193SX087 出土遺物 (Fig.31)

土師器

小皿 a1 (1) 復元口径 8.0 cm, 器高 1.2 cm, 復元底径 6.1 cm, 底部切り離しは回転系切り。
 环 a (2~5) 2 は復元口径 12.2 cm, 器高 2.5 cm, 復元底径 8.0 cm, 底部切り離しは回転系切り。
 板状圧痕あり。色調は黄灰色。3 は復元口径 12.4 cm, 器高 2.6 cm, 復元底径 7.6 cm, 底部切り離しは回転系切り。板状圧痕あり。色調は黄灰色。4 は復元口径 12.5 cm, 器高 2.8 cm, 復元底径 8.6 cm, 底部切り離しは回転系切り。色調は黄灰色。5 は、復元口径 13.0 cm, 器高 2.7 cm, 復元底径 8.6 cm, 底部切り離しは不明。板状圧痕あり。色調は淡赤灰色。

土師質土器

羽釜 (7) 鈿部の破片。器高 4.7+ cm, 焼成は良好。色調は赤褐色。外面に煤が付着する。

瓦質土器

羽釜 (6) 鈿部の破片。器高 5.6+ cm, 焼成は良好。色調は灰色~濃黒色。外面の前面にわたって煤が吸着している。

瓦器

椀 c (8) 器高 1.3+ cm, 貼り付け高台。内面は灰白色で瓦質化していない。

瓦類

丸瓦 (9) 縦 19.2 cm, 横 11.1 cm, 厚さ 2.5 cm, 玉縁部の破片。焼成はやや不良。色調は黄白色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。端部はヘラ切り。側縁部はヘラ切り後に凹面割をヘラにより調整している。凹面は布目痕、凸面は格子目。二重格子である。凸面方向から、瓦の中央に直径 2.2 cm の孔を穿っている。

石製品

滑石製石鍋 (10~12) 10 は器高 3.1+ cm, 厚さ 1.3 cm, 11 は器高 3.3 cm, 厚さ 1.7 cm, 鈿部厚さ 2.8 cm, 鈿部の破片。色調は茶褐色。12 は厚さ 1.0 cm, 外面は煤が付着している。

193SX088 出土遺物 (Fig.31)

土師器

小皿 a1 (13) 復元口径 8.0 cm, 器高 1.0 cm, 復元底径 6.6 cm, 底部切り離しは回転系切り。

土製品

鈿型 (14) 縦 4.9+ cm, 横 5.1+ cm, 厚さ 5.1+ cm, 平坦面と斜面によって構成されている鈿型。色調は、灰白色。鈿型面のクロミは残存している。鍋か。

193SX091 出土遺物 (Fig.31)

石製品

滑石製石鍋 (15, 16) 15 は口縁部の破片。器高 0.9+ cm, 16 は体部の小片。

193SX093 出土遺物 (Fig.31)

土師器

小皿 a1 (17) 復元口径 8.9 cm, 器高 1.3 cm, 復元底径 6.4 cm, 底部切り離しは回転系切り。胎土に 1mm 以下の金色雲母を多量に含む。

須恵質土器

鉢 (18) 口縁部破片。焼成は良好。

瓦類

軒丸瓦 (19) 瓦当面の破片。縦 5.4+ cm, 厚さ 2.05 cm, 焼成は不良。瓦質。蓮弁と珠文を部分的

に確認できる。

丸瓦 (20) 縦 26.4 cm, 横 15.5 cm, 厚さ 2.3 cm, 焼成は良好, 須恵質。色調は褐灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を多量に含む。端部はへら切り。側縁部は半分へら切りの後に破断して未調整。凹面は布目圧痕と吊り紐痕跡あり。凸面は格子目印目調整。叩き目には、記号が 2 種類確認できる。器形は歪んでいる。

土製品

瓦玉 (21) 縦 3.15 cm, 横 3.0 cm, 厚さ 2.0 cm, 色調は暗黒色。

石製品

滑石製石鏝 (22) 体部の破片。厚さ 1.2 cm。

193SX096 出土遺物 (Fig.32)

須恵器

蓋 (1) 器高 1.5+ cm, 天井部へら削り。線刻の記号あり。焼成はやや良好。色調は暗灰赤色。

甕 (2) 器高 2.4+ cm, 口縁部破片。

193SX106 出土遺物 (Fig.32)

土製品

土甕 (3~9) それぞれ、色調は赤褐色を呈す。切を含んでいた痕跡が残る。平らな面をもつ個体は、壁の面に使われていたと考えられる。3は縦5.0+cm, 横4.4+cm, 厚さ3.7cm, 4は縦2.6+cm, 横3.5+cm, 厚さ1.9+cm, 5は縦2.6+cm, 横2.5+cm, 厚さ2.0+cm, 6は縦4.1+cm, 横4.0+cm, 厚さ2.3+cm, 7は縦5.7+cm, 横4.9+cm, 厚さ3.4+cm, 8は縦2.3+cm, 横1.7+cm, 厚さ1.4+cm, 9は縦2.7+cm, 横4.6+cm, 厚さ1.3+cm, 10は縦3.8+cm, 横5.6+cm, 厚さ4.1+cm。

193SX111 出土遺物 (Fig.32)

瓦類

平瓦 (11) 縦9.2+cm, 横14.2+cm, 厚さ2.2+cm, 側端部は一部にへら切りで分割ラインをいれて、あとは削ってそのままの状態。端部は凹面に面取り状にへら調整をしている。凹面は布目痕跡をナデ消している。凸面は格子目叩き調整。焼成はやや不良。瓦質。

193SX112 出土遺物 (Fig.32)

石製品

不明製品 (12) 縦 2.3+ cm, 横 1.25 cm, 厚さ 0.8+ cm。滑石製石鏝の再利用品か。

193SX113 出土遺物 (Fig.32)

土師器

甕 c (13) 器高 2.25+ cm, 復元高台径 7.4 cm。

193SX114 出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿 a1 (14) 復元口径 8.2 cm, 器高 1.05 cm, 復元底径 5.8 cm。底部切り離しは回転糸切り。焼成は良好。色調は赤褐色。

須恵質土器

こね鉢 (15) 口縁部破片。器高 3.0+ cm, 東播系。

193SX118 出土遺物 (Fig.32)

土師器

鉢 (16) 口縁部破片。器高 4.9+ cm, 口縁部端部を内側に傾斜させる。外面の前面に煤が付着している。

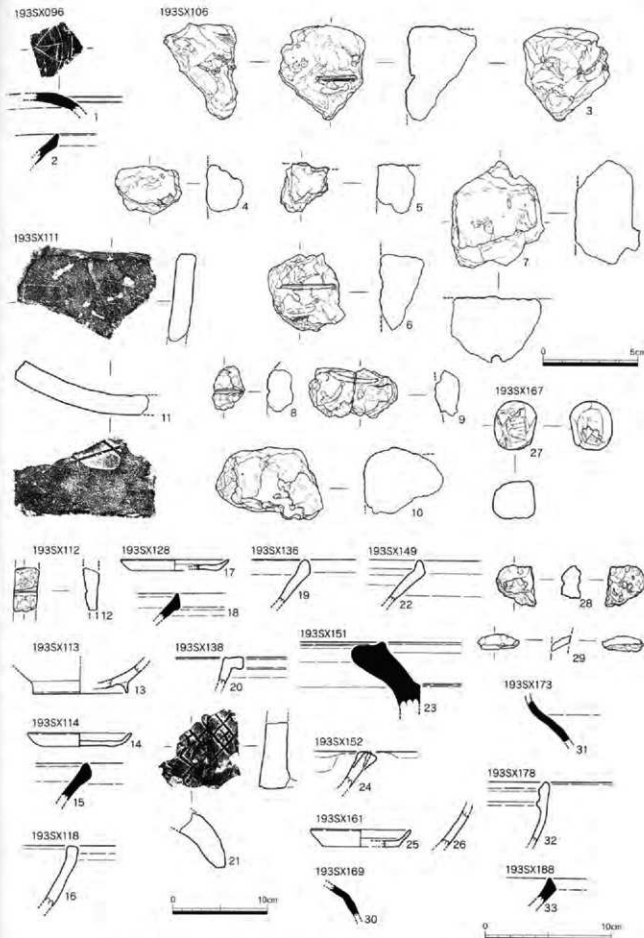


Fig.32 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 5 (1/2, 1/3, 1/4)

193SX128 出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿 a1 (17) 復元口径 8.6 cm、器高 0.85 cm、復元底径 7.0 cm、底部切り離しは回転糸切り。その後に板状圧痕を施す。

須恵器

鉢 (18) 器高 2.1+ cm、口縁部破片。束播系。

193SX136 出土遺物 (Fig.32)

瓦質土器

鉢 (19) 器高 3.4+ cm、口縁部破片。焼成は不良。色調は灰白色。

193SX138 出土遺物 (Fig.32)

土師質土器

鍋 (20) 口縁部破片。器高 2.2+ cm、口縁部は L 字型で横方向に水辺に延びている。外面には煤が吸着している。焼成は良好。

瓦類

丸瓦 (21) 縦 8.6 cm、横 8.3 cm、厚さ 2.5 cm、玉縁部が剥離している。凹面はナデ調整。凸面は格子目叩き調整。格子目の間に「×」字あり。側端部はへら切り。

193SX149 出土遺物 (Fig.32)

土師質土器

鉢 (22) 口縁部破片。器高 3.2+ cm、焼成はやや不良。色調は淡赤色。

193SX151 出土遺物 (Fig.32)

中国陶器

壺 (23) 器高 5.2+ cm、口縁部破片。大きく内湾する口縁と考える。口縁部外面に小さい突帯を持つ。焼成は良好。外面は焼締まっているが、器内の内面は灰白色でサンドイッチ状となっている。

193SX152 出土遺物 (Fig.32)

土師質土器

片口鉢 (24) 器高 3.0 cm、口縁部片口部の破片。焼成はやや良好。色調は黄灰色。

193SX161 出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿 a1 (25) 復元口径 7.9 cm、器高 1.35 cm、復元底径 6.0 cm、底部切り離しは回転糸切り。色調は明赤褐色。XIX 期。

施釉陶器

鉢 (26) 器高 2.9+ cm、体部破片。内外面に施釉あり。2次焼成をうけており、表面の釉の残存が悪い。

193SX167 出土遺物 (Fig.32)

土製品

瓦玉 (27) 縦 2.5 cm、横 2.2 cm、厚さ 1.9 cm。色調は灰白色～淡黄灰色。

金属製品

鉋洋 (28) 縦 2.2 cm、横 2.1 cm、厚さ 1.0 cm。色調は暗灰色。

石製品

滑石製品 (29) 破片。縦 0.7+ cm、横 2.2+ cm、厚さ 1.05+ cm。

193SX169 出土遺物 (Fig.32)

中国陶器

甕 (30) 器高 2.5+ cm、C 群。

193SX173 出土遺物 (Fig.32)

中国陶器

壺 (31) 体部から頸部の破片。3.2+ cm、外面はへら削り。内面はロクロナデ。A 群。

193SX178 出土遺物 (Fig.32)

中国陶器

鉢 (32) 口縁部破片。器高 4.7+ cm、I-1b 類。

193SX188 出土遺物 (Fig.32)

須恵質土器

鉢 (33) 口縁部破片。器高 2.1+ cm。

193SX192 出土遺物 (Fig.33)

瓦類

平瓦 (1) 縦 15.5+ cm、横 5.5+ cm、厚さ 2.4 cm。焼成は良好。瓦質。胎土は 5mm 以下の白色粒子を少量含む。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。

193SX193 出土遺物 (Fig.33)

土師器

坏 a (2) 復元口径 14.8+ cm、器高 2.8+ cm、復元底径 10.6 cm。焼成は良好。色調は灰黄色。底部は回転糸切り調整。

193SX196 出土遺物 (Fig.33)

土師器

坏 a (3~7) 3 は復元口径 11.3 cm、器高 2.2 cm、復元底径 7.4 cm。色調は灰黄色。調整は不明。4 は復元口径 13.6 cm、器高 2.3 cm、復元底径 10.0 cm。色調は灰黄色。調整は不明。5 は口縁部を欠く破片。復元口径 13.7 cm、復元器高 2.8 cm、復元底径 8.4 cm。底部切り離しは回転糸切りの後に板状圧痕。6 は口縁部の破片。器高 1.8+ cm。焼成は不良。色調は灰黄色。7 は器高 2.3+ cm。色調は灰黄色。表面が風化しており調整は不明。

坏 c (8) 器高 1.6+ cm、復元高台径 4.6 cm、貼付高台。焼成は良好。小碗の可能性もある。高台の断面は逆三角形。

須恵質土器

片口鉢 (9) 口縁部の破片。片口部。復元口径 25.2 cm、器高 5.4+ cm。焼成はやや不良。瓦質化している。口縁部外面は帯状に黒色化している。

瓦質土器

鉢 (10) 口縁部の破片。器高 3.9+ cm。焼成はやや不良。色調は灰白色～淡黒灰色。内外面は刷毛目調整。口縁部は肥厚させて横ナデ調整。

石製品

滑石製石鍋 (11) 底面から立ち上りの破片。最大幅 4.8 cm。外面は縦方向の削り。直径 5mm の穴が底面を貫いている。二次加工品。

193SX197 出土遺物 (Fig.33)

須恵質土器

鉢 (12) 口縁部の破片。器高 4.5+ cm。口縁部をやや肥厚させる。

石製品

滑石製石鐮 (13) 縦 1.8 cm、横 3.7 cm、厚さ 1.1 cm。外面に炭素が吸着している。煤と思われる。
193SX198 出土遺物 (Fig.33)

金属製品

鍔澤 (14) 縦 2.0 cm、横 2.8 cm、厚さ 1.1 cm。

193SX198 茶色土出土遺物 (Fig.33)

土師器

小皿 a1 (15) 復元口径 8.3 cm、器高 0.8 cm、復元底径 6.4 cm。色調は灰黄色。底部は回転糸切り。
小皿 a× 小皿 b (16) 復元口径 9.1 cm、器高 1.6 cm、復元底径 7.6 cm。底部回転糸切り。

瓦質土器

鉢×火鉢 (17) 底部の破片。器高 7.2 cm。内面の調整は不明瞭ながら横方向のナゲ調整か。外面は丁寧な削り調整と考えられるが、不明瞭なため推測にとどめておく。

瓦類

軒丸瓦 (18) 瓦頭面の破片。残存高 2.5 cm。珠文と唐草文の一部も確認できる。焼成は良好。須恵質。

193SX199 茶色土出土遺物 (Fig.33)

土師器

小皿 a1 (19) 復元口径 9.0 cm、器高 1.1 cm、復元底径 7.4 cm。色調は淡赤黄色。底部回転糸切り。

石製品

滑石製石鐮 (20) 縦 1.4 cm、横 4.4 cm、厚さ 2.5 cm。二次利用をした際にでた破片か。

193SX202 出土遺物 (Fig.33、34)

土師器

小皿 a1 (21、22) 21 はほぼ完形。復元口径 8.0 cm、器高 1.3 cm、復元底径 6.0 cm。色調は灰黄色。底部は回転糸切り。22 は復元口径 8.6 cm、器高 1.1 cm、復元底径 7.0 cm。色調は赤褐色。底部切り雑しは、回転糸切り。

杯 a (23) 復元口径 15.8 cm、器高 3.1 cm、復元底径 10.0 cm。表面が風化しており、調整は不明。

須恵質土器

鉢 (24) 器高 2.1+ cm。東播系。

瓦質土器

火鉢 (25) 口縁部破片。器高 3.3+ cm。焼成はやや不良。そのためやや土師質化している。色調は黄灰色～灰白色。強く内湾した口縁部。口縁端部は内面に向かって緩い三角状を呈す。

瓦器

椀 (26、27) 26 は口縁部破片。器高 2.3+ cm。外面の回転ナゲ調整が強い。27 は口縁部破片。器高 1.7+ cm。口縁端部が黒色化している。

椀 c (28) 高台破片。器高 1.3+ cm、復元高台径 8.6 cm。貼付高台。高台の断面形は丸みを帯びた方形。

中国陶器

鉢 (29) 口縁部破片。復元口径 22.4 cm、器高 4.3+ cm。内面に摺目。口縁端部に黒色釉が掛かっている。鉢 II -1a 類。

甕 (30) 口縁部破片。器高 4.2+ cm。甕 III 類。

盤 (31) 口縁部破片。器高 1.5+ cm。盤 II 類か。

中国陶器の年代観としては、13 世紀～14 世紀前半と考えられる。

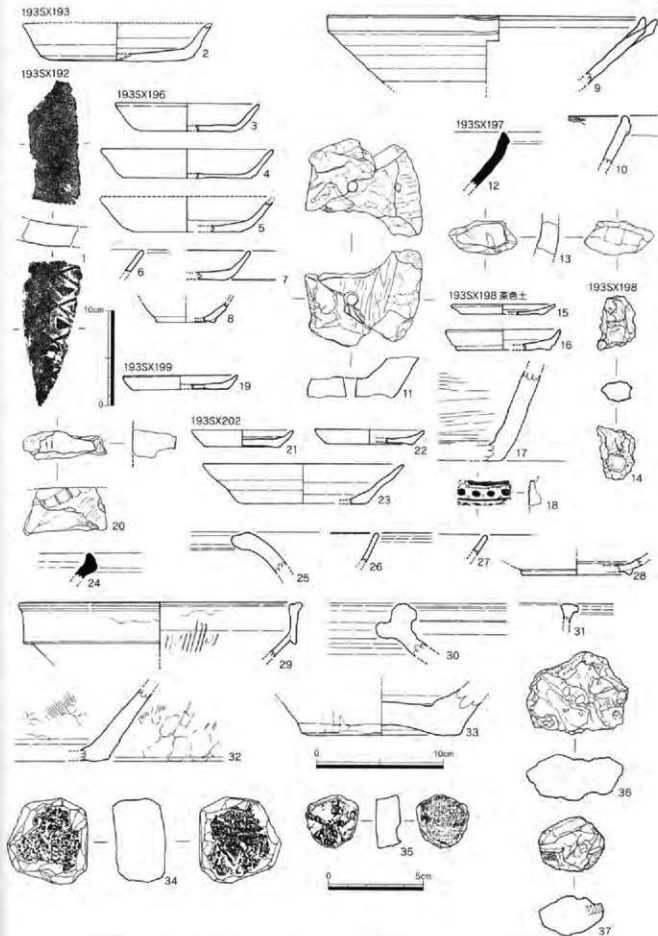


Fig.33 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 6 (1/2、1/3、1/4)

国産陶器

鉢 (32, 33) 32は底部破片。器高5.7+cm。焼成はやや不良。色調は黄赤灰色。内面は横ナデ。外面は剛毛目調整。33は底部の破片。器高3.8cm。復元底径12.5cm。外底面から押し上げられたように外底面中央部が底面から浮いている。色調は明赤褐色。胎土は2mm以下の白色粒子を多量に含む。外底部の端から2cm程度が盛り上がり高台状になっている。内面見込み部に強い回転ナデ。

土製品

瓦玉 (34, 35) 34は縦4.3cm、横4.5cm、厚さ2.6cm。焼成は良好。やや還元炎焼成。須恵質。35は縦2.8cm、横2.7cm、厚さ1.3cm。焼成は良好。須恵質。

缸鉢 (36) 縦4.4cm、横5.3cm、厚さ2.3cm。炉壁の可能性もある。

焼土塊 (37) 縦2.9cm、横3.5cm、厚さ2.1cm。淡赤灰色の土師器片を含む。

炉壁 (38) 体部の破片か。縦5.9cm、横9.4cm、厚さ2.9cm。内面に灰白色～黒色の鉱滓がべつたりと付着している。器壁は熱により内側が暗茶褐色、外側は明茶色に変化している。胎土は5mm以下の白色粒子を大量に含む。

石製品

滑石製石鏝 (39～41) 39は小破片。縦2.9cm、横5.6cm、厚さ1.0cm。割れ口を丁寧に加工していることから石鏝の再利用品と考えられる。40は体部の破片。縦5.2cm、横6.6cm、厚さ1.7cm。金鏝のようなものでの切断の傷が残っている。再利用品を切り取ったあとの資料か。41は破片。縦6.4cm、横12.6cm、厚さ1.1cm。外面は縦方向の細かい削り調整。内面は横方向の削りのあとに平滑に仕上げている。割ったあとにきちんと断面を加工していることから、石鏝の再利用品と考えられる。用途は不明。

193SX204出土遺物 (Fig. 34)

石製品

滑石製石鏝 (42) 復元口径18.1cm、器高6.3+cm。鈎の先端が若干下がっている。外面は多方向の削り調整。内面は使用によって平滑になっている。

193SX212出土遺物 (Fig. 34)

土師質土器

挿鉢 (43) 口縁部破片。器高3.1+cm。焼成はやや不良。器壁の断面を観察すると、中心に黒い焼成不良を挟んでサンドイッチ状になっている。

鏝 (44) 口縁部破片。器高1.6+cm。口縁部上面に巴紋のようなスタンプを施す。色調は赤褐色。

193SX214出土遺物 (Fig. 34)

土師器

坏a (45) 復元口径11.8cm、器高2.4cm、復元底径8.3cm。底部切り離しは不明。

土製品

焼土塊 (46) 破片。縦3.9cm、横4.7cm、厚さ1.9cm。平坦面が1箇所ある。平坦面の裏面は、スサ掬じりのため、平坦面が表側と推測できる。色調は暗褐色～赤褐色。

瓦玉 (47) 縦2.7cm、横2.4cm、厚さ1.95cm。色調は淡灰白色～淡黒色。かなり丸くなっている。

193SX215出土遺物 (Fig. 34)

須恵器

坏a (48, 49) 48は復元口径12.2cm、器高2.6cm、復元底径9.0cm。色調は暗灰色。底部切り離しは回転糸切り。その後には板状圧痕。内面に黒灰色の有機質が付着している。49は底部破片。器高1.3+cm、復元底径8.2cm。色調は明赤褐色。底部切り離し技法は、回転糸切り。後に板状圧痕。

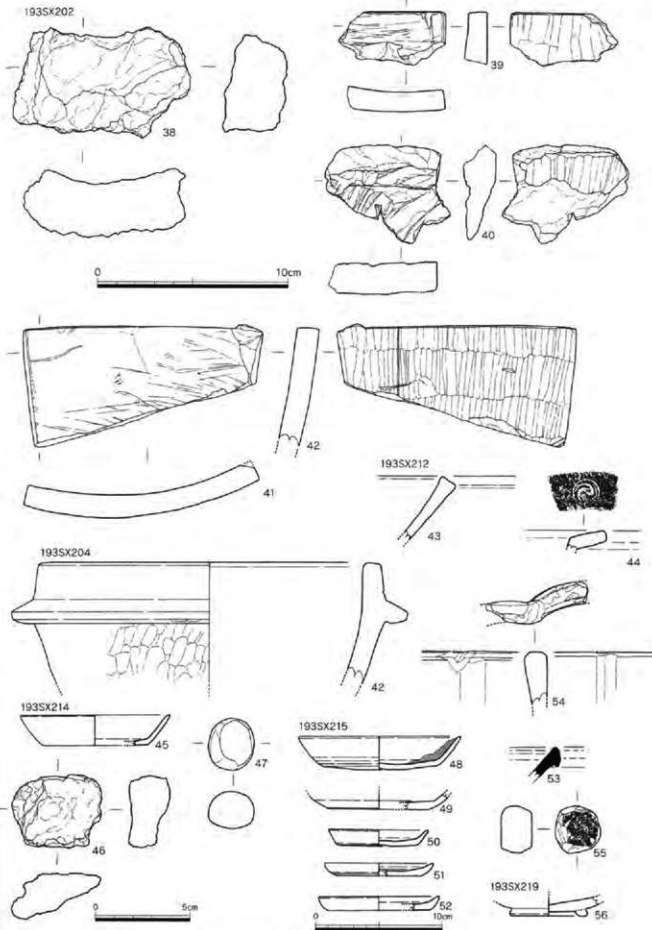


Fig.34 第193次調査その他の遺構出土遺物実測図その7 (1/2, 1/3, 1/4)

小皿 a1 (50~52) 50は口径7.8cm、器高1.3cm、底径6.4cm。色調は黄灰色。底部は回転糸切り後に板状圧痕。51は復元口径8.5cm、器高1.0cm、復元底径6.6cm。色調は黄灰色。底部は回転糸切りの後に板状圧痕。52は復元口径9.5cm、器高1.1cm、復元底径8.2cm。色調は黄灰色。底部切り離し技法は不明。

須恵質土器

鉢 (53) 口縁部破片。器高2.4+cm。焼成は良好。還元炎焼成。色調は淡青灰色。束橋系。

瓦質土器

火鉢 (54) 口縁部の破片。器高4.2+cm。口縁部は輪花形となっている。焼成はやや良好。色調は外面が黒灰色、内面が灰白色。胎土は1mm以下の白色粒子を少量含む。

土製品

瓦玉 (55) 縦2.4cm、横2.5cm、厚さ1.6cm。瓦の平坦面が確認できる。

1935X219 出土遺物 (Fig. 34)

瓦器

板c (56) 高台片。器高1.6+cm、復元底径6.1cm。貼り付け高台。焼成はやや不良。色調は暗灰色~灰白色。器壁表面の風化が激しくて調整は不明。

1935X220 暗茶色土出土遺物 (Fig. 35、36)

土師器

小皿 a1 (1~25) 小皿 a1 の色調は茶褐色系か黄灰色系の大きく2つに分かれる。茶褐色系は、2、6~8、11、17~19、23~25。黄灰色系は、1、3~5、9、10、12~16、20~22。それぞれの比率はおおよそ5:5である。底部切り離し技法はすべて回転糸切り技法。板状圧痕がある個体とない個体がある。(Tab.3-2、3-3 参照)

1は口径7.7cm、器高1.2cm、底径5.6cm。2は復元口径8.1cm、器高1.5cm、復元底径6.3cm。3は口径8.2cm、器高0.95cm、底径6.3cm。4は口径8.2cm、器高1.25cm、底径6.6cm。5は口径8.3cm、器高1.0cm、底径6.1cm。6は口径9.0cm、器高1.0cm、復元底径7.4cm。7は口径8.5cm、器高1.0cm、底径5.8cm。8は口径8.5cm、器高1.0cm、底径7.3cm。9は復元口径8.6cm、器高1.0cm、復元底径6.3cm。10は復元口径8.6cm、器高0.9cm、復元底径7.4cm。11は復元口径8.1cm、器高1.15cm、復元底径6.3cm。12は復元口径9.4cm、器高1.2cm、復元底径7.2cm。13は復元口径8.8cm、器高1.2cm、復元底径7.7cm。14は口径9.0cm、器高1.0cm、底径6.4cm。15は口径9.0cm、器高0.9cm、底径7.0cm。16は復元口径9.0cm、器高0.9cm、復元底径7.0cm。17は口径9.0cm、器高0.9cm、底径7.0cm。18は復元口径9.0cm、器高1.2cm、復元底径7.2cm。19は復元口径9.0cm、器高0.9cm、復元底径7.6cm。20は口径9.1cm、器高1.1cm、底径7.2cm。21は復元口径9.2cm、器高1.3cm、復元底径7.0cm。22は復元口径9.2cm、器高1.0cm、復元底径7.6cm。23は復元口径9.4cm、器高1.2cm、復元底径7.2cm。24は復元口径9.4cm、器高1.0cm、復元底径7.0cm。25は器高0.85+cm、復元底径8.0cm。

坏 a (26~40) 26は、復元口径12.2cm、器高2.25cm、復元底径8.6cm。色調は黄灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。27は口縁部の破片。復元口径12.4cm、器高2.3cm、復元底径8.6cm。色調は黄灰色。底部切り離しは回転糸切り。28は復元口径12.6cm、器高2.2cm、復元底径8.6cm。色調は黄灰色。底部回転糸切り、後に板状圧痕。29は復元口径12.8cm、器高3.2cm、復元底径9.4cm。焼成は良好。色調は赤褐色。胎土は3mm以下の白色粒子を多く含む。底部は回転糸切り。内面見込み部分が黒色変色している。30は復元口径12.9cm、器高2.4cm、復元底径8.7cm。色調は淡赤褐色。

底部は回転糸切り後に板状圧痕。胎土は1mm以下の白色粒子を極少量含む。黒色雲母片を極少量含む。31は口径13.0cm、器高2.2cm、底径7.9cm。色調は赤褐色。底部回転糸切り。32は復元口径13.2cm、器高2.2cm、復元底径8.2cm。色調は黄灰色。底部は底部回転糸切り。33は復元口径13.2cm、器高2.25cm、復元底径9.2cm。焼成は良好。色調は黄灰色。底部は底部回転糸切りの後に板状圧痕。34は口径13.3cm、器高2.15cm、底径9.1cm。色調は淡赤褐色。底部は底部回転糸切りの後に板状圧痕。35は復元口径13.2cm、器高2.2cm、復元底径7.2cm。色調は赤褐色。底部切り離しは回転糸切り技法。36は復元口径13.6cm、器高2.2cm、復元底径8.8cm。焼成はやや不良。色調は淡赤褐色。底部外面は回転糸切り。37は復元口径13.6cm、器高2.3cm、復元底径9.1cm。色調は明赤灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。38は復元口径13.8cm、器高2.25cm、復元底径8.4cm。焼成は良好。色調は明黄灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。39は底部から体部の破片。器高1.9+cm、復元底径8.4cm。色調は黄灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。40は破片資料。器高2.1+cm。色調は黄灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。

小皿 c (41) 復元口径9.1cm、器高1.9cm、高台径6.9cm。焼成は良好。色調は暗赤褐色。胎土は1mm以下の白色粒子を少量含む。金色雲母を極少量含む。

土師質土器

鉢 (42) 復元口径34.0cm、器高7.9+cm。焼成は良好。色調は黄灰色~淡黒灰色。外面は横ナテ調整。内面は使用により調整は不明瞭。外面には黒色の炭化物が吸着している。

須恵質土器

こね鉢 (43~47) 43~45は口縁部破片。すべて束橋系の器鉢と考えられる。焼成良好で還元炎。43は器高4.3+cm。44は器高5.2+cm。45は5.4+cm。46は底部破片。器高2.3+cm。内面は使用のため表面が摩滅している。47は底部破片。焼成は不良。瓦質化している。器高3.7+cm、復元底径11.6cm。外面は縦方向の刷毛目調整。外面底部に板状圧痕。

中国陶器

壺 (48) 器高2.9+cm、不明破片。焼成良好。色調は赤褐色。胎土3mm以下の白色粒子を多量に含む。外面にわずかに褐色系の釉が付着している。口縁部内面下に強いナテ調整が入る。外面にも二重の刻線が巡る。

瓦類

平瓦 (49) 縦7.2+cm、横8.6+cm、厚さ2.2cm。色調はやや不良。瓦質。色調は明灰色。内面は布目痕をナテ調整。外面は格子目焼き。凹面の端部にヘラ削りを施している。こちらが埃溜りの可能性がある。

土製品

焼土塊 (50) 縦4.7cm、横6.7cm、厚さ2.5cm。色調は明赤灰色~淡茶色。胎土は4mm以下の白色粒子を少量含む。

石製品

滑石製石鍋 (51) 口縁部から胴部までの破片。復元口径33.0cm、器高7.9+cm。鈔断面形は台形で、先端がやや下がっている。

滑石製加工品 (52) 石鍋の破片。縦2.5+cm、横9.6+cm、厚さ1.6cm。

1935X221 出土遺物 (Fig. 36)

土師器

小皿 a1 (53) 復元口径8.9cm、器高0.95cm、復元底径6.6cm。焼成はやや不良。底部切り離し技法は、

回転糸切り。その後板状圧痕。

193SX224 出土遺物 (Fig. 16)

土師器

小杯 b (54) 復元口径 9.4 cm, 器高 2.5 cm, 復元底径 5.2 cm。色調は茶褐色。底部回転糸切り。
小皿 a1 (55) 復元口径 8.7 cm, 器高 1.15 cm, 復元底径 6.2 cm。色調は赤褐色。底部回転糸切り後に板状圧痕。

須恵質土器

杯 (56) 器台部の破片。器高 1.4+ cm。底部平底で糸切り。内面は平滑。

土製品

土壁 (57) 縦 3.4 cm, 横 4.2 cm, 厚さ 2.1 cm。断面にスサの痕跡がある。

193SX224 茶色土出土遺物 (Fig. 36)

土師器

小皿 a1 (58) 復元口径 8.7 cm, 器高 1.15 cm, 復元底径 6.2 cm。

土製品

土壁 (59) 縦 3.6+ cm, 横 4.6+ cm, 厚さ 2.9+ cm。一面に平坦な面がある。こちらが表側と考えられる。

193SX224 暗茶色土出土遺物 (Fig. 36)

須恵器

杯身 (60) 口縁部の破片。器高 2.0+ cm。焼成は良好。色調は暗灰色。外面底部側にカキ目痕あり。

土師器

小皿 a (61) 復元口径 9.0 cm, 器高 0.9 cm, 復元底径 7.6 cm。底部回転糸切り。

杯 a (62) 復元口径 13.3 cm, 器高 2.4 cm, 復元底径 8.8 cm。色調は灰黄色。体部の器壁が薄い。底部回転糸切り後に板状圧痕。

須恵質土器

鉢 (63, 64) 共に口縁部の破片。東播磨産鉢。63 は器高 2.3+ cm, 64 は器高 2.5+ cm。

土製品

瓦玉 (65) 縦 2.9 cm, 横 2.4 cm, 厚さ 2.25 cm。焼成は不良。瓦質。

石製品

滑石製品 (66) 縦 4.0 cm, 横 2.4+ cm, 厚さ 1.2 cm。碗のように中央を凹ませている。周辺部は綺羅に加工している。二次加工品。

193SX224 東土層 明黄灰色土出土遺物 (Fig. 36)

土師器

杯 a (67) 口径 11.9 cm, 器高 2.6 cm, 底径 7.7 cm。色調は黄灰色。底部回転糸切り後に板状圧痕。

193SX224 西土層 暗黒茶色土出土遺物 (Fig. 16)

土師器

杯 a (68) 復元口径 13.5 cm, 器高 2.7 cm, 復元底径 9.0 cm。表面の風化により調整不明。

193SX225 出土遺物 (Fig. 36)

土師器

小皿 a1 (69) 口径 8.4 cm, 器高 0.9 cm, 底径 6.0 cm。底部回転糸切り。その後板状圧痕。器壁が薄い。

193SX228 出土遺物 (Fig. 36)

石製品

滑石製石鍋 (70) 破片。縦 5.7 cm, 横 5.5 cm, 厚さ 1.45 cm。2次加工品か。

193SX220 黒茶色土

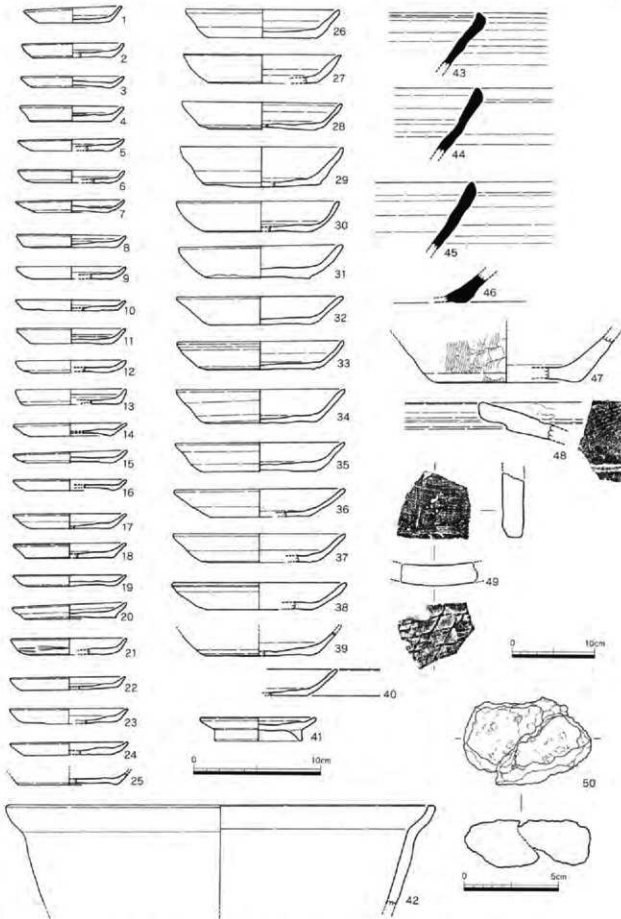


Fig.35 第193次調査その他の遺構出土遺物実測図その8 (1/2, 1/3, 1/4)

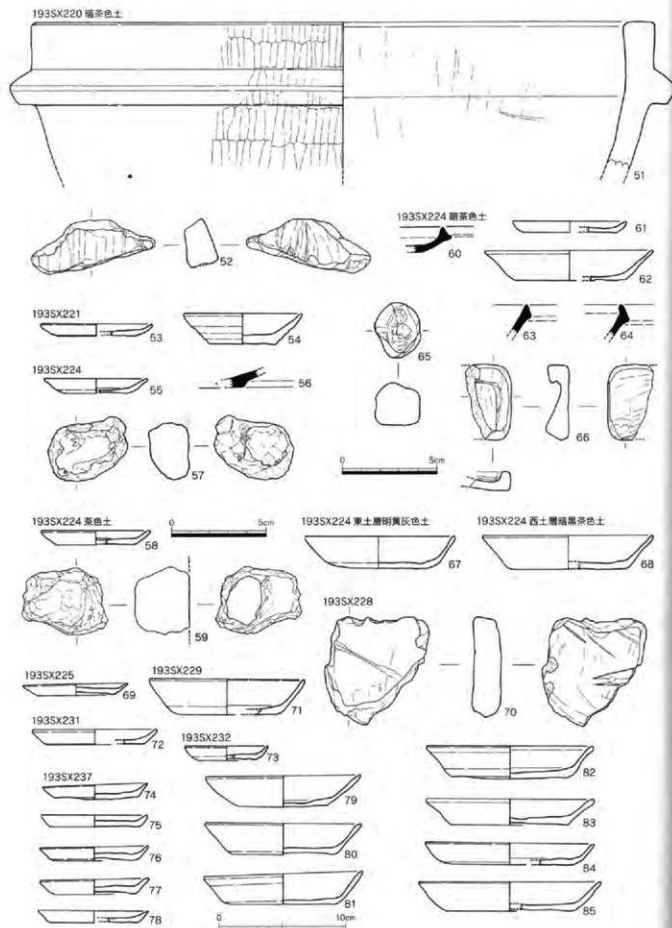


Fig.36 第193次調査その他の遺構出土遺物実測図その9 (1/2, 1/3)

193SX229 出土遺物 (Fig.36)

土師器

杯 a (71) 復元口径 12.3 cm, 器高 2.8 cm, 復元底径 8.0 cm。色調は黄灰色。底部回転糸切。

193SX231 出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿 a1 (72) 復元口径 9.9 cm, 器高 1.2 cm, 復元底径 8.0 cm。底部回転糸切り。

193SX232 出土遺物 (Fig.36)

小皿 a1 (73) 復元口径 6.6 cm, 器高 1.1 cm, 復元底径 4.6 cm。底部回転糸切り。

193SX237 出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿 a (74~78) すべて底部切り離しは回転糸切り技法を使い、その後には板状圧痕が施されている。色調は黄灰色を呈す。74 は口径 8.35 cm, 器高 1.35 cm, 底径 6.5 cm。75 は復元口径 8.4 cm, 器高 0.95 cm, 復元底径 7.0 cm。76 は口径 8.7 cm, 器高 1.2 cm, 底径 6.4 cm。77 は口径 8.7 cm, 器高 1.25 cm, 底径 6.4 cm。78 は復元口径 8.8 cm, 器高 0.9 cm, 復元底径 7.1 cm。

杯 a (79~85) 底部切り離しは回転糸切り技法で、その後にはほとんどの個体は板状圧痕を施している。例外としては、83 が施されていないのと、81 は表面が溶けており調整は確認できない。色調は 82 と 83 が赤褐色で、他は黄灰色である。79 は口径 12.25 cm, 器高 2.6 cm, 底径 7.1 cm。80 は復元口径 12.4 cm, 器高 2.45 cm, 復元底径 8.0 cm。81 は口径 12.6 cm, 器高 2.7 cm, 底径 8.3 cm。82 は復元口径 13.2 cm, 器高 2.6 cm, 底径 9.2 cm。83 は復元口径 13.3 cm, 器高 2.05 cm, 復元底径 9.2 cm。84 は復元口径 13.3 cm, 器高 1.7 cm, 復元底径 10.0 cm。85 は復元口径 14.4 cm, 器高 2.3 cm, 復元底径 10.4 cm。

193SX238 出土遺物 (Fig.37)

土師器

小皿 1 (1~21) すべて底部切り離しは回転糸切り技法が使われている。板状圧痕を施される個体が多い。色調は黄灰色系と (1~3, 5~7, 12, 14) と赤褐色系 (4, 8~11, 13, 15~21) の 2 つに分けられる。割合もおおよそ 1 : 1 である。傾向としては、黄灰色系のグループが、口径が小さいことを指摘できる。

出土金属製品

193SX005 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (1) 縦 4.3+ cm, 横 0.95 cm, 厚さ 0.75 cm。

193SX006 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (2) 縦 2.65+ cm と 2.3+ cm が残存する。横 1.1 cm, 厚さ 0.65 cm。

用途不明 (3) 縦 2.3+ cm, 横 3.7 cm, 厚さ 0.7 cm。

193SX011 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (4) 縦 2.65+ cm, 横 0.5 cm, 厚さ 1.7 cm。

193SX014 出土遺物 (Fig.38)

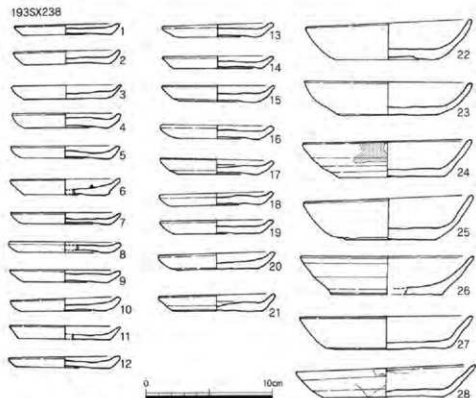


Fig.37 第193次調査その他の遺構出土遺物実測図その10 (1/3)

では0.3 cm程度である。8は縦3.0+ cm、横0.8 cm、厚さ0.6 cmである。9は縦4.05 cm、横1.65 cm、厚さ1.5 cm。

193SX020 黒色土出土遺物 (Fig.38)

金属製品

不明製品 (10) 縦4.0+ cm、横1.55 cm、厚さ0.9 cm。槽か。

釘 (11) 縦5.4 cm、横1.1 cm、厚さ0.9 cm。

193SK021 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

不明製品 (12) 縦1.9+ cm、横0.8 cm、厚さ0.6 cm。釘か。

193SX023 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (13, 15) 13は縦6.4+ cm、横1.05 cm、厚さ1.0 cm。15は縦3.15+ cm、横1.0 cm、厚さ0.8 cm。

不明製品 (14) 縦2.7+ cm、横4.2+ cm、厚さ0.4 cm。

193SX027 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (16) 縦2.7+ cm、横0.7 cm、厚さ0.7 cm。

193SE030 黄色土出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (17~21) 17は縦2.4+ cm、横1.1 cm、厚さ1.0 cm。18は縦2.3+ cm、横0.75 cm、厚さ0.55 cm。19は縦2.6+ cmと2.2+ cmが現存する。横0.8 cm、厚さ1.0 cm。20は縦1.9+ cm、横0.7 cm、厚さ0.6 cm。21は縦2.6+ cm、横1.0 cm、厚さ0.8 cm。

金属製品

釘 (5) 縦2.2+ cm、横1.8 cm、厚さ0.7 cm。

193SX015 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

不明製品 (6) 縦1.8+ cm、横1.3 cm、厚さ1.0 cm。釘か。

193SX020 褐色土出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (7~9) 7は縦1.95+ cm、2.1+ cm、1.25 cmが現存する。横0.8 cm。厚さは基部付近で0.8 cm程度、先端部付近

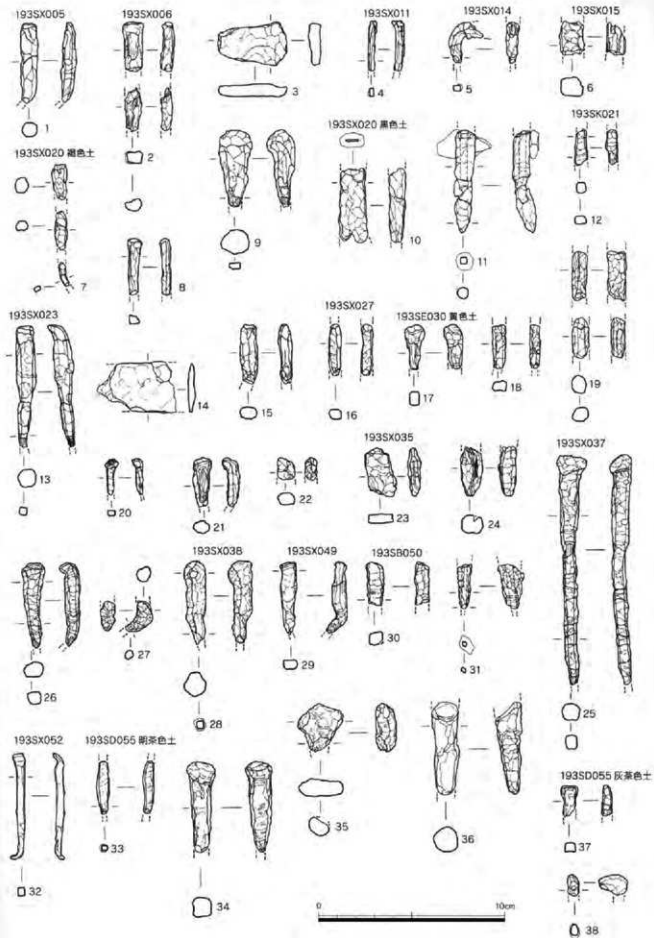


Fig.38 第193次調査その他の遺構出土金属器実測図その1 (1/2)

不明製品 (22) 縦 1.2+ cm、横 0.95 cm、厚さ 0.65 cm。

193SX035 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

不明製品 (23) 縦 1.6+ cm、横 1.7 cm、厚さ 0.7 cm。刀子か。

釘 (24) 縦 2.6+ cm、横 1.2 cm、厚さ 0.95 cm。

193SX037 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (25 ~ 27) *25は縦 12.1+ cm、横 1.6 cm、厚さ 1.2 cm。26は縦 4.5+ cm、横 1.25 cm、厚さ 0.9 cm。27は縦 1.6+ cm、横 0.8 cm。

193SX038 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (28) 縦 4.3 cm、横 1.2 cm、厚さ 1.3 cm。

193SX049 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (29) 縦 3.8 cm、横 0.85 cm、厚さ 0.8 cm。

193SB050 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (30, 31) 30は縦 2.3+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.8 cm。31は縦 2.4+ cm、横 0.75 cm、厚さ 1.2 cm。

193SX052 出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (32) 縦 5.6 cm、横 0.7 cm、厚さ 0.45 cm。

193SD055 明茶色土出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (33 ~ 36) 33は縦 2.8+ cm、横 0.6 cm、厚さ 0.6 cm。34は縦 4.8+ cm、横 1.5 cm、厚さ 1.4 cm。35は縦 2.6+ cm、横 2.4 cm、厚さ 1.1 cm。36は縦 4.9+ cm、横 1.5 cm、厚さ 1.4 cm。

193SD055 灰茶色土出土遺物 (Fig.38)

金属製品

釘 (37, 38) 37は縦 1.7 cm、横 0.9 cm、厚さ 0.6 cm。38は縦 1.2 cm、横 0.6 cm、厚さ 1.5 cm。

193SX071 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (1) 縦 2.4+ cm、横 1.1 cm、厚さ 1.0 cm。

193SX081 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (2) 縦 4.1+ cm、横 1.2 cm、厚さ 1.0 cm。

193SD086 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (3) 縦 1.15+ cm、横 0.85 cm、厚さ 0.5 cm。

193SX087 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (4 ~ 7) 4は縦 2.0 cm、横 0.6 cm、厚さ 0.55 cm。5は縦 2.2 cm、横 2.2 cm残存する。横 0.7 cm。

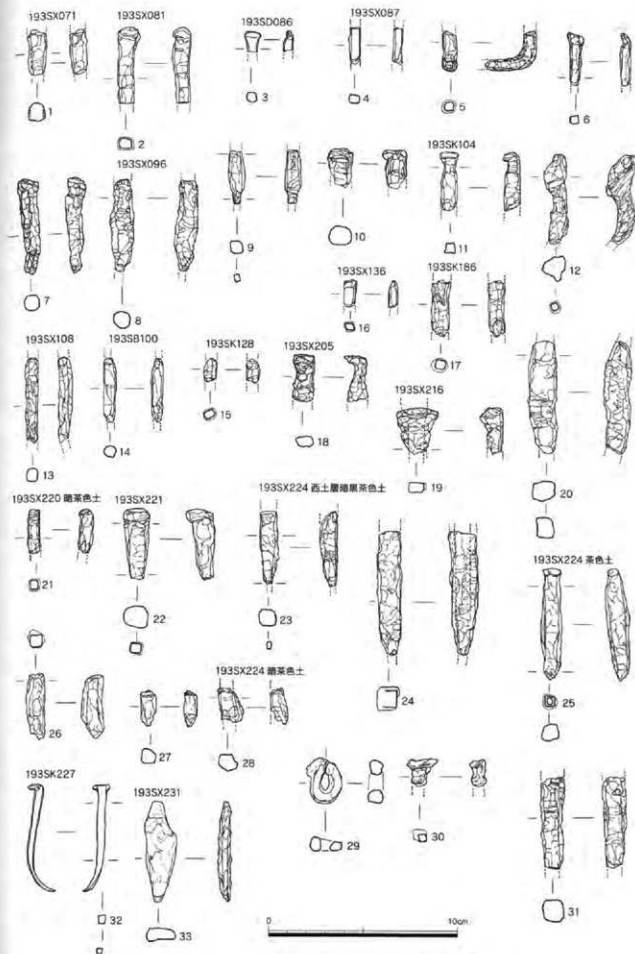


Fig.39 第193次調査その他の遺構出土金属器実測図その2 (1/2)

厚さ 0.8 cm。6 は縦 2.8+ cm、横 0.9 cm、厚さ 0.6 cm。7 は縦 5.1 cm、横 1.25 cm、厚さ 1.0 cm。

193SX096 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (8~10) 8 は縦 4.9+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.2 cm。9 は縦 2.9+ cm、横 0.9 cm、厚さ 0.8 cm。10 は縦 2.1+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.3 cm。

193SK104 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (11, 12) 11 は縦 3.1+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.9 cm。12 は縦 4.8+ cm、横 1.2 cm、厚さ 1.6 cm。

193SX108 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (13) 縦 4.5+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.75 cm。

193SB100 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (14) 縦 3.4+ cm、横 0.6 cm、厚さ 0.6 cm。

193SK128 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (15) 縦 1.3+ cm、横 0.75 cm、厚さ 0.75 cm。

193SX136 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (16) 縦 1.5+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.5 cm。

193SK186 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (17) 縦 3.0 cm、横 1.0 cm、厚さ 1.0 cm。

193SX205 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (18) 縦 2.5+ cm、横 1.1 cm、厚さ 1.0 cm。

193SX216 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (19, 20) 19 は縦 2.5+ cm、横 2.2 cm、厚さ 1.2 cm。20 は縦 5.9+ cm、横 1.6 cm、厚さ 1.5 cm。

193SX220 暗茶色土出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (21) 縦 2.3+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.8 cm。

193SX221 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (22) 縦 3.7+ cm、横 1.4 cm、厚さ 1.5 cm。

193SX224 西土層暗黒茶色土出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (23, 24) 23 は縦 6.6+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.6 cm。24 は縦 4.0+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.9 cm。

193SX224 茶色土出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (25, 26) 25 は縦 5.9+ cm、横 1.1 cm、厚さ 1.2 cm。26 は縦 3.4+ cm、横 1.0 cm、厚さ 1.2 cm。

193SX224 暗茶色土出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (27~31) 27 は縦 1.9+ cm、横 0.8 cm、厚さ 0.7 cm。28 は縦 1.8+ cm、横 0.9~1.2 cm、厚さ 0.9 cm。29 は縦 2.4 cm、横 1.7 cm、厚さ 0.7 cm。30 は縦 1.4+ cm、横 0.7~1.6 cm、厚さ 0.8 cm。31 は縦 4.9+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.3 cm。

193SK227 出土遺物 (Fig.39, 40)

金属製品

釘 (32) 縦 5.65 cm、横 0.25~0.9 cm、厚さ 0.1~0.9 cm。

鉄滓 (1) 縦 10.5 cm、横 11.6 cm、厚さ 3.9 cm を測る。重さ 1.447 kg。

193SK231 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

用途不明 (33) 縦 5.3+ cm、横 0.5~1.6 cm、厚さ 0.7 cm。

193 暗灰色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

用途不明 (2) 縦 4.4+ cm、横 1.9~2.4 cm、厚さ 1.55 cm。

193 茶色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

用途不明 (3~16) それぞれ小破片のため用途は不明。鉄で作られた製品の破片である。

193 出土銭貨

193SX020 褐色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

元祐通寶 (17) 書体は行書。背の下部左側にノ字形の突起が確認できる。北宋、初鑄 1086 年。銭径 (A) 24.78 mm。銭径 (B) 24.57 mm。内径 (C) 20.94 mm。内径 (D) 20.23 mm。銭厚 1.44~1.64 mm。量目 2.8 g を計る。

寛永通寶 (18) 字体から新寛永と判別される。寛永通寶の分類によれば、2 期以降の所産となる。また、背に「文」の字がないため、この銭は 3 期と推定される。3 期は各地で増産されており、時期的には元禄 10 年 (1697)~天明元年 (1781) 頃と考えられている。銭径 (A) 23.45 mm。銭径 (B) 23.55 mm。内径 (C) 18.67 mm。内径 (D) 18.65 mm。銭厚 0.95~0.98 mm。量目 2.6 g を計る。

193SX050 茶褐色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

□聖元寶 (19) 書体は篆書。破片資料。銭径不明。銭径内径も不明。銭厚 1.23~1.51 mm。量目 1.1 g を計る。銭文の上を 1 字欠くが、おそらくは「天」の字があてはまり、天聖元寶でよいと考えられる。天聖元寶であれば、北宋、初鑄 1023 年である。中央の四角の穴がずれて見かけ上菱形になっている。

193SB100 出土遺物 (Fig.40)

金属製品

聖宋元寶 (20) 銅書体は行書。表はかなり摩滅している。銭径 (A) 24.78 mm。銭径 (B) 24.86 mm。内径 (C) 18.14 mm。内径 (D) 17.70 mm。銭厚 1.14~1.29 mm。量目 3.1 g を計る。北宋、初鑄 1101 年。

193SX202 出土遺物 (Fig.40)

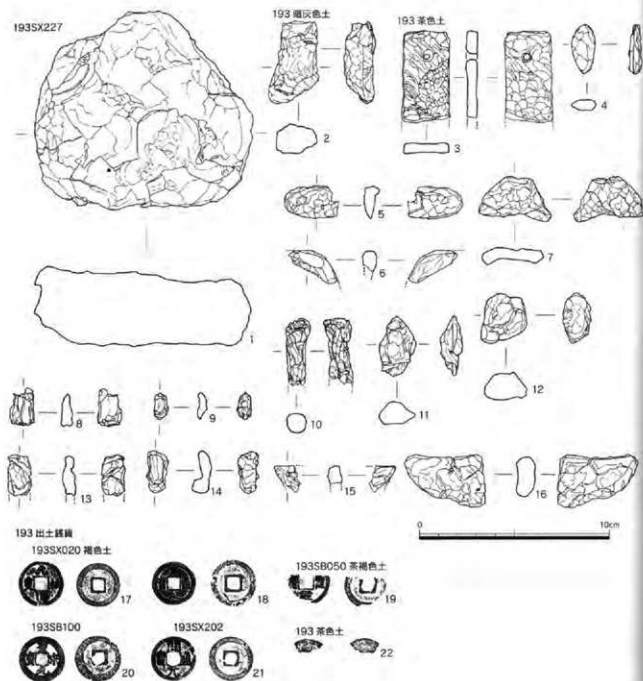


Fig.40 第193次調査その他の遺構出土金属器実測図その3 (1/2)

金属製品

開元通寶 (21) 銅銭。出土状態から2枚重なっており、表側が開元通寶となるが、裏は不明。銭が脆削だったため刺離はせずに保存処理をしている。銭径 (A) 23.96mm。銭径 (B) 24.33mm、内径 (C) 18.80mm、内径 (D) 19.84mm、銭厚 2.52 ~ 2.84mm (ただし、2枚重なった状態での数値)、重量 5.5g (2枚重なった状態での数値) を計る。

193 茶色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

不明 (22) 破片のため銭種は不明。重量 0.4g。

193 明黄灰色土出土遺物 (Fig.41)

土師器

小皿 a (1) 復元口径 8.8cm、器高 1.3cm、底径 7.2cm、底部切り離しは回転系切り。色調は黄灰色。

黒色土器

極 c (2) 底部の破片。貼り付け高台。器高 1.3cm、底径 7.2cm。B 類。

須恵質土器

甕 (3) 口縁部破片。焼成は不良。やや瓦質。色調は灰白色 ~ 濃黒灰色。外面は細かい格子目肌。内面は刺離がひどく不明。軟質系の甕か。

瓦類

平瓦 (4) 縦 10.5+cm、横 10.2+cm、厚さ 2.7cm。焼成は良好で須恵質。凹面は縦方向に横骨の痕跡が確認できる。凸面は縄目。側端部、端部ともにへら切り調整。

石製品

滑石製石鍋 (5) 復元口径 19.0cm、器高 3.9+cm。口径的にはやや小ぶりの印象がある。

193 暗灰色土出土遺物 (Fig.41)

土師器

小皿 a (6 ~ 9) 6 は復元口径 8.0cm、器高 1.2cm、復元底径 6.2cm。底部切り離しは回転系切り。色調は黄灰色。7 は復元口径 8.2cm、器高 1.2cm、復元底径 5.0cm。底部切り離しは回転系切り。色調は淡赤褐色。8 は復元口径 8.8cm、器高 1.0cm、復元底径 6.2cm。底部切り離しは回転系切り。板状圧痕あり。色調は黄灰色。焼成は良好。9 は復元口径 8.9cm、器高 1.3cm、復元底径 6.7cm。底部切り離しは回転系切り。板状圧痕あり。色調は黄灰色。

坏 a (10 ~ 13) 10 は口縁部破片。器高 2.15+cm。口縁部内側に沈線が巡る。11 は復元口径 10.9cm、器高 2.65cm、復元底径 7.8cm。底部切り離しは回転系切り。板状圧痕あり。色調は淡赤褐色。12 は復元口径 12.5cm、器高 2.5cm、復元底径 7.6cm。底部切り離しは回転系切り。板状圧痕あり。色調は明黄灰色。13 は口径 12.7cm、器高 2.3cm、底径 9.6cm。底部切り離しは回転系切り。その後板状圧痕。色調は黄灰色。

大皿 c × 大坏 c (14) 高台部の破片。器高 1.9+cm、底径 10.8cm。内面に煤が付いている。

須恵質土器

捏鉢 (15) 底部破片。器高 2.6+cm。復元底径 9.8cm。底部切り離しは回転系切り。焼成はやや良好。色調は淡灰色。内面は使用痕跡のために摩滅。

土師質土器

捏鉢 (16) 口縁部の片口部の破片。内面は刷毛目調整。外面はナデ調整。

瓦質土器

捏鉢 (17) 底部破片。器高 4.9+cm、復元底径 12.2cm。内面は使用痕で平滑になっている。

中国陶器

鉢 (18) 口縁部破片。器高 2.9+cm。I - 2 類。

瓦類

軒丸瓦 (19 ~ 20) 19 は複弁。中房の連子は2個確認できる。焼成は良好。やや須恵質。20 は複弁。中房の連子が2個確認でき、それぞれ近接している。焼成はやや不良。

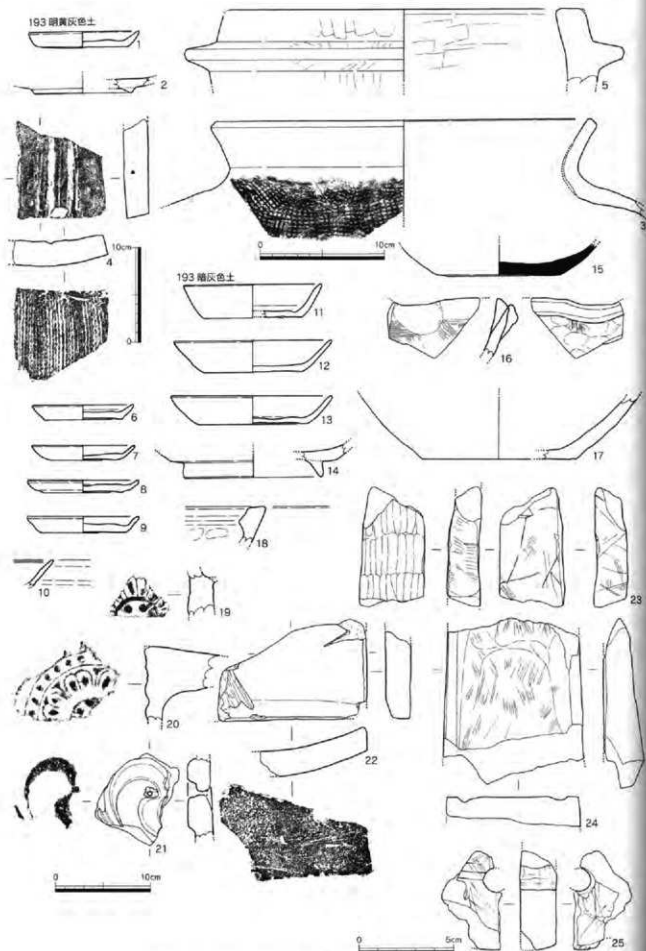


Fig.41 第193次調査土層出土遺物実測図その1 (1/2、1/3、1/4)

道具瓦 (21) 左巴紋の一部。裏が平坦な点と、中央に0.5cmの穴を貫通させていることから、道具瓦の一種と判断した。

平瓦 (22) 狭端部の破片。焼成は良好。狭端部凹面端に幅1.8cmのヘラ調整を行い、傾斜をつけている。側端部はヘラ切り。凹面は丁寧なナデ調整。凸面は部分的にヘラ削り。

石製品

滑石製製品 (23、25) 23は滑石製石編の体部の破片。体部を切断して、切断面は加工している。いわゆる2次利用品と考えられるが、目的は不明。25は縦5.2+cm、幅3.1+cm、厚み1.9cm、直径1.2cmの穴が穿たれ貫通している。

甕 (24) 縦8.7+cm、幅7.4cm、厚み2.2+cm。底面は刺離している。陸の部分は使用痕による平滑になっている。色調は明茶赤色。石材は泥岩。

193 暗灰色土出土遺物 (Fig.42)

中国陶器

緑釉陶器甕 (1) 復元口径32.4cm、器高8.3cm、復元底径28.5cmを測る。未分類。口縁部は玉縁状でやや外反する。胴部はやや外側に張っており、底部は平底を呈す。底面を除く全面に緑釉を施す。底部はヘラ削りにより軸を削り削っている。体部外面下部はヘラ削り調整、上部は回転ナデ。内面も回転ナデを施す。釉色は明緑色～暗深緑色を呈す。外面の中央部で軸調が変わっており、上部は軸染を重ねていると思われる。軸の表面は滑らかではなく、部分的に貫入が入っている。胎土の色調は淡灰黄色。胎土はやや密。淡茶色、白色の微細な粒子を含む。内底面に線刻で草花文のような絵柄を刻んでいる。

193 茶色土出土遺物 (Fig.43)

須恵器

蓋 (1、2) 1は口縁部の破片。器高1.6+cm。焼成は良好。2は口縁部の破片。器高1.0+cm。器壁がやや薄い。

土師器

小皿 (3～6) 3は口縁部を一部欠損する破片。口径8.0cm、器高1.2cm、底径6.1cm。色調は、赤褐色。底部切り離しは回転糸切り、後に板状圧痕が施される。4は復元口径8.3cm、器高0.9cm、復元底径6.1cm。色調は黄灰色。底部は回転糸切りの後に板状圧痕。5は口径8.6cm、器高1.0cm、底径6.0cm。色調は黄灰色。底部切り離しは回転糸切り。その後、板状圧痕。6は口径8.6cm、器高1.0cm、底径6.2cm。色調は黄灰色。器形は歪んでいる。底部切り離しは回転糸切り。その後、板状圧痕。

坏 (7～10) 7は復元

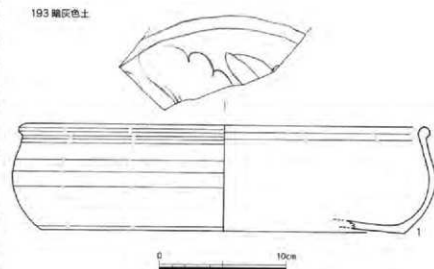


Fig.42 第193次調査土層出土遺物実測図その2 (1/3)

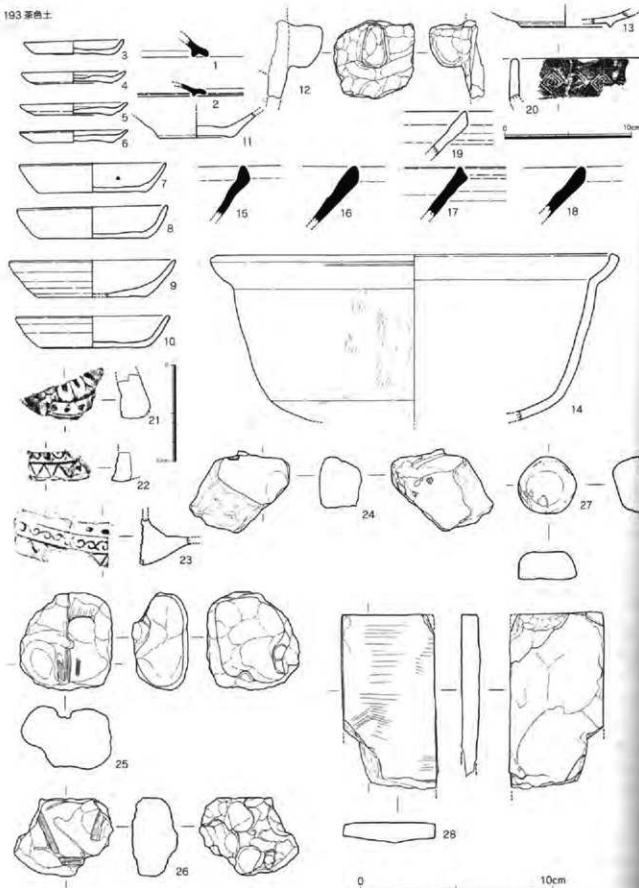


Fig.43 第193次調査土層出土遺物実測図その3 (1/2、1/3、1/4)

口径11.6cm、器高2.3cm、復元口径8.4cm。色調は灰白色。底部回転糸切り。8はほぼ完形。口径12.0cm、器高2.6cm、口径8.6cm。底部切り離しが回転糸切りで、その後に板状圧痕。9は復元口径13.2cm、器高2.9cm、口径8.6cm。色調は黄灰色。底部回転糸切りの後に、板状圧痕。10は復元口径12.2cm、器高2.5cm、復元口径8.4cm。色調は赤褐色。2mm以下の白色粒子をやや大量に含む。底部は回転糸切りの後に板状圧痕。

坏b(11) 底部の破片。器高1.95+cm、口径5.8cm。色調は明黄灰色。底部は回転糸切り。
 鏝(12) 取手部の破片。取手は台形を呈し貼り付けている。焼成は良好。色調は茶色～暗褐色。

瓦器

柄c(13) 高台部の破片。高台は貼り付け高台。器高1.2+cm、復元口径7.2cm。色調は明灰色。内面の器壁は平滑なため、ミガキが施してある可能性が高い。

土師質土器

鉢(14) 復元口径32.2cm、器高13.1+cm、復元口径22.8cm。口縁部は外反しなから立ち上がり、端部を内側に傾斜させている。焼成は良好。色調は黒褐色～明茶色。胎土は4mm以下の白色粒子を多く含む。外面は縦刷毛調整、内面は横ナデ調整。外面に使用時に付着したと思われる炭化物が大量に付着する。

須恵質土器

こね鉢(15～16) 15は口縁部の破片。器高3.9cm。東播系。17は口縁部破片。器高3.9+cm東播系。

瓦質土器

鉢(17～19) 3点とも東播系こね鉢の模様をした瓦質土器と考えられる。色調は灰白色だが、肥厚した口縁部外面を中心に、口縁部外面に淡黒色変が認められる。重ね焼き時の痕跡か。17は口縁部の破片。器高4.6+cm。18は口縁部の破片。器高3.9+cm。19は口縁部の破片。器高1.3+cm。焼成はやや不良。

火鉢(20) 20は口縁部破片。器高3.4+cm。焼成はやや不良。色調は暗灰色。外面に菱形のスタンプレットを巡らす。内面は回転ナデ調整。口径が小さいようなので手焙りの可能性もある。

瓦類

軒丸瓦(21) 瓦当面の破片。複弁。焼成は良好。須恵質。

軒平瓦(22、23) 22は小破片。外区の刷毛文と、唐草文が確認できる。焼成は良好で、須恵質。23も22と同様の特長を持っている。共に九州歴史資料館分類の604と思われる。

土製品

焼土塊(24～26) 24は縦4.4+cm、横5.3+cm、厚さ2.2+cm。25は縦5.2+cm、横4.9+cm、厚さ3.3+cm。26は縦3.6+cm、横5.2+cm、厚さ1.4+cm。共に色調は灰黄色～淡赤灰色。スサ痕跡が認められるので、土壁の一部と考えられる。

瓦玉(27) 縦3.0cm、横3.0cm、厚さ1.6cm。色調は灰白色。

石製品

砥石(28) 縦9.2+cm、横4.9cm、厚さ1.1cm。表面は砥石として使われて平滑になっている。裏面は割れて剥離面となっている。表面側には長軸に対して直交する細かい傷が多い。下部の割れ口以外の3辺は、砥石として使っていた可能性がある。片岩製。

193 茶色土出土遺物 (Fig.44)

石製品

滑石製石鏡(29、30) 29は口縁部の破片。復元口径19.2cm、器高3.1+cm。鈎部は断面三角形

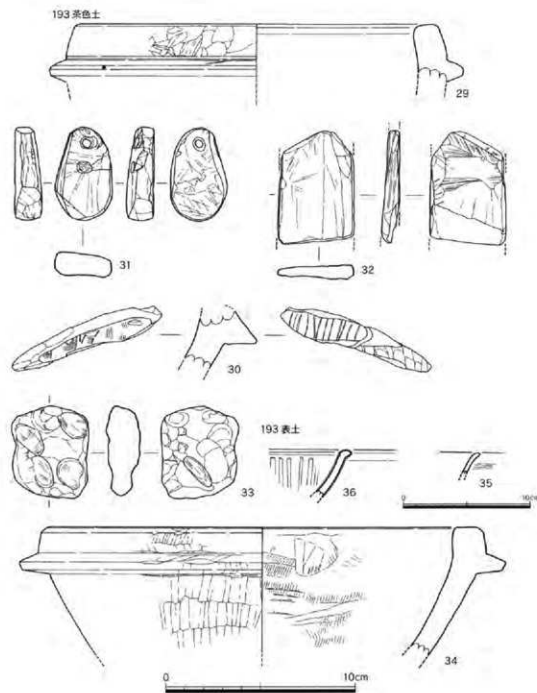


Fig.44 第193次調査土層出土遺物実測図その4 (1/2, 1/3)

を呈すが、尖端部は丸みを帯びる。30は跨部の破片。器高2.6+cm。

不明製品 (31~33) 31は涙滴型をしており、鍾もしくは装飾品か。縦4.95cm、横3.0cm、厚さ1.25cm。上部に直径4mmの貫通した穿孔がみられる。その7mm下に同じように横7mmの楕円形の穴が確認できるが、これは貫通していない。滑石製。32は砥石か。縦6.0cm、横4.0cm、厚さ0.8cm。頁岩製。33は、縦4.9cm、横4.1cm、厚さ1.8cm。色調は赤褐色。表面に丸い窪みが点在する。尖端部を丸めるための砥石か。

193 表土出土遺物 (Fig.44)

石製品

滑石製石鏡 (34) 復元口径23.4cm、器高6.7+cm。色調は淡赤褐色。銜は口縁部下部にあり、断面形は三角形。ただし、三角形の頂点にあたる場所は面取りして平坦に仕上げている。

黒色土器

碗 (35) 口縁部破片。器高1.7+cm。口縁部は外反している。B類。

龍泉窯系青磁

鉢 (36) 口縁部の破片。器高3.8+cm。口縁端部を肥厚させて外反させる。内面には幅3mmの縦方向の凹面の削りをいれる。未分類だが、IV類に近いと思われる。

(5) 小結

193 次調査の遺構変遷

今回の調査では部分的に2面までの遺構確認が出来た程度で、SE030 壁面での土層観察から最大で7面におよぶ面的な重層が予測されているため、限定的な情報と言わざるを得ない。検出された遺構は正方位を意識して配置されたもので、切り合い関係と出土した遺物からおおまかに3つの時期に分けて考える必要がある。

a. 1期 鎌倉後期の様相 (13世紀代)

調査区北にあり東西に長い擬立柱建物 193SB080 を中心とし、その中央間の南延長上にある動線にかかわると思われる 193SX036、037、068、086、冊 193SA034 と 193SX111、112、擬立柱建物 193SB010、調査区南にある祠の基壇と考えられる 193SX224 とその東の壁建ちの建物 193SB050 で、土坑 193SK065 などである。井戸 193SE030 はそれに少し遅れて穿たれたものか。193SB080 と 193SB010 は位置的に近接するため同時に存在したかは不明である。擬立柱建物は 193SB080 には柱基礎に礎盤となる花崗岩が敷かれ 193SB010 にはないことなど、建物仕様上の差も認められる。出土遺物は中国陶磁器では龍泉窯系青磁 III 類までが出土し、香炉も含まれることから持仏堂や居宅内での礼拝空間があったと考えられる。193SX224 は祠の基壇と考えられ、これが宗教的な施設の中核になっていた可能性もある。193SB080 は東西棟で検出された中では動線施設を伴う主軸的な建物といえる。井戸や土坑の存在から居宅的な生活空間としての土地利用が考えられる。この時期の遺物を持つ説明しきれないピット群が多数存在し、小規模な崩などの施設がまだ復元可能である。また、193SB050 は桁方向で半分残存している程度と思われ、南側は16世紀の遺物が含まれる段落ち 193SX035 に切られていることから、当該期のステージ面はさらに南側に数メートルあったものと考えられる。

b. 2期 室町前期の様相 (14世紀後半から15世紀代)

15世紀までの遺物が出土している南北溝 SD055 と14世紀後半までの遺物が出土した築地基礎と思われる東西溝状の 193SX006 が相当する。この遺構以外での当該時期の遺物の出土はほとんどない。

広い空閑地に土地をレイアウトする溝と築地が整然と存在していた景観が想定される。

c. 3期 室町後期の様相 (15世紀代以降)

調査区南側の東西棟 193SB100 とその南側の段落ち 193SX035 がそれに当たる。193SB100 は柱穴に礎盤があり、庇を持つ構造から居館の主屋か仏殿のような性格が考えられる。この土地の字が「佛前寺 (ぶつしょうじ)」であることから寺院関連の遺構である可能性を指摘したい。これ以外の遺構は基本的になく、広い空閑地の段造成の際に堂が1字建っていた姿が想像される。

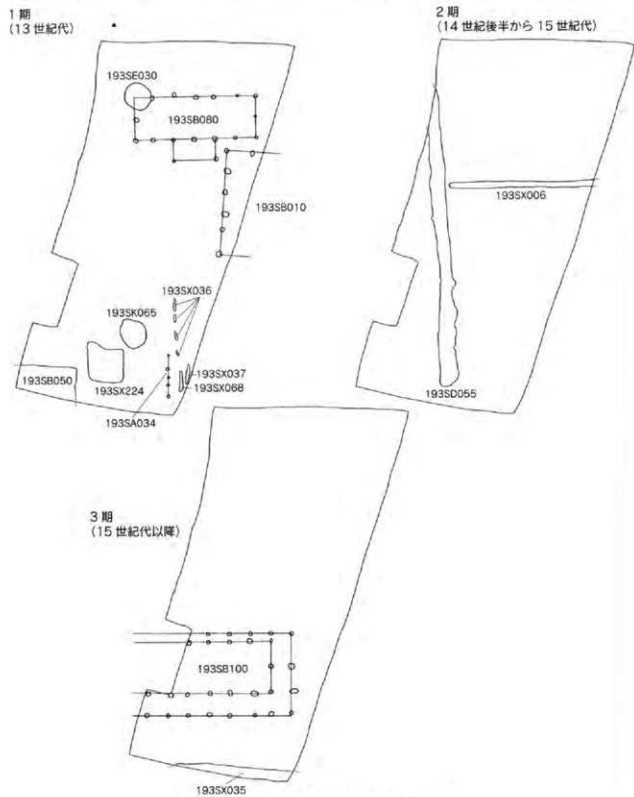


Fig.45 第193次調査主要遺構変遷図

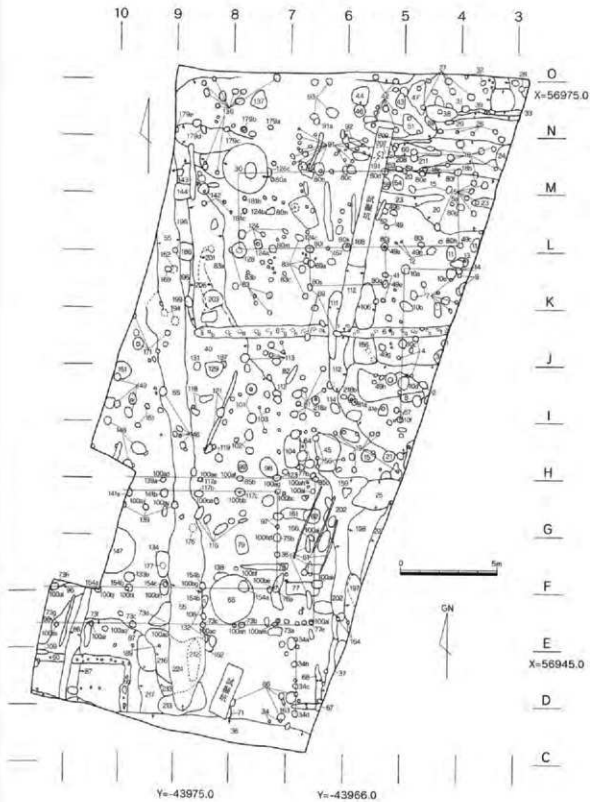


Fig.46 第193次調査遺構略測図1面目 (1/200)

Tab.1-2 大宰府条坊跡第 193 次調査 遺構番号台帳 (2)

※(遺構名)で記入がないものは、(調査員)が遺構番号不明のものを含む。

遺構番号	遺構名	種別	備考	地形区分(凡一別)	遺構群区分(凡一別)	遺構群	材 質	幅(単位)
79	BS29286	小石段		青色土		13b 中層	石	100
80		溝					石	36
81		小石段		紫灰色土			石	40
82		小石段		紫灰色土			石	40→40
84		小石段		紫灰色土			石	1.6
85	BS29289a	溝×土塀	S-603 跡石を復元	紫灰色土			石	10.4
86	BS29290	溝		紫灰色土		13a 中層→		10.1
87	BS29291	大土台基礎		紫灰色土		13c 中層→		1.00
88	BS29292	土塀		紫灰色土		SS→SS		1.60
89		小石段		紫灰色土			石	0.60
90	BS29293	溝×土塀		紫灰色土		SS→SS		1.60
91		小石段		紫灰色土			石	1.1
92		小石段		紫灰色土			石	1.6
93		小石段		紫灰色土			石	1.74
94		小石段		紫灰色土			石	1.6
95		溝跡×土塀		紫灰色土		1.6		0.6
96	BS29296	大土台基礎		紫灰色土		1.6 跡		0.11
97		小石段		紫灰色土			石	1.6
98	BS29298	土塀(欄干) 土塀×土柱		紫灰色土		SS→SS		1.6
99		土塀(欄干)		紫灰色土			石	0.6
100	BS29300	敷石(階段)	Tabokodogiri 77a 141, a, b, 112c, 160, 62 8段, 石 (長 110a 110a×75.6a, 79a 150cm×75.00)に復元	紫灰色土		15 中層		1.6
101		小石段		紫灰色土			石	1.7
102		小石段		紫灰色土			石	1.7
103		小石段		紫灰色土			石	1.7
104	BS29304	土塀		紫灰色土		13c 中層		1.0
105		小石段		紫灰色土			石	1.6
106	BS29306	大土台基礎		紫灰色土		100土柱・溝跡×土塀跡・土柱跡、100×700に復元した		1.6
107		土塀		紫灰色土		6→130		1.6
108	BS29308	小石段		紫灰色土		SS→SS→SS		1.6
109		土塀		紫灰色土		13c 中層		1.6
110		土塀		紫灰色土			石	0.11
111	BS29311	大土台基礎		紫灰色土		112→111		1.6
112	BS29312	溝跡×土塀		紫灰色土		SS→112		1.6
113	BS29313	大土台基礎		紫灰色土				1.6
114	BS29314	大土台基礎		紫灰色土		114→0→111		1.6
115		土塀		紫灰色土				1.6
116		土塀跡		紫灰色土				1.6
117	BS29316	小石段		紫灰色土				1.6
118	BS29318	小石段		紫灰色土				1.6
119		小石段		紫灰色土				1.6
120		土塀		紫灰色土				1.6
121	BS29321	溝		紫灰色土		SS→123		1.6
122		小石段		紫灰色土				1.6
123	BS29320	小石段		紫灰色土				1.6
124	BS29326	土塀		紫灰色土		125→33		1.6
125		土塀		紫灰色土		126→33		1.6
126	BS29326	小石段		紫灰色土		126→33		1.6
127		土塀		紫灰色土				1.6
128	BS29328	土塀		紫灰色土		128→30		1.6
129		土塀		紫灰色土				1.6
130		土塀		紫灰色土				1.6
131		小石段		紫灰色土				1.6
132		小石段		紫灰色土				1.6
133		小石段		紫灰色土				1.6
134		土塀		紫灰色土				1.6
135		土塀		紫灰色土				1.6
136	BS29330	小石段		紫灰色土		136 中層→		1.6
137	BS29332	土塀		紫灰色土		137 中層→		1.6
138	BS29333	土塀		紫灰色土				1.6
139	BS29340	小石段		紫灰色土		138→65		1.6
140		土塀		紫灰色土				1.6
141	BS29340	敷石(階段)		紫灰色土				1.6
142		小石段		紫灰色土				1.6
143	BS29343	溝		紫灰色土		40→143		1.6
144		大土台基礎		紫灰色土				1.6
145		土塀		紫灰色土				1.6
146		小石段		紫灰色土		SS→		1.6
147		土塀×大土台基礎		紫灰色土				1.6
148		土塀		紫灰色土				1.6
149	BS29349	土塀		紫灰色土		SS→149		1.6
150		土塀		紫灰色土				1.6
151	BS29351	土塀跡		紫灰色土		151→149		1.6
152		土塀		紫灰色土				1.6
153	BS29360	小石段		紫灰色土				1.6
154	BS29360	小石段		紫灰色土				1.6
155		土塀		紫灰色土		154→65		1.6
156		大土台基礎		紫灰色土				1.6
157		小石段		紫灰色土				1.6
158		小石段		紫灰色土				1.6
159		大土台基礎		紫灰色土				1.6

Tab.1-3 大宰府条坊跡第 193 次調査 遺構番号台帳 (3)

※(遺構名)で記入がないものは、(調査員)が遺構番号不明のものを含む。

遺構番号	遺構名	種別	備考	地形区分(凡一別)	遺構群区分(凡一別)	遺構群	材 質	幅(単位)
160		土塀		紫灰色土			石	1.6
161	BS29361	大土台基礎		紫灰色土		161→SS, 162		1.6
162		土塀		紫灰色土		162→138		1.6
163		溝跡×土塀		紫灰色土				1.6
164		土塀		紫灰色土			石	1.6
165		土塀		紫灰色土			石	1.6
166	BS29366a	小石段		紫灰色土		166→SS		1.6
167	BS29367	小石段		紫灰色土				1.6
168	BS29368	土塀		紫灰色土				1.6
169	BS29369	土塀		紫灰色土				1.6
170		土塀		紫灰色土				1.6
171		土塀		紫灰色土				1.6
172		土塀		紫灰色土				1.6
173	BS29373	小石段		紫灰色土				1.6
174		土塀		紫灰色土		1.6→124?		1.6
175		土塀		紫灰色土				1.6
176		土塀		紫灰色土		176→SS		1.6
177		土塀		紫灰色土				1.6
178	BS29378	土塀		紫灰色土		178→SS		1.6
179		土塀		紫灰色土				1.6
180		土塀		紫灰色土				1.6
181		土塀	ab	紫灰色土				1.6
182		土塀		紫灰色土		172→SS		1.6
183		土塀		紫灰色土				1.6
184		土塀		紫灰色土				1.6
185		土塀		紫灰色土				1.6
186	BS29386	土塀		紫灰色土		186→40, 55		1.6
187		土塀		紫灰色土				1.6
188	BS29388	土塀		紫灰色土		187→188		1.6
189		土塀		紫灰色土		SS, 136→189		1.6
190		土塀		紫灰色土				1.6
191		土塀		紫灰色土				1.6
192	BS29386	土塀		紫灰色土		192→SS		1.6
193	BS29390	土塀		紫灰色土		193→122		1.6
194		土塀		紫灰色土		194→55		1.6
195		土塀		紫灰色土				1.6
196	BS29396	土塀		紫灰色土		196→193		1.6
197	BS29397	土塀		紫灰色土		197→192		1.6
198	BS29398	土塀		紫灰色土				1.6
199	BS29399	土塀		紫灰色土				1.6
200		土塀		紫灰色土				1.6
201		土塀		紫灰色土				1.6
202	BS29402	土塀		紫灰色土				1.6
203		土塀		紫灰色土				1.6
204	BS29404	土塀		紫灰色土				1.6
205	BS29405	土塀		紫灰色土				1.6
206		土塀		紫灰色土				1.6
207		土塀		紫灰色土				1.6
208		土塀		紫灰色土		207→SS		1.6
209		土塀		紫灰色土				1.6
210		土塀		紫灰色土				1.6
211		土塀		紫灰色土				1.6
212	BS29421	溝跡×土塀		紫灰色土		212→188		1.6
213		大土台基礎		紫灰色土				1.6
214		大土台基礎		紫灰色土		5→40→214		1.6
215	BS29396	大土台基礎		紫灰色土		215→215		1.6
216	BS29420	土塀		紫灰色土		216→193→189		1.6
217	BS29427	溝跡×土塀		紫灰色土				1.6
218	BS29420	溝跡×土塀	ab	紫灰色土				1.6
219	BS29429	溝跡×土塀		紫灰色土		219→35		1.6
220	BS29429	大土台基礎		紫灰色土				1.6
221	BS29429	溝跡		紫灰色土		221→35		1.6
222		溝跡		紫灰色土				1.6
223		溝跡		紫灰色土				1.6
224	BS29424	溝跡×土塀		紫灰色土				1.6
225	BS29425	土塀		紫灰色土		S-225→S-223		1.6
226		土塀		紫灰色土				1.6
227	BS29427	土塀	SX, SXのノリ跡×土塀	紫灰色土				1.6
228	BS29428	土塀	敷石跡×土塀	紫灰色土				1.6
229	BS29429	溝跡	S-224 溝跡 溝跡×土塀	紫灰色土				1.6
230		溝跡		紫灰色土				1.6
231	BS29430	溝跡		紫灰色土				1.6
232	BS29431	溝跡		紫灰色土				1.6
233		溝跡		紫灰色土		2		1.6
234		溝跡		紫灰色土				1.6
235		溝跡		紫灰色土				1.6
236		溝跡		紫灰色土				1.6
237	BS29437	溝跡		紫灰色土		2		1.6
238	BS29438	小石段		紫灰色土		2		1.6

Tab.2-1 大宰府条坊跡第 193 次調査 出土遺物一覽表 (1)

S-2	遺物名	数量・場所
	藤原系青磁	甕 1 個 (1)
	磁石青磁	甕 1 個 (1)
	金銀器類	銅幣 (4 個入 1)
S-3	遺物名	場所
	土師器	破片
	瓦葺土器	破片
S-4	遺物名	場所
	土師器	破片
	瓦葺土器	破片
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付) 平瓦葺(甕口) 破片
S-5	遺物名	場所
	土師器	杯 a (1) 甕 c (2) 唐中念(小口) 小皿 (2)
	藤原系青磁	甕 1 個 (1)
	白磁	瓶 V-VIII (2)
S-6	遺物名	場所
	土師器	杯 a (1) 破片
	瓦類	燒 1 (2) (未分類)
	藤原系青磁	甕 1 個 (1) 甕 1 個 (1) 土師 B(9) (1) 破片 (1)
	藤原系青磁	甕 1 (1) 4 (1) 5 (1) 6 (1)
	磁石青磁	杯 c (2)
	磁石青磁	甕 V-VIII (3) (1) 破片 (1)
	白磁	甕 V (1) V-VIII (1) VIII (1) IX (1) 破片 (1)
	白磁	甕 1 個 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (1) (未分類)
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付)
	石製品	磨石(再使用品) 磨鉢
S-61	遺物名	場所
	土師器	破片
S-6M	遺物名	場所
	土師器	杯 a
	藤原系青磁	甕 1 個 (1)
	瓦類	平瓦 (土師器・焼付)
S-6N	遺物名	場所
	土師器	小皿 a (1) 甕
S-6O	遺物名	場所
	土師器	杯 a (1)
S-6L	遺物名	場所
	土師器	小皿 a (1)
S-7	遺物名	場所
	土師器	杯 a 小皿 a 甕 c 破片
	藤原系青磁	甕 1 (1) 破片
	磁石青磁	甕
	瓦葺土器	破片
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付)
	白磁	甕 V-VIII (2) (2) VIII (1) 破片 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (未入 1)
	瓦類	破片 (土師器)
S-8	遺物名	場所
	藤原系青磁	甕 1 個 (1)
	藤原系青磁	甕 破片 (1)
	磁石青磁	甕 2 個
	有白磁	破片 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (1) (未分類)
	瓦類	破片 (瓦質・焼付)
	土製品	伊模
S-9	遺物名	場所
	土師器	小皿 a
	藤原系青磁	甕 1 個 (1) (1)
	磁石青磁	甕
	石製品	磨石(再使用品)

Tab.2-2 大宰府条坊跡第 193 次調査 出土遺物一覽表 (2)

S-15	遺物名	場所
	藤原系青磁	甕 1 (1) (1) 破片 (2) 破片 (7)
	磁石青磁	甕
	瓦葺土器	破片
	瓦類	燒 1 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (1)
	石製品	磨石(再使用品)
S-17	遺物名	場所
	土師器	破片
	藤原系青磁	甕 1 個 (1) 破片 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (1) (未分類)
S-19	遺物名	場所
	土師器	甕 c
	土師器	杯 a 破片
	瓦類	燒
	藤原系青磁	甕 1 (1) 5 (1)
	磁石青磁	甕 1 (1)
	瓦葺土器	甕 2 枚 破片
	瓦類	燒 瓦 瓦 (須磨製)
	土製品	土瓦
S-19a	遺物名	場所
	白磁	甕 V-VIII (1)
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付)
S-20 b	遺物名	場所
	土師器	破片 (甕口)
S-20	遺物名	場所
	土師器	杯 a (1) 杯 c 甕 c 小皿 a (1)
	瓦類	燒
	藤原系青磁	甕 1 (6) (1) 5 (1) 6 (1) 甕 (1) 破片 (1)
	藤原系青磁	甕 1 (1) 破片 (2)
	藤原系青磁	甕 1 (1) 破片 1 (6)
	土師器土器	破片
	瓦葺土器	甕 2 枚
	瓦類	燒 1 (4) IX (1)
	白磁	甕 IX (2) IX (2) 5 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (1) (未分類)
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付)
	石製品	磨石(再使用品) 磨鉢
S-20 褐色土	遺物名	場所
	土師器	杯 a (1) 杯 c 甕 c 小皿 a (1) 甕
	藤原系青磁	甕 1 (6) (1) 5 (1) 6 (1) 甕 (1) 破片 (1)
	藤原系青磁	甕 1 (1) 破片 (2)
	藤原系青磁	甕 1 (1) 破片 1 (6)
	土師器土器	破片
	瓦葺土器	甕 2 枚
	瓦類	燒 1 (4) IX (1)
	白磁	甕 IX (2) IX (2) 5 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (1) (未分類)
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付)
	石製品	磨石(再使用品) 磨鉢
S-20 褐色土	遺物名	場所
	土師器	杯 a (1) 杯 c 甕 c 小皿 a (1) 甕
	藤原系青磁	甕 1 (2) (1) 5 (1) 6 (2) 5 (2)
	藤原系青磁	甕 1 (1)
	藤原系青磁	甕 1 (1)
	白磁	甕 V-VIII (1) V-VIII (1) (1) VIII (3)
	白磁	甕 IX (1) IX (1) IX (1) 破片 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (1) (未分類)
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付)
	石製品	磨石(再使用品) 磨鉢
S-25 褐色土	遺物名	場所
	土師器	杯 a (1) 杯 c 甕 c 小皿 a (1) 甕
	藤原系青磁	甕 1 (6) (1) 5 (1) 6 (1) 甕 (1) 破片 (1)
	藤原系青磁	甕 1 (1) 破片 (2)
	藤原系青磁	甕 1 (1) 破片 1 (6)
	土師器土器	破片
	瓦葺土器	甕 2 枚
	瓦類	燒 1 (4) IX (1)
	白磁	甕 IX (2) IX (2) 5 (1)
	中国陶器	甕 1 個 (1) (未分類)
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付)
	石製品	磨石(再使用品) 磨鉢
S-26	遺物名	場所
	土師器	杯 1 (1) 破片
	藤原系青磁	甕 1 個 (1)
	磁石青磁	甕
S-27	遺物名	場所
	土師器	甕 a (1) 甕
	瓦類	平瓦 (瓦質・焼付) 平瓦 (瓦質・焼付)

Tab.2-5 大宰府条坊跡第193次調査 出土遺物一覽表(5)

S-55 灰紫色土	
副金部	漆器
土師器	埴子 埴丸(赤) 埴丸(白)
鹿島塚系青磁	甌 1.5b(1) 甌片(1)
同化系赤青磁	甌 1.5b(1) 甌片(1)
土師器土器	磁器
甌?	土師器
同化系青磁	甌 埴丸(赤) (1)
白磁	甌 V-4X(1) (1.3 (1))
青白磁	甌 1.5a(2)
中国陶器	甌 埴子(1)
瓦器	平瓦 瓦葺(瓦葺)
金属製品	銅片
石製品	磨石(磨石)
S-56	
土師器	甌片
白磁	甌 甌片
石製品	磁石
S-57	
土師器	小皿 a(6)
鹿島塚系青磁	甌 1.2(1)
白磁	甌 V-4X(1) (1.3 (1))
中国陶器	甌 甌片 瓦(1)
金属製品	銅片
S-58	
土師器	甌片
瓦器	甌片
S-59	
土師器	小皿 a(6)
瓦器	甌片
石製品	甌 V-4X(1) (1.3 (1))
S-60	
土師器	埴
土師器	埴 a(1) 小皿 a(6) 甌
白磁	甌 1.5b(1) 甌片(1)
瓦器	平瓦 瓦葺(埴子、文字 1等)
土師器	埴 1
S-61	
瓦器	甌片(鹿島塚)
S-62	
土師器	小皿 a(6)
白磁	甌 V-3(2b)
S-63	
土師器	埴 a
鹿島塚系青磁	甌 1.2(1)
中国陶器	甌 甌片(1)
S-64	
副金部	漆
土師器	小皿 a(6)
白磁	甌 甌片(1)
S-65 明紫色土	
土師器	埴 a (6)
鹿島塚系青磁	甌 1.1(1) 甌 a(1)
同化系赤青磁	甌 甌片(1)
白磁	甌 V-4X(1) (1.3 (1)) V(1) (1) 甌片(1)
中国陶器	甌 甌片 瓦(1)
瓦器	平瓦 瓦葺(埴子)
金属製品	銅片
S-65 浅灰色土	
副金部	漆
土師器	埴 a (6) 小皿 a(6)
同化系赤青磁	甌 甌片(1)
瓦器	甌 甌片(1)
土師器	甌片
白磁	甌 甌片(1)
瓦器	甌 平瓦 瓦葺(埴子)

S-65 浅灰色土	
土師器	甌片
鹿島塚系青磁	甌
瓦器	平瓦 瓦葺(埴子) 平瓦(鹿島塚)
S-66	
土師器	甌片
鹿島塚系青磁	甌 1.5b(1)
瓦器	瓦瓦(瓦葺、無瓦)
S-67	
土師器	甌片
石製品	磨石(磨石)
S-68	
土師器	甌片
同化系青磁	甌片
白磁	甌 1.5(1)
中国陶器	甌 甌片(1)
S-69	
土師器	甌片
同化系青磁	甌片
白磁	甌 1.5(1)
中国陶器	甌 甌片(1)
S-70	
土師器	甌片
同化系青磁	甌片
白磁	甌 1.5(1)
中国陶器	甌 甌片(1)
S-71	
土師器	小皿 a(6)
瓦器	瓦瓦(瓦葺、埴子) 甌片(鹿島塚、埴子)
S-72	
土師器	甌片
瓦器	甌片
白磁	甌 埴子(1)
瓦器	平瓦 瓦葺(埴子)
S-73	
土師器	甌片
石製品	磨石(1)
瓦器	平瓦 瓦葺(埴子)
S-73a	
土師器	甌片
白磁	甌 V(1) (1.1)
S-73b	
土師器	甌片
S-74	
土師器	甌片
S-75	
土師器	小皿 a(6)
S-75a	
土師器	甌片
鹿島塚系青磁	甌 (O 層) (1) 甌片(1)
白磁	甌 埴子(7)
S-75b	
土師器	甌片
S-76	
土師器	小皿 a(6)
鹿島塚系青磁	甌 1.2(1)
中国陶器	甌 甌片(1)
同化系赤青磁	甌 1.1(1)
金属製品	銅片

Tab.2-6 大宰府条坊跡第193次調査 出土遺物一覽表(6)

S-77	
土師器	埴
鹿島塚系青磁	甌 1.5(1)
同化系赤青磁	甌 1.1(1)
白磁	甌 甌片(1)
中国陶器	甌 1.5(1) 甌片(1)
瓦器	甌 埴子(1)
瓦器	平瓦 瓦葺(埴子) 瓦瓦
S-77a	
土師器	小皿 a(6)
S-78	
土師器	甌片
鹿島塚系青磁	甌 1.1(1) (未分類)
石製品	土瓦
S-79	
副金部	漆
土師器	埴 a(6)
同化系赤青磁	甌 甌片 A
鹿島塚系青磁	甌 甌片(1)
同化系赤青磁	甌 甌片(1)
中国陶器	甌片(1)
白磁	甌 甌片(1)
石製品	磨石
S-81	
副金部	漆
土師器	小皿 a(6) 甌片
鹿島塚系青磁	甌 1.5(1)
同化系赤青磁	甌 1.1(1)
中国陶器	甌 埴子(1)
瓦器	平瓦 瓦葺(埴子)
S-82	
土師器	小皿 a(6)
鹿島塚系青磁	甌 x 埴 埴片(1)
白磁	甌 甌片(1)
S-83	
土師器	埴 小皿 a(6)
同化系赤青磁	甌 甌片(1)
中国陶器	甌 甌片 2.1(1) 甌片 C-1(1)
瓦器	平瓦 瓦葺(埴器、瓦葺)
S-83a	
土師器	甌片
S-84	
土師器	甌片
同化系赤青磁	甌 1.5a(1)
S-85	
土師器	甌片
S-86	
土師器	小皿 a(6)
鹿島塚系青磁	甌 1.5a(1)
同化系赤青磁	甌 甌片(1)
中国陶器	甌 甌片
同化系赤青磁	甌 甌片
白磁	甌 V-4X(1) (1.3 (1))
中国陶器	甌 甌片 甌片 C(2) (1)
石製品	磨石(甌片磨石)

S-87	
副金部	漆 漆 漆 漆
土師器	甌
鹿島塚系青磁	甌 1.5a(1) 1.2(1) 1.4(1) 1.5a(1) 1.5b(1) 1.5c(1)
同化系赤青磁	甌 小埴片(1) (未分類) 甌片(1)
瓦器	甌
白磁	甌 V-4X(1) (1.3 (1)) V(1) (1) 甌片(1)
中国陶器	甌 1.5(1)
瓦器	甌 埴子(1) 甌片(1)
中国陶器	甌 埴子 B(2)
中国陶器	甌 甌片 B(1)
瓦器	瓦瓦(1) 甌片 埴子、瓦瓦(1) 平瓦(1) 甌片、甌片
金属製品	銅片(磨石)
石製品	磨石(磨石)
S-88	
土師器	小皿 a(6)
同化系赤青磁	C-2(1)
中国陶器	甌
白磁	甌 IV (1)
石製品	磨石?
S-89	
土師器	甌片
S-91	
土師器	小皿 a(6)
鹿島塚系青磁	甌 1.5a(1)
同化系赤青磁	甌 1.5b(1)
中国陶器	甌 1.1(1)
中国陶器	甌
白磁	甌 1.5(1)
中国陶器	甌 埴子(1)
瓦器	瓦瓦(瓦葺、埴子) 平瓦(瓦葺、埴子) 甌片(鹿島塚)
石製品	磨石
S-91a	
同化系赤青磁	甌 1.1(1)
S-92	
土師器	埴 a(6)
S-93	
副金部	漆 漆
土師器	小皿 a(6) 甌
同化系赤青磁	甌
瓦器	甌 1.5a(2)
石製品	磨石(磨石)
S-93a	
同化系赤青磁	甌 1.5b(1)
瓦器	瓦瓦(瓦葺、埴子)
S-94	
副金部	漆片
土師器	甌片
同化系赤青磁	甌片
S-95a	
土師器	埴 C 小皿 a(6)
鹿島塚系青磁	甌 1.5(1)
白磁	甌 甌片(1)
S-95b	
副金部	漆 土師器
土師器	甌片
S-96	
副金部	漆 (N) 漆
土師器	小皿 a(6)
同化系赤青磁	甌 1.5(1)
同化系赤青磁	甌
白磁	甌 甌片(1)
中国陶器	甌 (A-2 埴子?) C-2(1)
石製品	土瓦

Tab.2-7 大宰府条坊跡第193次調査 出土遺物一覧表(7)

S-97	土師器 筒形	白
中国陶器	色・黒C(1)	
S-98	土師器 片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
瓦葺	平瓦(葺き物、破)	
土師器	土師	
S-99 赤褐色土	土師器 片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
S-99 赤褐色土	土師器 片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
S-99 土師器	片 a 1(小)	
S-100	土師器 片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
S-102	瓦葺 瓦	
土師器	片 a 1(小) 黒	
中国陶器	赤	
S-103	土師器 片 a 1(小)	
S-102	瓦葺 瓦	
土師器	片 a 1(小) 黒	
中国陶器	赤	
S-103	土師器 片 a 1(小)	
甕系系青磁	黒,1,4(1)	
中国陶器	赤	
瓦葺	平瓦(葺き物、破)	
S-104	土師器 小皿 a 1(小)	
甕系系青磁	黒,1,5(1) 破片(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
中国陶器	赤,1,6(1) 1(1)	
白磁	黒,1,7(1) 赤,1,8(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物、破)	
S-105	瓦葺 瓦	
土師器	片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
中国陶器	赤,1,9(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物、破)	
土師器	片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
S-107	土師器 片 a 1(小)	
中国陶器	赤,1,10(1)	
S-108	瓦葺 瓦	
土師器	片 a 1(小)	
白磁	赤,1,11(1)	
中国陶器	赤,1,12(1) 赤,1,13(1)	
S-108	瓦葺 瓦	
土師器	片 a 1(小)	
S-111	土師器 小皿 a 1(小)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
金銀製品	銅片	
S-112	土師器 片 a 1(小) 小皿 a 1(小) 破片(赤褐色)	
甕系系青磁	黒,1(1) 1,2(1) 1,3(1) 破片(1)	
瓦葺土葺	瓦葺	
中国陶器	赤,1,14(1)	
白磁	赤,1,15(1) 赤,1,16(1)	
中国陶器	赤,1,17(1) 赤,1,18(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物、破)	
金銀製品	銅片	
石製品	滑石	

Tab.2-8 大宰府条坊跡第193次調査 出土遺物一覧表(8)

S-113	土師器 破片	
甕系系青磁	黒,1(1)	
白磁	赤,1,19(1)	
S-114	土師器 小皿 a 1(小) 破片(赤褐色)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
甕系系青磁	黒,1(1)	
中国陶器	赤,1,20(1)	
中国陶器	赤,1,21(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
S-116	土師器 破片(赤褐色)	
中国陶器	赤	
S-117c	土師器 破片	
S-117	土師器 破片	
S-117	瓦葺 破片(瓦葺)	
S-118	土師器 片 a 1 土師	
甕系系青磁	黒,1,4(1)	
S-119	瓦葺 破片	
土師器	小皿 a 1(小)	
中国陶器	赤,1,22(1)	
S-120	土師器 小皿 a 1(小) 破片	
S-123	土師器 破片	
S-124	瓦葺 瓦	
甕系系青磁	黒,1,5(1)	
中国陶器	赤,1,23(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
白磁	赤,1,24(1)	
青石磁	赤,1(1)	
石製品	滑石	
S-124c	瓦葺 瓦	
甕系系青磁	黒,1,6(1)	
甕系系青磁	黒,1,7(1)	
S-125	土師器 小皿 a 1(小)	
瓦葺土葺	瓦葺	
石製品	滑石	
S-127	土師器 小皿 a 1(小)	
甕系系青磁	黒,1,8(1)	
中国陶器	赤,1,4c(1)	
瓦葺	破片(赤褐色)	
S-128	土師器 小皿 a 1(小)	
瓦葺	破片	
甕系系青磁	赤,1,9(1)	
中国陶器	赤,1,4c(2)	
中国陶器	赤,1,10(1)	
中国陶器	赤,1,11(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
土師器	破片	
石製品	滑石	
S-129	土師器 破片	
S-130	土師器 破片	
S-132	土師器 破片	
甕系系青磁	黒,1,2(1) 1,3(1)	
S-133	土師器 片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
中国陶器	赤	
瓦葺	平瓦(葺き物、破)	
S-134	土師器 破片	
白磁	赤,1,17(1)	
石製品	滑石	
S-136	瓦葺 破片	
中国陶器	赤	
瓦葺土葺	瓦葺	
甕系系青磁	黒,1,1(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
中国陶器	赤,1,1(1)	
白磁	赤,1,4X(1) 1,3(1) 1,3(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物、破)	
S-137	土師器 片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
甕系系青磁	黒,1,2(1) 1,3(1) 1,3(1)	
瓦葺土葺	瓦葺	
白磁	赤,1,1(1)	
中国陶器	赤,1,1(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物、破)	
S-138	土師器 片 a 1(小) 小皿 a 1(小)	
甕系系青磁	黒,1,3c(1)	
瓦葺	平瓦(葺き物)	
S-139	瓦葺 平瓦(葺き物)	
S-139a	土師器 破片	
S-141	土師器 破片	
金銀製品	銅片	
石製品	滑石	
S-141b	土師器 破片	
S-142	土師器 破片	
土師器	片 a 1(小)	
甕系系青磁	黒,1,1(1)	
中国陶器	赤,1,10(1)	
S-142a	土師器 破片(赤)	
甕系系青磁	黒,1,2(1)	
S-143	白磁 赤,1,1(1)	
中国陶器	赤,1,1(1)	
S-144	土師器 破片	
甕系系青磁	赤,1,1(1)	
中国陶器	赤,1,1(葺き物、破)	

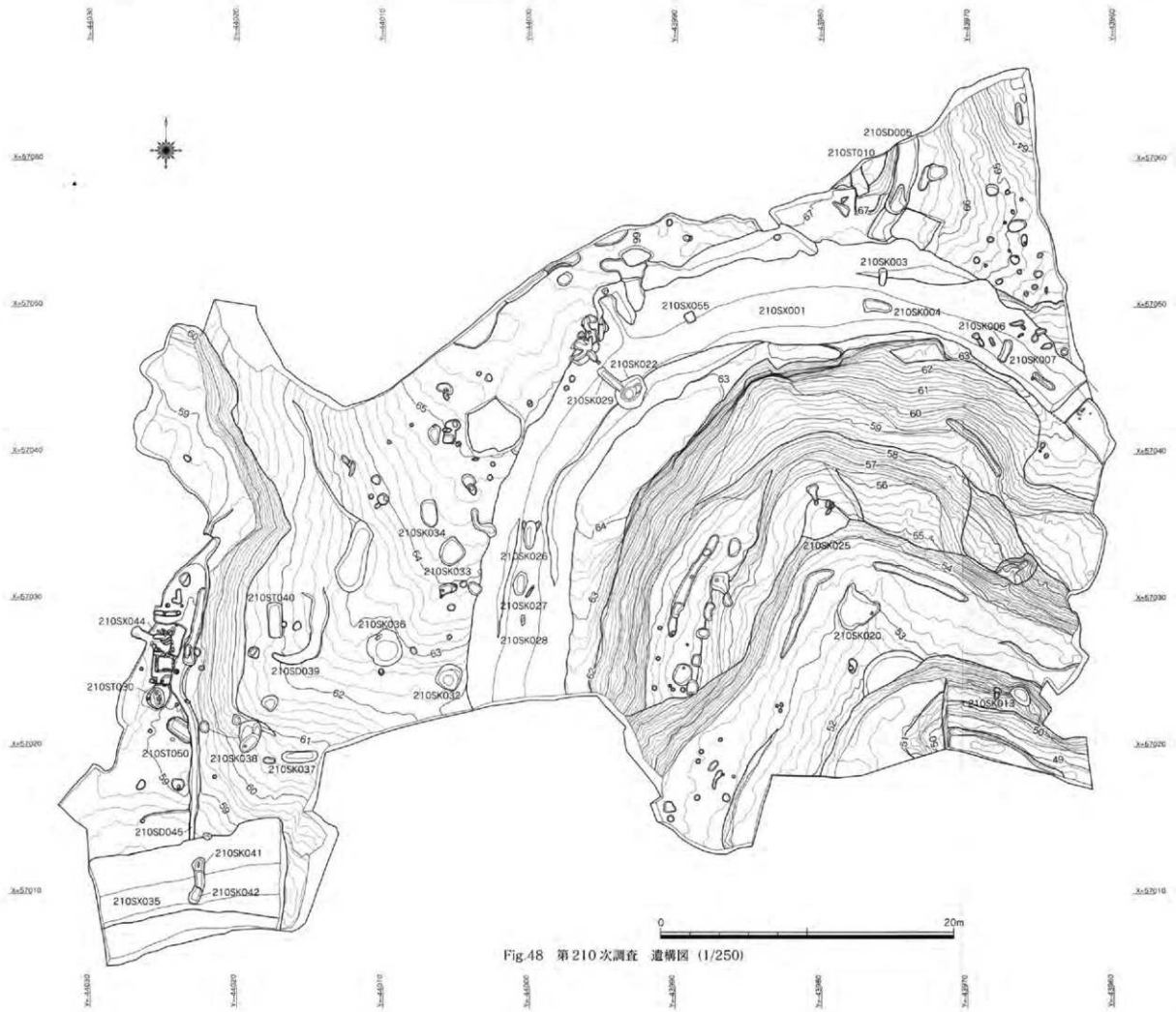


Fig 48 第210次調査 遺構図 (1/250)

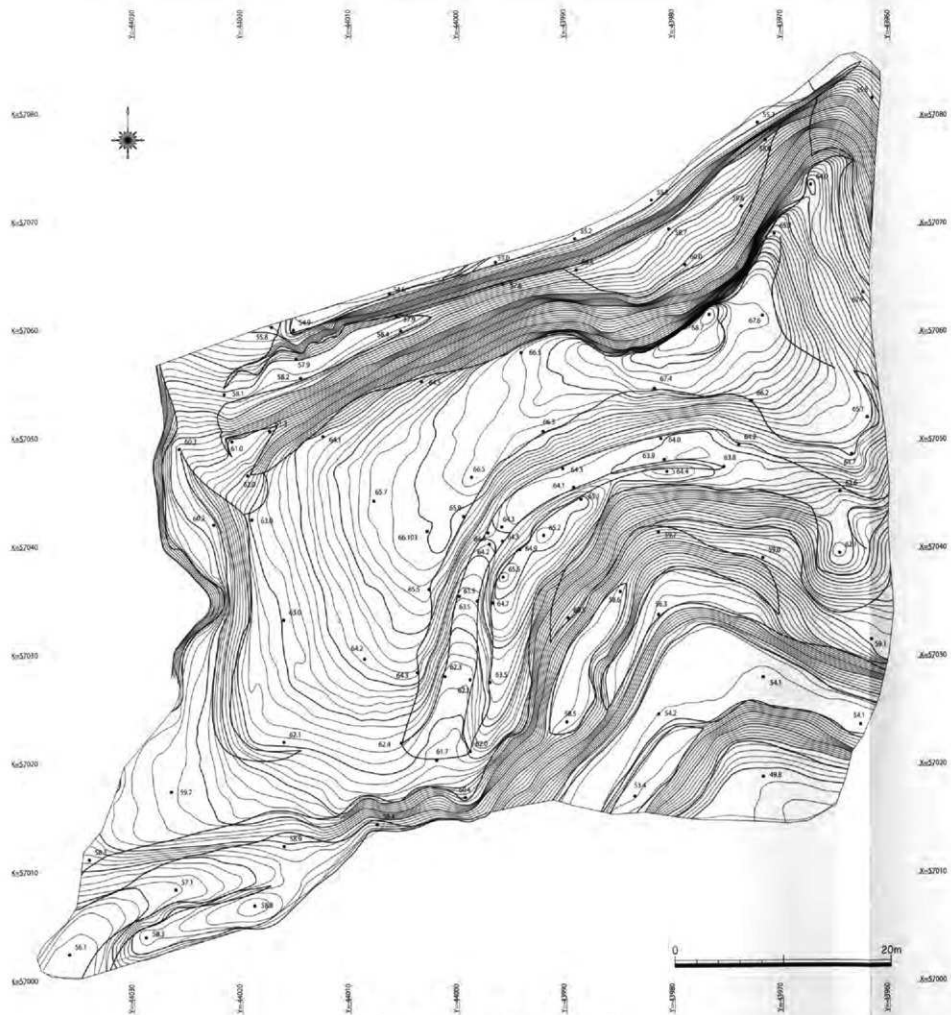


Fig.49 第210次調査 調査前地形図 (1/350)

2. 大宰府条坊跡第 210 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市観世音寺 5 丁目 870、867-1 外に所在する。立地は、四王寺山から南に派生し突出した丘陵の突端にあたる。丘陵の先端からは東西南方に尾根が短く続く。北側の四王寺山方向へは、馬ノ背状に丘陵が存在していたと推定できるが、調査以前に大規模に土取りをされており、丘陵を切りおとして確保した平坦面には、花園酒造という会社の建物があり、調査直前まで営業をしていた。この建物には、東の御所ノ内から白川へ向かう南北道路から、西方向の斜面をあがる急な坂道が接続していた。当該地において、丘陵を掘削して団地を造営したいという申し出があった。遺構の有無を確認するために、平成 11 年 12 月 (1999) に確認調査を狭川真一が行った。調査結果として花園酒造の跡地は完全に丘陵のカット面で遺構が存在しないことと、南側に残存していた丘陵部では、丘陵を切った堀切のようなものと丘陵頂部に墓の存在を確認した。そのため工事が行われる前に埋蔵文化財の発掘調査を行うことになった。開発対象面積は 10,324 m²、調査面積は 3,793 m²。調査期間は平成 12 年 (2000) 4 月 17 日から平成 13 年 (2001) 3 月 9 日。調査は高橋学が担当した。

(2) 基本層位

調査地は丘陵のため堆積層自体は薄く、表面に表土 (腐葉土) が全面に 0.3m ほど堆積していた。この表土を除去すると、調査区全面に茶色土が 0.2m ほどの厚さで展開しており、これを遺構検出上として設定した。この茶色土を除去すると遺構が検出される。

調査地を便宜的に地形から大きく 3 つの地区に分けた。1 つは丘陵の尾根の部分。ここには尾根を切りおとした堀が平面逆 U 字型に尾根に沿って掘られている。また、丘陵の頂部には高まりがあり、ここに墓が構築されていた。2 つ目は尾根からやや下がった西側の平坦面。ここには溝や墓。そして、1 つ目と同じく東西南方向の堀が掘られている。3 つ目は丘陵から南側に降りたところにある谷部である。ここには土坑が集中していた。

また、花園酒造の建物があった尾根掘削地帯を越えた北側の丘陵斜面にトレンチを $\alpha \sim 1$ の 8 箇所入れて確認調査をした。現況地形としては北から南、そして東から西へ傾斜しているが、トレンチ調査によって旧来の地層堆積の変遷を追った。

(3) 検出遺構

溝

210SD005 (Fig.58)

調査区北部中央に位置する南北方向の溝。210ST010 の東側に位置し、この墓に伴うものと考えている。幅 1.5m、長さ 5.3m、深さ 1.1m を測る。埋土観察では西側の墓の高まりから土砂が流入しているのが確認された。出土遺物から 12 世紀に埋没した可能性が考えられる。

210SD039 (Fig.50)

調査区西部中央部に位置する溝。北から南方向へ下がった後、西へ折れ曲がった平面プランを呈す。長軸長 5m、短軸長 4m、溝の幅は 0.3 ~ 1.2m、深さは 0.02 ~ 0.08m。溝の深さが極端に浅いため削平された可能性が考えられる。埋土は茶褐色土で花崗岩の風化土を大量に含む。西側に近接した

210ST040の墓を取り囲むようにこの溝は展開していることから、丘陵の上部からの雨水が墓にかかるとを防ぐため掘られた排水用の溝と考えている。遺物が出土していないため、時期は不明だが、遺構の立地から210ST040と同一時期に掘削されたものと考えておく。

210SD045 (Fig.50)

調査区西部西側に位置する溝。長軸長17m、幅0.3~1m、深さ0.1~0.8mを測る。中ほどでやや西に振ってまた東へ戻っている。周辺の中世墓を壊して構築されている。検出した溝の中央付近の土層断面図をみると、東側、つまり丘陵側に板状のものを数回にわかって差し込んでいるような土層が確認されている。これが何を示すのかは現状では判断できないが、土留めの板だったとも推測される。出土遺物から12世紀前半以降に埋没したことが考えられる。

土坑

210SK003 (Fig.51)

調査区北部東側に位置する土坑。平面プランは隅丸長方形。210SX001の埋土を除去後の床面検出段階で検出された。長軸長1.1m、短軸長0.55m、深さ0.8m。210SX001の北側壁方を垂直に掘り下げてL字型にしている。遺物は検出されていない。

210SK004 (Fig.51)

調査区北部東側に位置する土坑。平面プランは隅丸長方形。210SK004の南側に隣接する。210SK003と同様に、210SX001の床面で検出されている。長軸長1.9m、短軸長0.75m、深さ0.75m。土層は水平堆積。SK003とSK004は近接しており、配置からは逆Tの字型であることがわかる。相互に関係する遺構である可能性も考えておきたい。

210SK006 (Fig.51)

調査区北部東側に位置する土坑。210SX001の埋土を除去後の床面検出段階で検出された。長軸長1.5m、短軸長0.6m、深さ0.65m。平面プランは隅丸長方形。平面検出時は掘立柱建物の柱痕と想定したが、断面を削りをして土層を確認すると、柱痕ではない浅い窪み堆積だと判断した。出土遺物から12世紀前半以降に埋没したものと考えられる。

210SK007 (Fig.51)

調査区北部東側に位置する土坑。210SK006の南東方向へ2.1m離れた箇所位置する。SK006と同様、210SX001の埋土を除去した床面から検出された。平面プランは隅丸方形。長軸長1.8m、短軸長0.5m、深さ0.8m。

210SK013 (Fig.51)

調査区南部東側に位置する土坑。長軸長1.6m、短軸長1m、深さ1.6m。北側の斜面側を切り込んで、南側に開放される。底面は平坦だが中央にわずかに窪みがある。土層は水平堆積後に表面を上部から流れた土で覆われている。

210SK020 (Fig.52)

調査区南部中央に位置する土坑。長軸長3.5m、短軸長3m、深さ0.5m。谷部中央の谷筋に沿っている。北に1.3mほど掘方が延びるが、平面は楕円形のプランを呈す。堆積土層中位、特に赤茶色土層に礫と炭が多量に交じっていた。礫は谷筋に沿って配置していることから何らかの意図を持って並べられている可能性が高い。炭が混じった層が礫の上層にあたるため、礫の上で何かを焼いてそのまま炭ごと埋め戻している可能性が考えられる。出土遺物は古墳時代の須恵器から、8世紀代の須恵器蓋、9世紀代の黒色土器A類検等、時期差がある遺物が出土しているが、谷筋の遺構のため周辺からの遺物混入が多

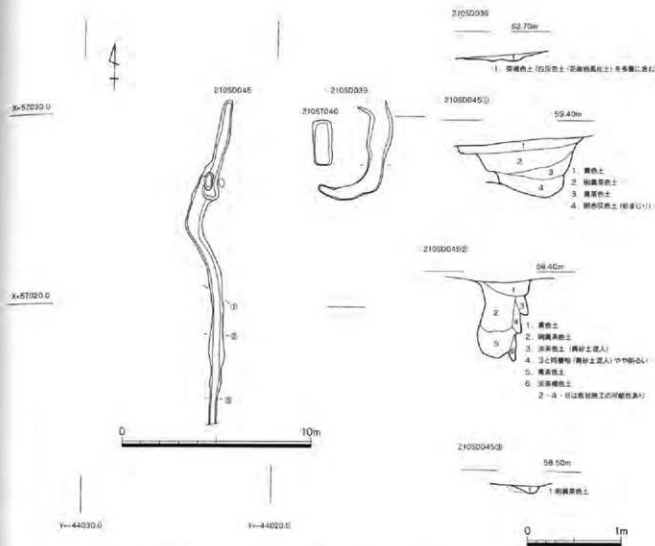


Fig.50 210SD039, 045 遺構図 (1/200、土層図は 1/40)

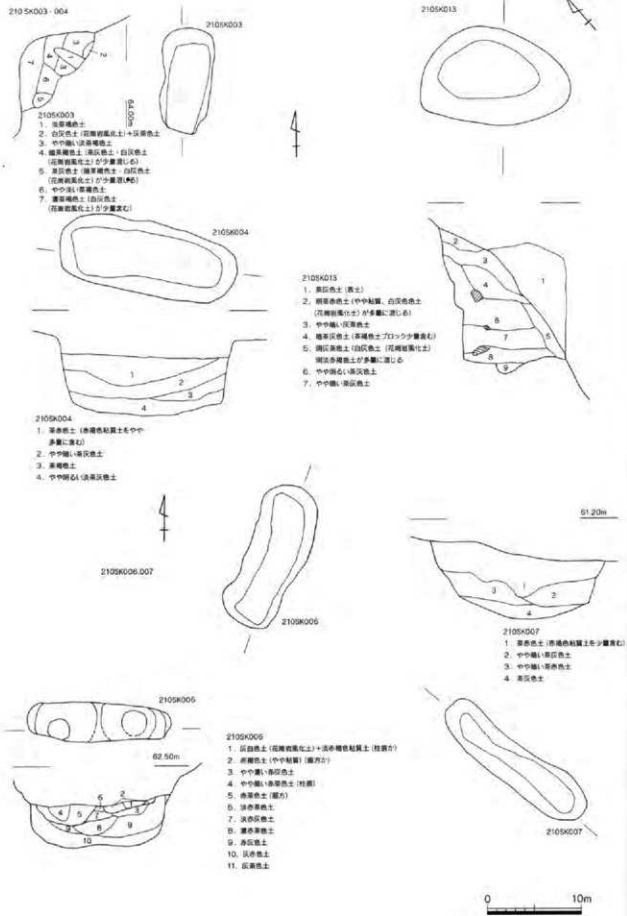


Fig.51 210SK003・004・006・007・013 遺構図 (1/40)

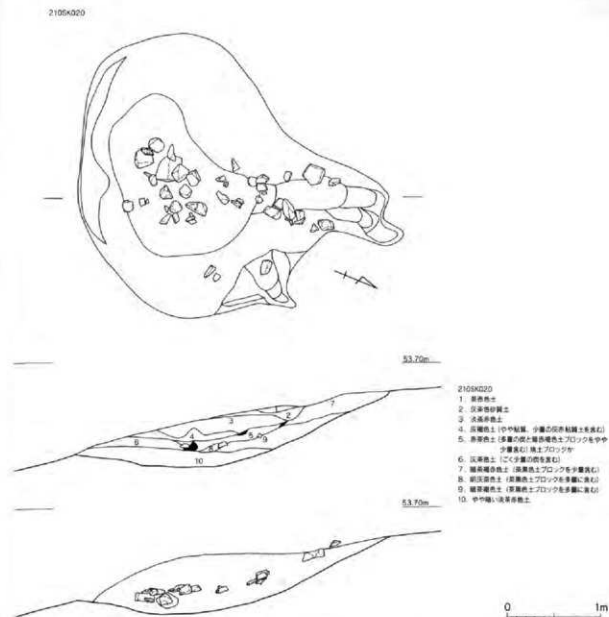


Fig.52 210SK020 遺構図 (1/40)

かったと考えられる。出土遺物の下限は粉青細網の椀と考えられるため、埋没の下限は14～15世紀と推測しておく。

210SK022 (Fig.53)

調査区北部中央に位置する土坑。210SX001の埋土を除去後の床面検出段階で検出された。長軸長2m×短軸長2m、深さ1.1m。楕円形の平面プランを呈す。土坑内の北西部に、長軸長1.1m、短軸長0.7m、深さ0.7mの平面プランが方形の土坑が切り合っていた。その土坑内は水平堆積しており、埋め戻し行為と考えている。その土坑の東側には0.2m四方の方形の切り込みがあり、深さ0.1mと非常に浅い単一土層で埋まった穴がある。東西方向の土層を観察すると、切り合いの土坑以外の埋土土層をみると細かく分けて埋めてあり、きちんと埋め戻して突き固めている。

210SK023 (Fig.53)

調査区北部中央に位置する土坑。210SX001の掘方に切り込んでいる。長軸長1.2m、短軸長0.8m、

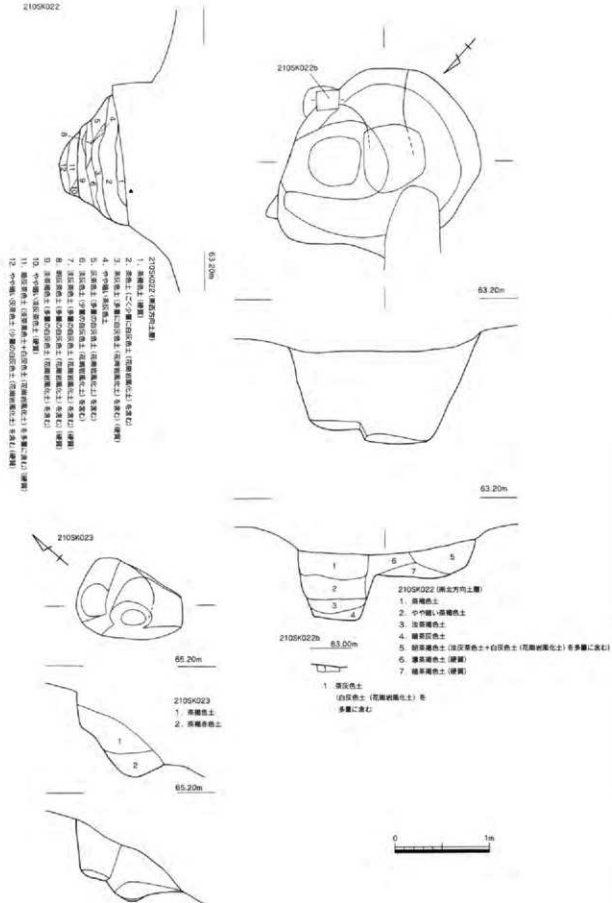


Fig.53 210SK022・023 遺構図 (1/40)

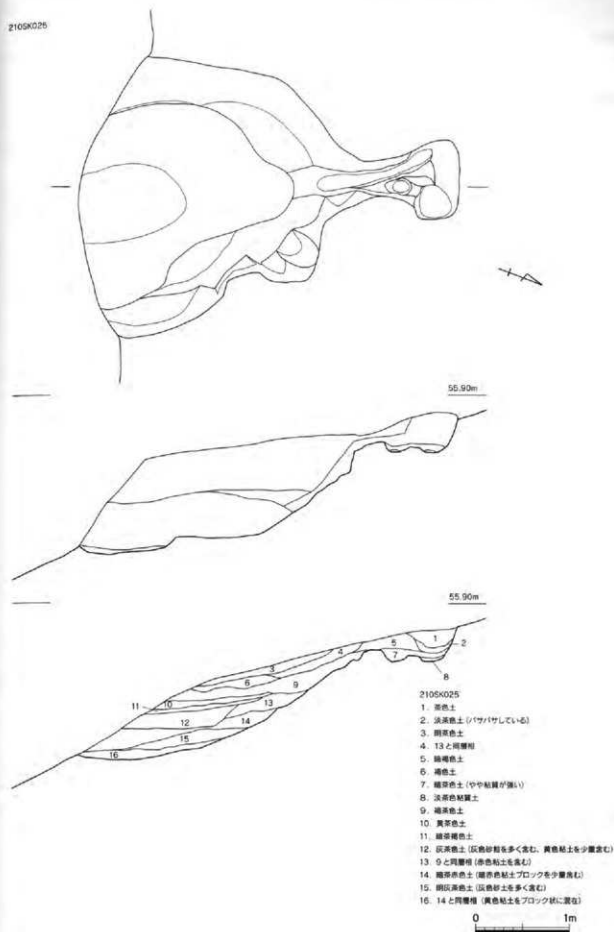


Fig.54 210SK025 遺構図 (1/40)

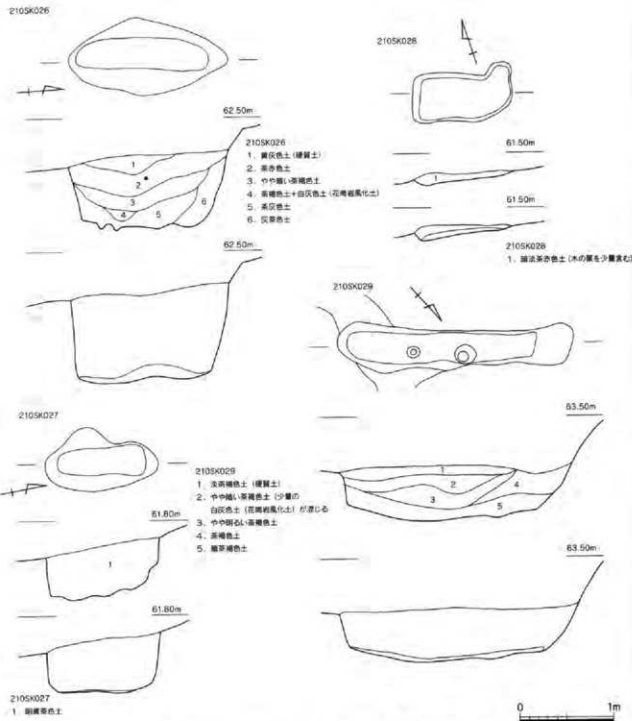


Fig.55 210SK026・027・028・029 遺構図 (1/40)

深さ 1.05m を測る。北側の斜面側を掘り採って南側は開放している。

210SK025 (Fig.54)

調査区南部中央に位置する土坑。谷堆積の一部とも考えられる。平面プランは、半円形で東西長 5.5m、南北長 2.3m、深さ 0.20m を測る。出土遺物が少なく埋没時期は明確ではないが、少なくとも古代以降に埋没したと考えられる。

210SK026 (Fig.55)

調査区北部西側に位置する土坑。210SX001 の床面から検出された。平面プランは楕円形。長軸長

1.7m、短軸長 0.95m、深さ 0.95m を測る。遺物としては土製品の土壁が出土している。

210SK027 (Fig.55)

調査区北部西側に位置する土坑。210SX001 の床面から検出された。平面プランは楕円形。長軸長 1.2m、短軸長 0.68m、深さ 0.63m を測る。埋土は明黄茶色土。遺物は土師器の破片が出土している。

210SK028 (Fig.55)

調査区北部西側に位置する土坑。210SX001 の床面から検出された。平面プランは隅丸方形だが東側は不整形。長軸長 1.05m、短軸長 0.6m、深さ 0.16m を測る。埋土は暗淡茶赤色土で、木の葉を少量含む。遺物は検出されていない。

210SK029 (Fig.55)

調査区北部中央に位置する土坑。210SX001 の床面から検出された。210SK022 を切る。平面プランは長方形。長軸長 2.5m、短軸長 0.45m、深さ 0.55m を測る。底面に小穴状の窪みが 2 つ検出されている。遺物は検出されていない。

210SK032 (Fig.56)

調査区西部中央に位置する土坑。平面プランは隅丸方形。南北長 1.6m、東西長 1.65m、深さ 1.22m を測る。掘り方は二段になっており、下のプランは東西方向に長い楕円形を呈す。土層は、最下層に 40cm ほど、茶灰色土が溜まった後に自然堆積をしている。遺物は出土していない。

210SK033 (Fig.56)

調査区北部西側に位置する土坑。平面プランは方形。南北長 1.45cm、東西長 1.7m、深さ 0.30m を測る。土層の堆積は、中央部に南北長 0.5m、東西長 0.3m の楕円形の円形たまりがあった。土色は淡茶黄色土で堅くしまっていた。土層断面で確認したが柱穴ではないと思われる。遺物は出土していない。

210SK034 (Fig.56)

調査区西部北側に位置する土坑。平面形は楕円形。南北長 1.8cm、東西長 1.13m、深さ 0.4m を測る。遺物は出土していない。

210SK036 (Fig.56)

調査区西部中央に位置する土坑。平面プランは方形。南北長 2.25m、東西長 2.30m、深さ 1.59m を測る。遺物として、黒曜石のフレイクが 1 点出土している。

210SK037 (Fig.57)

調査区西部中央に位置する土坑。平面プランは東西方向に細長い溝状。南北長 0.75m、東西長 2.45m、深さ 0.73m を測る。

210SK038 (Fig.57)

調査区西部中央に位置する土坑。平面プランは楕円形。南北長 2.3m、東西長 1.5m、深さ 0.62m を測る。出土遺物は土師器の破片、平瓦等である。

210SK041 (Fig.57)

調査区西部南側に位置する土坑。210SX035 の底面から検出された。平面プランは南北に長い溝状。210SK042 と切り合いがあり、切っている。210SX035 の底面から立ち上がりにかけて掘られており、210SK035 とは直交している。南北長 2.3m、東西長 0.87m、深さ 0.5m を測る。遺物は出土していない。

210SK042 (Fig.57)

調査区西部南側に位置する土坑。210SX035 の底面から検出された。平面プランは長方形。南北長 0.95m、東西長 0.75m、深さ 0.70m を測る。埋土は上下 2 層に大別でき、下層は砂質土傾向にある。

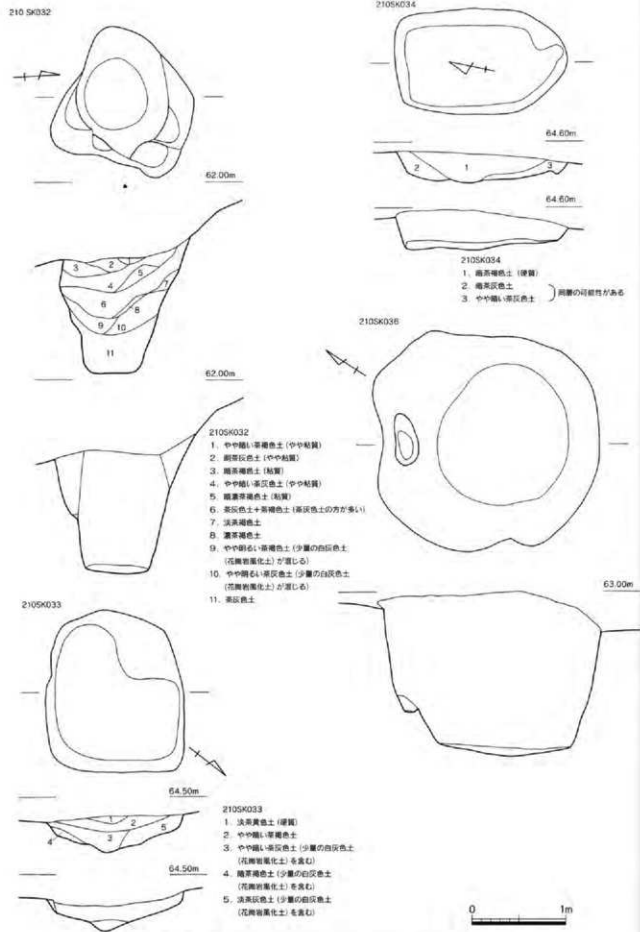


Fig.56 210SK032・033・034・036 遺構図 (1/40)

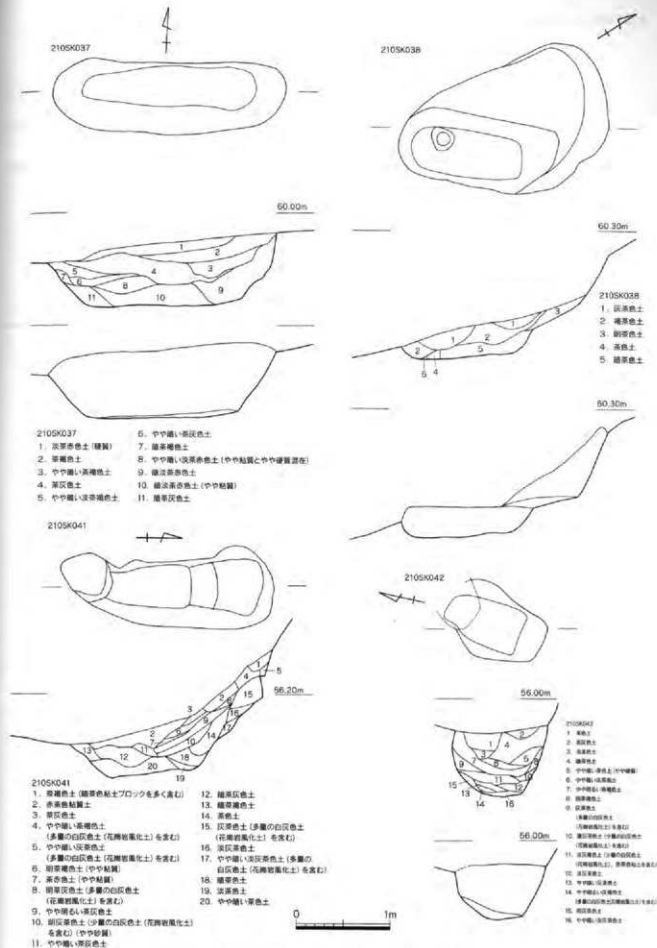


Fig.57 210SK037・038・041・042 遺構図 (1/40)

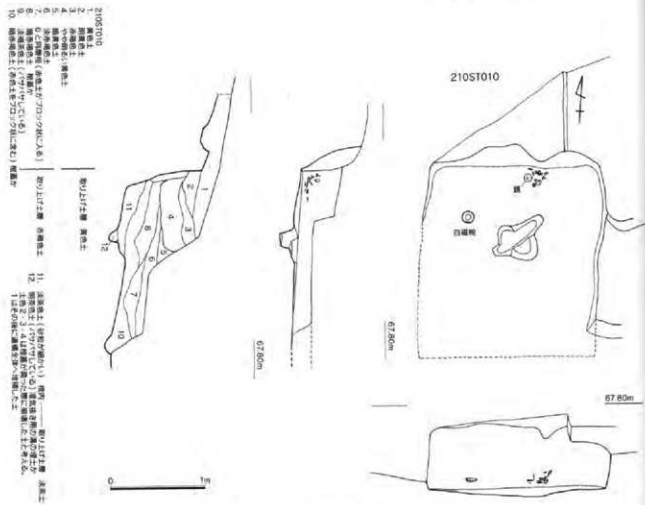
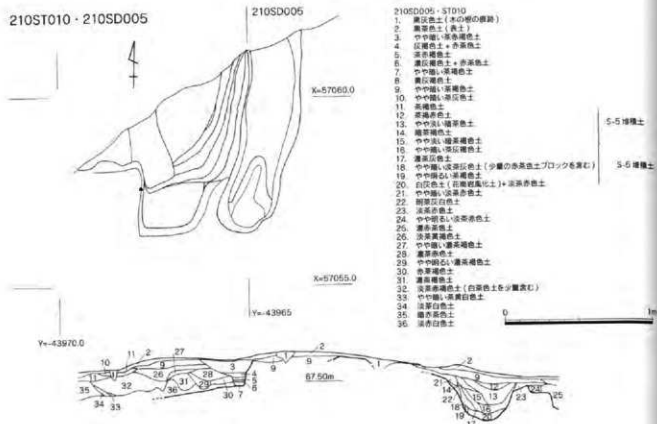


Fig.58 210SD005・ST010 遺構図 (1/50, 1/40)

210ST010 遺物出土状況図

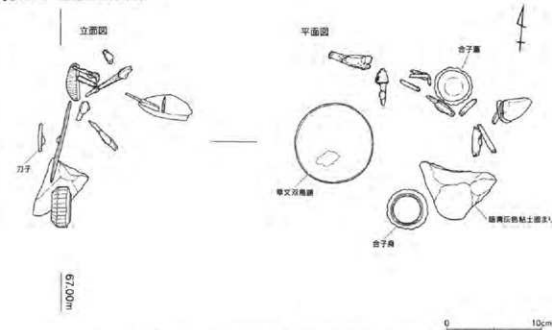


Fig.59 210ST010 遺物出土状況図 (1/4)

遺物は出土していない。

墓

210ST010 (Fig.58, 59, 60)

調査区北部やや東によった頂部で検出された墓。墓壁が検出された高まりは、調査以前に北部は酒造工場の建築のために掘削されており、当初の姿は不明である。旧地形図をみると、西ヶ寺山方向から延びてきた丘陵の突端にあたると思われる。また、発掘調査のための確認(試掘)調査により西半分は掘削されており、全容の把握が難しくなっている。現状では東西長4m、南北長4m、高さ0.65mの高まりが確認された。東側には210SD005とした溝が南北方向に巡っている。これは、この墓に伴うものと考えている。墓壁のプランとして確認されたのは、東西長1.7m、南北長1.85m、深さ0.67mである。ただし、南側、西側については削平されており、平面プランは不明である。北東部の隅と他の辺の比率からいって、方形もしくは正方形に近いものであった可能性がある。210SX012とした遺構に切られているが、この遺構は墓の可能性があり、丘頂部で墓が切り合っていた可能性が残る。

墓壁内の北西部に白磁の皿が、北部端中央にはままとって鏡、刀子、鉄釘、和鉄、青白磁の合子が検出された。鏡は紐を下にしており、鏡面に織った布と思われる付着物があるため、鏡は布に包まれていたことが想定できる。鉄釘はこの鏡周辺にしか検出されていない。南北方向の土層を立ち割って確認したが、箱が握えられた痕跡は検出されてなかった。これらのことから、この墓は直葬であり、副葬品を納める釘をつかった小さな箱状のものがあった可能性がある。出土遺物から遺構の年代は12世紀代と考えている。

210ST030 (Fig.61)

調査区西部で検出された石組み墓の一群。南北長5.5m、東西長1.7m。南より、a、b、c、dと4つの個別の墓に分かれる。それぞれの墓には、緑色片岩の自然石を置いている。この緑色片岩を除去すると、個別の墓のプランが明確になった。またそれぞれの埋土からは焼骨の破片が確認されている。こ

条210次

S-10 淡茶土 20000801 (処理前)

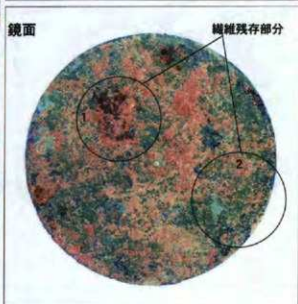
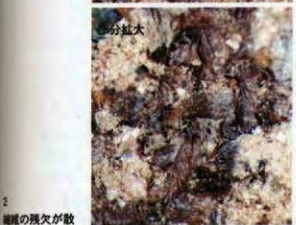
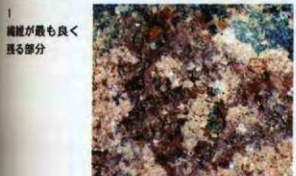
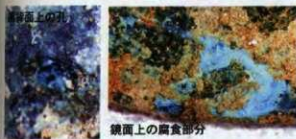
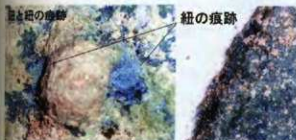


Fig.60 210ST010 出土鏡保存処理前状況

210ST030

210ST030a

1. 淡灰赤色土 (粘質が強い)
2. 赤褐色粘土
3. 褐色粘土
4. 1と2の層間
5. 1と3の層間
6. 赤褐色土 (赤まじり)
7. 6と2の層間
8. 褐色赤土 (水戻)

210ST030b

1. 淡灰赤土
2. 淡灰赤土
3. 赤褐色土 (粘質強い)
4. 3と2の層間 (黄褐色土を混む)
5. 赤褐色粘土
6. 淡赤褐色土

210ST030c

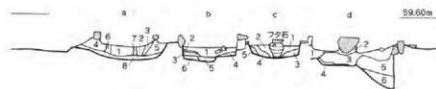
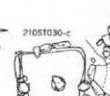
1. 淡灰赤粘土
2. 淡灰赤土
3. 赤褐色土
4. 淡灰赤土 (粘土質砂土まじり)
5. 淡灰赤土

210ST030d

1. 淡灰赤土 (5-30%の炭片混入)
2. 淡黄赤土 (やや粘質が強い)
3. 黄赤土 (粘質が強い)
4. 赤褐色土
5. 暗赤褐色土 (黄砂土まじり) 石混みの石土
6. 赤褐色粘土 (黄砂土を混む)
7. 淡赤褐色土 (黄砂土を混む)



1. 淡灰赤粘土
2. 淡灰赤土



1. 淡灰赤土
2. 淡灰赤土
3. 赤褐色土
4. 赤褐色土
5. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
6. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
7. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
8. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
9. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
10. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
11. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
12. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
13. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
14. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
15. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
16. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
17. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
18. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
19. 赤褐色土 (黄砂土を混む)
20. 赤褐色土 (黄砂土を混む)

発掘状況

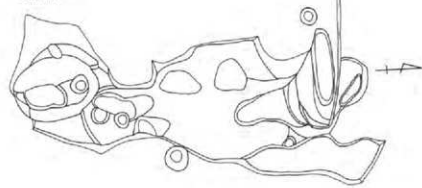
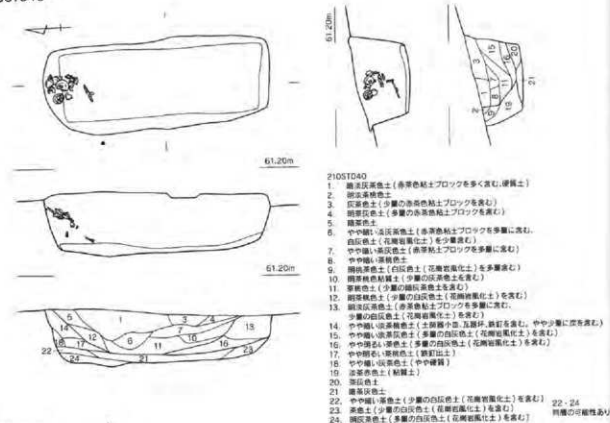


Fig.61 210ST030 遺構図 (1/60)

210ST040



210ST050

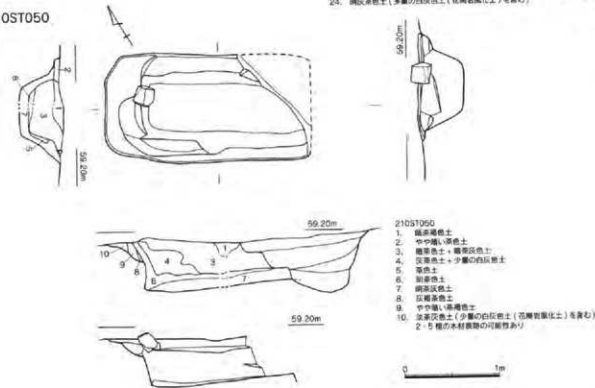


Fig.62 210ST040・050 遺構図 (1/40)

の遺構周辺には軒丸瓦や平瓦が点在している。

a. aの平面プランは楕円形で、南北長1.5m、東西長1.0cm、深さ0.53mを計る。土坑の底に0.25×0.35×0.10m程度の平たい石があり、その上面に3cmばかりの炭層が広がっていた。炭層の上面に釘や土師器皿が点在しており、周辺を囲むように石が配置されている。土師器皿は南に2枚、北に2〜3枚の重なりが確認できた。床面の底石を木棺安定用の石と仮定すれば、釘が打たれた木棺を焼焼きして、その後土をかけて盛り上げた後、石を配して区画した墓と考えられる。

b. bはaの北側に位置している。Aとの境界に東西方向の石列が確認された。cとの区画の間を占有すると思われるが、東西方向の石列がなく東西の長さは不明。南北長は1.0m、深さは石列の頂部から0.4mを計る。

c. 平面の形は、方形で南北長1.1m、東西長1.2m、深さ0.43mを測る。地山を0.25mほど掘り窪めた後に、中央部に白磁の四耳壺を据える。この四耳壺は口を上にして正立させている。四耳壺の口縁部は打ち欠いており、検出時は口をふさぐように平坦な石で蓋をしていた。四耳壺の中には火葬された骨が詰まっていた。火葬骨は打ち欠いた口から10cm程度下まで堆積しており、中央が盛り上がりつつ端に行くと空気が空いていた。この四耳壺内から火葬骨以外は出土していない。

遺構の時期は骨燼器に転用された白磁四耳壺が12世紀初めのため、それ以降と考えられる。

d. cの北に位置する。土層断面観察によれば、cのほうがり切り合的に勝っている。平面は石によって囲まれた方形となっている。中央部に上面が平らな石が配されているが、周辺に焼土などはない。緑色片岩で葺かれた状態で、平坦な石に載せていたのが西側にずれた状態で、五輪塔地輪が確認できた。墓の上部施設として使われていたものか。

210ST040 (Fig.62)

調査区西部中央に位置する木棺墓。東から南にかけて逆しに曲がる溝を伴う。平面プランは長方形で、南北長2.38m、東西長0.95m、深さ0.68mを測る。遺物は北側に集中している。土器類は土層14からまとまって出土している。断面した土層断面を観察すると、このまとまった土器は北側から中央に向かって斜めに傾斜してなだれ込んでいる状態が確認できた。これは木棺の蓋の上に置かれた土器群が、蓋が腐って埋没したことに伴って傾斜堆積したものと理解できる。同じく土層14からは炭が検出されている。土層17からは釘が4点出土しており、それぞれ木質が残存しているため木棺に使われていたと考えられる。土層17からは金属製品の刀子も1点検出されており、これは出土した位置と深さから棺内品と推測され、副葬品と考えられる。出土遺物の土師器環aの底部がへら切りで、小皿aの底部切り離し技法が糸切りと混在していることから、この墓の構築年代は太宰府土器編年XIV期前後、12世紀中頃と考えられる。

210ST050 (Fig.62)

調査区西部西側に位置する墓。平面プランは長方形と思われるが、南東部を210SD045によって切られているため確定ではない。長軸長2.2m、短軸長1.15m、深さ0.50mを測る。埋土は、明茶灰色土を除いた土層が墓に關係する土層と考えている。北側に長方形の石が0.2×0.2m程度の花崗岩が1点検出された。中央から北側の3ヶ所で骨の破片を検出した。出土遺物は土師器破片と須恵質土器破片のため時期の推測は難しい。切り合い関係にある210SD045の埋没が12世紀前半以降の埋没のため、それ以前に構築されたと考えられる。

その他の遺構

210SX001 (Fig.63)

調査区南西〜中央〜南東部で検出された平面プランは溝が半円状に続く環状遺構。谷地形から丘陵部

210SX001

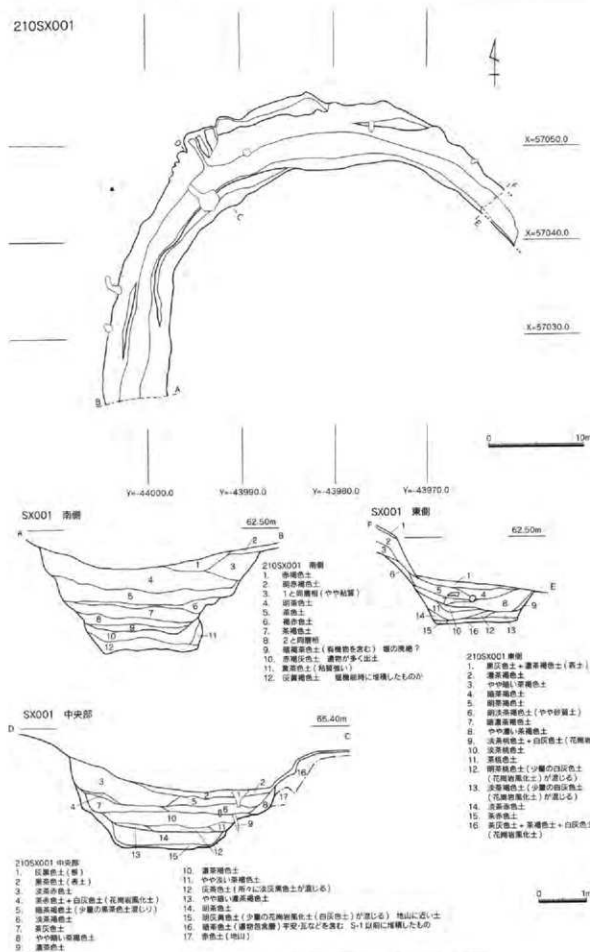


Fig.63 210SX001 遺構図 (1/400, 土層図は 1/80)

に接続したあたりで、丘陵に沿うように断面U字型で長大に掘削されている。堀上部の幅は5~7m、深さは検出面から2~2.3mを測る。堀に対して直交するように土層の断面を南西部、中央部、南東部で確認したが、その結果、堀内部の堆積土はほぼ水平に堆積をしている箇所が多かった。おそらく掘を構築して使用していた時期がすぎると、そのまま放置され埋まっていったと考えられる。発掘調査時の安全上の問題から、調査区外に延びる堀の南西部と南東部については完掘しておらず、この堀がどのように斜面につながっていたのかは不明である。出土土物の中で、時期の同定しやすい土器の出土が少ない点で時期の推定は難しいが、土師器の坏aをみると、大宰府土器編年XVIII期~XVIII期以降(13世紀前半~中頃)に埋没したと考えられる。ほかには阿蘇凝灰岩製五輪塔の火輪の一部が出土している。また、小型の角がとれた川原石が3点出土しているが、これは飛礫の可能性もある。特殊土物であるFig.74-12の瓦質土器乗燭の存在や、瓦類がある程度出土していることから、この堀状の遺構の上部にそれらの供給先が考えられる。

210SX002 (Fig.48)

調査区北部北東部に位置する確認調査時のトレンチ。210ST010の西側を掘削しており、210SX012も切っている。トレンチ内埋土掘り出し段階で土師器皿と白磁碗IV-2a類が出土していることから、本来は210SX012に伴っていた可能性がある。

210SX012 (Fig.64)

調査区北部北東部に位置する。210ST010を切っている。東西方向のプランと思われるが、南と西に関しては削平されており元々の寸法は不明。南北長0.65m、東西長1.4m、深さ0.45mが確認された。土層を検討すると、底面は掘りすぎてしまっていることがわかった。土層1.2までが本遺構に伴うものである。出土土物としては、堀方の東端から瓦形の土師器皿aの上に、白磁碗を重ねた状態でも出土している。これを副葬品とすると、この遺構は墓であると考えられる。白磁碗はII類。大宰府陶磁器区分C期。12世紀以降のものか。そうすると210ST010との時期差はなく、210ST010が構築されてあまり時間をおかずにこの遺構がつくられたことになる。

210SX035 (Fig.64, Pla.3-2)

調査区西部南端に位置する東西方向の堀状遺構。東と西側は調査区外に伸びるため、東西長13.4m、南北長8.0m、深さ3.0mを測る。現況で堀は埋まっていたが浅くほみか壊れており堀状に見えていた。埋土堆積は1.7mである。断面形は縦やかなV字型を呈している。埋土は自然堆積と思われる。土層No.5~11を取り上げ時は淡茶色土としてとりあげている。遺物の多くはこの淡茶色土から出土している。出土土物の特徴として、瓦類が豊富に出土していることがある。特に瓦形の丸瓦や瓦形に近い平瓦が多く出ている。これは、調査区西側、この210SX035より北側に瓦を構う構造物があった可能性を指摘できる。堀の埋没は、出土した土師器小皿bの編年観からXIX期~XX期(14世紀後半)以降の埋没と考えられている。

210SX043 (Fig.65)

調査区西部西側に位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係では210SD045に切られる。南北長1.5m、東西長0.85m、深さ0.28mを測る。北側に0.2m程度の障が4点集中している。

210SX044 (Fig.65)

調査区西部西側に位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係では210ST030に切られる。出土土物は、白磁碗II類。大宰府陶磁器区分C期。これにより遺構の埋没は12世紀以降と考える。

210SX046 (Fig.65)

調査区西部のさらに西側下場に位置する五輪塔群。丘陵の西斜面と宅地造営地の間の1.6mの幅に存

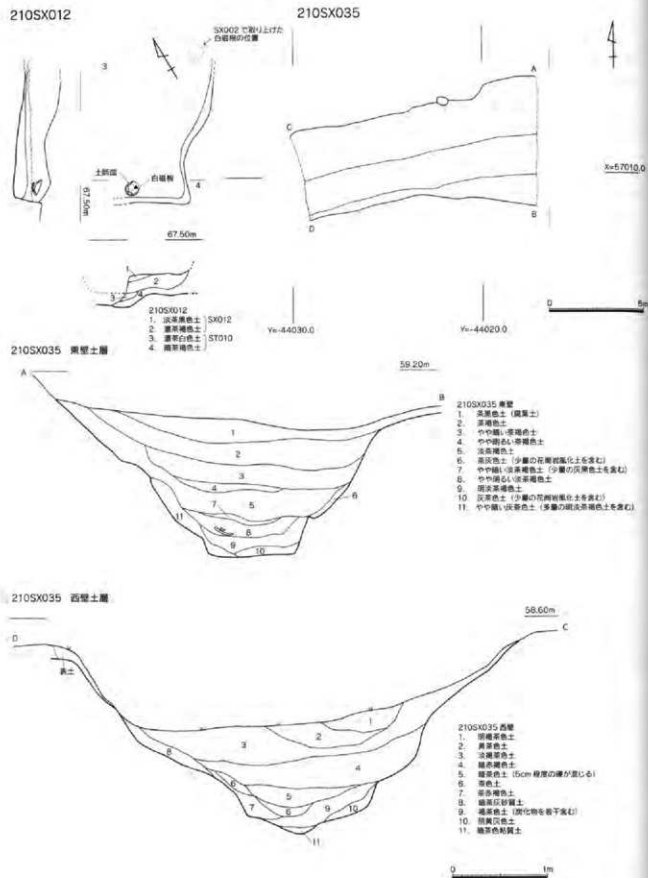


Fig.64 210SX012・035 遺構図 (1/40、210SX35 平面図は 1/200、土層図は 1/60)

在していた。周辺に確認のトレンチを3箇所にわたっていったところ、やはり周辺に遺構は確認されず、近年の宅地造営に伴って移動されたものと考えられる。

210SX055 (Fig.66)

調査区北部中央に位置する埋納遺構。210SX001の埋土を掘り下げて、床面が検出された段階で、北側の壁面で確認された。平面プランは半円形で、南側が切られたように直線になっている。東西長0.2m、南北長0.11m、深さ0.18mを測る。現況では堀の斜面に棚状に掘られているが、元々は円形の小穴だった可能性もある。埋土は、上層が明茶灰色土でハサハサしており、下層が暗灰褐色土でやや粘質だった。下層の埋土を除去すると、東西方向に3列、出土銭が検出された。それぞれ手前からA列、B列、C列として取り上げており、その組成は表Tab.4-1、4-2を参照して頂きたい。注目されるのはそれぞれの銅銭が100枚単位でまとまっており、いわゆる銅銭と呼称されるものがそのまま埋納されている状況であった。この埋納遺構は、210SX001の堀が埋まっていく過程で構築されたと考えている。

試験坑

トレンチの位置関係は、Fig.67を参照して頂きたい。主に工場建造段階で崩削されていない北斜面の埋没状況と、南側では斜面の状況を把握する目的でトレンチをいたした。

210北地区トレンチ a (Fig.67)

東西方向に5mの長さで設定した。表土下、すぐ地山となり、それ以上はききなかった。出土遺物なし。

210北地区トレンチ b (Fig.67)

東西方向に9.7mの長さで設定した。北壁の土層観察により、土層1～7までは昭和20年代に埋められたものであることがわかった。それより下層は、東側から西側へ傾斜堆積をしている。出土遺物は古代から中世にわたる。注目されるものは、7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる須恵器蓋の取り付き口縁部である。須恵器杯cの高台も外側に張るタイプで同じ様相をもっている。

210北地区トレンチ c (Fig.67)

南北方向に5.2mの長さで設定した。東面の土層を観察した。土層17.暗茶褐色土(ごく少量に明灰茶色土が混じっている)が旧表土である。よって土層1～16までは昭和20年代の埋土と考えられる。

210北地区トレンチ d (Fig.67)

南北方向に4.7mの長さで設定した。トレンチcと同じく近現代の堆積層を確認した。

210北地区トレンチ e (Fig.67)

南北方向に3mの長さで設定した。古代から中世の遺物は少量出土したが遺構は確認できなかった。

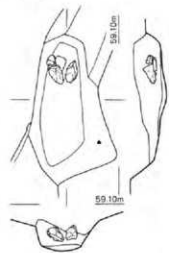
210北地区トレンチ f (Fig.68)

北地区の一番西側に設定したトレンチ。南北方向と東西方向で設定した。後に調査をした大宰府条坊踏第210-2次調査に隣接している。隣の土地とのつながりを調べておきたかったので拡張して調査をした。このトレンチからは遺物が多く出土している。特に注目されるのは、阿蘇凝灰岩製の五輪塔や瓦質土器の瓦灯、そして瓦経の破片である。瓦経の福岡県での出土例は福岡市飯盛山出土のものが著名である。近隣の出土例としては、観世音寺北側の日吉神社境内や、観世音寺境内からの出土が知られている。これらの小規模な瓦経の出土については、付近に瓦経を埋納した経塚の存在を指摘されている。日吉神社が所在する丘腹は、この条坊踏第210次調査と同じく四王寺山の南端部である。そのため同じような経塚が点在している可能性は高い。

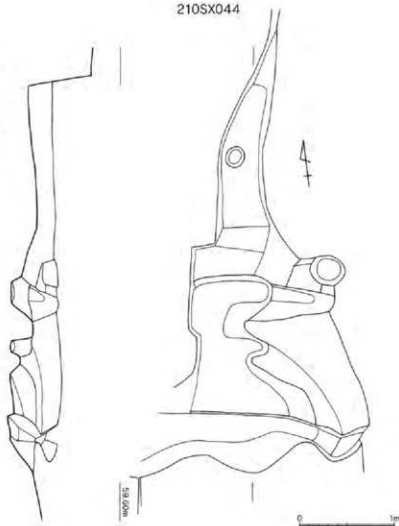
210北地区トレンチ g (Fig.68)

東西方向に4mの長さで設定をした。北地区での一番東側のトレンチ。現況地形はなだらかに傾斜しているが、旧地形は途中段を持ちながらも西から東へ急激に落ち込む。トレンチ内でも比高差は2.4mと

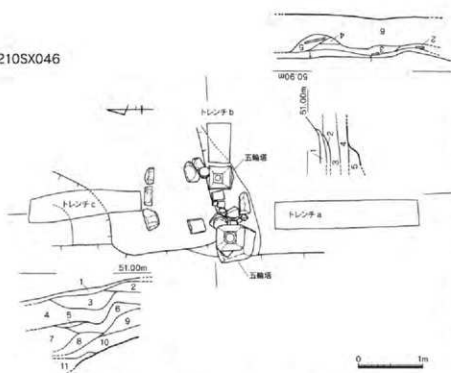
210SX043



210SX044



210SX046

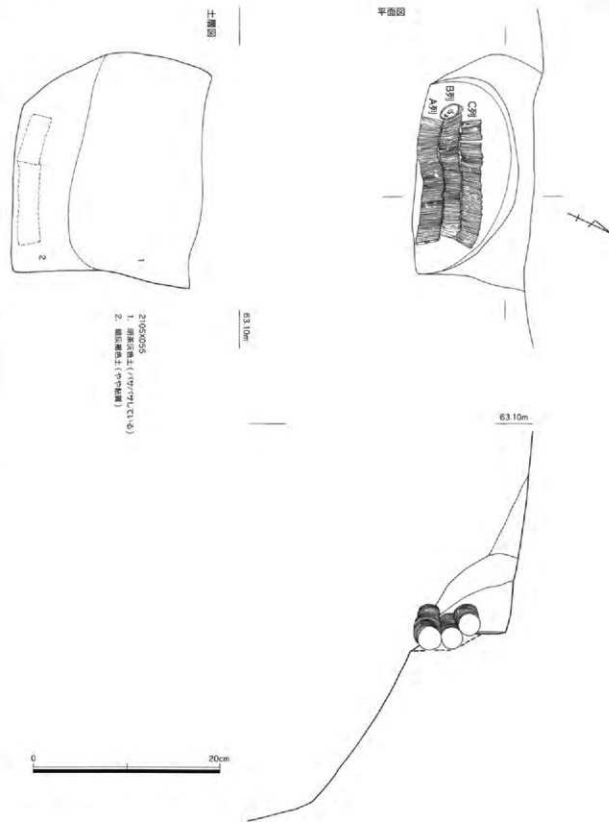


210SX046 トレンチa 西壁
 1. 高黄褐色土(黄褐色土)
 2. 淡黄褐色土(黄褐色土)
 3. 赤褐色土(少量の灰褐色土を含む、互有赤む)
 4. 赤褐色土
 5. 黄褐色土(互有赤む)
 6. やや細かい淡黄褐色土(やや多量に白灰土(花崗岩風化土)が混じる)

210SX046 トレンチb 北壁
 1. 赤褐色土(黄褐色土)
 2. 赤褐色土
 3. 黄褐色土
 4. 緑灰色褐色土(赤褐色土を含む)
 5. 淡黄褐色土(トレンチaと同壁と考える)
 トレンチbの1-2層はトレンチaの1-5と同層である。

210SX046 トレンチc 東壁
 1. 高黄褐色土(黄褐色土)
 2. 赤褐色土(少量の灰褐色土を含む)
 3. トレンチaの土と同層の可能性あり
 4. 緑灰色褐色土
 5. 赤褐色土(やや赤味がかった)
 6. やや細かい黄褐色土
 7. 黄褐色土
 8. やや細かい赤褐色土
 9. 黄褐色土
 10. 高黄褐色土
 11. やや細かい黄褐色土

210SX055

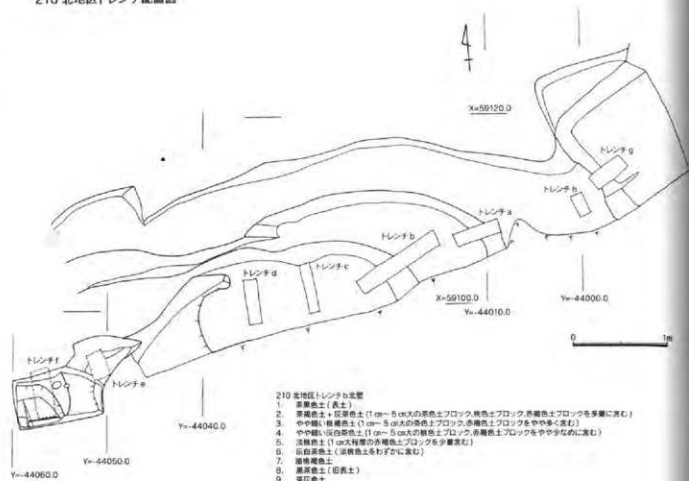


210SX055
 1. 高黄褐色土(黄褐色土)
 2. 赤褐色土(少量の灰褐色土を含む)

Fig.66 210SX055 遺構図 (1/4)

Fig.65 210SX043・044・046 遺構図 (1/40、046は1/60)

210 北地区トレンチ配置図



210 北地区トレンチb北壁

1. 表層粘土 (表土)
2. 表層粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロック, 赤褐色粘土ブロックを多数に含む)
3. やや強い硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロック, 赤褐色粘土ブロックをやや多く含む)
4. やや強い硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロック, 赤褐色粘土ブロックをやや多く含む)
5. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
6. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
7. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
8. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
9. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
10. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
11. やや弱い硬質粘土 (砂の混入が)
12. 硬質粘土
13. 硬質粘土
14. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
15. 硬質粘土

210 北地区トレンチ B 北壁



210 北地区トレンチc

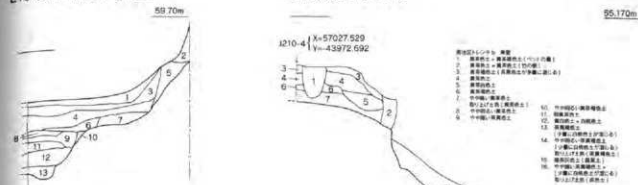
1. 表層粘土 (表土)
2. 表層粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロック, 赤褐色粘土ブロックを多数に含む)
3. やや強い硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロック, 赤褐色粘土ブロックを少量含む)
4. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
5. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
6. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
7. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
8. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
9. やや強い硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
10. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
11. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックを少量含む)
12. やや強い硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロック, 赤褐色粘土ブロックを少量含む) (少量の硬質粘土に混入)
13. やや強い硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロック, 赤褐色粘土ブロックを少量含む)
14. やや強い硬質粘土 (少量の硬質粘土が混入)
15. 硬質粘土
16. 硬質粘土
17. 硬質粘土 (100~5 cm次の赤褐色土ブロックが混入)
18. やや強い硬質粘土 (少量の硬質粘土が混入)
19. 硬質粘土
20. やや強い硬質粘土

210 北地区トレンチ C 東壁

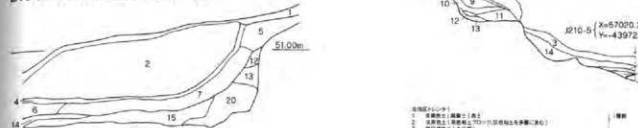


Fig.67 第210次調査北地区トレンチ配置図 (1/200), 北地区トレンチ b, トレンチ c 土層図 (1/80)

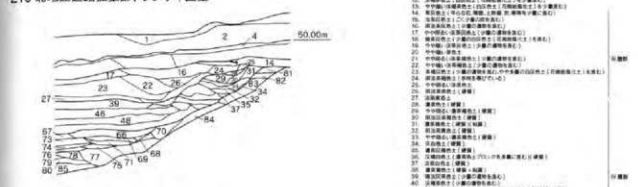
210 北地区トレンチ g 南壁



210 北地区道路拡張部トレンチ f 北壁



210 北地区道路拡張部トレンチ f 西壁



210 北地区道路拡張部トレンチ f 南壁



Fig.68 第210次調査北地区トレンチ g, 北地区道路拡張部トレンチ f, 南地区トレンチ b 土層図 (1/80)

なる。土層の堆積は水平堆積の箇所が多いので近現代の埋め土の可能性が高い。

210 北地区トレンチ h (Fig.67)

南北方向に2.3mの長さで設定をした。土師器杯 a が出土した。北から南への堆積だが、遺構は確認されなかった。

210 北地区道路拡張トレンチ (Fig.68)

北地区のトレンチ f を拡張する意味で設定したトレンチ。遺構は検出されなかったが、北壁、西壁、南壁と土層の確認をした。確認された土層を群として分けてそれぞれの特徴を記載する。I 層群は、I 層を表土層と考えている。2層は大量の土、淡茶色土が確認でき整地層と考えている。これらは比較的新しい近現代の堆積と考えられる。時期的に工場建築の際の廃土かもしれない。II 層群は4層を表土として考え、5~9層が整地層と考えられる。整地層は全体的に見て褐茶色土を呈している。III 層群は、14層から骨、緑色片岩、陶器片、土師器皿がまとめて出土したので墓があった可能性が考えられる。12~20層を表土として、21~27層が整地層と推定できる。また10、11層は遺構内埋土の可能性が高い。土色は全般的に茶色土である。IV 層群は、28~38層が堅くしまっており、全体的にみて少し赤みを帯びた茶色土である。この層から39~41層へ続いているので、この層群が生活面を示しているのは不明である。ただし、暗い灰色を帯びた土色の共通点を重要視して同じ層群とした。V 層群は53.54層(炭層)が遺構である可能性に注目して、層位を検討してみた。全体的にみて55~65は少し赤みを帯びた暗灰茶色。81~85層は赤茶色土、66~67層は暗灰茶色となっている。

210 南地区トレンチ b (Fig.68)

調査の表土めくりの前に、調査区から外にのびる南側の斜面にトレンチ a~e の5本のトレンチを入れて掘削の範囲を決定した。明確な遺構は確認できなかったが、遺物の出土があったため調査範囲にいった。トレンチ b は210SK015の存在している平坦面から210SK025の平坦面への土層の堆積を表している。

(4) 出土遺物

溝出土遺物

210SD005 出土遺物 (Fig.69)

瓦器

椀 c (1) 復元口径18cm、器高5.5cm、底径6.3cm。

貼り付け高台。

白磁

皿 (2) 器高1.5+cm、復元底径4.2cm。皿Ⅲ-1類。

210SD008 出土遺物 (Fig.69)

土師質土器

火鉢 (3) 器高2.7+cm。

210SD045 粘質土出土遺物 (Fig.69)

土師器

杯 a (4) 器高0.9+cm。

黒色土器

杯 (5) 器高1.6+cm、復元底径6.2cm。

瓦類

平瓦 縦6.8+cm、横7.0+、厚さ1.7cm。

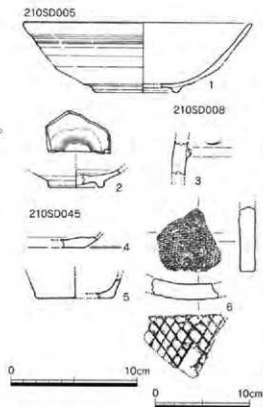


Fig.69 第210次調査溝出土遺物実測図 (1/3、1/4)

土坑出土遺物

210SK006 出土遺物 (Fig.70)

土師器

杯 a × 小皿 a (1) 底部破片。器高1.4+cm、底径8.0cm。底部切り離し技法は回転イト切りか。わずかに板状圧痕が確認できる。色調は橙褐色。外面調整は摩滅が激しく不明。

210SK015 赤茶色土出土遺物 (Fig.70)

土師器

取手 (2) 破片。縦7.0+cm、横7.1+cm、厚さ4.4cm。色調は淡橙褐色。調整はナデ調整だがやや荒く施しており、部分的に成形段階の工具痕跡が確認できる。

210SK020 明茶土出土遺物 (Fig.70)

須恵器

蓋 (3) 復元口径13.4cm、器高4.4+cm。

黒色土器

椀 c (4) 器高1.95+cm、復元底径7.0cm。A類。

磁器

椀 c (5) 器高4.8+cm、底径6.6cm。

210SK020 赤褐色土出土遺物 (Fig.70)

須恵器

蓋 3 (6、7) 6は復元口径14.6cm、器高1.2+cm。天井部は回転ヘラ削りを施す。色調は灰白色~灰黄色。7は口縁端部の破片。器高0.9+cm。色調は暗灰色。

土師器

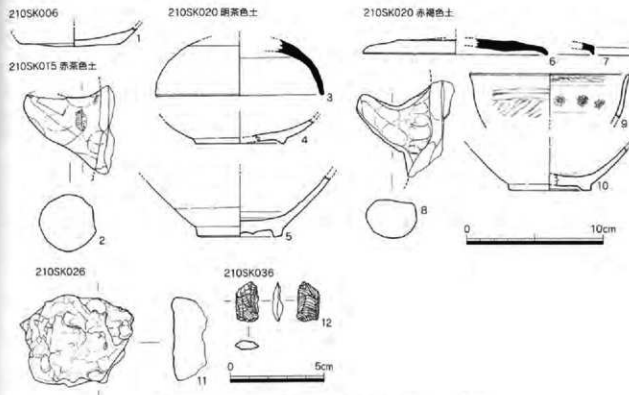


Fig.70 第210次調査土坑出土遺物実測図 (1/2、1/3)

取手 (8) 破片。縦 7.5+cm、横 7.7cm、厚さ 3.0cm。体部に取手を貼り付けた際の指頭圧痕が残る。色調は淡橙茶褐色。調整はナテ調整。取手上部はやや平坦に仕上げている。

陶器

碗 (9) 口縁部破片。復元口径 12.6cm、器高 3.5+cm。

碗 c (10) 器高 3.4+cm、復元高台径 6.6cm。

210SK026 出土遺物 (Fig.70)

土製品

土壁 (11) 縦 4.9+cm、横 6.0+cm、厚み 1.8+cm。

210SK036 出土遺物 (Fig.70)

石製品

剥片 (12) 縦 2.1cm、横 1.2cm、厚み 0.55cm。黒曜石製。

墓出土遺物

210ST010 出土遺物 (Fig.71)

白磁

皿 (1) ほぼ完形。口径 10.8cm、器高 2.55cm、底径 3.4cm。皿 VI-1b 類。

青白磁

台子 (蓋・身) (2) 蓋は口径 3.8cm、器高 1.3cm。外面に薄い青白色の透明感がある釉を施す。内側は露胎。身は口径 3.0cm、器高 1.8cm、底径 3.2cm。外面体部に蓋と同じく薄い青白色の透明感がある釉を施す。内部と、体部下部から底部に掛けては、釉を掛けていない。

金属製品

釘 (3) 縦 5.0+cm、横 0.35~0.9cm、厚さ 0.6cm。釘先端を欠く。頂部近くに木質 (横方向の木目が確認可能) が残存している。

210ST010 淡茶色土出土遺物 (Fig.71, Pla.4-1)

白磁

皿 (4) 口縁部破片。復元口径 10.2cm、器高 1.7+cm。皿 VI-1a 類。

金属製品

刀子 × 和鉄 (5) 縦 0.9cm、横 2.7+cm、厚さ 0.3cm。刃部の一部だが、11 の和鉄と比較すると、非常に近いサイズと形状をしている。和鉄の一部という可能性も提示しておきたい。

草文双鳥鏡 (6) 縦 8.3cm、横 8.3cm、厚さ 0.45cm を測る円鏡である。鏡背を觀察すると、紐は紐座を持たない素紐で界隈を巡らさず、周縁の断面はややつぶれた三角形を呈す。紐を中心にして鳥文を対照に配置しており、鳥文の対角には草花文を配置する。宋鏡式と呼ばれる和鏡の祖型の一つである。三重県多度申社経塚出土の花枝散蝶鳥鏡に文様構成が類似する。出土した段階では紐の穴に紐の痕跡が確認できた。また、鏡面には縦糸と横糸が確認できる布のようなもの数カ所付着しており、鏡が布に包まれていたことが推定できる。

釘 (7, 8, 9) 7 は縦 3.4+cm、横 0.25~1.15cm、厚さ 0.3cm。頭部と先端を欠く。8 は縦 4.2+cm、横 0.8~1.5cm、厚さ 1.6cm。先端を欠く。木質は横方向の木目を確認。9 は縦 5.3cm、横 0.25~1.6cm、厚さ 0.6cm。先端を若干欠く。頭部近くでは横方向の木目をもつ木質が残存している。

210ST010b 出土遺物 (Fig.71)

金属製品

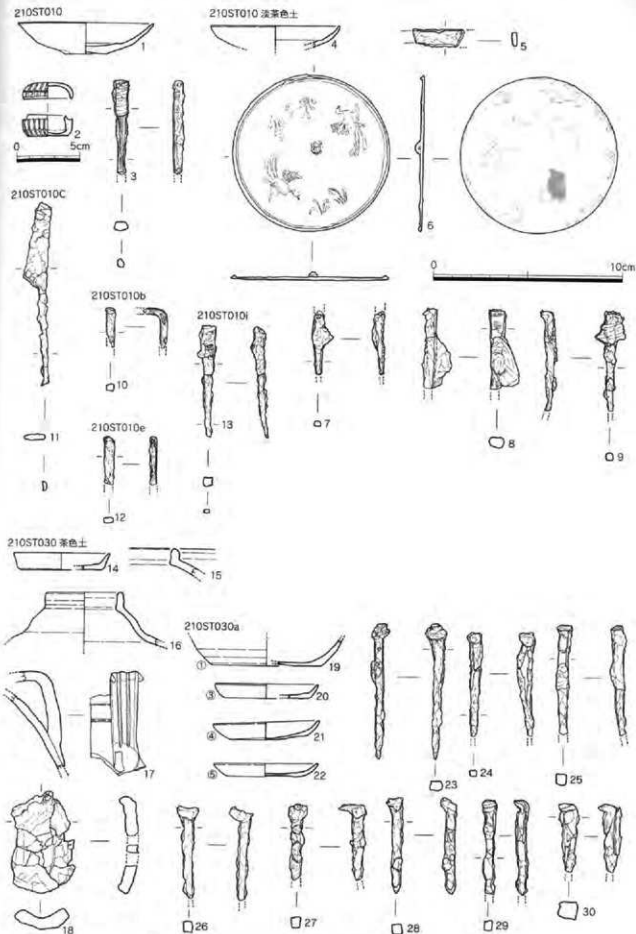


Fig.71 第 210 次調査墓出土遺物実測図その 1 (1/2, 1/3)

釘 (10) 縦 2.05 cm、横 4.0 cm、厚さ 0.4 cm。L型を呈す。

210ST010c 出土遺物 (Fig.71)

金属製品

和鋏 (11) 縦 9.7 cm、横 0.2 ~ 1.4 cm、厚さ 0.3 cm。本来、刃が付いたU字型をしているが、片刃しか残存していなかった。軸部がやや曲がり始めているのがU字型の根本にあたるためだろう。刃の尖端は欠けている。

210ST010e 出土遺物 (Fig.71)

金属製品

釘 (12) 縦 2.6+ cm、横 0.5 cm、厚さ 0.4 cm。頭部と先端を欠く。

210ST010i 出土遺物 (Fig.71)

金属製品

釘 (13) 縦 5.9 cm、横 0.3 ~ 0.95 cm、厚さ 0.2 ~ 0.7 cm。

210ST030 茶色土出土遺物 (Fig.71)

土師器

小皿 a1 (14) 口縁部破片。復元口径 8.2 cm、器高 1.1 cm、復元底径 6.8 cm。底部糸切り。焼成は良好。色調は灰赤黄色。

中国陶器

壺 (15) 口縁部破片。器高 2.15+ cm。壺Ⅳ。

水注 (16、17) 16は口縁部破片。復元口径 6.2 cm、器高 4.3+ cm、17は取手の破片。最大残存高 8.3 cm、取手部幅 2.2 cmを測る。水注Ⅷ類。

金属製品

用途不明品 (18) 縦 5.4 cm、横 3.5+ cm、厚さ 0.7 cm。中央部が窪む。

210ST030a 出土遺物 (Fig.71、72)

土師器

杯 a (19) 器高 2.1+ cm、復元底径 8.5 cm。底部切り離しは糸切りのち板状圧痕。色調は暗灰灰色。①出土。

小皿 a1 (20、21) 20は復元口径 8.2 cm、器高 1.1 cm、復元底径 6.8 cm。口縁部破片。底部糸切りか。③出土。21は口径 8.3 cm、器高 1.05 cm、底径 6.0 cm。色調は暗褐色 ~ 明黄色。底部糸切り調整のち板状圧痕。XⅧ類。④出土。

小皿 a (22) 口径 8.45 cm、器高 1.6 cm、底径 6.0 cm。焼成はやや不良。色調は黄褐色。胎土は赤色粒子を含む。XⅧ ~ XⅧ類。⑤出土。

金属製品

釘 (23 ~ 36)

23から36は鉄製の釘である。23は縦 7.2 cm、横 0.2 ~ 1.15 cm、厚さ 1.2 cm。頭部は折れ開く。24は縦 5.5+ cm、横 0.4 ~ 0.75 cm、厚さ 0.8 cm。25は縦 5.8+ cm、横 0.4 ~ 0.8 cm、厚さ 0.7 cm。先端を欠く。26は縦 4.9+ cm、横 0.6 ~ 1.1 cm、厚さ 1.3 cm。頭部が平たく開いている。先端を欠く。27は縦 3.9+ cm、横 0.5 ~ 1.0 cm、厚さ 1.3 cm。頭部は折れ曲がる。先端を欠く。28は縦 5.1+ cm、横 0.5 ~ 0.9 cm、厚さ 0.7 cm。外形に近いが先端を少し欠く。29は縦 5.0+ cm、横 0.8 cm、厚さ 0.7 cm。30は縦 3.6+ cm、横 1.0 cm、厚さ 1.0 cm。先端を欠く。31は縦 3.55+ cm、横 0.9 cm、厚さ 0.9 cm。先端を欠く。32は縦 3.0+ cm、横 0.5 ~ 1.0 cm、厚さ 0.7 cm。先端を欠く。33は縦 3.2+ cm、

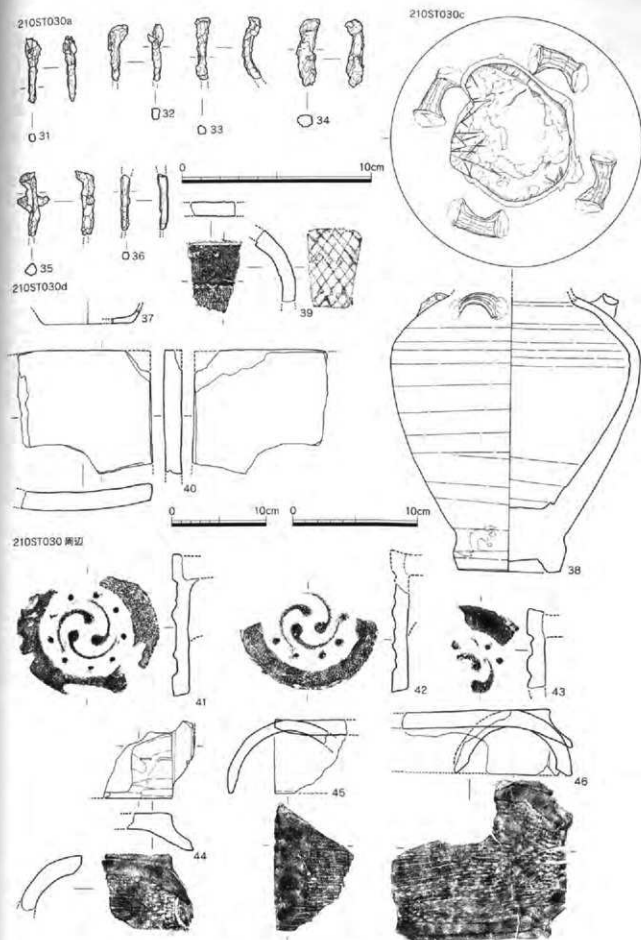


Fig.72 第210次調査発掘出土遺物実測図その2 (1/2、1/3、1/4)

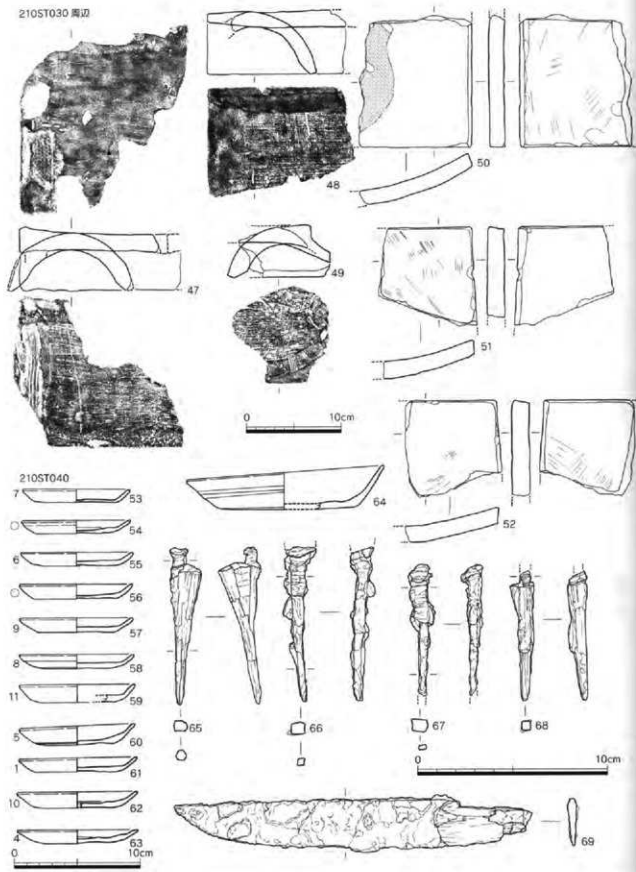


Fig.73 第210次調査草出土遺物実測図その3 (1/2, 1/3, 1/4)

横 0.4 ~ 0.8 cm, 厚さ 0.7 cm。頭部はつぶれて、先端を欠く。34 は縦 3.4+ cm, 横 0.8 cm, 厚さ 0.7 cm, 31 と同一個体の可能性がある。35 は縦 3.4+ cm, 横 0.4 ~ 1.3 cm, 厚さ 0.9 cm, 先端を欠く。頭部は折れ曲がっている。中位には横方向の残存部が吸着している。36 は縦 2.9+ cm, 横 0.4 cm, 厚さ 0.5 cm。頭部を欠く。

210ST030d 出土遺物 (Fig.72)

土師器

小皿 a (37) 底部破片。器高 1.05+ cm, 復元底径 6.8 cm。色調は灰黄色。底部回転糸切り。

白磁

四耳壺 (38) 器高 21.8+ cm, 胴部最大径 19.8 cm, 高台径 8.1 cm。口縁部頭部は打ち欠いている。内部には火葬骨が詰まっており、蔵骨器として転用して使われていた。

瓦類

平瓦 (39, 40) 39 は側端部の破片。縦 5.8 cm, 横 7.6 cm, 厚さ 1.9 cm。焼成は良好。還元炎焼成。凹面は布目痕跡。凸面は格子目印。側端部はヘラで分割線を入れたあとに、削っており、未調整。40 は広端部の破片。縦 13.1 cm, 横 15.5 cm, 厚さ 2.0 cm。焼成は良好。須恵質。色調は淡青灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を大量に含む。側端部、広端部ともにヘラ切り調整。凹面凸面ともに仕上げは磨具を使ったナデ調整を施す。

210ST030 周辺出土遺物 (Fig.72, 73)

瓦類

軒丸瓦 (41 ~ 43) 41 ~ 43 は、巴紋。三つ巴でそれぞれ左巴である。41 は瓦頭径 15.0 cm, 厚さ 1.85 cm。焼成はやや良好。瓦質。42 は瓦頭径 11.5+ cm, 厚さ 1.8 cm。珠文は 9 つ。焼成はやや良好。瓦質。43 は瓦頭径 8.4 cm, 厚さ 2.0 cm。焼成はやや良好。瓦質。

丸瓦 (44 ~ 49) 44 は玉縁部をもつ破片。長さ 9.7+ cm, 高さ 6.3+ cm, 厚さ 2.7 cm。焼成はやや良好。焼し状態になっており瓦質。色調は淡暗黒灰色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を少量含む。凸面調整は器具をつかったナデ調整。凹面は布目痕が残り、端部はヘラ切り後にヘラ調整をしている。45 は広端部の破片。長さ 7.8+ cm, 幅 10.75 cm, 厚さ 1.7 cm。凹面には布目痕が残り、端部をヘラ切り後にヘラで調整している。凹面広端部には 3.5cm ほどの幅でヘラ調整を施している。46 は玉縁部をもつ破片。長さ 9.7+ cm, 高さ 6.3+ cm, 厚さ 2.7 cm。焼成は良好。焼し状態になっており瓦質。色調は暗黒灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。凸面調整は器具をつかったナデ調整。凹面は布目痕が残り、端部はヘラ切り後にヘラ調整をしている。長さ 18.3 cm, 高さ 7.0 cm, 厚さ 1.7 cm。47 は長さ 18.1 cm, 高さ 6.7 cm, 厚さ 1.8 cm。48 は長さ 14.7+ cm, 高さ 6.7 cm, 厚さ 1.7 cm。49 は長さ 9.7+ cm, 高さ 5.5 cm, 厚さ 1.9 cm。

平瓦 (50, 51, 52) 50 は縦 14.1+ cm, 横 12.0 cm, 厚さ 1.7 cm。51 は縦 10.5+ cm, 横 10.4+ cm, 厚さ 1.9 cm。52 は縦 10.3+ cm, 横 10.2+ cm, 厚さ 1.9 cm。

210ST040 出土遺物 (Fig. 73)

土師器

小皿 a1 (53 ~ 63) 53 は復元口径 8.5 cm, 器高 1.05 cm, 底径 5.3 cm。54 は口径 8.65 cm, 器高 1.05 cm, 底径 6.0 cm。色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。55 は口径 8.9 cm, 器高 1.1 cm, 底径 5.6 cm。色調は黄灰色。内面見込みに一定方向のナデ調整を施す。底部糸切り後、板状圧痕。56 は復元口径 9.0 cm, 器高 1.15 cm, 底径 6.6 cm。色調は黄灰色。底部糸切り。57 は復元口径 9.0 cm, 器高 1.15 cm, 底径 6.0 cm。58 は復元口径 9.1 cm, 器高 1.15 cm, 底径 5.0 cm。色調は黄灰色。底部糸

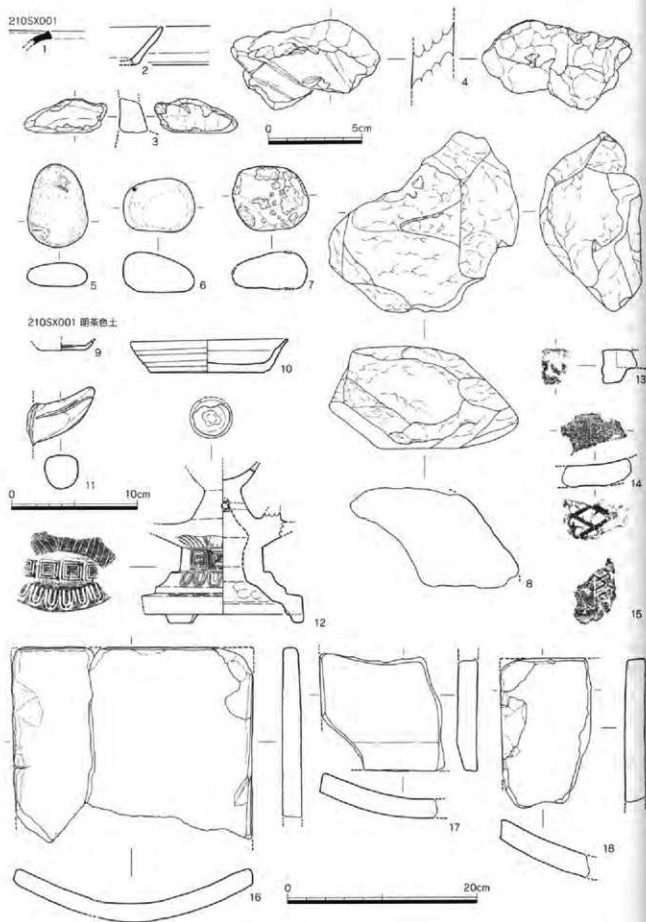


Fig.74 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その1 (1/2, 1/3, 1/4)

切り後、板状圧痕。59は復元口径9.1cm、器高1.45cm、復元底径6.0cm、色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。60は口径9.2cm、器高1.5cm、底径6.1cm、色調は黄灰色。見込み部には不定方向のナダ調整。底部糸切り後、板状圧痕。61は口径9.4cm、器高1.15cm、底径6.5cm、色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。62は復元口径9.6cm、器高1.3cm、復元底径5.3cm、色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。63は復元口径9.6cm、器高1.1cm、底径5.5cm、色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。XIV期前後か。

杯a (64) 口径15.6cm、器高2.95cm、底径11.1cm。焼成はやや良好。色調は褐茶色。胎土は2mm以下の白色粒子を少量含む。内外面、回転ナダ調整。底部切り離し技法はヘラ切り。XIV期。

金属製品

釘 (65~68) 65から68はすべて鉄製の角釘である。65は縦8.4cm、横1.7cm、厚さ2.3cm。木質が釘全体に付着している。木目は縦方向。釘の頭部は折れ曲がっている。66は縦8.2+cm、横1.8cm、厚さ1.3cm。頭部は広がっており、先端はわずかに欠く。釘の頭部に近い部位には木質が確認でき横方向である。67は縦7.0+cm、横1.3cm、厚さ1.2cm。先端をわずかに欠く。頭部近くに付着している木質は横方向の木目が確認できる。68は縦6.9+cm、横1.2cm、厚さ1.1cm。頭部と先端を欠く。木質が全面に吸着しており、木目は縦方向に確認できる。

刀子 (69) 全長18.9cm、刃部長15.1cm、刃部最大幅2.8cm、厚さ0.6cm。枝の部分に木質が残存している。

その他の遺構出土遺物

210SX001 出土遺物 (Fig. 74)

須恵器

小壺 (1) 口縁部の破片。器高1.1+cm。

土師器

杯a (2) 器高3.1+cm。色調は淡灰黄色。器壁が風化して調整は不明。

石製品

滑石製石鏝 (3, 4) 3は器高1.8+cm、4は器高4.8+cm。2点とも滑石製石鏝の破片である。積極的な転用の跡は見られない。

玉石 (5~7) 5~7、すべて表面は滑らかである。5は縦4.4cm、横3.2cm、厚さ1.25cm。6は縦2.8cm、横3.8cm、厚さ2.1cm、7は縦3.4cm、横4.0cm、厚さ2.0cm。

五輪塔

火輪 (8) 火輪の破片。縦19.2+cm、横20.0+cm、厚さ10.8+cm。阿蘇凝灰岩製。

210SX001 明茶色土出土遺物 (Fig. 74, 75, Pl.4-2)

土師器

小皿a1 (9) 器高0.7+cm、底径3.4cm。焼成は不良。色調は茶灰色。

杯a (10) 口径12.5cm、器高2.55cm、底径8.8cm。底部切り離しは回転糸切り、その後板状圧痕。XVII~XVIII期。

須恵器

取手 (11) 縦4.2+cm、横5.3+cm、厚さ2.7cm。焼成は良好。還元炎焼成。色調は青灰色。胎土は1mm以下の白色粒子が極少量含まれる。取手の下部に3本の線刻が入る。

土師器

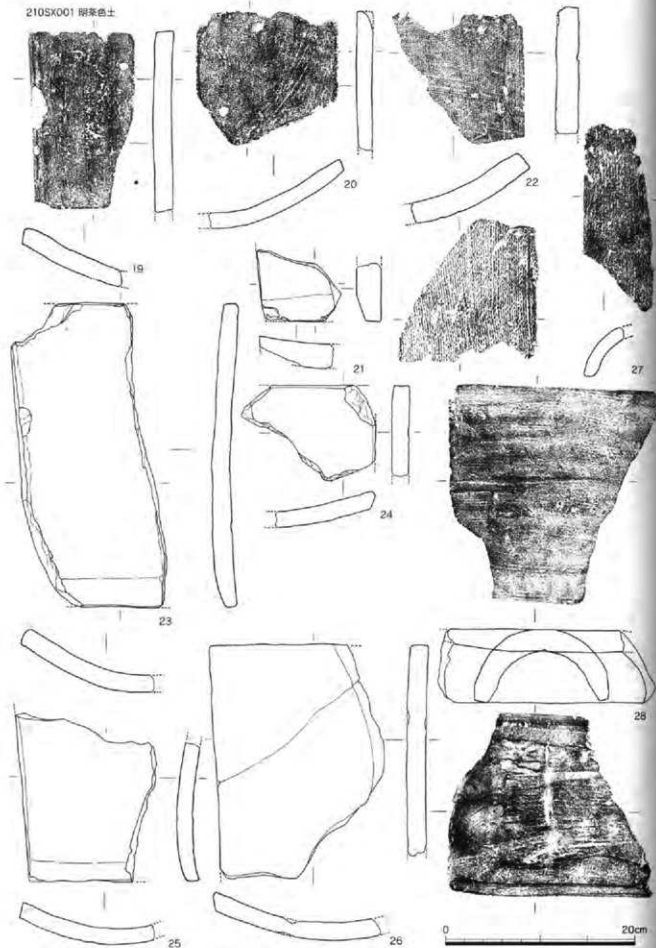


Fig.75 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その2 (1/4)

乗筒 (12) 器高 12.2+cm、復元底部径 12.5cm。焼成は良好だが、器壁には中央に黒色変化してサンドイッチ状に焼き上がっている。色調は明灰黄色。胎土は2mm以下の白色粒子をごく少量含む。高台は台形をしたものが2つ残存しており、欠損部との位置関係を考えて本来は3脚と考えている。円形の台座の上面にスタンプによる波文様が認められる。その上には簡略化した蓮華紋をスタンプしている。体部は円柱状をしており、そこにも方形が連なるスタンプを押す。体部上位に軒のように張り出し部があり、張り出し部の下部に、線刻による蓮華紋を施す。張り出し部は欠損しているため形は推定と考えないが、横方向と上方向にのびるものと考えられる。上にのびている部位は、ぐるりと円形に回ると考えられる。張り出し部の上部中央には、小さい機状のものに円錐形の脚が付いており、器台に似ている。その脚部には直径5mmの穿孔が貫通して対角線上に2つ開けられている。特殊な形をしており、仏具関係と考えられる。

瓦類

軒平瓦 (13) 軒部破片。縦4.3+cm、横4.0cm、厚さ1.9cm。焼成はやや良好。色調は黄灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を少量含む。

平瓦 (14~26) 14は破片。縦6.1+cm、横7.9+cm、厚さ2.3cm。焼成は良好。色調は暗灰色。凹面に格子印。凸面には布目痕。15は破片。縦8.3+cm、横4.7+cm、厚さ2.5cm。焼成はやや良好。色調は淡赤黄色。凹面に格子印。16は広端部の破片。縦20.7+cm、横25.6+cm、厚さ2.0cm。焼成はやや不良。色調は灰黄色。胎土は3mm以下の白色粒子を多量に含む。器壁が風化しており調整は不明。側端部はへら切り。17は扶端部の破片。縦12.4+cm、横13.3+cm、厚さ2.1cm。焼成は良好。色調は淡黄灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を少量含む。凹面凸面ともにナテ調整。側端部はへら切り。凹面扶端部には幅2.8cm程度の範囲を帯状にへら調整をしている。18は広端部の破片。縦15.8+cm、横10.8+cm、厚さ2.3cm。焼成は良好。色調は暗灰色。胎土は2mm以下の白色粒子を少量含む。端部はへら切り。19は広端部破片。縦19.3+cm、横10.9+cm、厚さ1.9cm。20は広端部破片。縦14.7+cm、横14.2+cm、厚さ1.7cm。19と20は接合して1つの破片となる。同じ破片として詳細を記載する。焼成はやや良好。色調は黄灰色。胎土は5mm以下の白色粒子を少量含む。凹面凸面ともにナテ調整。側端部はへらで垂直に切り落とし。21は扶端部破片。縦7.6+cm、横8.8+cm、厚さ2.6cm。焼成は良好。色調は灰黄褐色。胎土は3mm以下の白色粒子を少量含む。側端部はへら切り。凹面はナテ調整。凸面は表面剥離のため不明。扶端面凹面には幅3cmほどの帯状へら削り調整を扶端面端部に向かって斜めに行っている。22は端部の2方向が確認できる破片。縦15.5+cm、横13.5+cm、厚さ2.4cm。焼成は良好。やや須臾質。色調、灰白色~暗灰色。4mm以下の白色粒子を少量含む。1mm程度の黒色粒子を多く含む。凹面布目痕、凸面は欄目。端部切り落としはへらで内側に向かって切られている。端部の凹面側はへらケズリ調整を施している。23は端部3方向が確認できる破片。縦32.2cm、横16.4+cm、厚さ1.9cm。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は7mm以下の白色粒子を多く含む。狭端部凹面に2.2cm程度の帯状の削りを扶端面端部に向かっておこなう。24は端部2方向確認できる破片。縦10.1+cm、横14.1+cm、厚さ1.8cm。焼成はやや良好。色調は黄灰色。3mm以下の白色粒子を多量に含む。1mm程度の金色雲母をごく少量含む。側端部はへら切り。推定広端部はへら削り調整。25は端部の2方向が確認できる破片。縦17.7+cm、横15.0+cm、厚さ1.7cm。焼成は良好。須臾質。色調は灰青色。胎土は5mm以下の白色粒子を大量に含む。凹面凸面ともにナテ調整。扶端面凹面には幅2.5cmほどの帯状へら削り調整を扶端面端部に向かって斜めに行っている。全体的に歪んでいる。26は2方向の端部が確認できる破片。縦24.8+cm、横18.5+cm、厚さ1.9cm。焼成はやや不良。色調は明黄灰色。胎土は6mm以下の白色粒子を多量に含む。表面が風化しており調整は

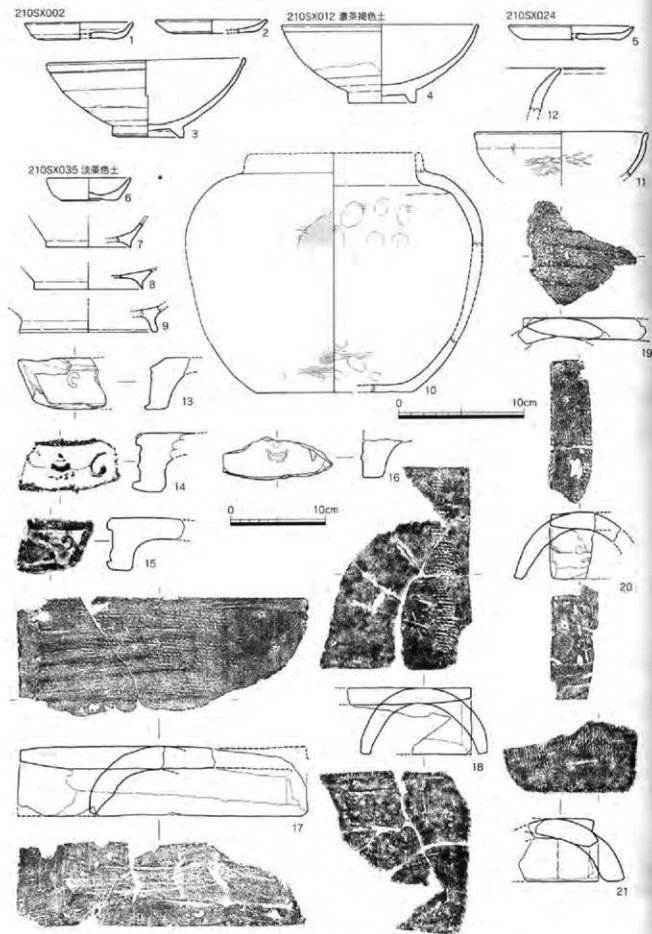


Fig.76 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その3 (1/3, 1/4)

不明。

丸瓦 (27, 28) 27は側縁部が1方向確認できる破片。縦19.5+cm、横4.2+cm、厚さ1.4cm。焼成はやや不良。瓦質。断面の色調が焼成不良のためサンドイッチ状に黄色に挟まれた黒色部が存在している。色調は暗黒灰色～黄灰色。胎土は、4mm以下の白色粒子を多量に含む。凹面の調整は摩耗により不明。凸面は縄目印き。28は側縁部と広端部が確認できる破片。縦23.2+cm、横14.2+cm、厚さ2.3cm。焼成は良好。還元炎焼成でよく焼き締まっている。須恵質。色調は、明青灰色。胎土は5mm程度の白色粒子を少量含む。凹面には布筒と模骨痕跡が確認できる。側縁部と広端部はヘラ切りしたあとにヘラで調整をしている。凸面は縄目印きの後、工具をつかったナデ調整が行われている。

210SX002 出土遺物 (Fig.76)

土師器

小皿a1 (1, 2) 1は復元口径8.6cm、器高1.4cm、復元底径6.8cm。2は復元口径8.9cm、器高1.1cm、底径7.0cm。

白磁

椀 (3) 口径15.8cm、器高6.1cm、高台径5.8cm、IV-2a類。

210SX012 濃茶褐色土出土遺物 (Fig.76)

白磁

椀 (4) 口径15.5cm、器高6.2cm、高台径5.4cm、II類。

210SX024 出土遺物 (Fig.76)

土師器

小皿a1 (5) 復元口径9.9cm、器高1.1cm、復元底径7.5cm。

210SX035 淡茶色土出土遺物 (Fig.76 ~ 86)

土師器

小皿b (6) 復元口径6.7cm、器高1.8cm、底径4.4cm。

椀c (7) 器高1.85+cm、復元高台径6.7cm。

椀 (8, 9) 8は器高1.6+cm、復元底径8.6cm。9は器高2.1+cm、復元底径11.0cm。

甕 (10) 推定器高10.8+cm、復元底径12.2cm。

黒色土器 (B類)

椀 (11) 復元口径13.8cm、器高3.6+cm。

瓦質土器

甕 (12) 器高3.5+cm。口縁部破片。口縁部は外反している。焼成は不良。胎土は0.5～0.3mmの白色粒子を多く含む。内外面の調整は、器壁の摩耗により不明瞭。

瓦類

軒平瓦 (13 ~ 16) 13は縦5.5+cm、横9.4+cm、厚さ3.0cm。14は縦6.2cm、横10.1cm、厚さ2.8cm。15は縦6.0cm、7.8+cm、厚さ2.5cm。16は縦4.5cm、横11.5cm、厚さ2.5cm。

丸瓦 (17 ~ 24) 17は玉縁部を欠損するが、わずかに凸面狭端縁連結面が残る。広端面と側面が残っている破片。凸面は布目の印き痕跡が残るが、長軸に対して平行な強いナデ調整を施す。広端面、狭端面に近い箇所は横方向のヘラ削りを施す。凹面には布目痕跡が残存し、吊り紐痕も確認できる。端部はヘラ削りにより調整している。色調は灰白色。焼成はやや良好で、須恵質。胎土は3mm程度の白色粒子を多く含む。1cmほどの長石縦30.6cm、横8.6+cm、厚さ2.4cm。18は長さ13.15+cm、幅13.4cm、厚さ1.65cm。19は縦13.0+cm、横10.5+cm、厚さ2.1cm。20は広端面と側面の2面が

残る破片。縦4.7cm、横11.3cm、厚さ1.8cm。調整は、17と同じで端面を丁寧にヘラ削り調整をしている。側面から広端面に接するコーナーは他の半分程度の厚みに削って調整している。焼成はやや良好で、還元炎焼成。色調は淡赤灰色。21は長さ6.5cm、幅10.0+cm、厚さ2.2cm。22はほぼ完形。縦36.3cm、横14.5cm、厚さ2.1cm。焼成は良好。色調は黄灰色～灰青色。胎土は7mm以下の白色粒子を大量に含む。凹面には布目痕が残り、3箇所ほど吊り紐痕跡も確認できる。端部はすべてヘラ切り後はヘラ削り調整を行っている。また凹面の側端部側は2～2.5cmの幅でヘラ削りによって形を整えている。また凹面の広端部は端部から5cmほどの範囲をヘラで削りとり薄く仕上げている。凸面は細目明きの後に、器具をつかったナデ調整を長軸方向にそろえて施すことでナデ消している。23は一部を欠くがほぼ完形。全体的に22と同じ成形・調整である。縦35.9cm、横14.5cm、厚さ2.4cm。焼成は良好。22に比べると還元炎焼成。色調は明灰青色～暗青色。24は玉縁部をもつ丸瓦。22と同様の成形・調整である。縦36.9cm、横7.4cm、厚さ2.3cm。焼成はやや良好。色調は灰黄色。胎土は6mm以下の白色粒子を大量に含む。

平瓦(25～75) 25はほぼ完形。縦34.2cm、横23.8cm、厚さ1.9cm。焼成はやや良好。色調は淡赤褐色～暗灰色。胎土は5mm以下の白色粒子を大量に含む。側端部はヘラ切り。凹面狭端部は1.2cmの帯状にヘラ調整を行っている。表面は風化が進んでいるが、残存部から判断するとナデ調整を施している。26は端部が2方向確認できる破片。縦7.8+cm、横8.1+cm、厚さ2.2cm。焼成は不良。色調は灰白色。胎土は2mm以下の白色粒子を大量に含む。表面が風化して調整は不明。27は広端部破片。縦11.2+cm、横10.0+cm、厚さ1.8cm。焼成は良好。色調は淡赤青色。胎土は4mm以下の白色粒子を大量に含む。端部はヘラ切り。凹面凸面ともにナデ調整。28は狭端部の破片。縦12.7+cm、横9.7+cm、厚さ2.3cm。焼成は良好。色調は淡赤灰色。胎土は5mm以下の白色粒子を大量に含む。側端部はヘラ切り。凹面狭端部に幅1.5cmのヘラ調整を行う。29は端部が3方向確認できる破片。縦28.7+cm、横24.7+cm、厚さ2.5cm。焼成はやや良好。色調は暗黒灰色～灰黄色。狭端部側がややいぶし気味に暗黒灰色を呈す。胎土は5mm以下の白色粒子を多量に含む。側縁部は垂直に切り落とされており、ヘラ削り調整を行っている。調整はナデ調整。30は1方向の側縁部が確認できる破片。縦9.0+cm、横7.9cm、厚さ1.8cm。焼成はやや不良。色調は灰黄色。胎土は3mm以下の白色粒子を多量に含む。表面の摩擦のため調整は不明。側縁部は垂直に切り落とされ、調整はヘラで行われている。31は端部3方向確認できる破片である。縦30.5cm、横24.5+cm、厚さ2.2cm。焼成はやや不良。表面に重ね焼きの痕跡か、暗灰色の箇所と明赤茶色の箇所が存在している。暗灰色の箇所は焼き締まっているので、明赤茶色部分が重ねられた箇所か。色調は暗灰色～明赤茶色。胎土は10mm以下の白色粒子を多量に含む。調整はナデ調整。側縁調整はヘラ削り調整。狭端面凹面には幅2cmほどの帯状ヘラ調整を狭端面端部に向かって斜めに行っている。32は狭端面近くの破片。縦14.5+cm、横9.7+cm、厚さ1.8cm。焼成はやや不良。色調は灰黄色。胎土は5mm以下の白色粒子を多量に含む。表面の調整はナデ調整。凹面狭端部には、1.3～1.8mmの幅でヘラ調整が帯状に行われている。33は端部が2方向確認できる破片。縦16.3+cm、横16.7+cm、厚さ2.4cm。焼成はやや不良。瓦質。胎土は3mm以下の白色粒子を少量含む。摩擦のため調整は不明。側縁部は垂直に切り落とされている。34は欠けてはいるが、全体の寸法が復元できる個体である。縦34.1cm、横24.1cm、厚さ1.8cm。焼成は良好。やや還元炎焼成。胎土は1～7mm程度の白色粒子を多量に含む。側縁部は垂直に切り落とされている。側縁調整はヘラ削り調整。狭端面凹面には幅2.5cmほどの帯状に、狭端面端部に向かって斜めにヘラ調整を行っている。35は2方向確認できる破片。焼成は良好。やや還元炎焼成。胎土は3～10mm程度の白色粒子を多量に含む。色調は淡黄灰色。凹面凸面ともに一定方向のナデ調整を施されている。広端面凹面

210SX035 淡茶色土

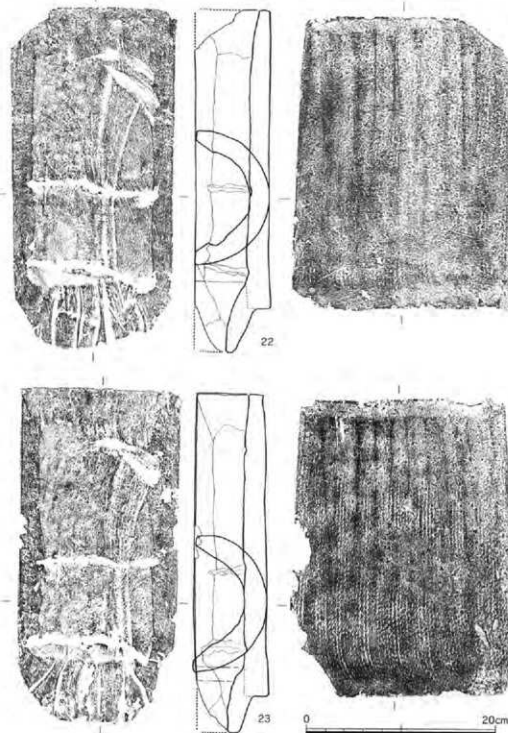


Fig.77 第210次調査その他の遺構出土物実測図その4 (1/4)

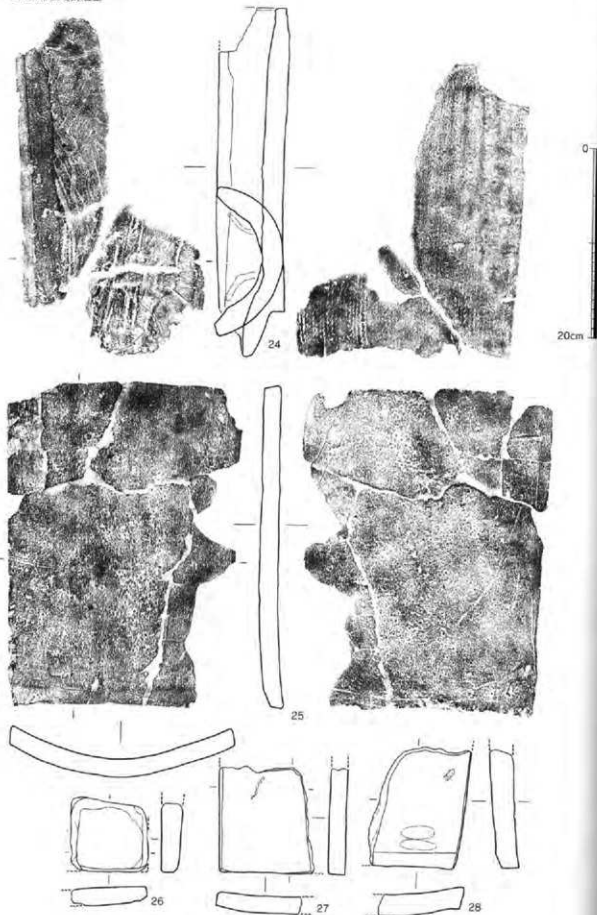


Fig.78 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その5 (1/4)

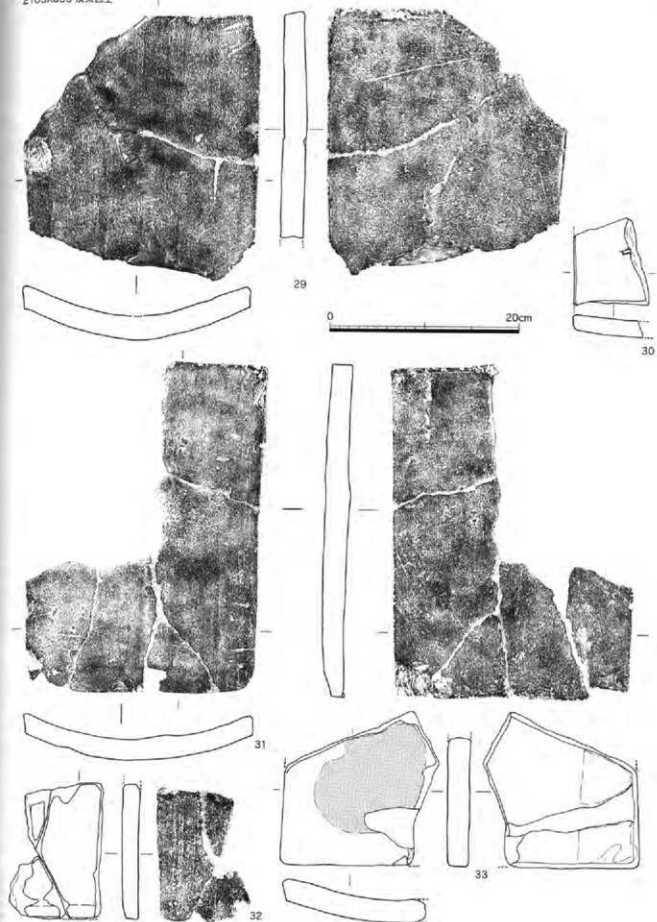


Fig.79 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その6 (1/4)

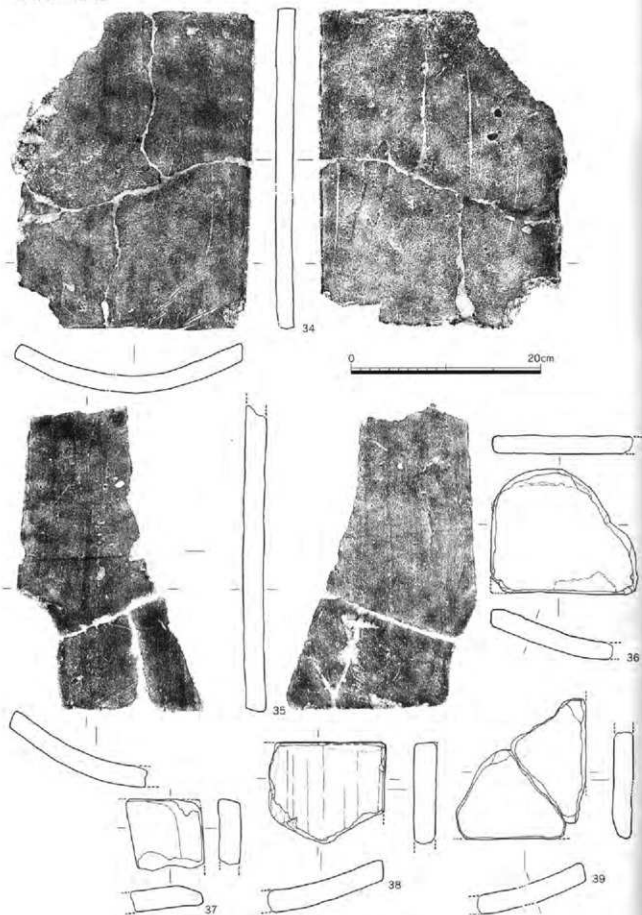


Fig.80 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その7 (1/4)

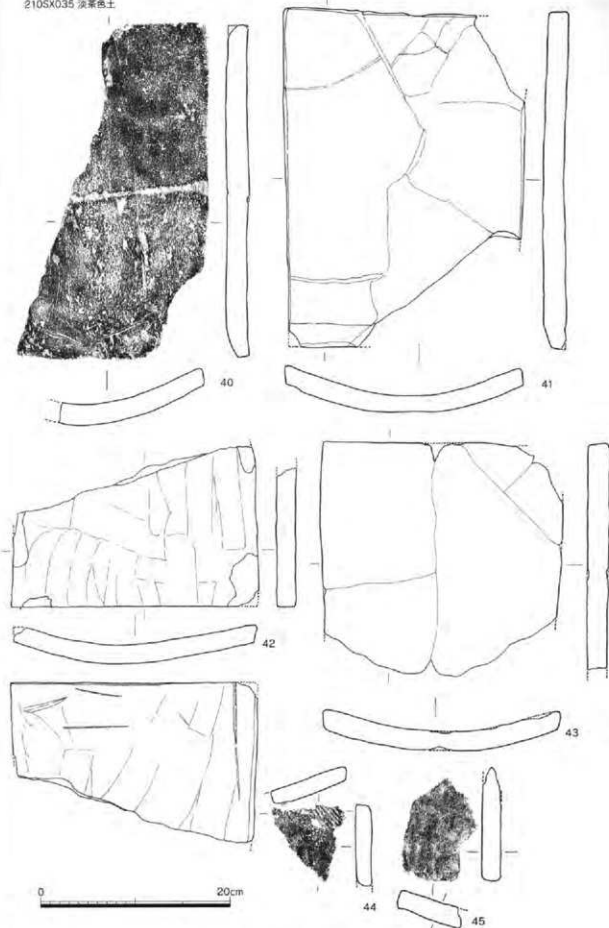


Fig.81 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その8 (1/4)

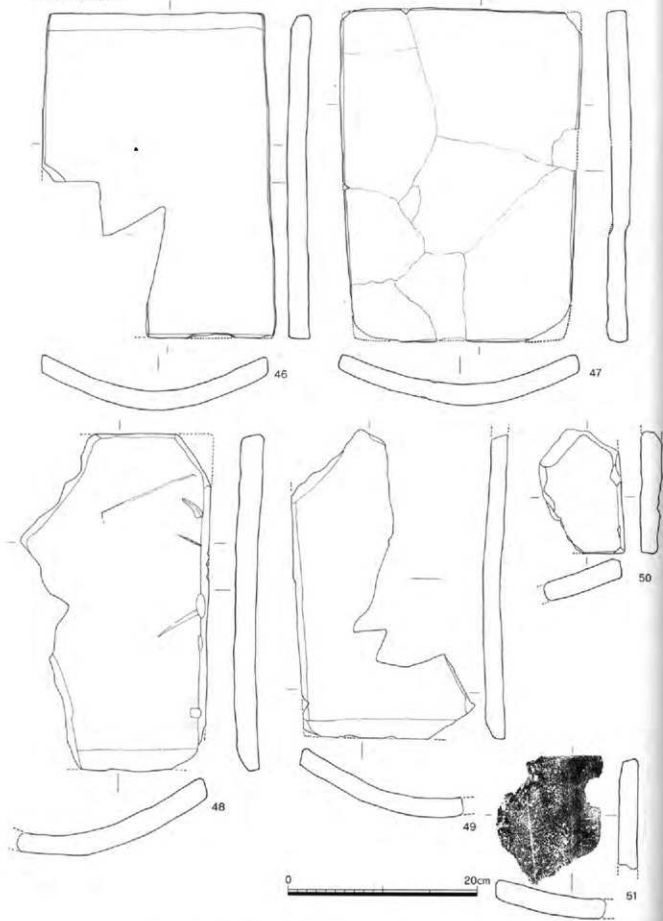


Fig.82 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その9 (1/4)

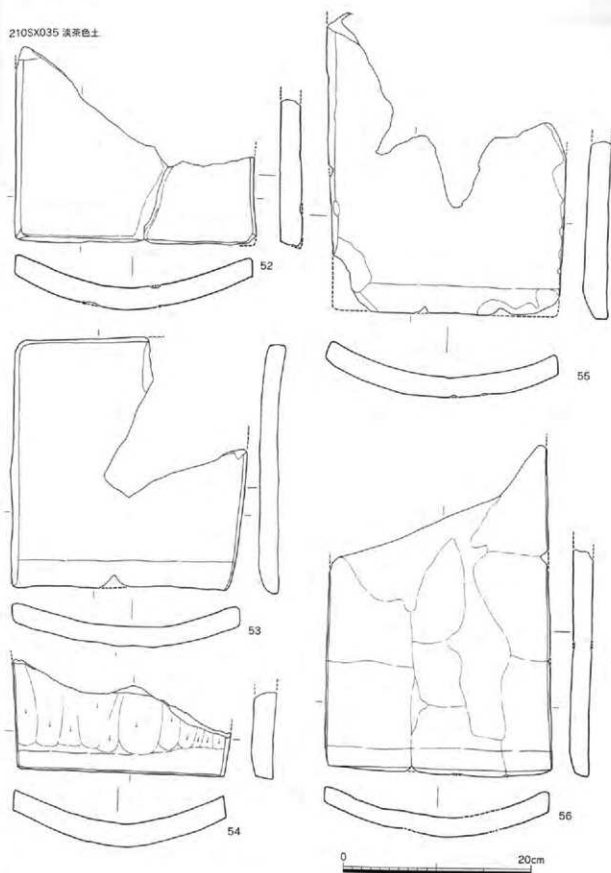


Fig.83 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その10 (1/4)

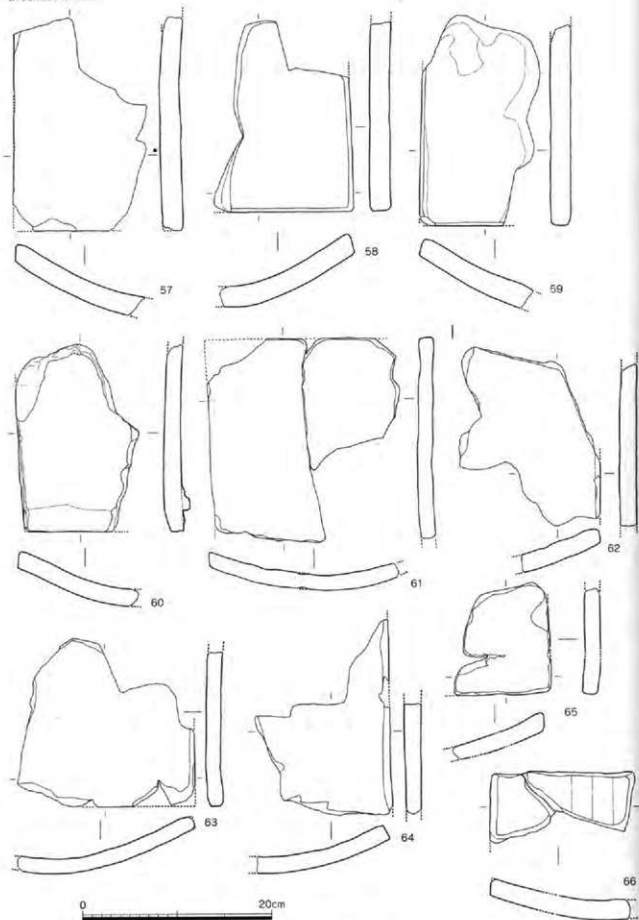


Fig.84 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その11 (1/4)

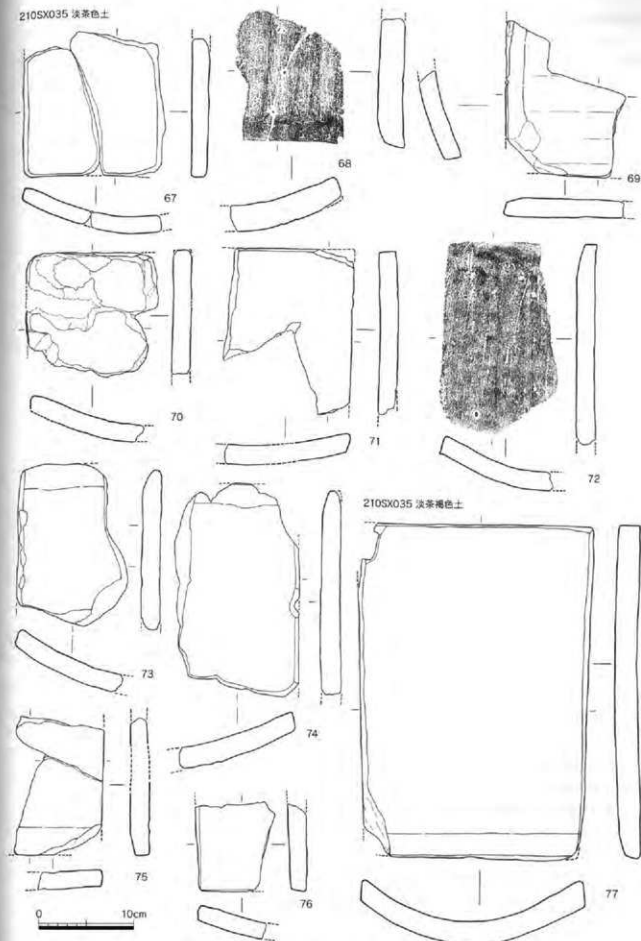


Fig.85 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その12 (1/4)

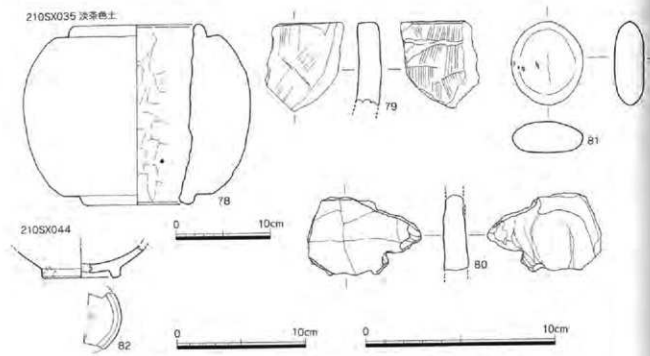


Fig.86 第210次調査その他の遺構出土実測図その13 (1/2, 1/3, 1/4)

側におわずかたが、粘土切り難しのため糸で引いた痕跡が認められる。側縁部は垂直に切り落とされている。側縁調整はヘラ削り調整。縦32.4cm、横11.5+cm、厚さ2.1cm。36は端部2方向が確認できる破片。縦15.7cm、横13.2+cm、厚さ2.0cm。焼成は不良。1~5mm程度の白色粒子を多量に含む。色調は明黄灰色。凹面の調整はナテ調整。凸面の表面の剝離により調整は不明。37は端部の2方向が確認できる破片。縦7.6+cm、横8.1+cm、厚さ2.35cm。焼成は不良。色調は灰黄色。器壁の摩耗で調整は不明瞭。凹面に2.5cmほど斜めにヘラ調整を行っているため、こちら側が挟端部だと理解できる。端部は垂直に切り落とし、ヘラ削り調整を行っている。38は端部2方向が確認できる破片。縦10.7+cm、横12.4+cm、厚さ2.3cm。焼成は不良。1~5mm程度の白色粒子を多量に含む。色調は明黄灰色。端部の一部は明灰色。凹面の調整は一定方向のナテ調整。凸面は表面の剝離により調整は不明。側縁部は垂直に切り落とされている。側縁調整は直線的にヘラ削り調整。39は端部の2方向が確認できる破片。縦14.7+cm、横13.7+cm、厚さ2.1cm。焼成は不良。器壁は摩滅して調整は不明。40は端部が3方向確認できる破片。縦35.2+cm、横20.2+cm、厚さ2.15cm。焼成はやや不良。瓦質。色調は暗灰色。胎土は5mm以下の白色粒子を多く含む。調整はナテ調整。側縁部は直線的にヘラ削りしている。41は4方向の端部がわかる破片。縦35.8cm、横25.2cm、厚さ2.0cm。焼成はやや不良。色調は淡茶灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を少量含む。凹面挟端部に幅2.0cmほどのヘラ調整が帯状に施される端部はヘラ削り調整。42はおそらく広端部破片。縦16.95+cm、横26.1+cm、厚さ2.0cm。焼成は良好。やや還元炎焼成。色調は、赤灰色~薄青灰色。胎土は1mm~7mmまでの白色粒子を多量に含む。表面調整はナテ調整。側縁部はヘラ削り落とし後、端部を少し丸く調整している。広端部はヘラ削り調整。43は端部が3方向確認できる破片。縦24.4+cm、横25.5cm、厚さ2.1cm。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は4mm以下の白色粒子を多量に含む。端部はヘラ削り。器壁の調整は表面の風化により判別がきかない。44は端部が2方向確認できる破片。縦12.0+cm、横8.7+cm、厚さ2.2cm。焼成はやや不良。色調は黄

灰色。摩耗のため調整は不明。端部はヘラ削りの可能性が高い。44は端部が2方向確認できる破片。縦8.8+cm、横8.1+cm、厚さ2.1cm。焼成はやや良好。色調は灰黄色。やや暗灰色を呈す箇所あり。胎土は10mm以下の白色粒子を大量に含む。側縁部はヘラ削り。45は縦8.3+cm、横8.0+cm、厚さ1.7cm。46は一部が欠損するが復元するとはぼ元の寸法がわかる個体である。縦34.4cm、横24.8+cm、厚さ2.0cm。焼成はやや不良。色調は灰白色~淡茶灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を多量に含む。側縁部・挟端部ともにヘラ削り調整。凹面挟端部には帯状に幅2.0cmのヘラ調整が行われている。凹面凸面ともに器壁の風化が激しく調整は不明瞭。47はほぼ完形の個体である。縦35.2cm、横25.4cm、厚さ2.2cm。焼成はやや不良。色調は黄灰色~淡紅灰色。胎土は4mm以下の白色粒子を多量に含む。凹面凸面ともに器壁の風化が激しく、調整は不明。挟端部にも帯状のヘラ調整が行われているように見えるが不明瞭である。48は挟端部と広端部と側端部が確認できる破片である。縦35.7+cm、横20.2cm、厚さ2.4cm。焼成はやや不良。断面では不完全な状態でサンドイッチ状態に内部が壊れている。色調は褐灰色。端部はヘラ削り落とし、凹面挟端部には幅2cmほどの帯状ヘラ調整が施される。表面が風化しており調整が不明瞭。49は挟端部と側端部が確認できる破片。縦32.6+cm、横19.8cm、厚さ1.9cm。焼成はやや不良。色調は暗灰色。端部はヘラ削り落とし、凹面挟端部には幅1.6cmほどの帯状ヘラ調整が施される。表面が風化しており調整が不明瞭。50は端部の2方向が確認できる破片。縦13.2+cm、横9.1+cm、厚さ2.2cm。焼成はやや不良。色調は黄灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を大量に含む。端部はヘラ削り。調整は表面が風化しており不明。51は挟端部の破片。縦11.8+cm、横11.7cm、厚さ2.2cm。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は7mm以下の白色粒子を大量に含む。全体的に表面が風化しており調整が不明瞭。凹面の挟端部には幅2.0cmで帯状にヘラ調整を行っている。52は広端部と側縁部2方向が確認できる破片。縦20.8cm、横25.3+cm、厚さ2.4cm。焼成はやや良好。色調は淡赤灰色。胎土は5mm以下の白色粒子を少量含む。凹面凸面ともに器具をつかったナテ調整。側縁部・広端部はヘラ削り。53は一部が欠けが復元できる個体である。縦26.8+cm、横25.0+cm、厚さ2.3cm。焼成はやや不良。色調は淡茶灰色~黄灰色。胎土は2mm以下の白色粒子を大量に含む。端部はヘラ削り。凹面挟端部に2.7cmの幅でヘラ調整を施している。ほかの平玉より長さが短い。54は挟端部と側端部の破片。縦11.6+cm、横23.5+cm、厚さ2.4cm。焼成は良好。須臾質。色調は灰青色。胎土は2mm以下の白色粒子を大量に含む。端部はヘラ削り。凹面挟端部には2.5~2.8cm幅のヘラ調整が施されている。凹面凸面ともに器具をつかったナテ調整を施している。55は挟端部と側縁部2方向が確認できる破片。縦31.6+cm、横30.7+cm、厚さ2.5cm。焼成はやや不良。色調は灰白色。胎土は4mm以下の白色粒子を多量に含む。凹面挟端部は幅3.0cm程度の帯状にヘラ調整している。凹面凸面ともにナテ調整か。56は挟端部と側端部の破片。縦34.8cm、横24.0cm、厚さ2.1cm。焼成は不良。色調は淡灰色~褐灰色。胎土は2mm以下の白色粒子を大量に含む。側縁部はヘラ削り。凹面挟端部には幅2cmほどのヘラ調整が施されている。57は端部が2方向確認できる破片。縦22.7+cm、横14.2+cm、厚さ2.2cm。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は5mm以下の白色粒子を大量に含む。摩耗のため調整痕跡は不明瞭だが、表面はナテ調整と思われる。凸面に器壁が生乾きの際へラで傷をつけたような線が2箇所見られる。長辺輪にむかって19cmほど延びている。58は端部の2方向確認できる破片。縦20.3+cm、横14.7+cm、厚さ2.3cm。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は4mm以下の白色粒子を多量に含む。表面が摩耗しており、調整は不明。側縁部はヘラ削り。59は端部が2方向確認できる破片。縦22.4+cm、横12.7+cm、厚さ2.2cm。焼成は不良。胎土は4mm以下の白色粒子を多量に含む。器壁は摩滅して調整は不明。側縁部はヘラ削りで調整されている。60は挟端部が確認できる破片。縦19.8+cm、横13.0+cm、厚さ1.8cm。焼成はやや良好。色調は淡灰色~薄赤灰

色。胎土は2mm以下の白色粒子を少量含む。調整はナデ調整。側縁部はヘラ切り調整。扶端部凹面側に、幅2.6cmほどの帯状に、端部に向かうヘラ調整を行っている。凹面扶端部近くに3.7cm～5.5cmの範囲に銅を含むスサのようなものが付着している。61は端部が2方向確認できる破片。縦21.7+cm、横19.6+cm、厚さ1.7cm。他の個体と比べて、厚みが薄い。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は1mm～12mmの白色粒子を多量に含む。摩耗のため調整は不明。62は縦19.1+cm、横14.9cm、厚さ1.9cm。63は縦17.8+cm、横18.75cm、厚さ1.6cm。64は縦20.6+cm、横14.6cm、厚さ1.8cm。65は縦11.9+cm、横10.3+cm、厚さ1.7cm。66は縦7.3+cm、横14.8+cm、厚さ2.2cm。67は端部の2方向が確認できる破片。縦15.3+cm、横15.0+cm、厚さ1.8cm。焼成はやや不良。色調は黄灰色。胎土は5mm以下の白色粒子を少量含む。表面の摩耗が激しくて表面の調整は不明。68は扶端部と側縁部の破片。縦14.7+cm、横12.3+cm、厚さ2.7cm。焼成は良好。色調は明黄灰色～白灰色。胎土は4mm以下の白色粒子を少量含む。側縁部はヘラ切り。凹面は一定方向の器具をつかったナデ調整。凹面扶端部には2.5cmの帯状の幅でヘラ調整を施す。69は扶端部と側縁部の破片。縦12.7+cm、横16.7+cm、厚さ1.9cm。焼成はやや不良。色調は灰白色。胎土は4mm以下の白色粒子を多く含む。凹面扶端部には、2cmの幅で帯状にヘラ調整を行っている。側縁部はヘラ切りか。表面が風化しており調整は不明瞭。70は端部が2方向確認できる破片。縦13.2+cm、横14.0+cm、厚さ1.9cm。焼成は不良。色調は淡赤灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を少量含む。側縁部はヘラ切りか。表面の調整は風化により不明。71は端部が2方向確認できる破片。縦17.5+cm、横13.6+cm、厚さ2.0cm。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を多少含む。側縁部はヘラ切り。凹面凸面の調整は表面の風化により不明。72は扶端部と側縁部の破片。縦21.1+cm、横12.05+cm、厚さ2.05cm。焼成は良好。互質。色調は明黒青色～灰白色。胎土は4mm以下の白色粒子を多く含む。側縁部はヘラ切り。凹面扶端部には幅3cmで帯状にヘラ調整を施している。凹面凸面ともにナデ調整。73は扶端部と側縁部の破片。縦17.2+cm、横11.9+cm、厚さ2.15cm。焼成はやや不良。色調は灰白色。胎土は3mm以下の白色粒子を多く含む。凹面扶端部には、2.5cmの幅で帯状にヘラナデを行っている。側縁部はヘラ切りか。表面が風化しており調整は不明瞭。74は扶端部と側縁部の破片。縦22.5+cm、横13.55+cm、厚さ2.2cm。焼成はやや不良。色調は黄灰色。胎土は5mm以下の白色粒子を大量に含む。側縁部はヘラ切り。凹面扶端部には2.5cmほどの帯状にヘラ調整を行う。凹面凸面ともに表面はナデ調整。75は扶端面近くの破片。縦14.7+cm、横9.4+cm、厚さ2.05cm。焼成はやや不良。色調は黄灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を少量含む。摩耗のため表面の調整は不明瞭だが、ナデ調整が。扶端面凹面には、幅2cmほどの帯状に端部に向かってヘラ調整を行っている。側縁部は三角状に2方向からヘラにより調整されている。

210SX035 淡茶褐色土出土遺物 (Fig.85)

瓦類

平瓦 (76、77) 76は端部が2方向確認できる破片。縦9.2+cm、横8.4+cm、厚さ1.9cm。焼成はやや不良。色調は明赤黄色。胎土は0.1～0.7mm程度の白色粒子を多量に含む。白色の雲母片を少量含む。摩耗のため調整は不明。側縁部はヘラ切りで切り落とされているが、垂直ではなくゆるい三角状に仕上げている。77はほぼ完形。縦35.8+cm、横24.8+cm、厚さ2.3cm。焼成は良好。やや還元炎焼成。胎土は3～5mm程度の白色粒子を多量に含む。色調は淡黄灰色。凹面凸面ともに一定方向のナデ調整を施されている。凸面の一部にナデ調整がされていない箇所を観察では、器具をつかったナデが縦方向に施されている。扶端面凹面には幅1.6～2.9cmほどの範囲を、扶端面端部に向かって斜めに帯状にヘラ調整を行っている。側縁部は垂直に切り落とされている。側縁調整はヘラ削り調整。

210SX035 淡茶色土出土遺物 (Fig.86)

石製品

五輪塔 (78) 水輪の破片。高さ19.1cm、復元最大径24.0cm、復元差し込み口径は、上方13.8cm、下方11.7cmを測る。阿蘇凝灰岩製。

滑石製石鐮 (79・80) 79は口縁部の破片。器高4.7+cm。内面は丁寧な削り調整で滑らか、外面はやや荒い削り調整。色調はやや赤色が混じる明灰色。転用材か。80は体部の破片。

不明製品 (81) 扁平石。縦4.4cm、横3.8cm、厚さ1.6cm。白い長石で表面が研磨されたかのように平滑である。

210SX044 出土遺物 (Fig.86)

国産陶器

甕 (82) 器高は2.5+cm、復元高台径6.2cm。高台外面に墨書がある。

210SX055 出土遺物 (Fig.87～91、Tab.5-1～6)

金属製品

銅銭 (1～100) それぞれの詳細なデータは、別表にそれぞれまとめている。たとえば、通貨の種類については、Tab.4-1に300枚の内訳を記載している。Tab.4-2では手前から(南から北へ)A列、B列、C列とわけて、それぞれの銭の種類と東方向からみた銭の裏表についてまとめている。Fig.87～91には銭の裏表の拓本を載せている。Tab.5-1では個々の銭についての測定値を表にしている。

さて、この銭が出土した穴の検出状況から考えると、この3層以外に銅銭が存在した可能性は否定できない。ただ、周辺からも全く銭は出土しておらず、現場の層からも銭が見つかっていないことから、ここは300枚の銅銭が3層の状態に出土したと理解している。他の出土例との比較(1)によっていろんなことが判ってくるが、現時点では判っている点について以下に箇条書きで記す。

特徴

- ・銭100枚を1つの単位として甕をつくっている。これにより丁百法が採用されていることがわかる。
- ・銅銭は東西方向にそろえて蓄えてあり、位置は乱れていない。
- ・銅銭の1つの単位内の銭についてのデータとしては、Tab.4-1～3にまとめているが、この表を元に分析すると、銅銭内で特定の銭を揃えたり、銭の裏表を揃えたりしている状態は確認できない。
- ・300枚の内、1枚しかでていないが、最新銭は原定元寶(初鑄1260年)である。
- ・Tab.4-1の分析によれば、銭總の割合で10%を超えて他の銭に対して、優位と判断されるものは、開元通寶、熙寧元寶、元豐通寶があげられる。

註

(1) この埋藏銭との比較対象としては大宰府志摩郡第83次調査出土例がある。出典は「奈勢83次埋藏銭一覽」『遺跡たより』第28号1994年 大宰府教育委員会文化課。

Tab.4-1 第210次調査 SX055 出土銭貨分類表

No.	銭貨名	国名	初鋳年	枚数	出土割合	No.	銭貨名	国名	初鋳年	枚数	出土割合
1	開元通寶	唐	621	31	10.33%	19	治平通寶	北宋	1064	1	0.33%
2	宋通元寶	北宋	960	1	0.33%	20	崇寧元寶	北宋	1068	35	11.67%
3	太平通寶	北宋	976	3	1.00%	21	元祐通寶	北宋	1078	46	15.33%
4	淳化元寶	北宋	990	2	0.67%	22	元祐通寶	北宋	1086	21	7.00%
5	至道元寶	北宋	995	5	1.67%	23	紹聖元寶	北宋	1094	8	2.67%
6	咸平元寶	北宋	998	6	2.00%	24	元祐通寶	北宋	1098	9	3.00%
7	景祐元寶	北宋	1004	7	2.33%	25	崇寧元寶	北宋	1101	13	4.33%
8	祥符元寶	北宋	1009	4	1.33%	26	大觀通寶	北宋	1107	3	1.00%
9	祥符通寶	北宋	1009	8	2.67%	27	政和通寶	北宋	1111	13	4.33%
10	天祐通寶	北宋	1017	4	1.33%	28	宣和通寶	北宋	1119	1	0.33%
11	天聖元寶	北宋	1023	14	4.67%	29	淳熙元寶	南宋	1174	4	1.33%
12	景祐元寶	北宋	1034	5	1.67%	30	嘉泰通寶	南宋	1201	1	0.33%
13	皇宋通寶	北宋	1038	29	9.67%	31	開禧通寶	南宋	1205	2	0.67%
14	至和元寶	北宋	1054	1	0.33%	32	嘉定通寶	南宋	1208	2	0.67%
15	至和通寶	北宋	1054	1	0.33%	33	紹定通寶	南宋	1228	1	0.33%
16	嘉祐元寶	北宋	1056	3	1.00%	34	景定元寶	南宋	1260	1	0.33%
17	嘉祐通寶	北宋	1056	6	2.00%	35	判読不能		7	2.33%	
18	治平元寶	北宋	1064	2	0.67%		合計枚数		300	100.00%	

Tab.4-2 第210次調査 SX055 出土銭貨分類表 (表の裏は裏から見た際のものである)

裏から	A	種類A	字体	背	種類B	字体	C	種類C	字体
1	裏	大観通寶	真	裏	開元通寶	去	去	元祐通寶	行
2	裏	政和通寶	分幣	去	去	去	去	元祐通寶	行
3	裏	景祐元寶	真	裏	元祐通寶	行	裏	元祐通寶	行
4	裏	皇宋通寶	篆	裏	皇宋通寶	篆	去	天聖元寶	真
5	裏	崇寧元寶	篆	裏	元祐通寶	行	裏	元祐通寶	行
6	裏	崇寧元寶	篆	裏	崇寧通寶	篆	去	聖宋元寶	真
7	裏	天聖元寶	篆書	去	祥符元寶	真	裏	崇寧元寶	真
8	裏	天聖元寶	篆書	去	天祐通寶	真	裏	熙寧元寶	真
9	裏	開元通寶	行(下)	裏	崇寧元寶	真	裏	元祐通寶	篆
10	裏	天祐通寶	行	裏	天祐通寶	行	去	元祐通寶	行
11	裏	政和通寶	篆	去	崇寧通寶	篆	去	元祐通寶	行
12	裏	政和通寶	篆	去	至道元寶	行	去	天聖元寶	篆
13	裏	天聖元寶	篆	去	聖宋元寶	行	去	元祐通寶	行
14	裏	元祐通寶	篆	去	神祐通寶(三)	去	去	治平元寶	篆
15	裏	皇宋通寶	X	裏	天祐通寶	行	裏	元祐通寶	篆
16	裏	元祐通寶	行	裏	天祐通寶	行	裏	元祐通寶	行
17	裏	崇寧元寶	行△	去	開元通寶	去	裏	元祐通寶	篆△
18	裏	開元通寶	行△	去	聖宋元寶	篆	裏	皇宋通寶	篆△
19	裏	元祐通寶(行)	行	去	聖宋元寶	篆	裏	嘉祐元寶	真
20	裏	淳化元寶	真	裏	祥符元寶	篆	裏	元祐通寶	行
21	去	崇寧元寶	真	裏	政和通寶	篆	裏	元祐通寶	行
22	去	祥祐元寶	真	去	開元通寶	行	去	熙寧元寶	真
23	裏	崇寧元寶	真	裏	崇寧元寶	行	去	景祐元寶	篆
24	去	嘉祐通寶	篆	去	皇宋通寶	篆	去	元祐通寶	行
25	去	皇宋通寶	真	裏	祥符通寶	真	裏	元祐通寶	行
26	裏	元祐通寶	行	裏	太平通寶	篆	裏	太平通寶	篆
27	裏	治平元寶	篆	裏	天祐通寶	行	裏	咸平元寶	真
28	去	崇寧元寶	篆	去	元祐通寶	行	裏	天祐通寶	行
29	去	元祐通寶	篆	裏	紹聖元寶	行	裏	開元通寶	行
30	裏	皇宋通寶	行	裏	開元通寶	去	裏	至道元寶	行
31	去	開元通寶	真	裏	政和通寶	篆	裏	政和通寶	分幣
32	裏	祥符通寶	真	去	聖宋元寶	篆	去	政和通寶	分幣
33	去	皇宋通寶	真	裏	元祐通寶	行	裏	紹聖元寶	篆
34	裏	治平通寶	篆	裏	天祐通寶	行	裏	元祐通寶	篆
35	裏	崇寧元寶	篆	去	天聖元寶	行	去	嘉祐通寶	篆
36	去	紹聖元寶	行	去	元祐通寶	行	裏	元祐通寶	行
37	裏	紹聖元寶	篆	裏	崇寧元寶	篆	去	祥符元寶	真
38	裏	開元通寶	真	去	天祐通寶	行	裏	政和通寶	篆
39	裏	嘉泰通寶	背文(三)	裏	崇寧元寶	行	裏	天聖元寶	篆
40	去	元祐通寶	真	裏	元祐通寶	行	裏	天祐通寶	篆
41	去	崇寧元寶	真	裏	嘉祐通寶	篆	去	紹聖元寶	篆
42	裏	開元通寶	真	裏	無寧元寶	真	裏	政和通寶	篆
43	去	元祐通寶	行	去	開元通寶	去	裏	開元通寶	行
44	去	祥符元寶	真	裏	嘉祐通寶	篆	裏	崇寧元寶	真
45	去	元祐通寶	篆	去	皇宋通寶	篆	裏	崇寧元寶	真
46	裏	元祐通寶	篆	裏	宋通元寶	篆	裏	元祐通寶	行
47	裏	景祐元寶	真	去	崇寧通寶	篆	裏	元祐通寶	行
48	去	元祐通寶	行	裏	咸平元寶	真	裏	元祐通寶	篆
49	去	元祐通寶	行	去	皇宋通寶	篆	裏	天祐通寶	篆
50	去	開元通寶	背(上)	行	崇寧元寶	行	去	開元通寶	行
51	去	崇寧元寶	真	去	崇寧元寶△	篆	裏	元祐通寶	行
52	裏	嘉祐元寶	真	去	至道元寶	行	去	開元通寶	行
53	裏	皇宋通寶	真	裏	元祐通寶	行	裏	嘉定通寶	背文「三」
54	去	淳熙元寶	行(背)	裏	元祐通寶	篆	裏	天祐通寶	行
55	裏	崇寧元寶	△	裏	祥符元寶	篆	裏	紹聖元寶	篆
56	裏	崇寧通寶	行	裏	無寧元寶	行	裏	崇寧元寶	真
57	去	聖宋元寶	行	去	天祐通寶	行	裏	淳熙元寶	篆
58	裏	開元通寶	背上月	去	天祐通寶	行	去	元祐通寶	篆
59	去	聖宋元寶	篆	裏	熙寧元寶	行	裏	元祐通寶	行
60	去	元祐通寶	行	去	天聖元寶	真	去	咸平元寶	真
61	裏	崇寧元寶	真	裏	皇宋通寶	篆	裏	崇寧元寶	真
62	去	開元通寶	行	去	無寧元寶	行	裏	天祐通寶	真
63	裏	皇宋通寶	真	裏	開元通寶	去	去	皇宋通寶	篆
64	去	至道元寶	真	裏	嘉祐通寶	篆	裏	嘉祐通寶	篆
65	裏	開元通寶	行	裏	崇寧元寶	行	裏	元祐通寶	篆

Tab.4-3 第210次調査 SX055 出土銭貨分類表 (表の表裏は裏から見た際のものである)

68	裏	崇寧元寶△	裏	表	崇寧元寶	裏	表	崇寧元寶	背文「九」裏
67	表	政和通寶	分冊	表	崇寧元寶	行	表	△崇寧元寶	裏
68	裏	崇寧元寶	裏	裏	元豐通寶	裏	表	元豐通寶	行
69	表	政和通寶	分冊	表	祥符通寶	裏	裏	天聖元寶	裏
70	裏	元祐通寶	「？」裏	裏	元祐通寶	行	裏	祥符元寶	裏
71	裏	崇寧元寶	裏	裏	元豐通寶	裏	裏	崇寧元寶	裏
72	裏	元豐通寶	裏	表	崇寧元寶	行	裏	崇寧元寶	裏
73	裏	崇寧通寶	裏	裏	開元通寶		裏	崇寧通寶	底
74	裏	大觀通寶	裏	裏	開元通寶		裏	開元通寶	背上月
75	裏	崇寧元寶	裏	表	崇寧通寶	裏	裏	開元通寶	
76	裏	崇寧元寶	裏	裏	咸平元寶	裏	表	崇寧元寶	裏
77	裏	大觀元寶	裏	裏	開元通寶		裏	崇寧元寶	裏
78	裏	開元通寶	表	裏	至道元寶	裏	裏	元祐通寶	裏
79	裏	至道通寶	裏	表	祥符通寶	裏	裏	崇寧通寶	背月文「四」
80	裏	至道元寶	裏	裏	大觀通寶	裏	裏	元豐通寶	裏
81	裏	×	表	崇寧元寶	裏△	裏	裏	崇寧通寶	裏
82	裏	大觀元寶	裏	裏	開元通寶	表	裏	崇寧元寶	裏
83	表	淳化元寶	行	表	元祐通寶	裏	表	政和通寶	分冊
84	裏	崇寧通寶	裏	表	崇寧元寶	裏	表	天聖元寶	裏
85	裏	崇寧通寶	背??	表	元豐通寶	行	表	祥符元寶	裏
86	裏	崇寧元寶	行	表	崇寧通寶	裏	表	淳化元寶	裏
87	裏	元祐通寶	裏	裏	崇寧元寶	裏	表	崇寧元寶	裏
88	裏	崇寧元寶△	裏	表	×元寶	裏	表	崇寧元寶	裏
89	裏	天聖元寶	裏	表	△元祐通寶	裏	表	崇寧元寶	裏
90	表	崇寧元寶	裏	裏	崇寧元寶	行	表	開元通寶	裏
91	裏	崇寧通寶	裏	裏	元豐通寶	行	表	元豐通寶	行
92	表	開禧通寶	背元	表	開元通寶	裏	裏	元豐通寶	行
93	裏	崇寧通寶	裏	裏	元豐通寶	行	裏	元祐通寶	行
94	裏	政和通寶	分冊	裏	崇寧元寶	行	裏	崇寧元寶	背二
95	裏	崇寧元寶	行	表	元祐通寶	行	表	咸平元寶	裏
96	裏	元豐通寶	裏	表	崇寧元寶	行	表	崇寧元寶	裏
97	裏	崇寧通寶	裏	表	太平通寶	裏	表	元祐通寶	裏
98	裏	崇寧通寶	裏	表	元祐通寶	裏	裏	咸平元寶	裏
99	裏	政和通寶	分冊	裏	崇寧元寶	裏	表	元祐通寶	裏
100	裏	開元通寶		裏	祥符通寶	裏	表	元祐通寶△	裏

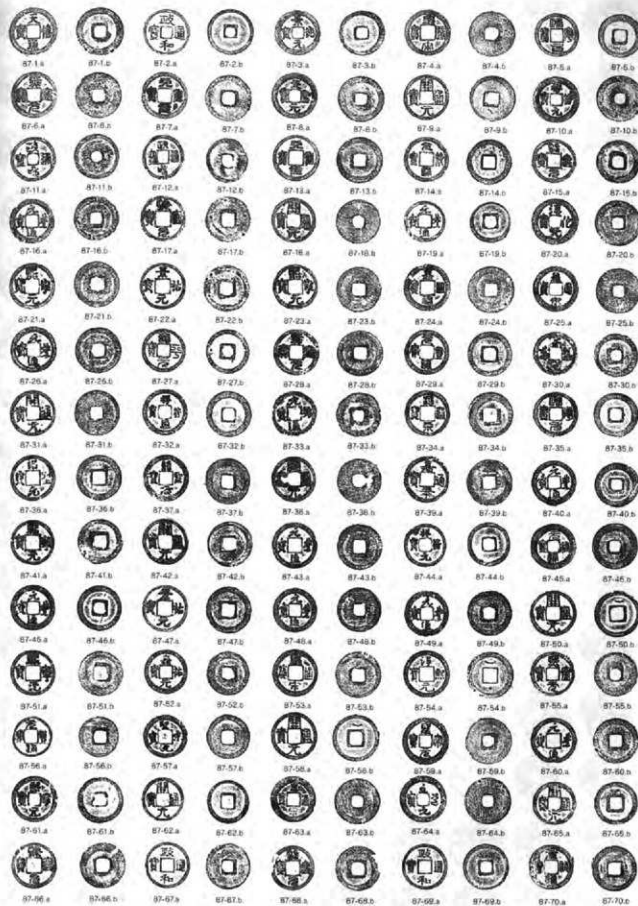


Fig.87 第210次調査 SX055 出土遺物実測図その1 (1/2)

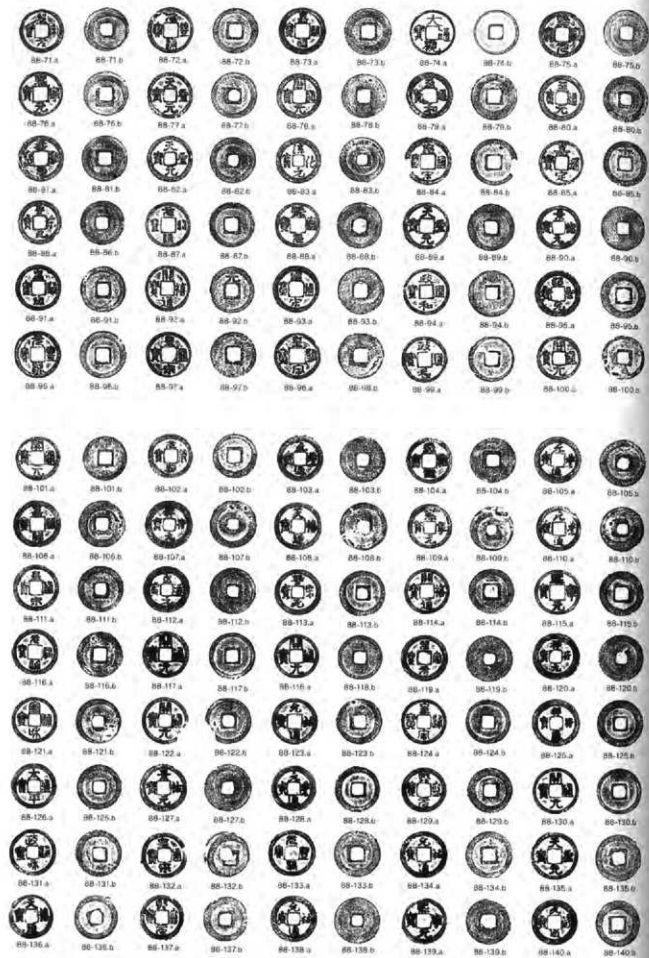


Fig.88 第210次調査 SX055 出土遺物実測図その2 (1/2)

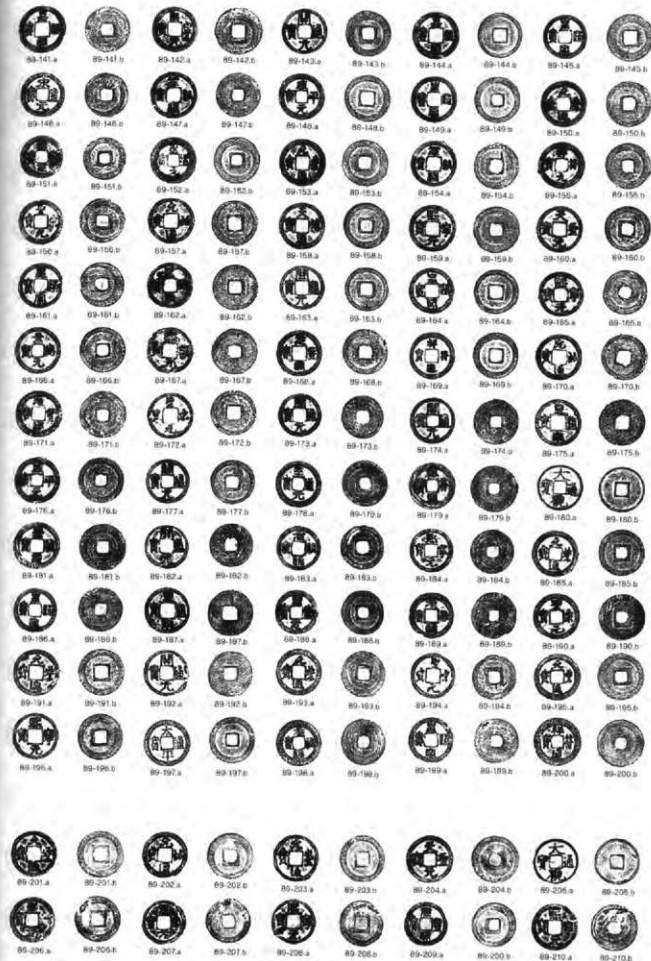


Fig.89 第210次調査 SX055 出土遺物実測図その3 (1/2)

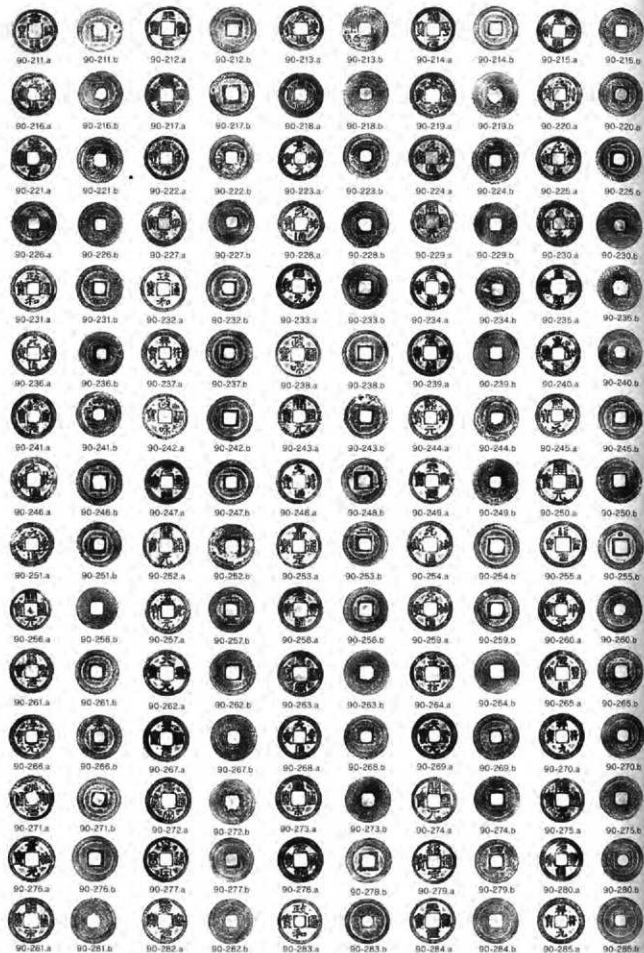


Fig.90 第210次調査 SX055 出土遺物実測図その4 (1/2)

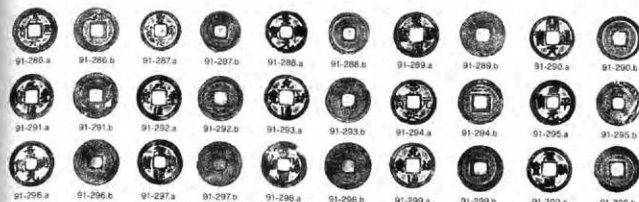


Fig.91 第210次調査 SX055 出土遺物実測図その5 (1/2)

Tab.5-1 第210次調査 SX055 出土銭貨計測値

A列【条210 SX-55】	(A) 銭径(mm)	(B)	(C) 内径(mm)	(D)	銭厚(mm)	重量(g)	R番号
1	25.83	25.66	20.72	20.16	1.14 ~ 1.28	3.7	001
2	24.48	24.84	21.10	21.01	1.12 ~ 1.43	3.9	002
3	24.42	24.41	18.23	18.24	1.13 ~ 1.41	3.6	003
4	24.88	24.84	19.73	19.27	1.05 ~ 1.22	3.6	004
5	23.82	23.84	19.28	18.97	1.43 ~ 1.53	4.0	005
6	24.89	24.77	20.59	19.81	1.08 ~ 1.25	2.9	006
7	25.08	24.78	20.10	20.17	1.21 ~ 1.39	3.8	007
8	24.66	24.69	17.90	17.73	1.05 ~ 1.15	3.3	008
9	24.60	24.62	20.35	20.29	1.15 ~ 1.22	3.0	009
10	25.02	24.93	18.20	17.51	0.96 ~ 1.08	3.0	010
11	24.25	24.22	20.83	20.65	0.84 ~ 1.33	3.2	011
12	24.08	22.53	19.74	18.18	1.05 ~ 1.43	2.8	012
13	24.77	24.83	20.40	20.79	1.13 ~ 1.33	3.6	013
14	24.33	24.32	19.89	19.64	1.14 ~ 1.32	2.9	表 014
15	23.56	23.56	19.58	19.71	1.28 ~ 1.38	3.4	表 015
16	23.98	24.38	17.57	17.73	1.09 ~ 1.36	3.5	表 016
17	24.61	24.38	21.08	21.69	1.18 ~ 1.50	3.5	017
18	23.78	23.93	20.77	20.04	1.10 ~ 1.38	3.5	表 018
19	21.84	22.04	17.66	18.29	1.27 ~ 1.40	2.9	019
20	24.69	25.19	18.21	17.82	0.95 ~ 1.30	2.9	020
21	24.68	24.61	20.46	20.80	1.21 ~ 1.43	3.8	表 021
22	24.90	24.76	20.99	21.10	1.27 ~ 1.77	3.8	表 022
23	24.05	24.02	20.10	20.23	1.41 ~ 1.49	4.0	表 023
24	25.20	25.19	19.64	19.64	1.06 ~ 1.24	3.3	表 024
25	24.19	24.10	18.20	18.78	1.35 ~ 1.46	3.8	表 025
26	24.65	24.62	18.45	19.85	1.25 ~ 1.43	4.1	026
27	23.57	23.49	19.61	19.23	1.46 ~ 1.71	3.7	表 027
28	24.53	24.25	20.55	21.01	1.07 ~ 1.43	3.5	表 028
29	24.01	24.08	19.41	19.09	1.19 ~ 1.42	3.6	表 029
30	23.28	23.60	19.30	17.91	1.12 ~ 1.48	3.4	030
31	24.41	24.44	21.11	19.84	1.05 ~ 1.12	3.2	表 031
32	24.58	24.57	19.26	18.58	1.19 ~ 1.35	3.4	032
33	23.93	24.33	19.12	19.31	1.08 ~ 1.38	3.5	表 033
34	24.52	24.39	19.85	19.50	0.95 ~ 1.28	3.0	034
35	23.84	24.08	19.07	18.83	1.12 ~ 1.39	3.2	035
36	24.25	24.35	20.07	20.34	1.17 ~ 1.44	3.2	表 036
37	24.64	24.48	18.55	18.53	1.40 ~ 1.58	4.3	037
38	24.00	23.88	19.99	20.25	0.88 ~ 1.16	2.7	038
39	24.69	24.50	20.08	19.96	1.02 ~ 1.32	3.1	039
40	24.03	23.78	17.86	18.58	1.23 ~ 1.38	3.6	表 040
41	23.98	24.16	20.06	19.75	1.27 ~ 1.74	3.7	表 041
42	24.43	25.15	20.14	20.63	1.17 ~ 1.43	3.5	042
43	24.55	24.26	19.42	19.26	1.25 ~ 1.77	3.6	表 043
44	23.23	22.66	19.27	18.64	1.37 ~ 1.60	3.8	表 044
45	24.30	24.35	17.35	17.55	1.10 ~ 1.38	3.7	表 045
46	24.14	24.07	18.32	18.72	1.19 ~ 1.41	3.5	046
47	25.02	24.81	21.16	21.47	1.27 ~ 1.40	3.8	047
48	23.71	23.96	17.80	17.67	1.02 ~ 1.16	3.1	表 048
49	24.22	24.17	17.36	18.10	1.02 ~ 1.32	3.0	表 049
50	24.61	24.72	20.08	20.69	1.25 ~ 1.39	3.3	表 050
51	24.07	23.86	20.33	20.35	1.08 ~ 1.38	3.2	表 051
52	23.74	23.60	18.02	18.64	1.20 ~ 1.54	3.6	052
53	24.93	24.51	19.41	19.40	1.00 ~ 1.35	3.5	053
54	25.09	24.85	19.81	19.32	1.12 ~ 1.90	3.6	表 054

Tab.5-2 第210次調査 SX055 出土銭貨計測値

55	23.42	23.31	19.40	19.62	1.17 ~ 1.60	3.4	055
56	21.55	21.35	18.89	18.63	1.00 ~ 1.35	2.5	056
57	23.72	23.86	18.20	18.67	0.98 ~ 1.37	3.3	表 057
58	24.96	24.97	20.99	20.64	1.20 ~ 1.49	3.4	058
59	24.98	24.64	18.38	18.20	1.11 ~ 1.34	3.9	表 059
60	24.34	24.58	19.32	19.34	1.18 ~ 1.48	3.5	表 060
61	24.64	24.62	19.23	19.13	1.04 ~ 1.35	3.3	表 061
62	23.23	23.32	19.65	19.57	1.10 ~ 1.40	3.0	表 062
63	24.53	24.46	17.90	18.01	0.99 ~ 1.20	3.1	063
64	24.91	24.94	18.25	18.48	0.90 ~ 1.34	3.2	表 064
65	22.94	23.17	18.83	19.10	1.12 ~ 1.74	3.4	065
66	24.24	24.50	20.60	20.61	1.25 ~ 1.50	3.8	066
67	24.57	24.49	20.91	20.93	0.91 ~ 1.50	3.5	表 067
68	24.08	22.47-α	19.63	19.64	0.96 ~ 1.08	2.5	表 068
69	24.41	24.49	20.33	20.94	1.00 ~ 1.41	3.7	表 069
70	24.09	24.13	18.97	19.01	1.01 ~ 1.55	3.2	070
71	23.92	24.17	19.23	19.07	1.23 ~ 1.70	4.1	071
72	24.44	24.53	20.54	19.79	1.22 ~ 1.52	3.7	072
73	25.21	25.06	19.30	19.22	1.15 ~ 1.31	3.7	073
74	24.30	24.21	20.92	21.51	1.12 ~ 1.50	3.3	074
75	24.81	24.99	19.94	20.61	0.95 ~ 1.22	3.0	075
76	24.18	23.91	20.75	20.74	1.34 ~ 1.52	3.8	076
77	24.78	24.48	18.91	18.40	1.15 ~ 1.51	3.8	078
78	24.15	24.45	20.39	20.02	1.27 ~ 1.57	3.9	077
79	24.77	24.86	18.64	18.64	1.06 ~ 1.23	3.3	079
80	24.69	24.62	18.34	18.64	1.28 ~ 1.44	3.9	080
81	24.81	24.58	19.85	19.85	1.22 ~ 1.72	3.9	081
82	24.10	24.47	18.97	19.00	1.11 ~ 1.45	3.3	082
83	24.20	24.38	18.32	18.21	1.32 ~ 1.90	3.9	表 083
84	25.24	(21.55)	19.36	19.36	1.17 ~ 1.67	3.6	084
85	24.01	24.10	20.63	20.32	1.18 ~ 1.45	3.4	085
86	23.57	23.42	18.38	18.07	1.26 ~ 1.35	3.5	086
87	24.22	24.49	20.56	20.37	1.01 ~ 1.16	2.8	表 087
88	24.52	23.77	20.53	20.10	1.26 ~ 1.42	3.8	表 088
89	25.10	25.06	21.14	20.93	1.04 ~ 1.43	3.1	089
90	23.68	23.96	19.08	18.47	1.11 ~ 1.31	3.6	表 090
91	24.76	24.57	19.76	19.85	1.06 ~ 1.38	3.4	091
92	24.68	24.23	20.99	20.59	1.00 ~ 1.28	3.3	表 092
93	24.94	24.96	18.77	19.37	1.06 ~ 1.55	3.9	表 093
94	24.75	24.74	20.74	21.02	0.98 ~ 1.29	3.1	094
95	24.50	24.74	18.17	18.55	1.04 ~ 1.28	3.6	095
96	25.13	25.19	20.69	19.99	1.03 ~ 1.56	3.5	096
97	24.20	24.36	21.22	20.81	1.18 ~ 1.59	3.7	表 097
98	24.61	24.73	20.78	21.03	1.21 ~ 1.61	3.6	表 098
99	24.36	24.79	20.83	20.38	1.12 ~ 1.55	3.4	099
100	23.40	23.54	19.37	19.37	1.26 ~ 1.63	3.1	表 100

Tab.5-3 第210次調査SX055出土銭貨計測値

B号	【A】 外径 (mm)	【B】	【C】 内径 (mm)	【D】	銭厚 (mm)	目目 (g)	R番号
1	23.85	23.78	19.78	20.04	0.95~1.28	2.3	表 101
2	24.02	24.25	18.57	18.73	1.13~1.72	3.2	表 102
3	24.61	24.67	19.07	18.54	1.17~1.44	3.7	表 103
4	24.72	24.74	20.04	20.33	1.04~1.29	3.1	表 104
5	25.28	25.21	18.56	18.84	1.20~1.60	4.0	表 105
6	25.22	25.23	19.56	19.30	1.09~1.45	3.0	表 106
7	25.45	25.09	19.99	18.65	0.98~1.42	3.2	表 107
8	25.65	25.71	20.08	19.88	1.19~1.59	4.0	表 108
9	23.75	23.57	19.44	18.47	1.22~1.75	3.9	表 109
10	23.95	23.83	18.91	18.64	1.20~1.84	3.4	表 110
11	24.48	24.73	19.24	19.64	1.11~1.47	3.7	表 111
12	24.93	24.89	17.00	17.01	1.15~1.39	3.9	表 112
13	24.49	24.72	19.22	19.22	0.98~1.29	3.1	表 113
14	24.28	24.26	20.66	20.28	1.11~1.38	3.7	表 114
15	24.21	24.23	21.00	20.14	1.23~1.47	3.9	表 115
16	24.32	24.56	19.68	19.39	1.21~1.53	3.7	表 116
17	24.85	25.04	20.69	20.20	1.09~1.50	3.8	表 117
18	23.83	23.91	20.38	19.77	0.90~1.07	2.6	表 118
19	24.77	25.06	19.15	19.16	0.96~1.31	3.3	表 119
20	24.91	24.63	18.29	18.17	0.96~1.28	3.0	表 120
21	24.29	24.29	20.22	20.38	1.02~1.59	3.4	表 121
22	24.76	24.89	20.56	20.24	1.07~1.37	3.0	表 122
23	24.46	24.68	20.58	20.00	1.21~1.51	3.8	表 123
24	23.92	24.10	20.40	20.49	1.22~1.48	3.7	表 124
25	25.33	25.34	19.26	19.32	1.14~1.79	4.1	表 125
26	24.06	24.14	19.15	19.26	1.02~1.21	2.9	表 126
27	25.43	25.14	20.20	19.69	1.07~1.34	3.2	表 127
28	24.34	23.85	18.10	17.24	1.12~1.65	3.7	表 128
29	24.09	24.08	18.66	18.63	1.29~1.60	4.1	表 129
30	24.52	24.56	20.98	20.82	0.78~1.38	3.0	表 130
31	25.31	25.13	20.67	20.56	1.32~1.82	4.9	表 131
32	24.44	24.31	19.50	19.64	1.09~1.58	3.5	表 132
33	24.77	24.88	19.73	19.62	0.93~1.40	3.4	表 133
34	24.91	24.76	20.19	19.85	1.08~1.52	3.8	表 134
35	25.19	25.15	20.99	21.12	1.06~1.62	3.6	表 135
36	23.82	23.81	20.55	19.56	1.21~1.34	3.1	表 136
37	23.77	23.55	18.50	19.00	1.28~1.64	3.9	表 137
38	24.60	24.71	18.91	18.94	1.22~1.74	4.0	表 138
39	24.10	23.73	20.08	20.87	1.18~1.31	3.5	表 139
40	24.33	24.38	18.03	18.03	1.15~1.30	3.5	表 140
41	25.74	25.48	19.50	19.55	1.10~1.42	3.6	表 141
42	24.31	24.44	18.54	18.35	1.15~1.40	3.8	表 142
43	24.27	24.07	20.29	20.31	1.08~1.24	3.2	表 143
44	25.35	25.32	19.87	19.63	1.04~1.55	3.5	表 144
45	23.58	23.32	19.23	18.22	1.15~1.42	3.1	表 145
46	23.85	23.69	18.55	18.09	0.89~1.27	2.2	表 146
47	24.76	24.80	20.45	20.06	1.33~1.79	3.9	表 147
48	24.77	24.78	18.15	19.04	1.06~1.32	3.3	表 148
49	24.39	24.33	19.34	19.29	0.90~1.24	2.7	表 149
50	24.89	24.63	18.91	19.47	1.19~1.47	3.7	表 150
51	22.99	23.09	17.24	17.23	1.44~1.70	4.4	表 151
52	24.84	24.66	16.87	16.63	1.19~1.40	4.0	表 152
53	24.98	24.78	19.19	19.36	1.06~1.43	3.5	表 153
54	24.32	24.47	19.80	20.38	1.29~1.47	3.9	表 154

Tab.5-4 第210次調査SX055出土銭貨計測値

55	24.86	24.69	18.49	18.41	0.98~1.35	2.9	表 155
56	23.99	24.04	18.03	18.28	1.09~1.41	3.1	表 156
57	24.52	24.64	20.54	19.88	1.10~1.40	3.3	表 157
58	24.74	24.76	20.28	19.86	1.19~1.38	3.8	表 158
59	25.04	25.07	20.58	20.21	0.97~1.59	3.5	表 159
60	24.60	24.62	20.03	20.09	1.34~1.54	3.9	表 160
61	24.18	23.39	20.02	19.68	0.97~1.40	3.0	表 161
62	24.35	24.61	21.18	20.04	0.98~1.27	3.2	表 162
63	23.71	23.73	20.29	19.82	0.97~1.20	2.7	表 163
64	23.39	24.18	19.23	19.74	0.95~1.28	2.7	表 164
65	23.75	23.84	19.31	19.48	1.25~1.51	3.7	表 165
66	24.67	24.54	20.23	19.54	1.06~1.63	3.6	表 166
67	24.90	24.62	20.27	20.55	1.07~1.66	3.4	表 167
68	24.51	24.54	19.13	19.96	1.17~1.76	3.9	表 168
69	24.98	24.39	19.13	19.05	1.09~1.42	3.4	表 169
70	24.47	24.40	19.89	19.04	1.27~1.48	4.0	表 170
71	25.08	25.07	18.34	19.14	1.15~1.57	3.9	表 171
72	23.94	24.44	20.31	20.17	1.14~1.45	3.4	表 172
73	23.04	23.29	18.58	18.55	1.33~1.60	3.4	表 173
74	24.40	24.16	20.11	19.86	1.00~1.29	3.0	表 174
75	24.93	24.65	20.77	20.29	1.19~1.33	3.7	表 175
76	24.59	24.52	18.90	18.72	0.99~1.47	3.0	表 176
77	23.61	23.54	19.83	19.86	1.08~1.15	3.0	表 177
78	24.74	24.68	18.69	18.33	1.01~1.09	3.0	表 178
79	24.82	25.02	18.49	18.99	1.11~1.56	3.5	表 179
80	24.68	24.44	21.53	21.59	1.31~1.90	4.1	表 180
81	24.95	25.15	19.63	19.40	1.04~1.21	3.1	表 181
82	23.36	23.43	20.54	20.54	1.18~1.33	3.5	表 182
83	23.87	23.89	18.78	19.26	1.23~1.59	3.5	表 183
84	23.45	23.30	19.09	18.21	1.17~1.51	3.3	表 184
85	24.61	24.69	18.90	18.68	1.40~1.93	4.4	表 185
86	23.51	23.56	18.79	18.36	1.15~1.63	3.4	表 186
87	24.64	24.14	20.83	20.51	1.11~1.42	3.4	表 187
88	23.51	23.82	18.31	18.41	1.18~1.48	3.7	表 188
89	24.73	24.51	19.21	19.58	1.20~1.45	4.2	表 189
90	24.64	24.86	18.24	19.35	1.32~1.48	3.6	表 190
91	24.82	24.92	19.65	20.22	1.12~1.33	3.5	表 191
92	24.20	23.97	20.38	20.36	1.11~1.79	3.5	表 192
93	24.76	24.55	18.60	19.33	1.08~1.30	3.6	表 193
94	24.27	23.79	20.01	19.40	1.47~1.63	4.6	表 194
95	25.34	24.84	18.34	18.62	1.19~1.45	4.0	表 195
96	24.53	24.67	21.38	20.74	1.18~1.48	3.9	表 196
97	24.53	24.56	19.14	18.60	0.94~1.20	2.9	表 197
98	24.53	24.54	17.81	18.88	0.94~1.11	2.7	表 198
99	23.88	24.10	18.86	18.04	1.10~1.58	3.3	表 199
100	25.63	25.33	18.11	18.24	1.19~1.40	4.0	表 200

Tab.5-5 第210次調査SX055出土銭貨計測値

序号	(A) 銭径 (mm)	(B)	(C) 内径 (mm)	(D)	銭厚 (mm)	重量 (g)	R 番号
1	24.63	25.10	20.01	19.51	1.18 ~ 1.33	3.2	表 201
2	24.71	24.69	19.91	19.85	1.39 ~ 1.65	4.2	202
3	24.96	25.01	21.70	20.85	0.96 ~ 1.42	3.4	表 203
4	25.32	25.64	20.42	20.39	1.10 ~ 1.54	3.6	表 204
5	24.46	24.42	21.51	21.51	0.94 ~ 1.71	3.4	205
6	23.68	23.76	19.35	19.07	1.23 ~ 2.18	3.9	表 206
7	24.53	24.59	19.82	19.44	1.47 ~ 2.66	3.9	207
8	24.16	24.43	20.28	20.27	1.45 ~ 2.11	4.2	表 208
9	23.77	23.72	18.20	18.65	1.32 ~ 1.84	3.8	209
10	24.60	24.73	20.53	20.54	1.17 ~ 1.99	3.7	表 210
11	24.57	24.55	20.68	20.54	1.21 ~ 1.71	3.6	表 211
12	25.21	25.04	20.60	20.64	1.26 ~ 1.38	3.9	表 212
13	24.61	24.39	18.89	19.39	1.14 ~ 1.67	3.5	表 213
14	24.23	24.34	19.87	19.43	1.29 ~ 1.49	3.6	表 214
15	24.19	24.04	18.50	18.21	1.33 ~ 1.47	3.7	表 215
16	23.64	23.91	18.05	18.36	1.24 ~ 1.90	3.9	216
17	23.86	24.17	19.81	18.74	1.13 ~ 1.65	3.4	217
18	24.68	24.78	16.94	16.99	1.00 ~ 1.21	3.4	218
19	24.83	25.04	19.55	19.94	1.06 ~ 1.29	3.6	219
20	23.70	24.02	18.46	18.46	1.45 ~ 1.59	4.3	220
21	24.79	24.82	21.10	21.01	1.16 ~ 1.46	3.5	表 221
22	24.16	24.17	19.38	19.56	1.34 ~ 1.68	4.3	表 222
23	24.45	24.42	18.75	18.57	1.00 ~ 1.35	3.2	表 223
24	25.13	24.93	18.89	19.66	1.22 ~ 1.60	4.0	表 224
25	24.49	24.65	19.00	18.64	1.21 ~ 1.54	3.8	225
26	24.23	24.29	18.80	18.79	1.10 ~ 1.31	3.3	226
27	24.25	24.51	18.31	18.68	0.96 ~ 1.18	2.8	227
28	24.83	25.32	19.82	19.30	1.11 ~ 1.64	3.6	228
29	23.32	23.42	19.58	18.63	1.34 ~ 1.60	3.9	229
30	24.47	25.14	16.44	17.27	1.01 ~ 1.40	3.3	230
31	25.18	25.19	19.61	18.90	1.19 ~ 1.44	3.4	231
32	24.45	24.56	19.75	20.14	1.24 ~ 1.65	3.4	表 232
33	24.36	24.58	18.52	18.53	1.00 ~ 1.20	2.8	233
34	24.06	23.90	19.12	19.13	1.26 ~ 1.74	3.7	234
35	24.50	24.56	19.74	20.19	1.17 ~ 1.43	3.8	表 235
36	24.10	23.96	18.74	18.33	1.10 ~ 1.34	3.2	236
37	25.31	25.47	19.28	18.08	1.15 ~ 1.32	3.7	表 237
38	24.44	24.51	20.96	21.08	1.07 ~ 1.42	3.7	238
39	24.73	24.87	19.65	20.22	1.20 ~ 1.51	4.1	239
40	24.06	24.04	19.84	19.20	1.64 ~ 1.93	3.8	240
41	24.56	24.40	15.23	18.64	0.99 ~ 1.24	3.1	表 241
42	24.43	24.48	20.67	20.98	1.14 ~ 1.68	4.2	242
43	23.74	22.97	19.43	18.91	1.14 ~ 1.58	3.0	243
44	24.30	24.32	19.43	20.03	1.31 ~ 1.75	4.1	244
45	23.83	23.95	19.03	18.25	1.00 ~ 1.19	2.8	245
46	24.95	25.04	18.85	19.99	1.25 ~ 1.45	3.7	246
47	24.04	24.33	17.90	18.15	1.25 ~ 1.58	3.8	247
48	24.51	24.63	18.63	19.38	1.21 ~ 1.38	3.6	248
49	25.21	24.81	21.04	20.27	1.06 ~ 1.58	3.7	249
50	24.79	24.81	20.71	20.41	1.19 ~ 1.66	3.3	表 250
51	24.57	24.82	17.68	17.61	0.96 ~ 1.15	3.5	251
52	24.18	24.19	19.43	19.34	1.11 ~ 1.19	3.1	表 252
53	24.33	24.06	19.95	18.58	0.91 ~ 1.07	3.3	253
54	24.42	24.35	18.99	18.94	1.19 ~ 1.42	3.2	254

Tab.5-6 第210次調査SX055出土銭貨計測値

55	22.31	22.37	19.02	18.95	0.93 ~ 1.04	3.7	255
56	25.04	24.97	19.50	19.71	1.20 ~ 1.34	2.3	256
57	24.64	24.85	20.25	20.51	1.07 ~ 1.27	3.6	257
58	24.45	24.48	21.04	20.71	1.10 ~ 1.30	2.8	表 258
59	24.93	25.04	21.20	20.32	1.10 ~ 1.88	3.2	259
60	24.39	24.35	18.99	17.71	1.19 ~ 1.64	3.1	表 260
61	24.01	23.62	18.63	18.39	1.23 ~ 1.41	3.5	表 261
62	24.93	25.15	20.40	20.11	1.10 ~ 1.38	3.5	262
63	24.73	24.69	20.68	20.70	1.18 ~ 1.42	4.1	表 263
64	24.08	24.04	19.71	18.85	1.21 ~ 1.74	4.1	264
65	24.77	24.86	19.77	19.68	1.18 ~ 1.41	3.5	265
66	24.18	24.25	18.90	18.67	1.11 ~ 1.32	3.4	表 266
67	24.94	24.67	19.31	19.30	1.04 ~ 1.22	3.2	表 267
68	23.60	23.78	18.19	18.31	1.36 ~ 1.49	4.1	表 268
69	24.68	24.47	18.96	18.08	1.07 ~ 1.30	3.5	269
70	24.33	24.30	18.27	18.36	0.97 ~ 1.24	3.1	270
71	23.98	23.51	19.87	18.97	1.18 ~ 1.78	3.4	271
72	24.62	24.81	20.04	19.39	0.93 ~ 1.14	2.6	表 272
73	24.71	24.81	19.16	19.50	1.05 ~ 1.26	3.6	273
74	24.94	24.52	20.36	21.05	1.09 ~ 1.32	3.3	274
75	24.05	23.85	20.77	20.70	0.94 ~ 1.22	2.8	275
76	24.65	24.85	20.74	20.47	1.07 ~ 1.28	3.3	表 276
77	23.98	24.26	20.14	20.25	0.94 ~ 1.23	3.1	277
78	24.45	24.66	18.22	17.62	1.14 ~ 1.29	3.5	278
79	23.79	23.61	19.75	20.43	1.14 ~ 1.55	3.6	279
80	23.51	23.46	18.67	18.39	1.25 ~ 1.38	3.8	表 280
81	24.74	24.94	19.15	19.57	1.28 ~ 1.74	4.7	281
82	24.32	24.12	20.41	20.56	0.96 ~ 1.27	3.1	表 282
83	24.38	24.19	19.88	20.39	1.03 ~ 1.35	3.2	表 283
84	24.65	24.62	20.68	21.13	1.20 ~ 1.38	3.8	表 284
85	25.21	25.19	18.95	18.56	0.84 ~ 1.36	3.5	表 285
86	24.43	24.60	18.09	17.83	1.22 ~ 1.49	3.8	表 286
87	21.75	22.41	18.07	17.91	0.82 ~ 1.02	1.9	表 287
88	22.66	22.21	18.51	17.95	1.04 ~ 1.28	2.6	表 288
89	24.39	24.02	20.32	20.11	1.06 ~ 1.34	3.5	表 289
90	24.33	24.01	20.55	20.25	1.03 ~ 1.35	3.3	表 290
91	24.80	24.56	19.10	19.30	1.15 ~ 1.52	2.9	表 291
92	24.53	24.32	19.35	19.35	1.22 ~ 1.60	4.1	292
93	24.48	24.41	20.83	20.05	1.13 ~ 1.42	3.9	293
94	24.30	24.46	20.41	20.44	1.11 ~ 1.42	3.6	表 294
95	24.22	24.40	18.25	18.38	1.17 ~ 1.82	3.5	表 295
96	24.64	24.70	19.65	19.49	1.16 ~ 1.47	3.3	表 296
97	24.18	24.30	18.21	19.07	1.24 ~ 1.40	3.9	表 297
98	25.11	25.21	18.27	20.14	1.04 ~ 1.15	3.0	298
99	24.40	24.73	20.09	19.80	0.98 ~ 1.19	3.2	表 299
100	24.45	24.39	19.90	20.06	1.12 ~ 1.41	3.2	表 300

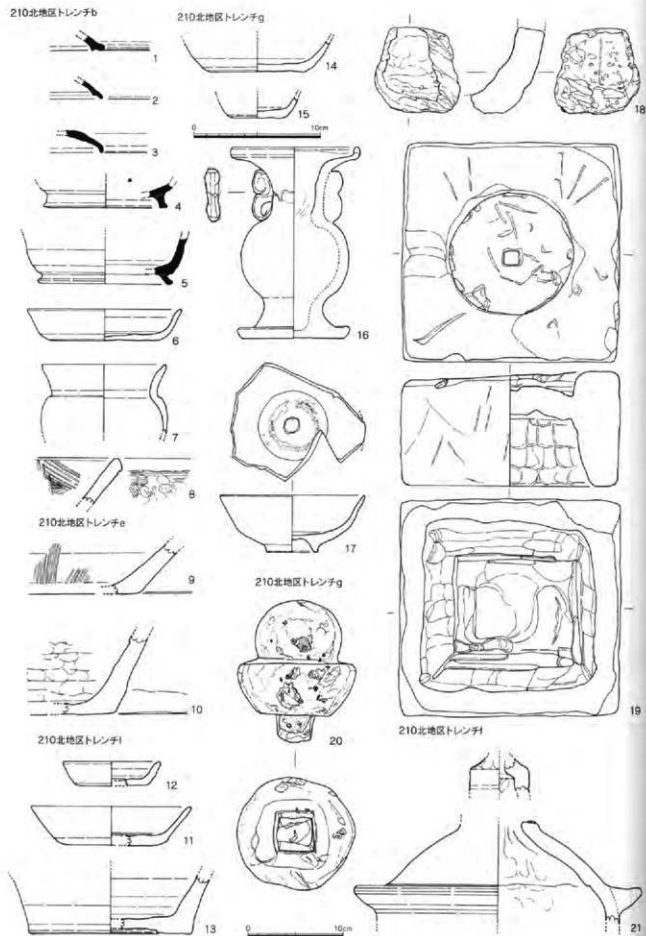


Fig.92 第210次調査トレンチ出土遺物実測図その1 (1/3、1/4)



Fig.93 第210次調査トレンチ出土遺物実測図その2 (22は1/2、1/3、1/4)

210北地区トレンチb 出土遺物 (Fig.92)

須恵器

蓋 (1~3) 1、2は蓋1破片。1の方角口縁部内部のかえりがしっかりしており、2はかなり退化している。3は蓋3破片。天井部を回転ヘラ削り調整。

坏c (4、5) 4は器高2.0+cm、復元底径9.8cm。高台はやや外側に向いて張っている。5は器高3.7+cm、復元底径10.8cm。高台は大きく外側にむかって張っている。

土師器

坏a (6) 復元口径12.2cm、器高2.5cm、復元底径9.0cmを測る。底部回転糸切り。

小壺 (7) 口径9.8cm、器高5.5+cmを測る。調整は内外面、横ナデ。全体的に摩耗瓦敷しい。器

形から古墳時代のものか。

瓦質土器

播鉢 (8) 口縁部破片。内面調整は刷毛目調整で、その後には播目を刻んでいる。外面には器壁調整時の指頭圧痕が残る、それの上から縦方向の刷毛目調整をする。口縁部付近は横方向の刷毛目調整となる。

210 北地区トレンチ e 出土遺物 (Fig.92)

国産陶器

播鉢 (9) 底部破片。器高 4.0+cm。内面に播目が入る。器壁断面に焼成不良による生焼け部が認められる。胎土の色調は淡灰色だが、その生焼け部は淡黄褐色を呈す。

鉢 (10) 底部破片。器高 6.1+cm。内面は横ナデ。指頭圧痕が残る。外面は横ナデ。体部の下部はヘラ削り調整を施す。底面は不定方向のヘラによるナデ調整。

210 北地区トレンチ f 出土遺物 (Fig.92)

土師器

坏 a (11) 復元口径 12.6cm、器高 3.1cm、復元底径 9.1cm を測る。底部切り離し技法は摩耗のため不明。

小皿 b (12) 復元口径 7.6cm、器高 1.9cm、復元底径 6.0cm を測る。底部切り離し技法は摩耗により不明。

中国陶器

壺 (13) 底部破片。器高 4.7+cm、復元底径 12.8cm を測る。削り出し高台。

210 北地区トレンチ g 出土遺物 (Fig.92)

土師器

坏 a (14) 口縁部を欠く破片。器高 2.5+cm、復元底径 7.9cm を測る。風化のため調整は不明瞭。

小皿 b (15) 口縁部を欠く破片。器高 1.8+cm、復元底径 4.4cm を測る。底部切り離しは回転糸切り。

国産陶器

華瓶 (16) 復元口径 9.8cm、器高 15.1cm、底径 8.2cm を測る。頸部に耳が付く。釉は乳白色の不透明のものが施される。内面の器壁には粘土の絞り痕跡が確認できる。底部は回転糸切り。

国産磁器

碗 (17) 復元口径 11.5cm、器高 4.5cm、底径 4.1cm を測る。内外面に施釉して、内面の見込み部を蛇の目状に釉刺きを施す。見込み部分には重ね焼き時の高台の跡が残る。

石製品

五輪塔 (18) 水輪の破片。縦 9.1+cm、横 9.0+cm、厚さ 3.5cm。石材は阿蘇凝灰岩。

210 北地区トレンチ f・g 出土遺物 (Fig.92)

石製品

五輪塔 (19、20) 19 は地輪の完形品。縦 23.2cm、横 23.15cm、厚さ 12.1cm。上面は火輪の受けのため窪みをもつ。内面は底面から削られて空洞になっている。内面の削りは粗く削り痕跡が明瞭に残っている。20 は風水輪の完形品。縦 15.1cm、横 12.5cm。石材はすべて阿蘇凝灰岩である。

210 北地区トレンチ f 出土遺物 (Fig.92)

瓦質土器

瓦釘 (21) 摘み部分と本体部分の 2 つに分かれて出土している。同一個体の破片と思われるが接合はしない。摘み部分の器高 2.6+cm。内面に粘土を塗ったねじり痕が観察できる。本体部は器高 7.8+cm、最大径 22.0cm を測る。胴部の罫は貼り付け。内外面に黒色化している。本体部の上部には刻み目があり、

一部透かし用の処理がしてあり上部との接合部にあたり何らかの細工がしてあったと想定される。

210 北地区トレンチ f 出土遺物 (Fig.93)

瓦類

瓦経 (22) 瓦経の破片。縦 6.7cm +、横 3.7cm +、厚み 1.6cm。上端部以外は割れている。胎土はやや密。0.2mm 程度の白色粒子を含む。焼成はやや良好。色調は淡黄灰色。細いヘラにより罫線を引き、区画に取めるように経文をヘラにより刻書している。横罫線は上部から 1.5cm の所に引く。縦罫線の幅は 1.6cm。表には、「自我得佛来」とあり、左に文字は判読できないが、次の行の経文が刻まれているが確認できる。自我得佛来は、如来寿量品第十六 91 行目の前半である。裏には、「爾時世尊」と刻まれている。これは、如来寿量品第十六 92 行目の前半である。

軒瓦 (23) 左回りの三巴紋。胎土は白色鉱石を多く含む。焼成は不良。色調は明黄灰色。土師質。

軒平瓦 (24) 側頭紋と巴紋の組み合わせ。三巴は右巻き。巴紋と巴紋の間に側頭を 2 つ配置する。

210 北地区道路拡張部出土遺物 (Fig.94)

土師器

坏 a (25) 復元口径 12.0cm、器高 2.6 + cm、復元底径 7.5cm。底部切り離しは回転糸切り。1/4 程度の破片。XIV 期か。

小皿 b (26 ~ 28) 26 は口径 6.3cm、器高 1.55cm、底径 4.9cm を測る。ほぼ完形。内外面の調整は摩耗により不明。X X 期。27 は復元口径 6.6cm、器高 1.5cm、復元底径 4.7cm を測る。底部切り離し技法は回転イト切り。X X 期。28 は復元口径 6.6cm、器高 1.7cm、復元底径 5.0cm を測る。X X 期。

中国陶器

壺 (29) 底部破片。高台は削りだし。焼成はやや良好。壺 B 類。

国産陶器

油壺 (30) 口縁部破片。焼成はやや不良。胎土の色調は明褐色。釉調は不透明な茶褐色を施す。

国産磁器

坏 X 皿 (31) 口縁部の破片。器高 2.3 + cm、口縁部は外反し、口縁端部が輪花状を呈す。

中国磁器

染付 (32) 器高 3.8cm +、底径 5.2cm。釉調は、やわらかく光沢があり硬質。半透明。内外面に呉須を使って文様を描く。大きめの貫入と、大きめの気泡が多くある。高台登付部には、砂目があり、重ね焼きをしていたと考えられる。明染。

肥前系磁器

皿 (33)

210 南地区トレンチ a 出土遺物 (Fig.93)

土師器

坏 a (34) 底部から体部の破片。器高 1.7cm +。復元底径は 7.5cm。底部切り離し技法は、回転糸切り。板状圧痕あり。

国産陶器

播鉢 (35) 口縁部の破片。器高 5.8cm +。内面に刷り目を施す。刷り目は 7 条。焼成は良好で、硬く焼き締まっている。色調は内外面共に暗茶褐色。

210 南地区トレンチ d 出土遺物 (Fig.93)

国産陶器

皿 (36) 復元口径12.4cm、器高3.85cm、底径4.0cm。見込み蛇ノ目軸割ぎ。高台は削りだし高台で、軸は付け掛けか。ただ、内面の軸割は艶のある透明で光沢がある緑黄色を呈し、軸重れ部は青みがかったている。外面は、灰色がかった緑色で軸は薄く施している。

210 茶色土出土遺物 (Fig.94)

土師器

小皿a1 (1、2) 1は復元口径7.1cm、器高1.45cm、復元底径4.0cm。色調は黄灰色。底部回転糸切

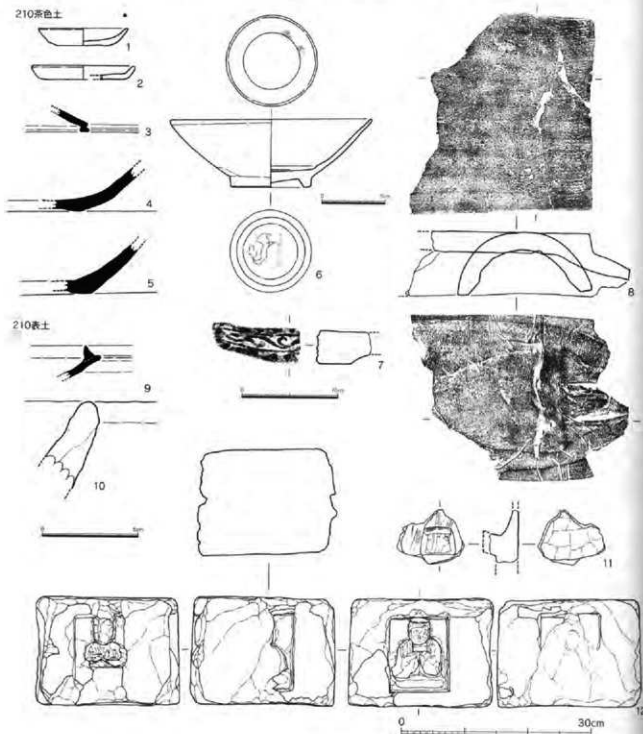


Fig.94 第210次調査トレンチ出土遺物実測図その3 (1/3、1/4、12は1/6)

り。2は復元口径8.2cm、器高1.15cm、復元底径6.1cm。色調は淡赤褐色。底部切り離しは、糸切り。その後には板状圧痕。

須恵器

蓋 (3) 口縁部破片。端部形状が異質。蓋以外の可能性もある。

須恵質土器

握鉢 (4、5) 共に底部から体部の破片。焼成は良好。還元炎焼成。色調は暗灰色。胎土は2mm以下の白色粒子を少量含む。1mm程度の黒色粒子を少量含む。内面は使用して摩滅しており、表面は滑らかである。底部の切り離し後は未調整。

瓦類

軒平瓦 (7) 破片。軒平面には、偏向唐草文と珠文が確認できる。焼成は不良。色調は灰黄色～黒灰色。胎土は4mm以下の白色粒子を少量含む。

丸瓦 (8) 玉緑部の破片。縦21.0+cm、横14.0cm、厚さ2.3cm。焼成は良好。還元炎焼成。色調は暗青色。表面は部分的に溶けて光っている。凹面は布目痕跡と吊り縄痕跡が確認できる。凸面は縄目印きをナデ調整によって消している。側端部はへら切り後に丁寧に調整している。凹面の側端部から玉緑部にかけては2cm前後の幅でへら削り調整を施している。

210 赤土出土遺物 (Fig.95)

白磁

椀 (6) 口径16.0cm、器高5.35cm、底径6.4cm。Ⅲ-2類。底部高台内に薄く透明な軸が掛かる。

須恵器

坏身 (9) 口縁部破片。器高2.6+cm。焼成は良好。還元炎焼成。色調は淡灰色。

土製品

とりべ (10) 口縁部破片。器高4.65+cm。外面に溶解した付着物が吸着している。

石製品

石鍋 (11) 破片。縦2.9cm、横3.5cm、厚み1.5cm、滑石製。

石塔 (12) 北地区で表採をした石塔の一部で方形を呈す。層塔の一材と考えている。高さ17.5cm、横幅23.1cm、奥行23.2cm (すべて残存値) を測る。石材は粘質土で軟質の砂岩。全体の2/3ほどが残存。現状の観察では、神・仏とみられる像が彫出されている面は3面確認できる。残り1面も像彫出しに伴う方形彫り窪みが確認できたため、側面のそれぞれ4面には元々、像が彫られていたと考えられる。比較的残りが良い部位で観察をすると、像の彫出しに伴う方形の窪みは、左右6.5cm、上下2.5cmの空間をとるように削り付けられている。方形窪みはやや歪んでおり、下部の横幅は9.5cmだが、上部の横幅は10.2cmとやや上部が広い。彫り出しの深さは深い部位で2.5cm、浅い部位は0.03cm。像は坐像で、残りが良い面を例にとると、ゆったりとした僧衣のようなものを着用しており、両手を合わせている姿である。これらの特徴からは神像と推定できる。この面の反対の面の坐像は、残った所を観察すると、手は合わせておらず、右手と左手の位置はずれている。この彫り込まれている像の特徴を、胸前で左手の人さし指を立てて拳を作り、その人さし指を右手の拳で包み込む智拳印と、頭上に冠冠を持つとみるならば、金剛界大日如来が考えられる。

また、左手と右手が智拳印にしては離れすぎているとみると、左手に何かを持ち、右手は割れてしまっていると考えられる。すると、右手が無腕装印で左手に蓮華などを持っているようにも見える。それらの属性からは観音菩薩と推定ができる。残存が悪い面も像のシルエットから考えると、如来の可能性が高い。以上のように、層塔の4面に彫られてことから、如来四仏の可能性が高いと考え

ていたが、薩摩川内市指定文化財である薩摩国分寺層塔など、4面それぞれの尊格が統一されていない例もあるため、類例の調査など、今後の検討をしていく必要があるだろう。

(5) 小結

本調査は小式氏と関係が深いと想定されている字「御所の内」地区の後背地にあたる丘陵の調査であった。時代を追って土地利用の変遷を追ってみたい。まず、丘陵南端の頂部に、周溝を伴う墳墓210ST010が構築された。ここは南側に遮蔽物がなく、眼下には当時栄えていた大宰府の町並みが広がる見晴らしのよい場所であった。その点からも墓所として選定されたものと考えられる。210ST010の副葬品としては、輸入陶磁器の白磁皿類碗、青白磁の合子（紅皿か）、双鳥草文鏡、鉄、刀子などが出土しており、被葬者が女性であった可能性も推定できよう。時期は12世紀代を考えている。時をあまりおかず、210SX012が同じ場所に構築されている。これも墓の可能性が高い。西側の丘陵の突端部とその西側の平坦部にそれぞれ、210ST030、040、050という墓が作られている。ST040と050はそれぞれ木棺墓と考えられる。同じ墓でもST030は4つ的小区画が集まってできた石組み集団墓という違いもみてとれる。おおよそ、それぞれの墓は12世紀代を中心としている。

丘陵の東西方向の頂部を横断するように、幅4～5m、深さ2m程度の堀が50m以上に渡って掘られている。埋没の時期は、出土した遺物や、埋納遺構（210SX055）によれば、13世紀後半～14世紀代と考えられよう。これは少式氏が大宰府を中心に活躍していた時期とかなり、字御所ノ内と近接していることから、少式氏に關係する防衛的な機能をもっていた可能性を考えておきたい。また、南西部の210SX035からは大量の中世瓦が出土しており、堀の北側、つまり丘陵側に瓦葺きの施設があった可能性が考えられる。この瓦を多くつかっていた建物は観世音寺の子院の可能性も考えられる。以後は顕著な土地利用がされず、昭和20年代に調査区北側は土取りされ大規模に地形が変化した。その後、花間酒造が建設され現代に至った。

今回の対象範囲内の北側はトレンチ調査しかできなかったが、遺物に五輪塔や瓦経が出土していることから、北側の丘陵に平安後期～鎌倉・室町期の遺跡が広がっていることが推定される。

以上、12世紀代の墓としての利用と、13世紀後半～14世紀代の堀の構築・利用の停止がこの土地に関する大きな土地利用の流れということがわかった。

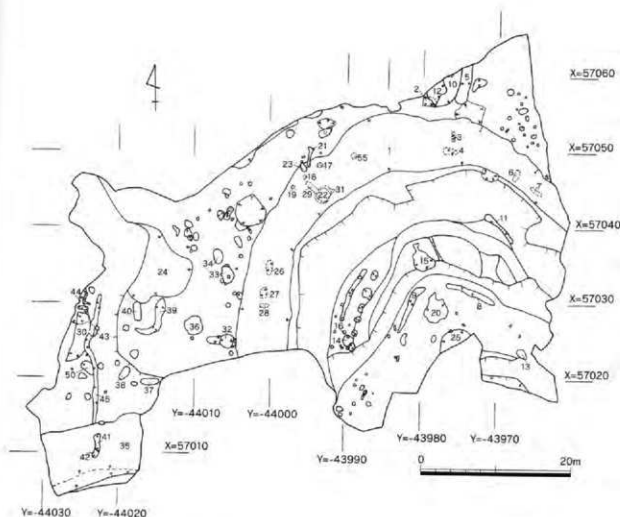


Fig.95 第210次調査遺構略測図 (1/500)

Tab.6 大宰府家坊跡第210次調査遺構番号台帳

※(遺構番号)で表記したのは、1層以上が遺構番号不明のものを含む。

遺構番号	遺構名	遺構	遺構位置(大-跡)	遺構形状(大-跡)	遺構	出土品
1	21020501	土壁				
2	21020502	瓦葺トレンチ	赤褐色土(100cm厚)		13号赤土+白土	
3	21020503	北方土瓦		新築赤瓦葺	3-1	
4	21020504	瓦葺トレンチ		新築赤瓦葺	12号赤土	
5	21020505	土	10号土層(赤土)			
6	21020506	北方土瓦		6-1		
7	21020507	北方土瓦		7-1		
8	21020508	瓦葺トレンチ				
9	21020509	瓦葺トレンチ				
10	21020510	土		12号赤土		
11	21020511	土			12号赤土	
12	21020512	赤褐色土(100cm厚)		新築土		
13	21020513	土				
14	21020514	土				
15	21020515	土				
16	21020516	土				
17	21020517	90°	縦穴(動物)の跡	赤褐色土	17-1	
18	90°			赤褐色土	18-1	
19	90°			赤褐色土	19-1	
20	21020520	土			14号赤土+15号赤土	
21	土	北に傾斜(25°傾斜)がある				
22	21020522	土		22-1		
23	21020523	土				
24	21020524	赤褐色土				
25	21020525	土			→赤土	
26	21020526	土		26-1		
27	21020527	土		27-1		
28	21020528	土		28-1		
29	21020529	土		29-1		
30	21020530	土	a, b, c, dの4段が確認できた		12号赤土	
31	土					
32	21020532	土				
33	21020533	土				
34	21020534	土				
35	21020535	土	SK01の延長		14号赤土	
36	21020536	土				
37	21020537	土				
38	21020538	土				
39	21020539	土	21020540に接している			
40	21020540	土		12号赤土		
41	21020541	土		41-42-35		
42	21020542	土		41-42-35		
43	21020543	土				
44	21020544	土	土層の延長	44-30	12号赤土	
45	21020545	土			12号赤土	
46	21020546	土				
47	土					
48	土					
49	21020550	土			→12号赤土	
50	土					
51	土					
52	21020555	赤褐色土(15cm厚)		13号赤土+白土		
53	赤褐色土			中央		
54	トレンチ			19号-15号赤土		
55	トレンチ			13-14		
56	トレンチ			中央-15号赤土		
57	赤褐色土					
58	赤褐色土			13号		
59	赤褐色土			→赤土		
60	赤褐色土			13号		
61	赤褐色土			13号		
62	赤褐色土			13号		
63	赤褐色土			13号		
64	赤褐色土			13号		
65	赤褐色土			13号		
66	赤褐色土			13号		
67	赤褐色土			13号		
68	赤褐色土			13号		
69	赤褐色土			13号		
70	赤褐色土			13号		
71	赤褐色土			13号		
72	赤褐色土			13号		
73	赤褐色土			13号		
74	赤褐色土			13号		
75	赤褐色土			13号		
76	赤褐色土			13号		
77	赤褐色土			13号		
78	赤褐色土			13号		
79	赤褐色土			13号		
80	赤褐色土			13号		
81	赤褐色土			13号		
82	赤褐色土			13号		
83	赤褐色土			13号		
84	赤褐色土			13号		
85	赤褐色土			13号		
86	赤褐色土			13号		
87	赤褐色土			13号		
88	赤褐色土			13号		
89	赤褐色土			13号		
90	赤褐色土			13号		
91	赤褐色土			13号		
92	赤褐色土			13号		
93	赤褐色土			13号		
94	赤褐色土			13号		
95	赤褐色土			13号		
96	赤褐色土			13号		
97	赤褐色土			13号		
98	赤褐色土			13号		
99	赤褐色土			13号		
100	赤褐色土			13号		

Tab.7-1 大宰府家坊跡第210次調査 出土遺物一覧表 (1)

5-1	銅器類	鏡	鏡
	土器類	杯 a 杯 b 酒杯	土器類
		白磁	丸瓦 (1x1) 皿 (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
	石葺品	溝石 溝石葺石 溝石葺石	石葺品 (溝石葺石)
5-1 褐色系土			
	銅器類	鏡	鏡
	土器類	酒杯 酒杯	土器類
		丸瓦	丸瓦
	陶器類	丸瓦 (1) 碗片 (1)	丸瓦 (1) 碗片 (1)
		白磁	丸瓦 (1) 皿 (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
	石葺品	溝石 溝石葺石	石葺品 (溝石葺石)
5-1 白色系土			
	銅器類	鏡	鏡
	土器類	酒杯 酒杯	土器類
		丸瓦	丸瓦
	陶器類	丸瓦 (1) 碗片 (1)	丸瓦 (1) 碗片 (1)
		白磁	丸瓦 (1) 皿 (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
	石葺品	溝石 溝石葺石	石葺品 (溝石葺石)
5-2			
	土器類	小皿 a	小皿 a
5-5			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-6 赤褐色系			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-8 赤褐色系			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-10			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-10 白色系土			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-10 褐色系土			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-11			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-12 赤褐色系土			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-12 白色系土			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-13			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-14			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-15			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦
5-15 白色系土			
	銅器類	鏡	鏡
		丸瓦	丸瓦
	土器類	丸瓦 (1) (2) (3)	丸瓦 (1) (2) (3)
		瓦葺	丸瓦

Tab.7-2 大宰府条坊跡第210次調査 出土遺物一覽表(2)

S-35 赤色土	
土師器	小皿 a(併)
灰土(漆器)	甕
灰土(漆器)	甕(漆器用)
灰土(漆器)	甕
灰土(漆器)	甕
白磁	甕(漆器用) 小皿(併) 甕(併)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文) 平瓦(瓦質, 無文)
瓦類	丸瓦(瓦質, 無文) 軒平瓦(土師器)
石製品	丸形鏡(漆器用) 緑色片石(併)

S-36	
土師器	甕(漆器用)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

S-40	
土師器	小皿(小皿(併) 甕(併))

S-40(併)	
土師器	小皿(併)

S-40(併)	
土師器	平皿 a(併)

S-44	
白磁	甕(漆器用)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)
石製品	緑色片石

S-45	
土師器	甕 c 小皿 a(併) 甕
瓦類	平瓦(土師器, 無文) 平瓦(漆器用, 無文)
瓦類	丸瓦(瓦質, 無文)

S-50	
土師器	甕 甕(併)
灰土(漆器)	甕(併)

トレンチ b(北地区)	
銅製品	高1 蓋3 貯c 貯c 蓋 壺(漆器)
土師器	小皿 a(併) 甕 甕(併)
灰土(漆器)	甕
銅製品系青銅	鏡(土師器) 小皿(併) 甕(併) 甕(併)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

白磁	
甕	甕(併) IV(併) VI(併) VII(併) VIII(併) IX(併)
中級陶器	甕(併) 小皿(併) 甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文) 平瓦(漆器用, 無文)
金銅製品	甕(併)
石製品	甕(併)

トレンチ c(北地区)	
銅製品	甕
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

トレンチ d(北地区)	
土師器	小皿 a(併) 甕
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

トレンチ e(北地区)	
銅製品	甕
土師器	小皿 a(併) 甕
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

トレンチ f(北地区)	
銅製品	甕
土師器	平皿 a(併) 小皿 a(併)
土師器	甕 甕(併) 甕
灰土(漆器)	甕
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文) 平瓦(漆器用, 無文)
石製品	丸形鏡(漆器用) 甕(併)
土製品	平瓦(瓦質, 無文)

トレンチ g(北地区)	
土師器	平皿 a(併)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

トレンチ h(北地区)	
銅製品	甕
土師器	小皿 a(併) 甕
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

トレンチ i(北地区)	
銅製品	甕
土師器	小皿 a(併) 甕
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

トレンチ j(北地区)	
銅製品	甕
土師器	小皿 a(併) 甕
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)

Tab.7-3 大宰府条坊跡第210次調査 出土遺物一覽表(3)

北地区 遺跡区画	
土師器	平皿 a(併) 小皿 a(併)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文) 平瓦(漆器用, 無文)
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文) 平瓦(漆器用, 無文)
金銅製品	甕(併)
石製品	緑色片石

赤色土	
銅製品	甕 c 貯c 壺 壺
土師器	甕 甕(併) 甕(併)
灰土(漆器)	甕
銅製品系青銅	鏡(土師器)
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文) 平瓦(漆器用, 無文)
石製品	甕(併)

青褐色土	
土師器	甕 c

灰土	
銅製品	甕(併) 甕
土師器	甕
中級陶器	甕(併)
瓦類	平瓦(瓦質, 無文)
金銅製品	甕(併)

Tab.8-1 大宰府条坊跡 第210次調査 出土遺物計測表

S-1							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
土師器	平皿 a	-	R-606	-	3.1-a	-	-

S-1 赤色土							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
土師器	小皿 a1	-	R-601	-	0.7-a	-	-
土師器	小皿 a1	併	R-602	12.5	2.55	8.8	○

S-2							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
土師器	小皿 a1	-	R-604	6.38	1.1	7.0	○
土師器	小皿 a1	併	R-602	6.39	1.4	6.89	○

S-5							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
瓦類	平皿 c	-	R-602	118.0	5.5	6.5	-

S-6 北地区							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
土師器	平皿 a(併) a1	イト	R-601	-	1.4-a	2.0	○

S-20 赤色土							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
銅製品	蓋3	-	R-604	194.0	1.2-a	-	-
銅製品	蓋3	-	R-603	-	0.9-a	-	-

S-20 赤褐色土							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
銅製品	蓋	-	R-602	112.4	4.4-a	-	○
銅製品	蓋	-	R-601	-	1.6-a	47.0	-

S-24							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
土師器	小皿 a1	併	R-601	99.0	1.1	7.5	○

S-30 赤色土							
種別	器 種	遺物番号	口徑	高さ	底径	A	B
土師器	小皿 b	併	R-603	77.5	1.35	6.4	-

Tab.8-2 大宰府条坊跡 第210次調査 出土遺物計測表

S-30①

種別	部 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿a1	イ	R-001	8.2	1.1	16.8	-

S-30a①

種別	部 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	杯a	イ	R-001	-	2.1a	8.5	-

S-30a②

種別	部 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	杯a	イ	R-001	8.45	1.9	6.9	○

S-30a③

種別	部 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿a1	イ	R-001	5.3	1.05	6.0	○

S-30a

種別	部 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿a	イ	R-001	-	1.65-a	10.9	○

S-35 遺物計測表

種別	部 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿b	イ	R-002	9.71	1.8	4.4	×
土師器	杯c	-	R-062	-	2.1-a	11.0	-
土師器	杯c	-	R-063	-	1.8-a	8.0	-
土師器	瓶	-	R-073	-	1.85-a	10.7	-
土師器	瓶	-	R-083	113.8	3.6-a	-	-

S-40

種別	部 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿a1	イ	R-001	8.4	1.15	6.3	○
土師器	小皿a1	イ	R-002	8.65	1.00	6.0	○
土師器	小皿a1	イ	R-003	9.0	1.15	6.6	○
土師器	小皿a1	イ	R-004	9.6	1.1	2.5	○
土師器	小皿a1	イ	R-005	9.2	1.5	6.1	○
土師器	小皿a1	イ	R-006	8.9	1.1	5.6	○
土師器	小皿a1	イ	R-007	8.5	1.05	5.5	○
土師器	小皿a1	イ	R-008	8.3	1.15	6.0	○
土師器	小皿a1	イ	R-009	8.0	1.15	6.0	○
土師器	小皿a1	イ	R-010	8.0	1.3	5.3	○
土師器	小皿a1	イ	R-011	8.1	1.45	6.0	○
土師器	小皿a1	イ	R-012	15.8	2.95	11.1	○

S-43

種別	部 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	杯a	-	R-001	-	0.9-a	-	-
黄色土師器	杯	-	R-002	-	1.65-a	16.2	-

(6) 大宰府条坊跡第210次調査隣接地
調査地点は、太宰府市観世音寺横岳1752番
が移転した場所にあたる。事前に確認(試掘)調査
した。ただし、条坊210次調査の隣接地ということ
蔵文化財の情報が得られたため地権者の了解を得て
立会調査は2000年1月27日～31日にかけて
た。現地調査担当は高橋学、実測・測量補助として
力を得た。

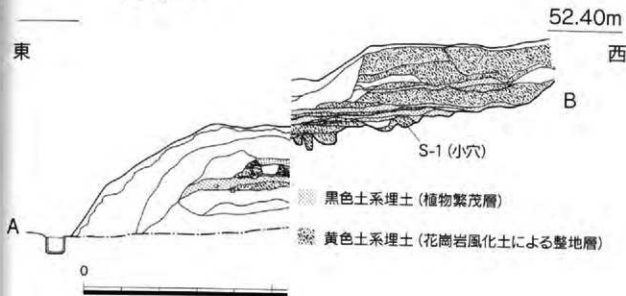
南壁土層を観察すると、地山の淡白黄色花崗岩層
れる。その遺構の断面形状から内容としては柱穴、
ないが、土層からは何点かの土師器皿(底部系切)
以降の所産であることがわかる。また、S-3とした
層位から判断して、最低5層にわたる文化面が
崗岩の風化土も混じっていることから、周辺地帯
るので、この土地が過去に活発に利用されたこと

X=57070.0

X=57060.0



南壁土層図



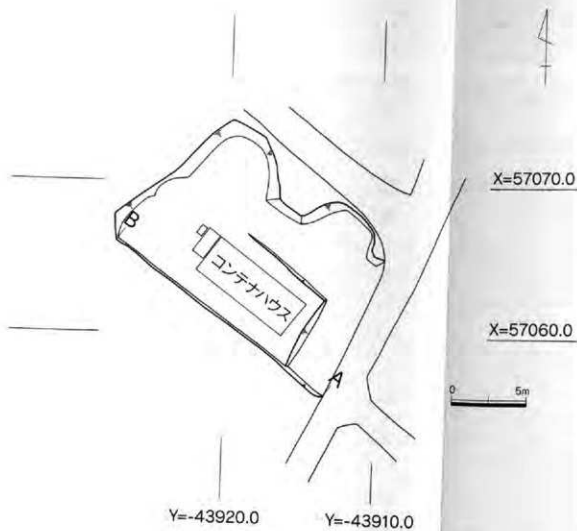
⑥ 大宰府条坊跡第210次調査隣接地調査について

調査地点は、太宰府市観世音寺字横岳1752番地である。ここは北西にあった花岡酒造の仮設会社に移転した場所にあたる。事前に確認(試掘)調査をしており、平坦面は削平されていることが判明した。ただし、条坊210次調査の隣接地ということもあり、対象地の南側の斜面を精査したところ、埋蔵文化財の情報が得られたため地権者の了解を得て、立会調査を行った。

立会調査は2000年1月27日～31日にかけて、平板測量と国土座標入れ、南壁の土層図作成を行った。現地調査担当は高橋学、実測・測量補助として、補助員平島義孝、島(豊岡)純子、坂本雄介の協力を得た。

南壁土層を観察すると、地山の淡白黄色花崗岩風化土をベースにして、遺構の切り込みが多く認められる。その遺構の断面形状から内容としては柱穴、土坑、小穴などが推定できる。時期は明確にはできないが、土層からは何点かの土師器皿(底部糸切り技法)が見つかったため、少なくとも12世紀以降の所産であることがわかる。また、S-3とした小穴からは奈良時代の土器片も出土している。

層位から判断して、最低5層にわたる文化面が存在した可能性が指摘できる。これは地山である花崗岩の風化土も混じっていることから、周辺地形を整形しながら、整地を繰り返していたと考えられるので、この土地が過去に活発に利用されたことの証左となろう。



南壁土層図

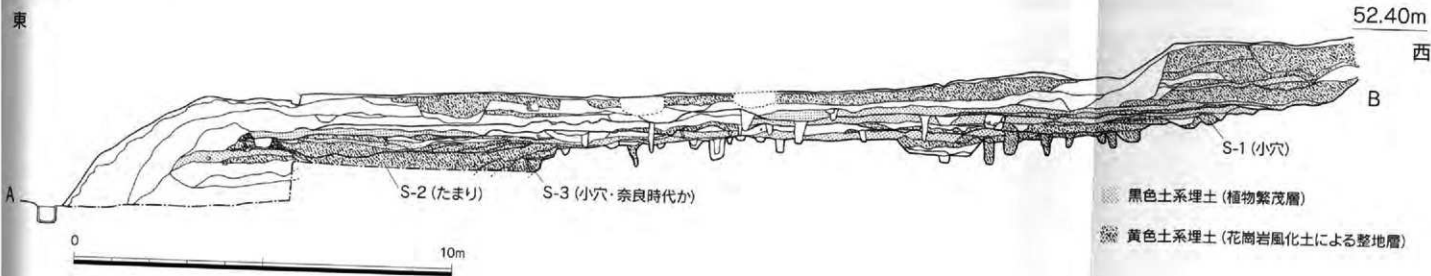


Fig.96 第210次調査立会調査 平面図 (1/250)・土層図 (1/100)

3. 大宰府条坊跡第210-2次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市観世音寺5丁目870、875-3に所在する。立地は、四王寺山から南に派生し突出した丘陵の西側にあたり、東西北の3方向を丘陵によって遮蔽された谷地形の最深部に位置する。大宰府条坊跡第210次調査で発掘調査をした東隣接地を、団地として開発するに先だって、この地点を団地用公園用地として確保したいと申し出があった。そのため工事が行われる際に地表面からの掘削が、遺構にどのような影響を与えるかを判断するため、本調査区を国庫補助事業の重要遺跡確認として埋蔵文化財の発掘調査を行うこととなった。開発対象面積は340㎡、調査面積は193㎡。調査期間は平成12年12月25日から平成13年3月31日。調査は高橋学が担当した。

(2) 基本層位 (Fig.98)

調査地の調査前の現況は竹が鬱蒼と茂ってあまり日が差さない暗い竹林であった。地表面を観察すると、中央部やや東側に中世墓の墓石などを利用した集積遺構があり、地藏菩薩を中心にして現代でも信仰が続いている様子が認められた。地形的には北から南へ緩やかに傾斜しており、調査区の中央に段差が認められる状況だった。北側では0.2m、南側では0.8mほど堆積している表土を除去すると、整地土とみられる黄色土が全面に堆積している。厚さは0.35m～0.4mを測る。その下層に灰茶色土層が0.3～0.4mほど堆積している。これが遺物包含層にあたり、この灰茶色土層を除去する遺構面が確認できる。遺構面は現況GLよりおよそ80～100cmほどさがっており、暗灰褐色土層で形成されている。トレンチa、cの土層から暗灰褐色土層の下層にもう1層遺構面と考えられる面を確認している。

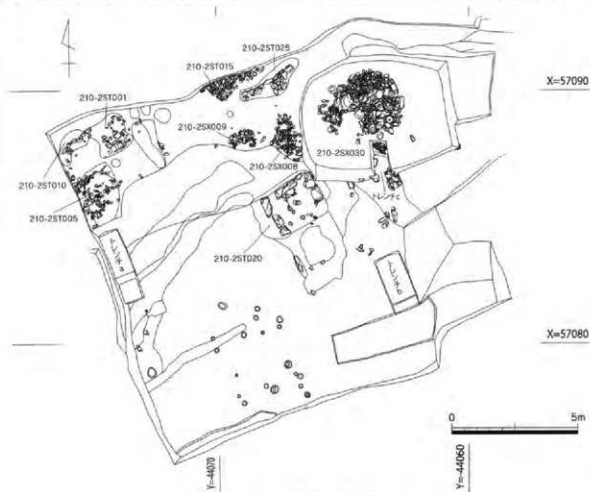
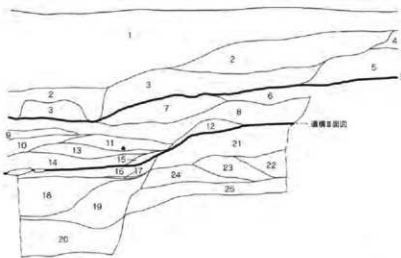


Fig.97 第210-2次調査遺構図 (1/150)



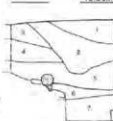
- 210-2トレンチ a 西壁
1. 遺構(土)の境界
 2. 遺構(土)の境界
 3. 遺構(土)の境界
 4. 遺構(土)の境界
 5. 遺構(土)の境界
 6. 遺構(土)の境界
 7. 遺構(土)の境界
 8. 遺構(土)の境界
 9. 遺構(土)の境界
 10. 遺構(土)の境界
 11. 遺構(土)の境界
 12. 遺構(土)の境界
 13. 遺構(土)の境界
 14. 遺構(土)の境界
 15. 遺構(土)の境界
 16. 遺構(土)の境界
 17. 遺構(土)の境界
 18. 遺構(土)の境界
 19. 遺構(土)の境界
 20. 遺構(土)の境界
 21. 遺構(土)の境界
 22. 遺構(土)の境界
 23. 遺構(土)の境界
 24. 遺構(土)の境界
 25. 遺構(土)の境界

0 1m



- 210-2トレンチ b 北壁
1. 遺構(土)の境界
 2. 遺構(土)の境界
 3. 遺構(土)の境界
 4. 遺構(土)の境界
 5. 遺構(土)の境界
 6. 遺構(土)の境界
 7. 遺構(土)の境界
 8. 遺構(土)の境界
 9. 遺構(土)の境界
 10. 遺構(土)の境界
 11. 遺構(土)の境界
 12. 遺構(土)の境界
 13. 遺構(土)の境界
 14. 遺構(土)の境界
 15. 遺構(土)の境界
 16. 遺構(土)の境界
 17. 遺構(土)の境界
 18. 遺構(土)の境界
 19. 遺構(土)の境界

1:1 縮尺で示す(土層は 5cm 間隔で省略して示す)



- 210-2トレンチ c 東壁
1. 遺構(土)の境界
 2. 遺構(土)の境界
 3. 遺構(土)の境界
 4. 遺構(土)の境界
 5. 遺構(土)の境界
 6. 遺構(土)の境界
 7. 遺構(土)の境界

1:1 縮尺で示す(土層は 5cm 間隔で省略して示す)

Fig.98 条 210-2 次調査土層観察図 (1/40)

(3) 検出遺構 (Pla.5-1)

以下、今回の調査地点のすべての遺構に共通することだが、今回の調査はあくまで重要遺構の確認調査という調査制限があるため、必要最小限の掘削でとどめている。よって遺構の性格は推論にならざるを得ず、調査時に遺構を確認した際のデータで遺構の性格を推測しているため、限界があることをあらかじめご了承ください。

■**210-2ST001 (Fig.99)**

調査区北西部に位置する墓と推定される遺構。L字状の石組みが確認できる。石組みの直線部分を基準に考えると、主軸は西へ大きく振っている。平石と遺物が集中している範囲は、南北長 1m、東西長 1.5m で掘り方は、いびつながら正方形に近く南北長 1.45m、東西長 1.5m である。この範囲に土師器の小皿 a と国産陶器・中国陶器の壺が散乱している。墓の設計としては、本来は平行を使い、方形(おそらく正方形に近い平面形)に区画してその中央部を掘り、その中心に壺を据えてその上に墳丘を構築したものと考える。そのため、これらの壺はこの墓に伴う骨蔵器というよりはのちに墓に供えられたものか、周辺の壊れた墓からの混入と考えたい。中央部の扁平な石と組み合せて現状南側に北から斜めに倒れこんでいる 0.2m×0.2m の石は、本来は直立して標石として機能していた可能性が考えられる。

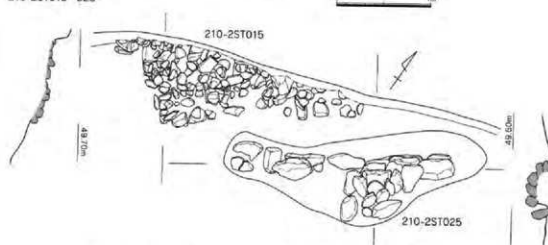
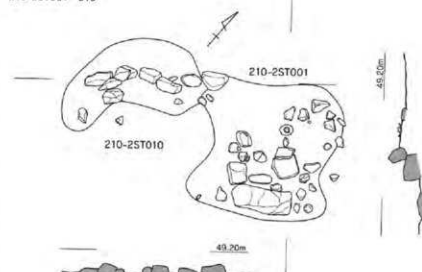


Fig.99 210-2ST001・005・010・015・025 遺構実測図 (1/40)

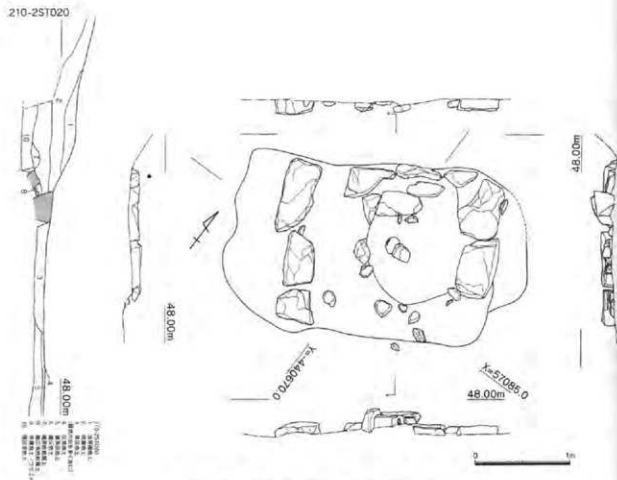


Fig.100 210-2ST020 遺構実測図 (1/40)

出土遺物から大宰府土器編年XX期前後以前に埋まった可能性がある。

210-2ST005 (Fig.99)

調査区西部中央に位置する墓。長方形で平たい石が数枚所確認できる他は、手のひらサイズの割れ石が集中している。遺構の掘り方の軸はやや西へ掘っており、長軸長2.1cm、短軸長1.3mのプランを持つと考えられる。また、阿蘇凝灰岩製の五輪塔火輪の軒部が出土していることから、墳丘の上には五輪塔が存在していた可能性がある。出土遺物から12世紀前半以降に埋没したことが考えられる。

210-2ST010 (Fig.99)

調査区北西部に位置する墓と推定される遺構。直線的な石組みが1.5mほど確認された。掘り方はその石組みを中心に南北1.5m、東西1mのびつな形状をしている。

210-2ST015 (Fig.99)

調査区北部中央に位置する墓と推定される遺構。210-2ST025に隣接する。緑色片岩で墳丘を覆っている。調査区外に展開しているため、全容は不明だが確認できる範囲では、長軸長2.1m、短軸長1mとなる。墳丘からは五輪塔の破片が3点出土している。このことから墳丘の上部施設として五輪塔が存在していた可能性が考えられる。

210-2ST020 (Fig.100)

調査区中央部に位置する墓と推定される遺構。平坦な石を据えて石組みをしている。その範囲は長軸長2.4m、短軸長1.8mを測る。掘方は長軸長3.2m、短軸長2.1m。南西方向に張り出すように灰青色粘質土の平面方形の堆積と、そのまわりに灰褐色土が堆積している。これらの土層が北側に隣接

する石組み本体と関係するかは現時点では不明である。出土遺物の中国陶器壺V類から13世紀後半から14世紀前半以降に埋められたものと考えられる。五輪塔を上部に安置していてもおかしくないほど、しっかりした石積みである。

210-2ST025 (Fig.99)

調査区北部中央に位置する墓と推定される遺構。平石を直線的に組み合わせているもので、北側に面を持つ石積み遺構。すくなくとも3段は積まれている。中央から東側には南方向の石も配置される。長軸長2.4m、短軸長0.7m、高さ0.25m。掘方は石組みを囲むように確認された。

その他の遺構

210-2SX008 (Fig.101)

調査区中央部やや北側に位置する緑色片岩を中心として集石された遺構。五輪塔の破片などが表面の集石の中から見つかるなど、墓の可能性も高い。しかしながら北から南へ傾斜する地形で、北と南で0.6mもレベル差があることや、墓と認定できる平面プランなどが調査時点では確認できなかったため、ここでは集石遺構としておく。遺構のプランが調査区外に展開するため、全容は不明だが長軸長2m、短軸長1.2mを測る。出土遺物は国産陶器の壺、甕等が出土しており、遺構の埋没は江戸時代以降と推定している。

210-2SX009 (Fig.101)

調査区中央部やや北側に位置する集石遺構。長軸長1.1m、短軸長0.7m。平面は南側が欠けているが長方形を呈していたと推測できる。ただし、他の推定墓遺構と違い掘り方が明確ではない。集石の間に口縁部を欠損した国産陶器の壺が出土している。

210-2SX030 (Fig.102, Pla.5-2)

調査区東部中央部からやや北側に位置する集積遺構。集積の範囲は長軸長2.75m、短軸長2.2m。現状ではハゼの木の根元に集積されたようになっている。この集積遺構は地藏菩薩の石仏や墓碑(近世)を中心に、周辺に散在していたと思われる中世墓のパーツを集積し、それに中世墓に葺かれていた緑色片岩を集めてアウンド状に盛り上げて構成されている。この集積墓の注目すべき点としては、集積された中世墓構成パーツの数の多さである。空風輪10基、火輪1基、水輪7基、地輪1基、板碑19(梵

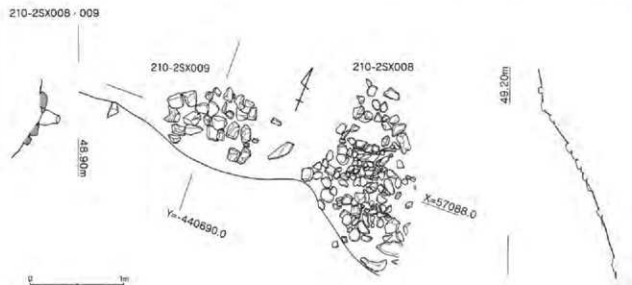


Fig.101 210-2SX008-009 遺構実測図 (1/40)

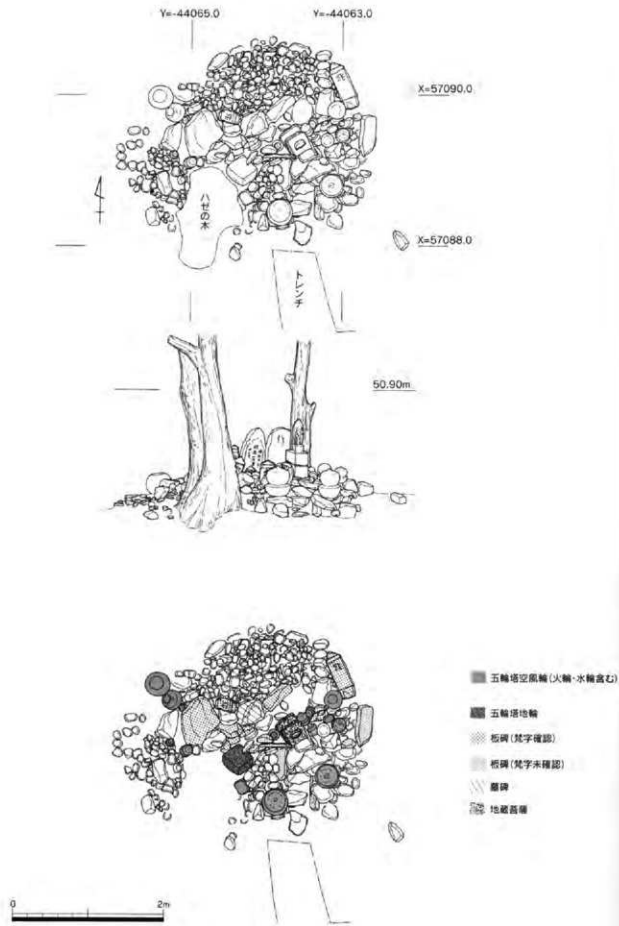


Fig.102 210-2SX030 遺構実測図 (1/50)

字確認したのが14基、未確認が5基)基、墓碑1基、地藏菩薩とその台座1基が確認された。これらは他地域から搬入したのではなく、本調査地に近接した場所より移動されたと考えている。原因としては、土砂崩れなどのため中世墓地が崩壊してしまい、後にそれが露頭した際に供養のために集積して供養したのではないかと推定している。その中でも高さ40cm以上の空風輪2基は、五輪塔として復元した場合の高さが1.6mを超えるため、太宰府地方では珍しい大形五輪塔として注目される。なお、210-2SX030の遺構図作成と石造物の把握には、同僚の宮崎亮一技師の協力を得た。

(4) 出土遺物

墓出土遺物

210-2ST001 出土遺物 (Fig.103)

土師器

小皿 a (1) 復元口径 6.7 cm、器高 1.3 cm、復元底径 4.8 cm。底部切り離し技法は摩耗が激しく推定だが回転系切り技法か。

陶器

壺 (2、3) 2 は体部破片。器高 6.5+ cm、復元胴部最大径 13.6 cm。3 は口縁部を欠損するが、完形に近い壺である。器高 20.0+ cm、胴部最大径 22.6 cm、底径 11.0 cm である。体部の調整は強い回転ナデが施される。

210-2ST005 出土遺物 (Fig.103)

土師器

杯 a (4) 底部破片。器高 1.6+ cm、復元底径 8.4 cm。底部切り離し技法は回転系切り。

石製品

五輪塔 (5) 火輪破片。軒部。残存高 5.35 cm。阿蘇凝灰岩製。

210-2ST020 出土遺物 (Fig.103)

瓦類

丸瓦 (6) 縦 18.4 cm、横 10.4 cm、厚さ 1.8 cm。凹面調整は布目痕跡。同じく凸面には太い紐の結び目痕跡あり。凸面は細目叩きをナデ消している。焼成は良好。瓦質。端部はヘラ切り、凹面側には端部から 1 cm ほどの範囲を縦方向のヘラ削りを施し、面取りをしている。

210-2ST020 灰茶色土出土遺物 (Fig.103)

土師質土器

こね鉢 (7) 口縁部破片。片口部。器高 3.0+ cm。

金属製品

釘 (8) 縦 5.4+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.7 cm。

210-2ST020 明黄茶色土出土遺物 (Fig.103)

陶器

壺 (9) 口縁部から体部の破片。復元口径 10.9 cm、器高 6.8+ cm。口縁部は肥厚し水平に外側に張り出す。釉調は暗茶褐色。光沢があり透明度は低い。中国産。V類。墓に伴う蔵骨壺であった可能性が高い。

その他の遺構出土遺物

210-2SX004 出土遺物 (Fig.103)

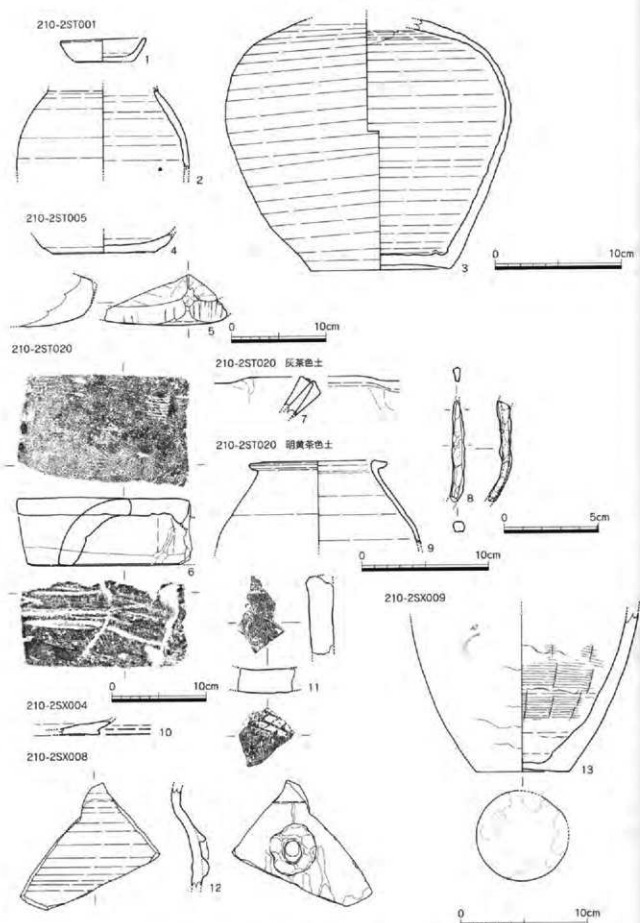


Fig.103 第210-2次調査墓、その他の遺構出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/4)

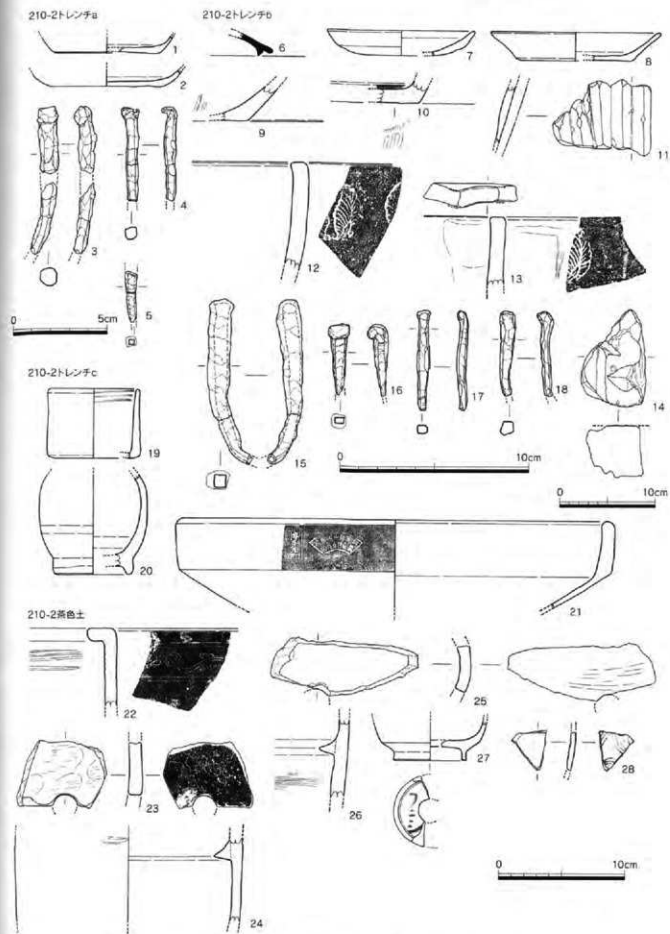


Fig.104 第210-2次調査トレンチ、土層出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/4)

土師器

小皿 a (10) 底部破片。器高 1.1+ cm。底部切り離し技法は摩耗のため不明。

瓦類

平瓦 (11) 小破片。縦 8.2+ cm、横 6.4+ cm、厚さ 2.4 cm。凹面は布目痕。凸面は格子目目調整。端部はへら削り後に面取り調整をしている。

210-2SX008 出土遺物 (Fig.103)

陶器

壺 × 瓶 (12) 体部破片。残存高 7.8 cm。体部の肩部には中央が窪む 5 方向からの指頭圧痕が明瞭に残る突起が貼り付けられている。

210-2SX009 出土遺物 (Fig.103)

陶器

壺 (13) 体部から底部の破片。器高 12.4+ cm、復元底径 7.3 cm。内面は横方向刷毛目調整。

210-2 トレンチ a 出土遺物 (Fig.104)

土師器

坏 a (1, 2) 1 は器高 1.3+ cm、復元底径 8.4 cm。摩耗して調整は不明。2 は器高 1.4+ cm、復元底径 8.8 cm。底部切り離しは回転糸切り。

金属製品

釘 (3, 4, 5) 3 は釘の頭部と中部の破片。接合しない同一個体である。縦 3.55 cm、横 3.8+ cm、厚さ 0.95 cm。4 は頭部から中部までの破片。縦 5.0+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.7 cm。5 は釘の先端部破片。縦 2.7+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.55 cm。

210-2 トレンチ b 出土遺物 (Fig.104)

須恵器

蓋 1 (6) 小縁部破片。器高 1.8+ cm。

土師器

小丸坏 a (7) 復元口径 10.6 cm、器高 2.0 cm。底部切り離しは回転へら切りで、その後底部を押し出している。

坏 a (8) 復元口径 13.4 cm、器高 2.3 cm、復元底径 8.8 cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

土師質土器

播り鉢 (9) 底部破片。器高 2.7+ cm。焼成は不良。

瓦質土器

鉢 (10) 底部破片。器高 1.8+ cm。内面に強く刷毛目痕調整が認められる。

火鉢 (11, 12, 13) 11 は火鉢の胴部修飾部の破片。断面三角形の縦方向のパーツの一部。残存高 5.0 cm。12, 13 とともに口縁部破片。12 は器高 8.6+ cm。13 は器高 5.6+ cm。口縁部に切り込みが入り輪花状になると推定される。口縁部は 12 と 13 は同一個体の可能性がある。

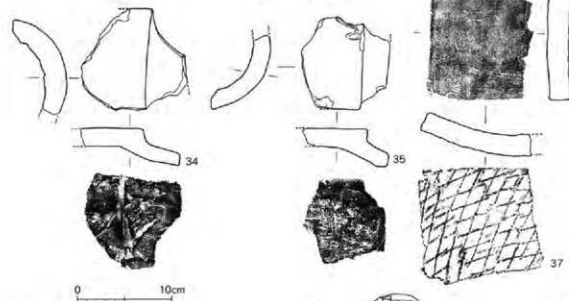
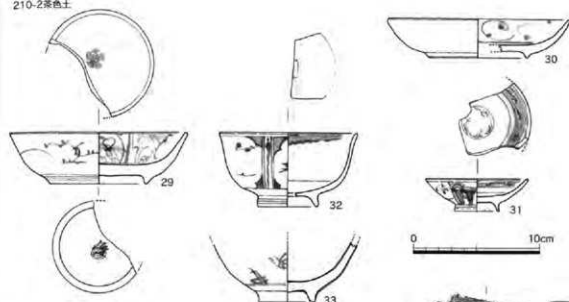
石製品

五輪塔 (14) 破片。縦 10.3+ cm、横 6.8+ cm、高さ 5.5+ cm。石材は阿蘇凝灰岩。

金属製品

釘 (15, 16, 17, 18) 15 は先端部が曲がり欠損している。縦 8.7+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.4 cm。16 は頭部が折れ曲がっている。縦 3.8 cm、横 1.15 cm、厚さ 1.1 cm。17 は縦 5.3+ cm、横 0.75 cm、厚さ 0.7 cm。18 は縦 4.5+ cm、横 0.9 cm、厚さ 0.9 cm。

210-2茶色土



210-2黄色土

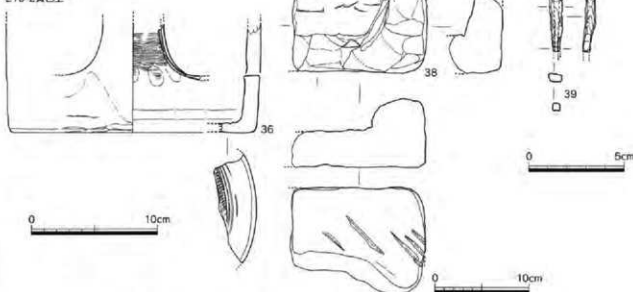


Fig.105 第210-2次調査土層出土遺物実測図その1 (1/2, 1/3, 1/4)

210-2 トレンチ c 出土遺物 (Fig.104)

国産磁器

筒型壺 (19) 復元口径7.3cm, 器高5.5+cm。内面は呉須による3条の線を染付。外面は青磁釉を施す。

青磁

壺 (20) 小型の壺。器高7.9+cm, 復元底径6.1cm。復元胴部最大径8.6cm。畳付部は軸刺ぎをす。内面は基本的に軸をけず露胎だが、見込み部には口縁部から垂れた軸が面まっている。

210-2 茶色土出土遺物 (Fig.104, 105)

陶器

焙烙 (21) 復元口径34.6cm, 器高7.0+cm。外面口縁部には2種類のスタンプが施される。1つは方形の「博多元町(続きあり)」。もう1つは、扇形のスタンプで上部に「 \square 兼業御試験済」下部に「 \square 博多 \square 」とある。

土師質土器

七輪 (22~26) 22は口縁部破片。器高6.2+cm。内側に水平に折り曲げられている。外面に流雲文を施す。「試」という文字を彫っている。23は体部破片。縦5.2+cm, 横7.0+cm, 厚さ1.1cm。穿孔あり。外面には文様あり。24は体部破片。七輪のサンが落ちないように、内面に断面三角状の突帯をめぐらす。器高6.9+cm。25は体部破片。縦4.4+cm, 横11.7+cm, 厚さ0.9cm。26は体部破片。24と同じ部位。器高6.0+cm。

陶器

植木鉢 (27) 底部破片。底部中央に水抜きのために穿孔されている。器高3.0+cm, 復元底径5.7cm。高台内部に「フニシ」と墨書されている。

青白磁

梅壺 (28) 破片。縦3.1cm, 横2.6cm, 厚さ0.45cm。

肥前磁器

皿 (29, 30) 29は復元口径14.0cm, 器高4.1cm, 復元底径7.7cm。内外面に呉須で絵付けを施す。内面文様は「竹ノ葉」。外面文様は「唐草文」。見込み五弁花文はコンニャク印判。高台中央には「海福」を描く。30は復元口径14.4cm, 器高3.1cm, 復元高台径8.0cm, 見込み部は蛇ノ目軸刺ぎ。畳付は露胎。高台内部も露胎。内面を呉須で絵付けしている。内面の文様は「花卉」。

小皿 (31) 内外面を呉須で絵付けしている。復元口径8.1cm, 器高2.6cm, 復元高台径3.6cm。高台の畳付は軸刺ぎ。外面文様は「宝」文様。

椀 (32, 33) 32は復元口径10.8cm, 器高5.85cm, 復元高台径4.8cm。内外面はしぶい藍色の呉須で絵付けをしている。高台畳付は軸刺ぎ。33は器高4.8+cm, 高台径4.4cm。外面に呉須で絵付けを施す。内面見込みは蛇ノ目軸刺ぎ。

瓦類

丸瓦 (34, 35) 34は縦10.6+cm, 横9.8+cm, 厚さ2.4cm。凸面は丁寧なナテ調整。凹面はヘラ削り調整。35は縦9.1+cm, 横7.4+cm, 厚さ2.0cm。凸面は丁寧なナテ調整。凹面は粗目削り調整。

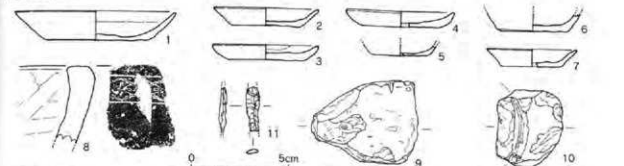
210-2 茶色土出土遺物 (Fig.105)

土師器

七輪 (36) 底部~体部破片。器高8.6+cm, 復元底径19.0cm。体部には大きくヘラにより窓が開けられている。内外面ともに使用時についたと思われる煤が確認できる。

瓦類

210-2 灰茶色土



210-2 灰褐色土

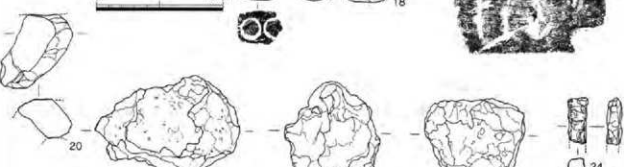


Fig.106 第210-2次調査土層出土遺物実測図その2 (1/2, 1/3, 1/4)

平瓦 (37) 縦 12.3+cm、横 12.0 cm、厚さ 2.4 cm。凹面は布目痕のあと不定方向のナテ調整。凸面は格子目印き。端部はヘラ切り後に角をナテ調整。

石製品

五輪塔 (38) 地輪破片。縦 11.25+cm、横 14.2+cm、厚さ 7.2+cm。内外面ともに工具による削りの痕跡が明瞭に残存している。阿蘇凝灰岩製。

金属製品

釘 (39) 頭部から中部までの破片。先端部は欠損している。縦 3.9+cm、横 0.8 cm、厚さ 0.7 cm。

210-2 灰茶色土出土遺物 (Fig.106)

土師器

杯 a (1) 口径 12.7 cm、器高 2.4 cm、底径 8.3 cm。表面の摩耗が激しく調整不明。
小皿 a (2~6) 2 は復元口径 8.2 cm、器高 1.4 cm、底径 7.6 cm。底部切り離し技法は回転系切り。板状圧痕。3 は口径 8.3 cm、器高 1.2 cm、底径 5.85 cm。底部切り離し技法は回転系切り。板状圧痕。見込みと口縁部内面に煤が付着している。4 は復元口径 8.4 cm、器高 1.25 cm、復元底径 5.7 cm。底部切り離し技法は回転系切り。板状圧痕。5.6 は口縁部欠損する破片。外面調整も磨滅によって不明瞭。5 は器高 0.8+cm、復元底径 4.4 cm。6 は器高 1.5 cm、復元口径 5.5 cm。

小皿 b (7) 復元口径 7.1 cm、器高 1.4 cm、復元底径 4.8 cm。底部切り離し技法は回転系切り。

瓦質土器

火鉢 (8) 口縁部破片。器高 6.15+cm、口縁部外面に沈線で区切った範囲に菱形のスタンプを押している。内面は削り調整。外面は丁寧な横ナテを施す。

石製品

五輪塔 (9、10) 水輪破片か。9 は縦 8.9+cm、横 11.0+cm、高さ 6.8+cm、10 は縦 8.2 cm、横 7.0 cm、高さ 5.8 cm。肩部に窪みを持ち火輪との嵌めこみになるものか。溝状になっている窪みの径は 12~13 cm である。阿蘇凝灰岩製。

金属製品

用途不明 (11) 長さ 2.35+cm、幅 0.8 cm、厚さ 0.35 cm。全面に錆。

210-2 灰褐色土出土遺物 (Fig.106)

土師器

小皿 a (12) 復元口径 6.6 cm、器高 1.4 cm、復元底径 5.1 cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。

須恵質土器

甕 (13) 残存高 3.95 cm、幅 7 mm、高さ 3 mm ほどの突起を貼り付けている。

瓦質土器

火鉢 (14) 口縁部破片。器高 4.1+cm。内面は丁寧な横ナテ。外面は菱形文をスタンプしている。焼成は良好。

仏器 (15) 体部破片。器高 4.7+cm、復元胴部最大径 15.3 cm。内面は不定方向の削り。体部には横一列に 3 つの方形が入れ子になっているような方形文様をスタンプしている。

陶器

蓋 (16) 復元口径 7.6 cm、器高 1.85+cm、かえりをもつ蓋。施軸される。胎土は淡黄褐色で、釉調は黄褐色。

瓦類

軒平瓦 (17) 瓦当の破片。縦 4.3+cm、幅 8.9 cm、厚さ 2.5 cm。瓦当文様は、中心飾りとして宝珠

を配置し、左右に唐草文を配す。

軒丸瓦 (18) 瓦当の破片。縦 9.2+cm、横 5.0+cm、厚さ 4.2 cm。円形のスタンプ文がめぐる。

丸瓦 (19) 縦 16.5+cm、横 13.3 cm、厚さ 2.4 cm。凸面は摩耗により調整不明。凹面は布目痕跡。袋の継ぎ目痕が確認できる。

土製品

輪羽口 (20) 破片。縦 3.9+cm。体部の色調は暗灰色と橙色に変化している。

金属製品

鉄銚 (21~23) 21 は縦 5.5 cm、横 5.3 cm、厚さ 2.4 cm。表面に黒灰色の付着物がある。22 は縦 6.3 cm、横 5.2 cm、厚さ 2.5 cm、23 は縦 5.6 cm、横 7.7 cm、厚さ 2.5 cm。表面に黒色 (若干艶あり) の鉱物が付着している。

釘 (24、25) 24 は釘頭から体部中位の破片。縦 2.45+cm、横 1.1 cm、厚さ 0.8 cm、25 は先端部の破片。縦 1.15+cm、横 0.6+cm、厚さ 0.45+cm。

土製品

不明品 (26) 縦 8.3+cm、横 9.0+cm、厚さ 4.1 cm。中央部に穿孔あり。色調は淡黄橙白色。部分的に錆の付着と煤の付着が認められる。

210-2 表土出土遺物 (Fig.106、107)

須恵器

甕 (27) 口縁部破片。口縁端部は貼り付けをして、外側に肥厚させている。復元口径 23.1 cm、器高 6.0+cm。焼成は良好。還元良好。色調は暗灰色。

陶器

小皿 (28) 復元口径 10.9 cm、器高 1.95 cm、復元底径 6.6 cm。内面中央部に梅鉢文、見込み部に「太宰府神口(社)」と文字を浮き彫りにする。

播鉢 (29) 底部破片。器高 4.1+cm、復元底径 13.8 cm。内面に播目を 6 条彫り込む。外面底部は工具によるナテ調整。内面の器壁は使用により表面が磨滅して平滑になっている。

肥前系磁器

湯呑み茶碗 (30) 復元口径 6.4 cm、器高 5.1 cm、復元高台径 3.4 cm。外面に貝須により絵付けをする。外面の文様は「遠山」「雁」である。高台登付部は釉剥きをして露胎しており、重ね焼き時の砂粒が付着している。

磁器

椀 (31) 31 は復元口径 10.7 cm、器高 6.1 cm、復元高台径 4.2 cm。高台登付部は釉をかきとる。高台内部も施釉。釉調は淡緑灰色~淡茶灰色が横筋状に施される。

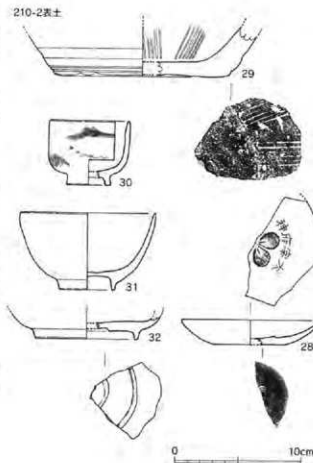


Fig.107 第210-2次調査土層出土遺物実測図その3 (1/3)

皿 (32) 32は器高2.0+cm、復元高台径8.2cm。高台内面を蛇ノ目状に軸をかきとっている。軸調は光沢がありガラス質、不透明で細かい貫入が全体に入る。化粧土を使用。

(5) 小結

遺構は墓と考えられるものが集中して検出された。中でも、五輪塔を伴う可能性が高い石組み墓(210-2ST020)が検出されており注目される。それ以外は平石を区画して使う墓と、緑色片岩を多量にマウンドに積み積石墓が見つかっている。出土遺物からは12世紀前半～14世紀前半、近世、近現代のものが出土している。江戸期の墓の可能性のある210-2SX008もあり、古代未から中世～近世と長期にわたって墓地として利用されてきたことが明らかになった。

後の特論で詳細は触れているが、210-2SX030で見つかった五輪塔空風輪2点は無銘無種子の大型五輪塔の構成物であり、その特徴からいわれる「律宗系五輪塔」と考えられる。そして、210-2ST020の石組み遺構と結びつけて考えると、このあたりに大型五輪塔が複数立ち並んでいた風景が推定可能になった。地形的にも平野の奥まった山裾の平坦部でもあり、五輪塔が立ち並んでその周囲には緑をもとめて積み石墓が点在した墓地、もっといえば中世寺院に伴う「奥の院」であった可能性が高くなった。これについては特論で論ずる。

後の課題としては、地表面に露出していた210-2SX030の石像物群の詳細の調査である。これは調査地周辺に路頭していたものを集積したものと考えられるが、多くの情報を含んでいる。残念ながら、調査時は五輪塔空風輪に注目したのみに終わった。しかしながら、改めてみるとそれらの構成物は興味深いものが多い。大小の五輪塔、そして板碑群。これらも詳細に観察していけば、多くの情報をもたらしてくれるはずだ。また、江戸期の石像物もある。たとえば、墓碑にして「明和四亥年 釈西口(山偏)に左ノ右下に平、異体字と思われ)吳十一月二日」とある。明和四年丁亥は西暦1767年である。法名が釈で始まっているので浄土真宗の墓碑とわかる。墓碑の形も自然石(花崗岩)を使って古い様相を残している。地藏菩薩に刻まれた「寛保二戌年 施主 觀世村金平」も寛保二年壬戌(1742年)とあり、古いものである。江戸時代、18世紀中頃に当時の観世村金平が施主として地藏菩薩を建立した理由は何だったのだろうか、興味は尽きない。

周辺の出土遺物に肥前系陶磁器が点在しており、年代も18世紀代のものがあるため、中世以来再びこのあたりを墓として再利用しはじめた時期を示しているのかもしれない。

調査直前まで地蔵菩薩には水やお供えものがしてあったのを確認している。現在でも信仰が続いているのだろうか。

現在、調査地点は埋め戻した跡に整地され、東に隣接している新興住宅地の公園として利用されている。その公園の片隅に文化財説明板とともに210-2SX030はそのままでみる事ができる。いずれ石像物の評価が定まると最低でも五輪塔空風輪の大型の2点については、きちんとした保護措置を施す必要がある重要な文化財と考えている。

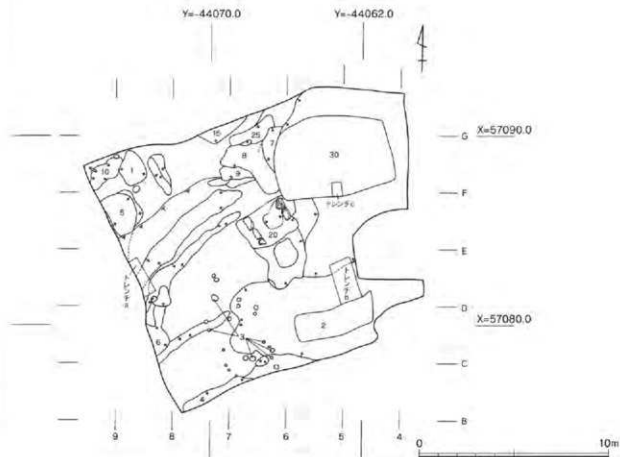


Fig.108 第210-2次調査 遺構略図 (1/200)

Tab.9 大宰府系坊跡第210-2次調査遺構一覧表

遺構番号	遺構名称	種別	所在	出土状況(1点/1群)	遺構形状(1点/1群)	遺構群	時期	地目番号
1	210-2SX008	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F9
2	210-2SX009	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F5
3	210-2SX010	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F6
4	210-2SX011	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F7
5	210-2SX012	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F8
6	210-2SX013	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F9
7	210-2SX014	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F10
8	210-2SX015	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F11
9	210-2SX016	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F12
10	210-2SX017	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F13
11	210-2SX018	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F14
12	210-2SX019	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F15
13	210-2SX020	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F16
14	210-2SX021	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F17
15	210-2SX022	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F18
16	210-2SX023	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F19
17	210-2SX024	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F20
18	210-2SX025	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F21
19	210-2SX026	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F22
20	210-2SX027	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F23
21	210-2SX028	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F24
22	210-2SX029	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F25
23	210-2SX030	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F26
24	210-2SX031	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F27
25	210-2SX032	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F28
26	210-2SX033	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F29
27	210-2SX034	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F30
28	210-2SX035	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F31
29	210-2SX036	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F32
30	210-2SX037	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F33
31	210-2SX038	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F34
32	210-2SX039	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F35
33	210-2SX040	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F36
34	210-2SX041	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F37
35	210-2SX042	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F38
36	210-2SX043	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F39
37	210-2SX044	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F40
38	210-2SX045	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F41
39	210-2SX046	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F42
40	210-2SX047	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F43
41	210-2SX048	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F44
42	210-2SX049	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F45
43	210-2SX050	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F46
44	210-2SX051	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F47
45	210-2SX052	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F48
46	210-2SX053	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F49
47	210-2SX054	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F50
48	210-2SX055	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F51
49	210-2SX056	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F52
50	210-2SX057	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F53
51	210-2SX058	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F54
52	210-2SX059	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F55
53	210-2SX060	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F56
54	210-2SX061	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F57
55	210-2SX062	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F58
56	210-2SX063	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F59
57	210-2SX064	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F60
58	210-2SX065	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F61
59	210-2SX066	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F62
60	210-2SX067	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F63
61	210-2SX068	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F64
62	210-2SX069	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F65
63	210-2SX070	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F66
64	210-2SX071	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F67
65	210-2SX072	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F68
66	210-2SX073	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F69
67	210-2SX074	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F70
68	210-2SX075	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F71
69	210-2SX076	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F72
70	210-2SX077	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F73
71	210-2SX078	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F74
72	210-2SX079	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F75
73	210-2SX080	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F76
74	210-2SX081	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F77
75	210-2SX082	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F78
76	210-2SX083	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F79
77	210-2SX084	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F80
78	210-2SX085	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F81
79	210-2SX086	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F82
80	210-2SX087	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F83
81	210-2SX088	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F84
82	210-2SX089	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F85
83	210-2SX090	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F86
84	210-2SX091	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F87
85	210-2SX092	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F88
86	210-2SX093	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F89
87	210-2SX094	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F90
88	210-2SX095	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F91
89	210-2SX096	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F92
90	210-2SX097	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F93
91	210-2SX098	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F94
92	210-2SX099	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F95
93	210-2SX100	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F96
94	210-2SX101	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F97
95	210-2SX102	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F98
96	210-2SX103	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F99
97	210-2SX104	遺構	6畝/5	出土層位が不明(西)	碑状形状(1点/1群)	12世紀前半	IX	F100

※(遺構番号)は表記入から100、101、102、103、104、105、106、107、108、109、110、111、112、113、114、115、116、117、118、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135、136、137、138、139、140、141、142、143、144、145、146、147、148、149、150、151、152、153、154、155、156、157、158、159、160、161、162、163、164、165、166、167、168、169、170、171、172、173、174、175、176、177、178、179、180、181、182、183、184、185、186、187、188、189、190、191、192、193、194、195、196、197、198、199、200、201、202、203、204、205、206、207、208、209、210、211、212、213、214、215、216、217、218、219、220、221、222、223、224、225、226、227、228、229、230、231、232、233、234、235、236、237、238、239、240、241、242、243、244、245、246、247、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、258、259、260、261、262、263、264、265、266、267、268、269、270、271、272、273、274、275、276、277、278、279、280、281、282、283、284、285、286、287、288、289、290、291、292、293、294、295、296、297、298、299、300、301、302、303、304、305、306、307、308、309、310、311、312、313、314、

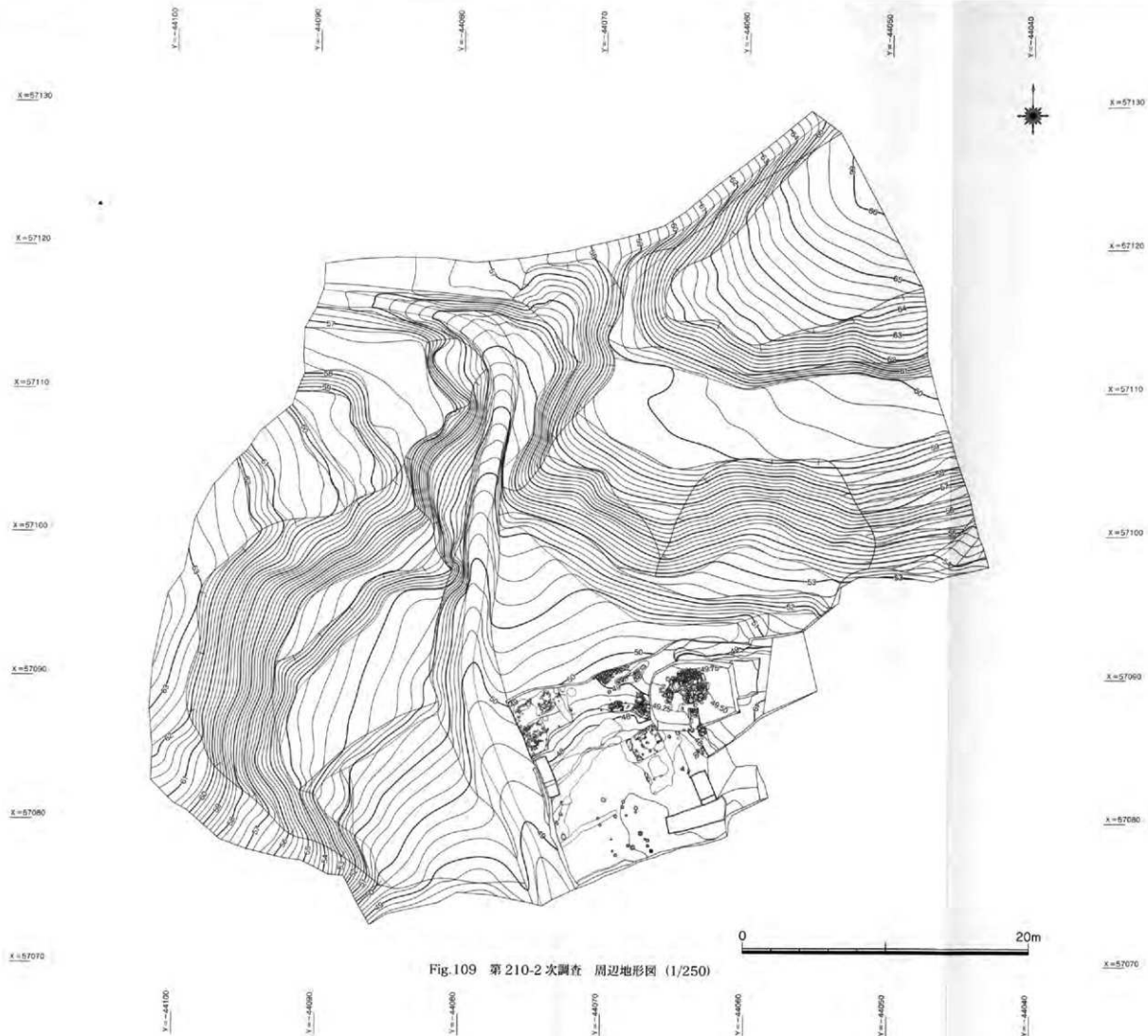


Fig.109 第210-2次調査 周辺地形図 (1/250)

Tab.10-1 大宰府条坊跡第210-2次調査 出土遺物一覧表(1)

S-1①		トレンチ a	
土師器	小皿 a (6)	肥前系陶磁器	陶片類 (内面黒釉, 内面赤白) (1)
四角海貝	壺	阿波系磁器	白磁器
中吸陶器	壺: A-2 (2)	中吸陶器	壺: B (1)
S-1②		トレンチ b	
土師器	小皿	肥前系陶磁器	陶片類 (内面赤磁器)
S-1③		赤色土	
阿波系赤磁器	横: L1b (1)	阿波系赤磁器	横: L1b (1)
土師器土器	壺 灰赤	土師器土器	壺 赤 灰赤
陶器土器	横鉢	陶器土器	横鉢
肥前系陶磁器	染付磁器 (片立赤土50%) 横 (L2a?) 角皿 皿 横 横付磁器 (片立赤土60%) 横鉢	肥前系陶磁器	染付磁器 (片立赤土50%) 横 (L2a?) 角皿 皿 横 横付磁器 (片立赤土60%) 横鉢
四角海貝	丸 壺 (黒磁器 7a?) 壺 横鉢 陶片 小赤土器	四角海貝	丸 壺 (黒磁器 7a?) 壺 横鉢 陶片 小赤土器
四角海貝	壺 白磁器 横付 白磁器	四角海貝	壺 白磁器 横付 白磁器
瓦類	横鉢 (1)	瓦類	横鉢 (1)
瓦類	平瓦 (灰赤, 横付) 瓦瓦 (灰赤, 横付)	瓦類	平瓦 (灰赤, 横付) 瓦瓦 (灰赤, 横付)
石製品	平瓦 (土師器, 横文) 横鉢, 瓦 七五瓦 緑色片岩 (4d) 五輪塔 (灰赤磁器灰)	石製品	平瓦 (土師器, 横文) 横鉢, 瓦 七五瓦 緑色片岩 (4d) 五輪塔 (灰赤磁器灰)
S-2		黄色土	
土師器	環 壺 横片	土師器	環 a (1)
瓦類	平瓦 (横赤磁, 横付) 平瓦 (横文) いし瓦	土師器土器	土師器
石製品	横石?	肥前系陶磁器	染付磁器 (灰赤)
S-3		陶器土器	
土師器	横片	陶器土器	壺
瓦類	平瓦 (横文)	白磁	横, 赤磁器片壺 横, 赤磁器
石製品	緑色片岩 (5d) 五輪塔	瓦類	平瓦 (灰赤) 平瓦 (横赤磁, 横文) 横鉢, 瓦 平瓦 (横赤磁, 横付) 瓦瓦 (横赤磁, 横文) 七五瓦 五輪塔 (灰赤磁器灰) 緑色片岩 (5d)
S-4		灰赤色土	
土師器	環 壺 横片	土師器	環 a (1) 小皿 a (1) 横片 (横赤磁)
肥前系陶磁器	小皿	土師器	横: L2 (1) 壺 (2) 皿 (2) 横片 (1)
瓦類	平瓦 (横赤磁, 横付) 平瓦 (横文) いし瓦	阿波系赤磁器	壺 壺
石製品	横石?	高麗系磁器	壺 横 (1)
S-5		土師器土器	
土師器	環 a (小皿 a (1) 八節? 横片)	土師器土器	小皿
瓦類	平瓦 (横文)	瓦瓦土器	横鉢 横片
石製品	緑色片岩 (5d) 五輪塔	肥前系陶磁器	染付 横 皿
S-6		四角海貝	
四角海貝	横片	四角海貝	横 横 (内面赤文) 壺 壺 横鉢, 横片
土師器	横片	白磁	横, 横片 (1)
瓦類	横片	青白磁	横鉢 (4)
S-6①		中吸陶器	
四角海貝	壺 壺	中吸陶器	壺: A-2 (1) 皿 (赤磁器) (1)
S-6②		赤色土	
四角海貝	壺	赤色土	丸瓦 (灰赤, 横文) 平瓦 (横赤磁, 横文) 横鉢, 横片 平瓦 (土師器, 横付) 平瓦 (横赤磁, 横付) 横鉢, 横片, 瓦 阿波系灰赤 緑色片岩 (6d) 石磨?
S-7 明鏡赤色土		灰赤色土	
土師器	小皿 a	土師器	壺 横片
四角海貝	壺	土師器	環 a 小皿 a (1) 小皿 b 横片
S-20 灰赤色土		阿波系赤磁器	
土師器	横片	阿波系赤磁器	壺 壺
土師器土器	こね鉢	高麗系磁器	壺 横 (1)
四角海貝	壺 横鉢	土師器土器	小皿
瓦類	平瓦 (横赤磁, 横付) 平瓦 (横文, 横付)	瓦瓦土器	横鉢 横片
石製品	阿波系灰赤	肥前系陶磁器	染付 横 皿
トレンチ a		陶器土器	
土師器	環 a (6)	陶器土器	壺
阿波系赤磁器	横: L1 (1)	瓦類土器	瓦鉢 横鉢 横付
土師器土器	壺 (土師器) (1)	肥前系陶磁器	染付磁器 (L1b-?)
土師器土器	横赤磁	四角海貝	横鉢 横鉢 壺 壺 横赤磁器 横鉢片 横 (L1a-?)
白磁	横: L1a (1)	阿波系陶器	横: L1 (1) 壺 (横赤→) 横片
中吸陶器	壺, 瓦 (横付)	陶器土器	横片
瓦類	平瓦 (横赤磁, 横付) 横片	白磁	横: V2a (1) ~ V10-4 (1) 横片 (1)
トレンチ b		中吸陶器	
瓦類	壺 1	中吸陶器	壺: A-2 (2) 壺 (1) C-1 (1) D-1 (1) (1)
土師器	環 a 小皿 a	陶器土器	壺
土師器土器	土師 横鉢	陶器土器 (横人)	横鉢系無釉陶器
瓦類土器	横鉢 (1)	瓦類	平瓦 (横赤磁, 横文) 瓦瓦 (横赤磁, 横文) 瓦瓦 (横赤磁, 横付) 平瓦 (横赤磁, 横付) 平瓦 (横赤磁, 横文) 七五瓦 横鉢, 瓦
白磁	横: L1 (1)	金銀製品	横鉢
中吸陶器	壺: A-4 (1) A-2 (1)	石製品	横鉢 五輪塔 (灰赤磁器灰) 緑色片岩 (5d) 横鉢片
石製品	瓦類 (横赤磁) 緑色片岩 (1)	土師器	平瓦 (横赤磁, 横付) 横鉢
トレンチ c		その他	
土師器	壺 1	その他	灰赤色土
土師器	環 a 小皿 a		
土師器土器	土師 横鉢		
瓦類土器	横鉢 (1)		
白磁	横: L1 (1)		
中吸陶器	壺: A-4 (1) A-2 (1)		
瓦類	瓦瓦 (横赤磁, 横付) 横鉢		
石製品	瓦類 (横赤磁) 緑色片岩 (1)		

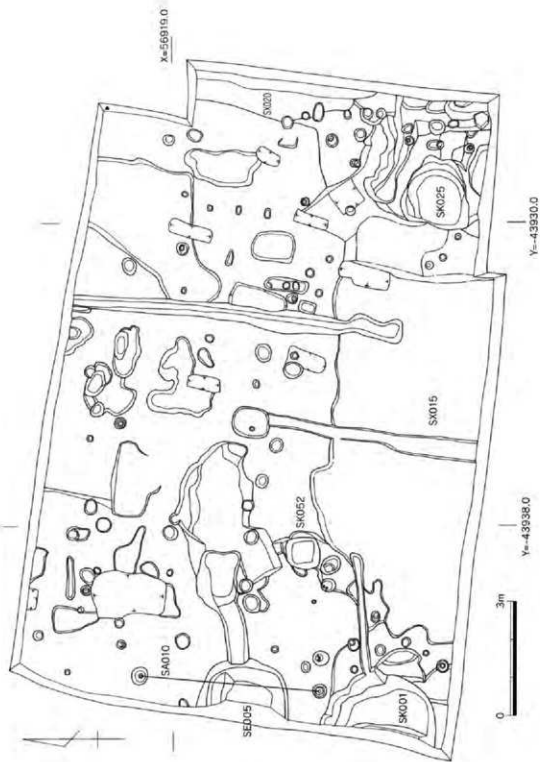


Fig.111 第283次調査遺構全体図 (1/100)

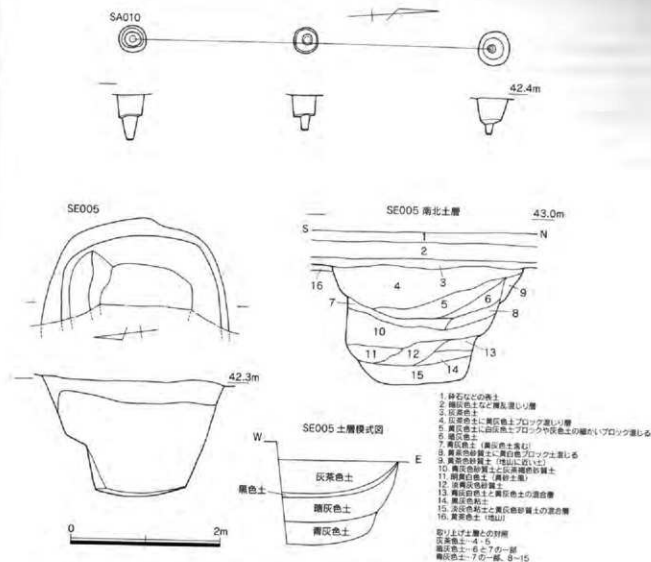


Fig.112 283SA010・SE005 遺構実測図 (1/50)

井戸

283SE005 (Fig.112)

調査区西端で検出された円形状の土坑で、深さや形状から井戸と推測される。掘り方は南北2.48m、東西1.45m以上で、深さは1.58mを測る。埋土に井戸枠の痕跡は確認できず、木片や曲物などの破片も全く出土していなかった。埋土途中に炭屑があるなど井戸構築時の掘り方の埋土というより、掘後の埋め戻しのような痕跡が見られた。

土坑

283SK001 (Fig.113)

調査区西端で検出された円形状の土坑で、南北3.05m、東西1.6m以上で、深さは0.84m、西側が若干深くなっていて、さらに調査区外に続いている。埋土は白色粘土混じりの灰茶色土のほぼ単層で、自然堆積ではなく、人為的に埋められたと考えられる。SX015と並んでおり、小さな土坑ではなく、溝もしくは大きな土坑になる可能性もある。

283SK025 (Fig.113)

調査区南東で検出された円形状の土坑で、南北1.8m、東西1.95mで、深さは0.77m。埋土は暗灰色土と黄灰色土の混合層で、中位には西側から傾斜した炭層が堆積し、その前後で完形の土師器が多数出土した。

283SK052 (Fig.113)

南北0.9m、東西0.85m、深さ0.4mの方形土坑で、上層に瓦とその直下に須恵器の横瓶が積み重なって出土した。

段落ち

283SX015

調査区南側に展開する段落ちで、専用住宅の基礎の掘削深度より深くするため、上面のみ調査し、残りは完掘せずに保存している。SK025付近の検出状況からすると、北側の遺構検出面より0.4m低い位置に平坦面が広がり、さらにその面に溝やピットが展開しているものと考えられる。埋没時期がSX020と同時期であり、SK001も並んでおり、東西の区画溝のようなものになる可能性がある。

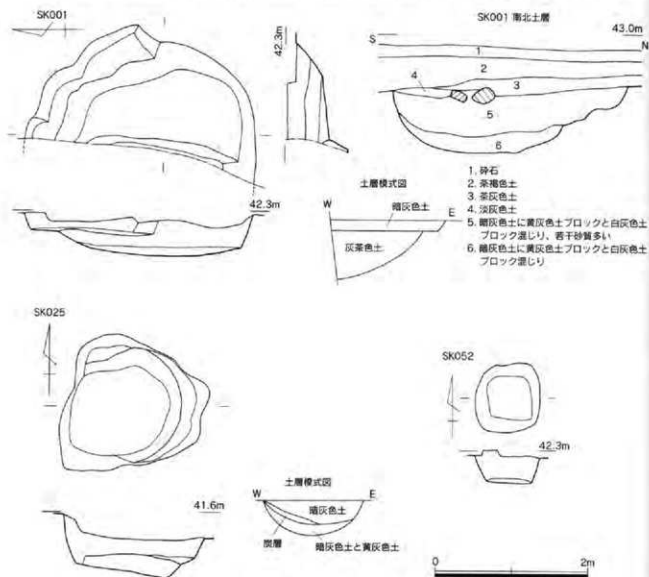


Fig.113 283SK001・025・052 遺構実測図 (1/50)

283SX020

調査区東端で南北に溝状に検出されたもの、調査区際の上、すぐ東を現在市道が南北に走っており、東側の状況が分からない現状では、段落ちとして報告する。第284次調査にも続いており、合わせて振れはN-5° 34' 47° -Wである。この市道付近が井上条法案の左第10坊路の推定ラインに位置するため、SX020は道路関連遺構の可能性は十分考えられる。最終埋没時期は条坊廃絶後である。

(4) 出土遺物

横列もしくは縦柱建物

283SA010a 出土遺物 (Fig.114)

瓦器

横 (1) 口縁部で内外面にミガキが残る。胎土は精製されている。

283SA010b 出土遺物 (Fig.114)

土師器

小皿 a (2) 外面底部には板状圧痕が残る。焼成はやや不良で淡褐色を呈する。

甕 (3) 口縁部で、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良で淡褐色を呈する。

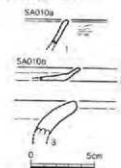


Fig.114
283SA010 出土
遺物実測図 (1/3)

井戸

283SE005 反茶色土出土遺物 (Fig.115)

土師器

小皿 a (1, 2) 1は復元口径9.2cm、器高1.2cm、復元底径7.0cm。底部外面には板状圧痕が残る。2は復元口径9.6cm、器高1.2cm、復元底径7.0cm。底部は回転ヘラ切り。

丸底坏 (3, 4) 内面にはミガキbが残る。

甕 (5) 口縁部で端部はヨコナデ、下半はヨコハケ、内面下半はヘラケズリである。外面の一部には煤が付着する。胎土は0.3cm以下の砂粒を含み、色調は茶灰色などを呈する。

283SE005 黒色土出土遺物 (Fig.115)

土師器

小皿 a (6) 復元口径9.8cm、器高1.15cm、復元底径7.8cm。底部切り離しは不明だが、外面底部には板状圧痕が残る。

丸底坏 a (7) 復元口径15.8cm、器高3.3cm。口縁部は肥厚させている。底部押し出しは明瞭であるが、指頭圧痕は明瞭でない。内面はミガキbを施す。焼成は良好である。

283SE005 暗灰色土出土遺物 (Fig.115)

土師器

小皿 a (8, 9) 2点とも外面はヘラ切りで僅かに板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。8は復元口径9.3cm、器高1.65cm、復元底径6.6cm、9は復元口径9.6cm、器高1.2cm、復元底径6.4cm。

坏 a (10) 復元口径14.0cm、器高3.6cm、底径9.0cm。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。内面底部はナデで、その他は回転ナデ調整。色調は灰黄褐色を呈する。

丸底坏 a (11, 12) それぞれ復元口径15.0cmと16.0cm。胎土には金雲母を含み、色調は淡褐色を呈する。11の外面下半には指頭圧痕が残る。

瓦類

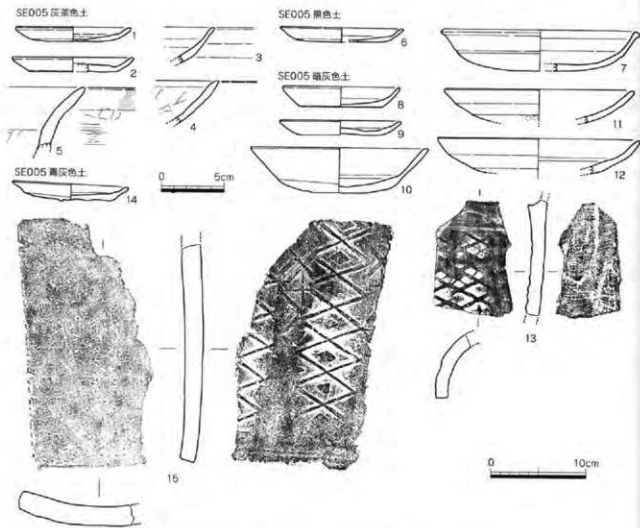


Fig.115 283SE005 出土遺物実測図 (1/3, 13・15 は 1/4)

丸瓦 (13) 凸面はやや大きな格子印き。焼成は良好で灰褐色を呈する。

283SE005 青灰色土出土遺物 (Fig.115)

土師器

小皿 a (14) 口径 9.2cm、器高 1.4cm、底径 6.8cm。底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面底部はナデで、その他は回転ナデ。色調は淡黄白色を呈する。

瓦類

平瓦 (15) 凸面に大きめの格子とその中に菱形を有する印きを施す。端部断面は分測線ではヘラ切りし切断後未調整である。

土坑

283SK001 暗灰色土出土遺物 (Fig.116)

土師器

小皿 a (1, 2) 2点とも焼成不良で磨滅し、調整不明。1は復元口径 8.8cm、器高 0.9cm、復元底径 6.1cm。2は復元口径 9.3cm、器高 0.95cm、復元底径 7.2cm。

坏 a (3) 底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕も残る。内面底部は不定方向のナデ。復元口径 11.4cm、器高 2.4cm、復元底径 7.9cm。焼成良好で淡橙白色を呈する。

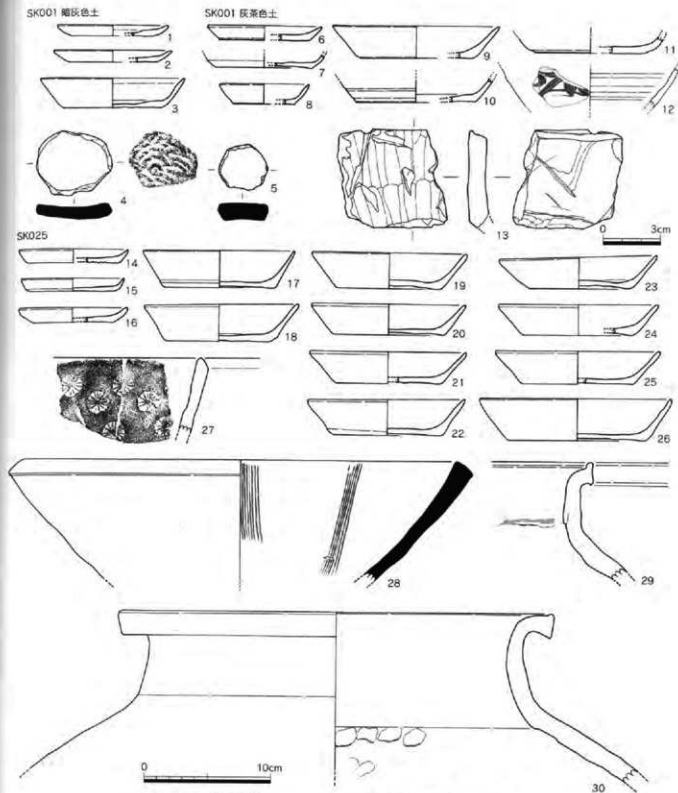


Fig.116 283SK001・025 出土遺物実測図 (1/3, 13 は 1/2)

須恵器

磨加工品 (4, 5) 全面的に磨滅し、断面も加工し丸くなる。現場の環境から自然に磨滅したとは思えず、人為的なものと考えられる。4は内面に同心円印きを有する裏の破片。5は内外面ナデ調整された裏もしくは裏の破片である。

283SK001 灰茶色土出土遺物 (Fig.116)

土師器

小皿 a (6, 7) 6は復元口径9.0cm、器高1.2cm、復元底径7.1cm。底部外面には板状圧痕が残り、切り離しは不明。7は復元底径7.6cm。底部切り離しは回転糸切り。

小皿 b (8) 復元口径7.0cm、器高1.6cm、復元底径5.0cm。内外面回転ナデ。底部調整は不明。色調は淡橙白色を呈する。

坏 a (9~11) 3点とも底部切り離しは回転糸切りで、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整である。9は復元口径13.1cm、器高2.6cm、復元底径8.8cm。10は復元底径9.4cmで、底部外面に板状圧痕が残る。11は復元底径8.8cm。

青白磁

壺 (12) 形状から壺の下半付近と見られる。胎土は僅かに黒色粒を含む。内面は回転ナデのあと若干青味のある透明釉を施し、外面は細広で浅い彫り込みの文様を施したあと、青味のある白濁した釉を施す。

石製品

石鏃 (13) 滑石製石鏃を二次加工した破片である。内外面は石鏃の時の縦方向の細かいケズリを施し、外面に煤が付着する。

283SK025 出土遺物 (Fig.116)

土師器

小皿 a (14~16) 復元口径8.2~8.7cm、器高1.05~1.2cm、復元底径6.5~7.2cm。底部切り離しは回転糸切りとみられるが、14は板状圧痕が強くて確認できない。14は板状圧痕があるが16にはない。3点とも内面底部はナデ調整される。

坏 a (17~26) 17~25は復元口径12.0~13.0cm、器高2.45~2.95cm、復元底径7.9~8.8cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、板状圧痕を残す。内面底部はナデで、その他は回転ナデ。胎土は金雲母や微細な砂粒を含むが精製されている。26は他より大きく、復元口径15.2cm、器高3.35cm、底径10.8cm。底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕を残す。

土師質土器

鉢 (27) 内面に菊花文のスタンプを施す。口縁端部はヨコナデ調整で、色調は黄白色を呈する。

須恵質土器

楕鉢 (28) 復元口径36.6cm。胎土は0.3cm以下の砂粒を含むが精製されている。内外面ともヨコナデで、内面には間隔をあけて縦方向の摺り目を施す。また、内面底部は使用によりやや滑らかになっている。

国産陶器

甕 (29, 30) 常滑産とみられる甕である。29の胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含む。内外面はヨコナデ調整。色調は内外面とも暗赤茶褐色を呈し、焼成時の灰がぶり部分は灰黄色を呈する。頸部内面には粘土接合痕が残る。30は復元口径34.4cm。外面は頸部から肩部と口縁部内面に自然釉がかかり、肩部が灰緑色、頸部から口縁部内面にかけて茶褐色を呈する。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含む。内外面ともヨコナデ調整され、肩部内面には口縁部接合時のナデ調整の指頭圧痕が残る。

283SK052 出土遺物 (Fig.117)

須恵器

甕 (1) 胴部下半で、外面は平行叩きで、内面には同心円の当て具痕を残す。底部は若干擦り減っている。色調は還元不良で暗茶褐色を呈する。

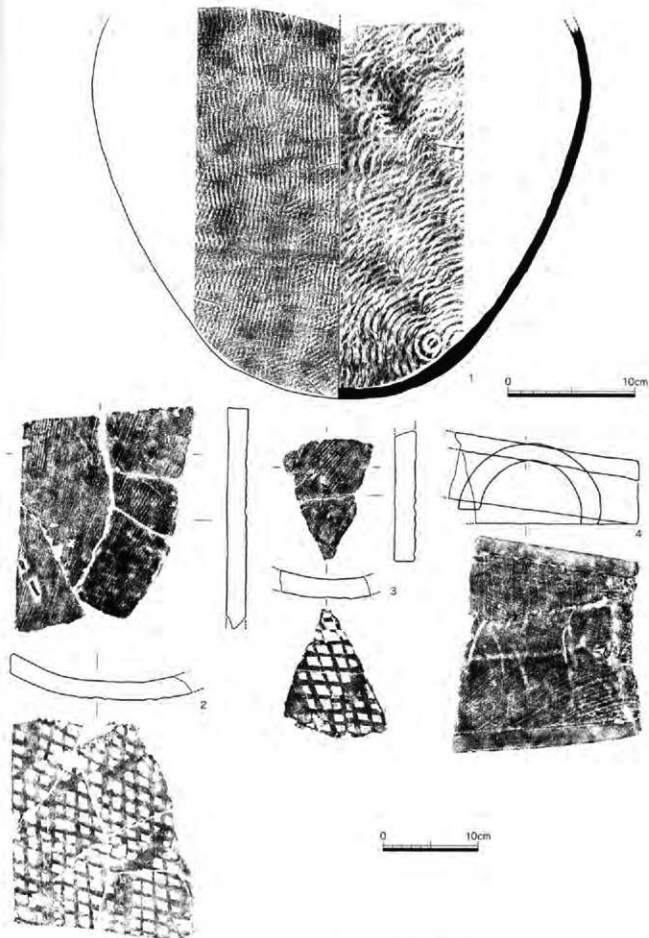


Fig.117 283SK052 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

瓦類

平瓦 (2, 3) 2点とも凸面にやや大きい格子叩きを施し、断面部はヘラケズリ調整する。内面には糸切り痕を残す。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良で灰白色を呈する。

丸瓦 (4) 全体的にやや歪んでいる。外面はヨコナデ、内面は布目痕を残す。断面部はヘラケズリ調整される。色調は灰白色や暗灰色を呈する。

その他の遺構

283SX015 赤茶色土出土遺物 (Fig.118)

土師器

小皿 a (1, 2) 底部切り離しは回転系切りで、内面底部は不定方向のナデ。1は復元口径7.7cm、器高1.15cm、底径5.8cm。2は復元口径7.8cm、器高1.25cm、復元底径4.2cm。

小皿 b (3) 復元底径3.4cm。底部切り離しは回転系切り。色調は淡褐色白色を呈する。

坏 a (4, 5) 底部切り離しは回転系切りで、その後板状圧痕を残す。内面底部は不定方向のナデ。端部に向かって細く仕上げる。4は復元口径12.2cm、器高2.6cm、底径7.8cm。5は復元口径13.3cm、器高3.1cm、底径7.5cm。

瓦器

椀 c (6) 丸く低い高台を貼付し、復元高台径6.4cm。磨滅し調整は不明瞭。

283SX015 灰茶色土出土遺物 (Fig.118)

土師器

小皿 a (7~10) 復元口径7.2~8.5cm、器高1.2~1.45cm、復元底径5.1~6.2cm。磨滅するものもあるが、底部切り離しは回転系切りで、板状圧痕を残す。色調は淡茶褐色などを呈する。

坏 a (11~18) 復元口径11.8~13.6cm、器高2.4~3.3cm、復元底径7.2~8.7cm。底部切り離しは全て回転系切りで、板状圧痕を残す。底部内面は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。12と18はやや歪んでいる。

甕 (19) 丸味のある口縁部で、体部内面はヘラケズリのようにみえる。胎土は0.5cm以下の砂粒を多く含み、色調は淡茶灰色を呈する。

土師質土器

鉢 (20) 口縁部を断面三角形に肥厚させる。口縁部はヨコナデで、内面は細かいヨコハケ、体部外面はナメハケの横ヨコナデで煤が付着する。微細な砂粒や金雲母を含み、色調は明褐色を呈する。

須恵質土器

鉢 (21) 復元底径13.2cm。外面はナデ調整、内面はヨコナデで使用により滑らかになる。胎土は0.5cm以下の砂粒や黒色粒を多く含む。色調は灰色を呈する。

瓦質土器

鉢 (22~24) 22の内面はヨコハケで、外面はヨコナデ。色調は白灰色を呈する。23は箱型の火鉢と考えられる。口縁部はミガキで、外面は斜め方向のナデ、内面は工具のようなヨコハケ痕が残る。胎土は0.3cm以下の砂粒を含み、断面白灰色、内外面は暗灰色を呈する。24は外面に径5.5cmの菊花文のスタンプを施す。内面はヨコハケ、口縁端部はナデ調整で、その一部に煤が付着する。胎土は微細な砂粒を多く含み、色調は灰白色や淡灰黄色などを呈する。焼成は良好である。

龍泉系青磁

椀 (25) 底部を残し、体部を意図的に打ち欠いている。底部内面に文様を施す。IV類。

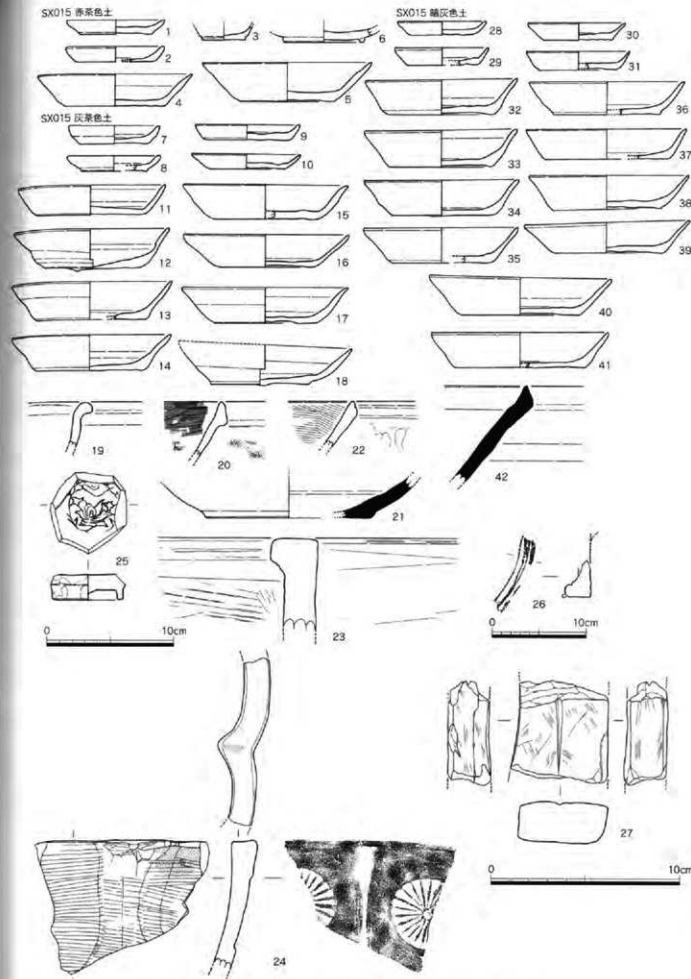


Fig.118 283SX015 出土遺物実測図 (1/3, 26は1/4, 27は1/2)

瓦類

軒丸瓦 (26) 軒丸瓦の周縁部分で、二重圓縁が確認できる。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

石製品

砥石 (27) 上下は欠損する。使用面は4面で、1面の中央に溝状の摺り目痕が残る。砂岩製。

283SX015 暗灰色土出土遺物 (Fig.118)

土師器

小皿 a (28~31) 復元口径7.0~8.2cm、器高1.1~1.5cm、復元底径4.8~6.0cm。底部切り離しは全て回転系切りで、板状圧痕を残す。底部内面は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。

坪 a (32~41) 復元口径11.9~13.0cm、器高2.4~2.95cm、復元底径8.0~9.7cm。底部切り離しは全て回転系切りで、板状圧痕を残す。底部内面は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。

須恵質土器

鉢 (42) 内外面ヨコナデだが、内面下半は磨滅する。色調は灰褐色で、口縁端部外面のみ暗灰色を呈する。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を含むが精製されている。

283SX020 出土遺物 (Fig.119)

土師器

小皿 a (1~5) 復元口径8.0~9.1cm、器高1.0~1.3cm、復元底径6.2~7.3cm。磨滅しているものもあるが、底部切り離しは全て回転系切りで、板状圧痕を残す。色調は橙褐色や黄茶褐色を呈する。

坪 a (6) 復元口径12.7cm、器高2.65cm、復元底径8.3cm。底部切り離しは回転系切りで、板状圧痕のようなものを残す。内面は磨滅する。色調は淡橙色を呈する。

瓦質土器

火鉢 (7) 内面はヨコハケで、外面はナデで、花文スタンプを施す。口縁端部は面取りしナデ調整を行う。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、灰色や暗灰色を呈する。

白磁

皿 (8) 復元口径8.8cm。口縁端部内面の軸を拭き取る。IX-a類。

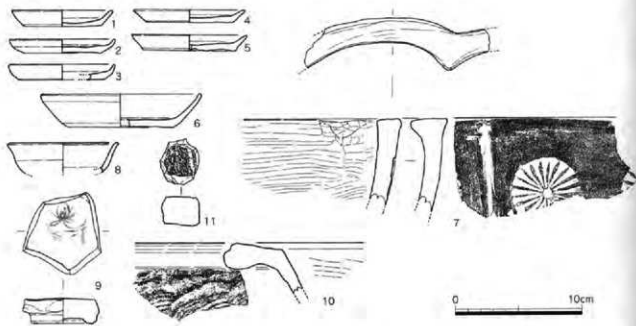


Fig.119 283SX020 出土遺物実測図 (1/3)

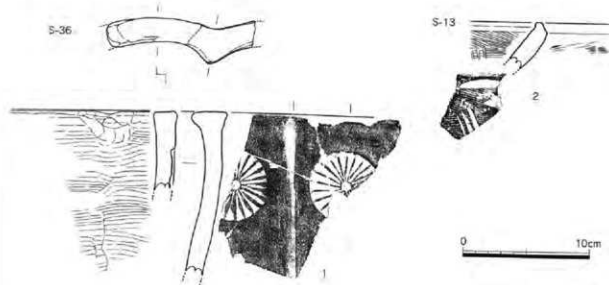


Fig.120 第283次調査その他の遺構出土遺物実測図 (1/3)

龍泉系系青磁

椀 (9) 底部を残し、体部を意図的に打ち欠いている。I類で内面に文様を施す。

中国陶器

甕 (10) 口縁部で、内面には同心円の当て具痕が残り、外面には斜め方向の平行叩きを施すが、ナデ消しているのか、うっすらと見える程度である。口縁端部は回転ナデ。胎土は0.2cm以下の砂粒や黒色粒を含み、褐灰色を呈する。I類。

瓦類

瓦玉 (11) 大きさは3.6×3.1cm、厚さ2.3cm。

その他の遺構出土遺物 (Fig.120)

瓦質土器

火鉢 (1) 内面はヨコハケで、外面はナデで、花文スタンプを施す。外面下半は縦方向のミガキを施す。口縁端部は面取りしナデ調整を行う。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、暗灰色や黒灰色を呈する。S-36より出土。

鉢 (2) 内面は細かいハケ、外面にも僅かにハケ目が残る。胎土は微細な白色粒を含むが精製され、色調は淡灰褐色を呈する。S-13より出土。

(5) 小結

調査では13世紀後半を前後する時期の遺物を中心に出土した。武藤氏が太宰府に來た時期や横岳崇福寺が創建された時期にあたる。しかし、調査地は横岳崇福寺境内や武藤氏屋敷跡の伝承が残る「御所内」の外側に位置し、両者に挟まれた場所に位置する。遺構については特異な状況は見られず、両者に関わる遺構と言いつける明確なものは確認できなかった。

また、東端の段落ち (SX020) については、西側のみのため、道路の側溝として成立するか明確で

ないが、井上条坊案の左郭10坊路の推定ラインに位置するため、道路関連遺構である可能性が考えられる。SX020の埋没時期は政庁廃絶後であるため、鎌倉時代にかけて道路として使用されていたことが推測される。市内の条坊が廃絶する中で、依然として使用され続けたのは、やはり横岳崇福寺や武藤氏屋敷が存在したことによるものだろう。

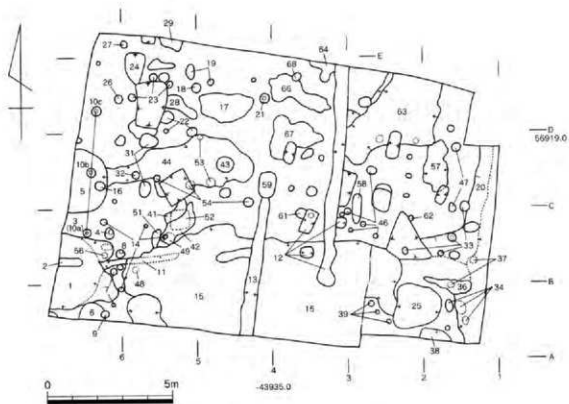


Fig.121 第283次調査遺構略測図 (1/150)

Tab.12 大宰府条坊跡第283次調査 遺構一覧表

シ番号	遺構番号	種類	遺上法	19世紀	19世紀
1	283S001	土塼		13 井上条坊	A01
2		溝	S-2 溝敷土	13 井上条坊	A02
3	283S005b	ビツト	溝敷土上 S-20 溝敷土		B0
4		ビツト	溝敷土上 自然築		B0
5	283S005c	溝		12 井上条坊	C0
6		土塼			C0
7		ビツト		12 井上条坊	A0
8		ビツト		12 井上条坊	A0
9		ビツト		12 井上条坊	B0
10		溝	S-5 溝	12 井上条坊	A0
11	283S010	溝	S-5 溝	12 井上条坊	A0
12		溝	S-11 溝	13 井上条坊	B0
13		溝			B0
14		溝	溝敷土 (中七砂層)	遺構-	A、C
15		溝			B0
16	283S015	溝		13 井上条坊 - 14 井上条坊	A0D - E
17		溝	S-5 溝		C0
18		溝			D0
19		溝	白色粘土層上 溝敷土	遺構-	D0
20	283S020	溝			D0
21		溝	溝敷土上 自然築	13 井上条坊 - 14 井上条坊	A、C
22		溝			D0
23		溝			D0
24		溝			D0
25	283S025	溝			D0
26		溝		13 井上条坊 - 14 井上条坊	A1 - 2
27		溝			D0
28		溝			D0
29		溝			D0
30		溝			D0
31		溝			D0
32		溝			D0
33		溝			D0
34		溝			D0
35		溝			D0
36		溝			D0
37		溝			D0
38		溝			D0
39		溝			D0
40		溝			D0
41		溝			D0
42		溝			D0
43		溝			D0
44		溝			D0
45		溝			D0
46		溝			D0
47		溝			D0
48		溝			D0
49		溝	S-16 溝		C0
50		溝			D0
51		溝			D0
52		溝			D0
53		溝			D0
54		溝			D0
55	283S025a	溝			D0
56		溝			D0
57		溝			D0
58		溝			D0
59		溝			D0
60		溝			D0
61		溝			D0
62		溝			D0
63		溝			D0
64		溝			D0
65		溝			D0
66		溝			D0
67		溝			D0
68		溝			D0

Tab.13-1 大宰府糸紡跡第283次調査 出土遺物一覧表

S-1 褐色土	
磁器部	高3、最大幅、厚加工品
土師部	小皿a (5件)、坪、坪a (5件)、壺、破片
瓦部	瓦葺土器
磁器系青磁	筒、1本 (1)
阿波系青磁	皿、1本 (1)
白磁	筒、1本 (1)
中国陶器	破片 (1)
瓦部	平瓦 (破片)、瓦文
S-1 灰白色土	
磁器部	筒、壺
土師部	小皿a (5件)、坪、坪a (5件)、壺、破片
磁器系青磁	筒、1本 (1)、皿 (1)、皿2 (1)
白磁	破片 (1)
中国陶器	破片 (1)
瓦部	平瓦 (破片)、破片 (1)
石製品	瓦石、石製加工品
S-2	
磁器部	破片
土師部	小皿a (5件)、坪、破片
石製品	瓦石
S-4	
土師部	坪、破片
S-5 灰紫色土	
磁器部	高1、坪a、坪c、壺
土師部	小皿a (5件)、小皿a (5件)、坪、瓦葺土器a、筒c、壺、破片
磁器系青磁	筒、筒c、破片
阿波系青磁	坪、1 (1)
瓦部	平瓦 (破片)、破片
土製品	壺土壺
S-5 灰白色土	
磁器部	壺、壺
土師部	坪a、小皿a、瓦葺土器a、壺、破片
瓦部	破片
中国陶器	破、V25a (1)
瓦部	瓦瓦 (破片)、平瓦 (破片)
土製品	壺土壺
S-5 黑色土	
磁器部	坪a、坪c、壺
土師部	小皿a (5件)、坪、坪a (5件)、筒c、壺、破片
瓦部	平瓦 (破片)
S-5 褐色土	
磁器部	壺
土師部	小皿a (5件)、坪、破片
磁器系青磁	筒、1 (1)
瓦部	瓦瓦 (破片)、平瓦 (破片)、破片 (1)
S-6	
磁器部	破片
土師部	小皿a (5件)、坪a (5件)、坪
中国陶器	壺 IV (1)
S-7	
磁器部	破片
土師部	小皿a (5件)、坪、破片
中国陶器	壺 IV (1)
瓦部	平瓦 (破片)、破片 (1)
S-8	
土師部	坪
瓦部	破片
S-9	
土師部	小皿a (5件)、坪、瓦葺土器

Tab.13-2 大宰府糸紡跡第283次調査 出土遺物一覧表

S-10a	
土師部	坪
瓦部	筒
S-10b	
土師部	小皿a、坪、壺
S-10c	
磁器部	坪
土師部	破片、破片 (5件)
中国陶器	破片 (1)
瓦部	破片
S-11	
磁器部	壺
土師部	小皿a (5件)、坪、筒c、破片、破片 (5件)
磁器系青磁	筒
阿波系青磁	筒 (1本 (1))
中国陶器	破片 (1本 (1))
瓦部	瓦瓦 (1)
S-12	
土師部	坪a (5件)、破片
瓦部	破片
土師部	破片
瓦部	筒 (瓦瓦)、平瓦 (破片)
S-24	
中国陶器	破片
阿波系青磁	破片 (1)
S-25	
磁器部	壺、筒
土師部	小皿a (5件)、坪、坪a (5件)、壺、破片
瓦部	破片
土師部	坪
中国陶器	破片
阿波系青磁	筒
磁器系青磁	筒、1 (1)、1-4 (1)、皿2 (1)
阿波系青磁	筒 (1本 (1))
白磁	筒 IV (2)、皿、1 (1)、IV (1)
中国陶器	壺 (1)
中国陶器	破片
土製品	土壺
石製品	瓦石、石製
瓦部	瓦瓦 (破片)、破片 (1)
S-26	
土師部	坪
瓦部	破片
S-27	
土師部	坪
S-28	
土師部	破片
S-29	
磁器部	壺、坪
中国陶器	小皿a
阿波系青磁	破片
S-31	
土師部	坪、破片
S-32	
中国陶器	坪c
土師部	小皿a、坪、筒c、壺
瓦部	瓦瓦
S-33	
土師部	坪、破片
瓦部	平瓦 (破片)
S-34	
土師部	小皿a (5件)、坪、坪a (5件)

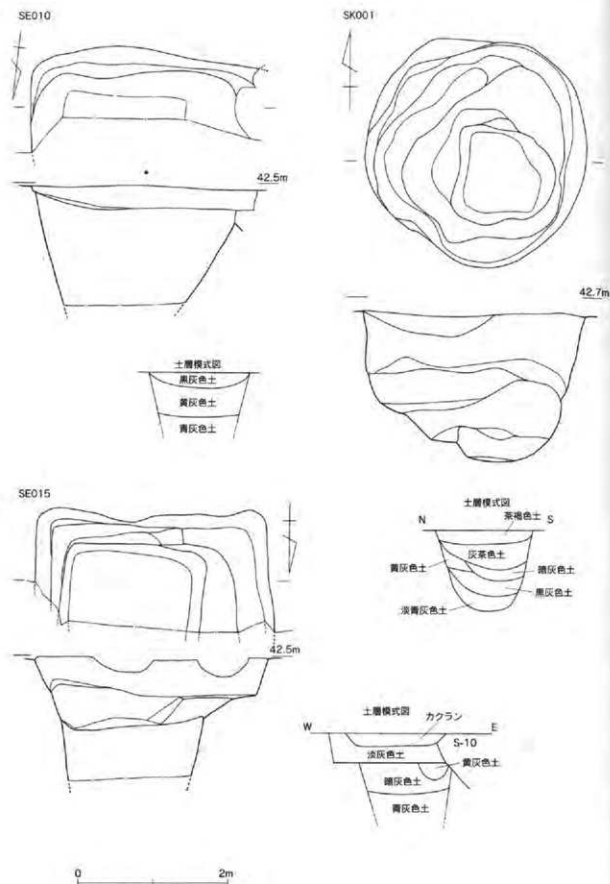


Fig.123 284SE010・015、SK001 遺構実測図 (1/50)

(2) 基本層位

調査直前は駐車場として利用されていたため、最上面には碎石が敷かれていた。その下には明確な耕作土は見られなかった。これら表土は0.4mと浅いため、現代の攪乱が遺構面に多くみられる。調査遺構面の標高は約42.3～42.5mである。なお、遺構検出の際の遺物ラベルは明茶色土で取り上げている。

(3) 検出遺構

井戸

284SE010 (Fig.123)

調査区際で湧水もあり、隣接地の崩落の危険があったため完掘はしていない。東西約3.0m、南北1.4m以上、深さ1.7m以上の隅丸方形の掘り方を持つ。調査区壁には井戸枠内が埋まったとみられる痕跡が土層で確認でき、井戸枠材とみられる板材も一部確認できたが、枠の構造は不明である。埋土は最上面に土師器を多く含む黒灰色土があり、その下に井戸枠のウラゴメ土とみられる黄色土と白灰色土ブロック土の混合層が堆積している。黒灰色土は井戸埋没後の陥没穴を埋めた土と推測される。

284SE015 (Fig.123)

284SE010同様、調査区際で湧水もあり、隣接地の崩落の危険があったため完掘はしていない。東西3.1m、南北1.6m以上、深さ1.6m以上の方形の掘り方を持つ。上面は284SE010や攪乱に切られている。埋土に部分的な違いはあるが、井戸枠痕と認識できるものではなく、板片も確認できていないが、284SE010と状況がよく似ているため井戸と推測される。

土坑

284SK001 (Fig.123)

東西2.92m、南北3.0m、深さ2.0mの円形の掘り方を持つ。形状から井戸と考えられたが、埋土からは井戸枠痕跡や井戸枠材など井戸に関するものは全く確認できていないため、土坑として報告する。しかし、埋土を除去した底面に約1.3m四方の方形に地山を掘削した状況があることから、井戸枠痕跡と考えた場合、井戸廃棄の際に完全に井戸枠を除去し埋められた可能性も考えられる。埋土の中位ほどでは奈良～平安前期の遺物が多く見られた。また、深さ1m付近には自然の草木が堆積したような腐植土が0.5m前後堆積しており、この土坑は大きく穴が開いていた状態で一時放置されていたことを物語っている。

段落ち

284SX005 (Fig.122)

第283次調査の283SX020の延長部分である。調査地隣接の市道に平行する形で確認された。方位はやや東に振っていて、283SX020と合わせるとおよそN-5°34'47"-Eを示す。調査区際のため東側の状況が不明なため、段落ちとして報告しているが、溝となる可能性も考えられる。検出長は15.2mで、第283次調査の283SX020を合わせると25.1mになる。深さは0.13～0.6mで南側ほど深く、傾斜も南に向かって下がっている。埋土は茶褐色土と灰茶色土で、硬化面などは確認できていない。井上条方案的左第十坊路の推定ラインに位置するため、条坊の道路を踏襲した痕跡の可能性が考えられる。

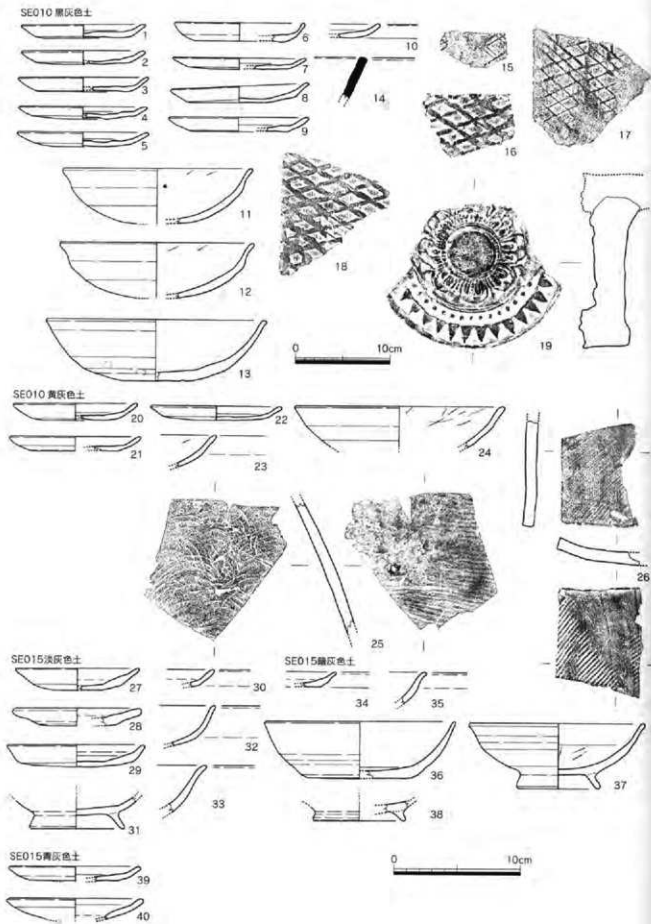


Fig.124 284SE010・015 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

(4) 出土遺物

井戸

284SE010 黒灰色土出土遺物 (Fig.124)

土師器

小皿 a (1~10) 復元口径 9.8~11.0cm, 器高 0.9~1.5cm, 復元底径 7.4~8.6cm, 6 以外底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整。6 の底部切り離しは回転糸切りで、胎土に細かい雲母が含まれ、若干光沢がある。

丸底坏 a (11、12) 内面ミガキ b で、口縁部近くにコテ当て痕も残る。11 は復元口径 15.0cm, 外面底部は回転ヘラ切り後ナデで、板状圧痕が残る。12 は復元口径 15.4cm, 回転ヘラ切り後押し出して、ナデ調整。

鉢 (13) 復元口径 17.4cm, 器高 4.8cm, 復元底径 13.6cm, 外面底部は回転ヘラ切り後粗いナデ調整で板状圧痕が残る。内外面上半部は回転ナデ、内面底部は回転ナデ後不定方向のナデ。色調は橙褐色を呈する。

須恵質土器

鉢 (14) 焼成はやや不良で、一部回転ナデ調整が確認できる。淡灰白色を呈する。

瓦類

平瓦 (15~18) 15 は二重の格子叩き。16・18 はやや太い斜格子叩き。17 はやや細い斜格子叩きを施す。

軒丸瓦 (19) 中房は消滅して蓮子は全く残っていない。外区は中房より高く、そこに珠文と鋸歯文がある。

284SE010 黄灰色土出土遺物 (Fig.124)

土師器

小皿 a (20~22) 復元口径 9.8~10.4cm, 器高 1.2~1.35cm, 復元底径 6.8~8.4cm, 外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整し、板状圧痕が残る。色調は明灰白色などを呈する。

丸底坏 (23、24) 23 は内面にコテ当て痕が残る。24 は復元口径 16.6cm, 内面はミガキ b でコテ当て痕も残る。その他は回転ナデ。

灰釉陶器

甕 (25) 外面は叩きのあと淡灰緑色釉を施す。一部厚く釉がかかる。内面は同心円の当て具で、釉がとて薄く点々と残る。胎土は 0.1cm 前後の砂粒や微細な黒灰色粒を含む。

瓦類

平瓦 (26) 凹面は布目痕と糸切り痕があり、部分的にナデ消している。凸面は櫛目状の叩きで一部ナデ消す。胎土は精製され、淡橙灰白色を呈する。側面はヘラ切りである。

284SE015 淡灰色土出土遺物 (Fig.124)

土師器

小皿 a (27~30) 復元口径 9.8~10.8cm, 27 は底部ヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデ。28 は全体的に厚い。底部はナデ調整に思えるが他は回転ナデ。淡橙褐色を呈する。29 は底部ヘラ切り後未調整で、板状圧痕が残る。

椀 c (31) 高台径 7.3cm, 外面底部に板状圧痕が残る。色調は淡黄白色を呈する。

椀 (32、33) 色調は淡茶褐色を呈する。32 は摩擦が目立つ。33 は内外面ヨコナデ。

284SE015 暗灰色土出土遺物 (Fig.124)

土師器

小皿 a (34) 体部はヨコナデが確認できるが、底部切り隠しは不明。

碗 (35) 摩滅が目立つが、内面にミガキのような痕跡が見える。

碗 a (36) 復元口径 15.2cm、器高 4.5cm、復元底径 8.2cm。外面底部はヘラ切り後未調整。内面底部はナデ、その他は回転ナデ調整である。胎土は 0.2cm 以下の砂粒を多く含み、暗黄白色を呈する。

丸底坏 c (37) 復元口径 13.9cm、器高 5.15cm、高台径 6.6cm。内面下半はミガキ b で、外面下半は押し出し後未調整。焼成は良好で淡灰褐色を呈する。

黒色土器

碗 c (38) 復元高台径 7.3cm。

284SE015 青灰色土出土遺物 (Fig.124)

土師器

小皿 a (39, 40) 内面底部ナデ調整、その他は回転ナデ。39 は復元口径 10.4cm、復元底径 7.0cm。底部切り隠しはヘラ切り。40 は復元口径 10.8cm。

土坑

284SK001 茶褐色土出土遺物 (Fig.125)

土師器

小皿 a (1) 復元口径 10.4cm、器高 1.35cm、復元底径 7.2cm。外面底部は板状圧痕が残り、内面底部は回転ナデの後不定方向のナデ調整を行う。焼成良好で茶灰色を呈する。

碗 (2) 口縁端部を僅かに外反させる。内外面回転ナデで、焼成は良好で淡白橙色を呈する。

284SK001 灰茶色土出土遺物 (Fig.125)

土師器

小皿 a (3, 4) 3 は復元口径 10.2cm、器高 1.0cm、復元底径 8.8cm。底部はヘラ切りで内面底部ナデ、その他は回転ナデ調整である。色調は淡白茶灰色を呈する。4 は復元口径 10.2cm、復元底径 8.4cm。底部はヘラ切り後ナデ調整。色調は淡茶灰色を呈する。

小皿 c (5) 復元口径 11.8cm、器高 2.4cm、高台径 7.6cm。坏部中央を打ち撞いて径 1.5cm の円孔を穿つ。

碗 c (6) 復元口径 17.0cm。口縁部を僅かに外反させる。焼成不良で内外面とも摩滅が目立つ。外面の底部近くは回転ヘラズリが確認できる。色調は淡白橙色を呈する。

器台 (7) 外面には手づくねの指頭圧痕が残る。内部には径 1cm 程度の空洞を作る。色調は橙灰色や黒灰色を呈する。

瓦類

平瓦 (8) 凸面に「観世」の文字を施した文字瓦で、側面は半分だけヘラ切りで折っている。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒や黒色粒を多く含む。焼成良好で灰色を呈する。

284SK001 暗灰色土出土遺物 (Fig.125)

土師器

小皿 a (9 ~ 12) 9 ~ 11 の復元口径は 9.8 ~ 10.0cm、器高 0.7 ~ 1.4cm、復元底径 7.0 ~ 7.3cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕もみられる。色調は黄橙色を呈する。10 の底部には 0.7cm の孔が焼成前に穿たれている。12 はやや他より大きく復元口径 11.2cm、器高 1.6cm、復元底径 9.0cm を測る。底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。

坏 a (13) 復元口径 13.4cm、器高 3.1cm、復元底径 10.8cm を測る。内面にミガキ b が施されているが、外面は上半部が回転ナデ、下半部がヘラ切り後ナデ調整のみで押し出した痕跡のみみられない。胎土には微細な雲母がやや多く含む。色調は茶灰色や灰色などを呈する。

丸底坏 a (14) 復元口径 13.2cm、器高 3.9cm、復元底径 10.5cm を測る。内面にはミガキ b が明瞭に残り、口縁部近くにはコテ当て痕も残る。外面上半部は回転ナデ、下半部は回転ヘラ切り後押し出しを行う。

越州窯系青磁

坏 (15) 遺構と直接関係の時期の遺物ではないが、あまり出土例がないため報告する。内外面に茶褐色釉を薄く施し、内外面底部に目跡が残る。体部は僅かに内湾気味に立ち上がる。胎土は黒色粒を僅かに含み茶褐色を呈する。1 類。

瓦類

軒平瓦 (16) 並列唐草文で、下外区は鋸歯文で、上外区は珠文である。

284SK001 黄灰色土出土遺物 (Fig.125)

須恵器

坏 c (17) 真っ直ぐ外開きの体部で、低い高台を貼付する。還元やや不良で灰白色を呈する。外面底部には「淨川」の墨書文字が書かれている。

284SK001 黒灰色土出土遺物 (Fig.125)

土師器

小皿 a (18 ~ 24) 復元口径 9.4 ~ 10.7cm、器高 0.9 ~ 1.5cm、復元底径 5.0 ~ 8.1cm。底部切り隠しは回転ヘラ切りで、23 を除いて板状圧痕が残る。内面底部はほとんどナデ調整される。

坏 a (25) 復元底径 9.0cm。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内面底部はナデ調整。

碗 c (26, 27) 26 は高台径 7.4cm、外面は回転ナデ調整。27 は復元高台径 7.6cm。丸みのある体部で内面底部以外回転ナデ調整。

丸底坏 (28) 復元口径 13.2cm。内面ミガキ b、外面中位に指頭圧痕が残る。底部はヘラ切り後未調整。

丸底坏 a (29) 復元口径 14.0cm。内面下半はミガキ b でコテ当て痕も残る。外面は摩滅するが口縁部は強く回転ナデを行う。胎土には金雲母がみられ、色調は暗黄白色を呈する。

丸底坏 c (30) 復元高台径 6.4cm。内面はミガキ b で、外面下半に指頭圧痕がみられる。

黒色土器

碗 c (31) 復元高台径 8.4cm。内面にミガキ c が僅かに残る。

石製品

砥石 (32) 両端を欠損しているようである。現存長 8.2cm、幅 4.9×3.65cm。4 面使用されている。284SK001 淡青灰色土出土遺物 (Fig.125)

須恵器

皿 c (33) 復元口径 18.4cm、器高 2.05cm、復元底径 14.6cm。外面底部は回転ヘラ切り後軽いナデ調整。内面底部は不定方向のナデ。色調は淡灰色で、体部外面は暗灰色を呈する。

土師器

碗 c (34) 復元口径 16.0cm。焼成不良で摩滅もあるが、外面下半は回転ヘラズリされる。色調は淡茶灰色を呈する。

大皿 c (35) 復元口径 24.0cm、器高 3.95cm、復元高台径 16.2cm。内外面とも体部はミガキ a が施され、内面底部は丁寧なナデ、外面底部は回転ナデ調整される。胎土には細かい金雲母が多く含ま

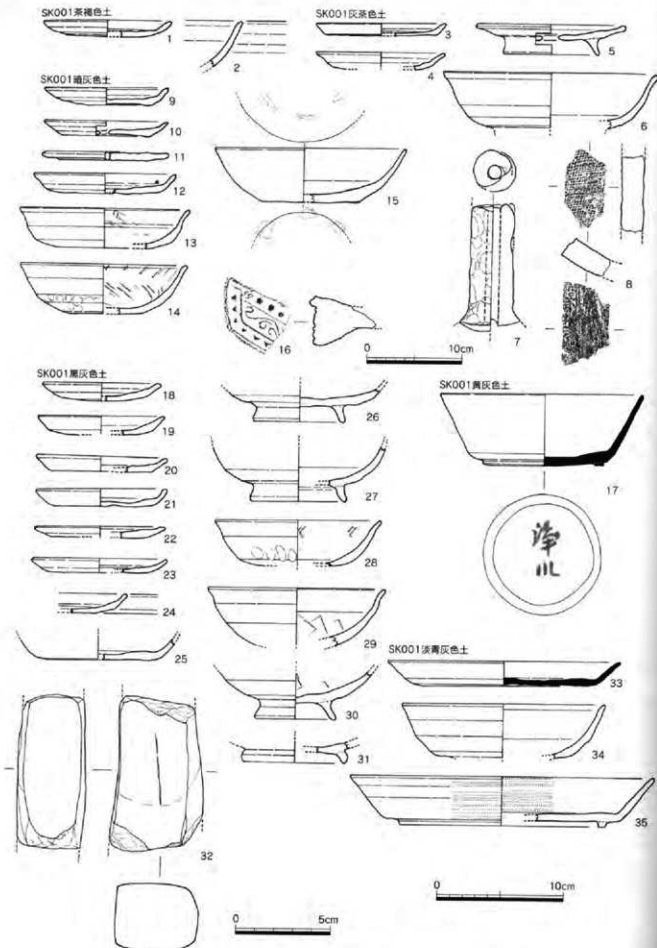


Fig.125 284SK001 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、32は1/2)

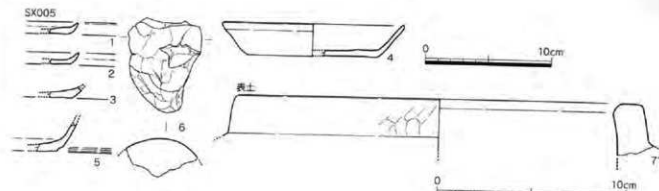


Fig.126 284SX005・表土出土遺物 (1/3、7は1/2)

れ、橙灰色を呈する。

その他の遺構

284SX005 出土遺物 (Fig.126)

土器

小皿 a (1~3) 1・2の胎土は微細な白色砂粒と金雲母を含む。1は器高1.0cm。調整は摩滅し不明。2は器高0.95cm。底部切り離しは不明瞭だが、糸切りのように見える。3は底部糸切り。

杯 a (4、5) 4は復元口径14.4cm、器高2.6cm、復元底径10.0cm。焼成不良で底部切り離しは糸切りのように見える。胎土は微細な白色砂粒を多く含む、金雲母も僅かに含む。5は焼成不良で全体的に摩滅し調整不明。

土製品

輪羽口 (6) 外面はナデ調整され、被熱で淡灰色に変色する。内部は黒褐色で中心部は淡橙褐色を呈する。胎土は白色砂粒を多く含む。

表土出土遺物 (Fig.126)

石製品

石鎧 (7) 鈎の部分が残る口縁部の破片で、内外面ケズリ成形され、内面は斜め方向の細かい傷が多数見られる。滑石製。

(5) 小結

南隣の第283次調査では13世紀代の遺構や遺物が多く確認できたが、今回の調査では284SX005以外に13世紀代の遺構は全く確認できず、平安後期の井戸などの深い遺構しか残っていなかった。ピット類も少なかったことを考えると、平安・鎌倉時代の地形は現在より若干高かった可能性が十分考えられ、掘削が浅い遺構は後世の削平により消失したものと推測される。

また、調査区東端を南北に検出された284SX005は、南隣の283SX020と合わせて井上条坊案の左第10坊路の推定ラインに位置する。詳細は第283次調査に記載しているが、条坊の道路を踏襲した痕跡と推測され、大宰府条坊を考える上で貴重な成果を得ることができた。

Tab.16-2 大宰府条坊跡第284次調査 出土遺物一覧表

S-6		S-21	
土器類	埴	瓦類	丸瓦・筒子形、平瓦・筒子形、横文
瓦類	丸瓦・筒子形	銅・鉄	肥前産銅器類
土器類1部	穴	石・石類	石製器類
			鏡身断片・石鏡
S-7		S-22	
瓦類	高坪瓦	瓦類	蓋瓦・埴・鏡片
土器類	小瓶・丸・埴・a(形)、蓋、鏡片	瓦類	鏡片(筒子形)
銅器類	鏡片	石類	鏡片(石)
		土器類	鏡片
S-23			
土器類	埴、小瓶・丸・埴・a(形)		
S-24			
銅器類	鏡片	銅器類	埴・c、鏡片
土器類	埴	銅器類	鏡片
土器類	鏡片	瓦類	丸瓦
		瓦類	鏡片
		銅器類	鏡片
		石類	鏡片(石)
		銅器類	鏡身断片
			鏡・a(形)
S-26		瓦上	
銅器類	鏡・c	銅器類	埴・c
土器類	小瓶・丸・埴・a(形)、小瓶・丸(形)、鏡	土器類	埴・埴・a(形)、鏡、蓋、鏡片
銅器類	鏡・c	瓦類	平瓦・筒子形、横文(横文)、横文、横文
銅器類	鏡・a(形)	石類	石鏡
銅器類	鏡・a(形)		
銅器類	平瓦・筒子形		

6. 山ノ井遺跡第1次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は大宰府市観世音寺5丁目881番にあり、観世音寺の北約400mの新山ノ井池の北岸に位置する。西側は国史跡観世音寺及び子院群に接する。

遺跡は南側に開く馬蹄形の丘陵地であり、中央に低平な窪地を有す。標高は谷底で56m、丘陵上部では66mを測る。

平成22年に開発に伴う事前協議が地権者からあり、事前の調査(踏査)により対象地の谷間で土器片と中世墓に特有の円礫状の緑色片岩が見られたため、重機による予備調査を実施した。調査では丘陵上部から谷底までの間に4つの試掘坑を設定し地下の状況を観察したところ、谷底の3トレンチにおいて地下約1mで鉄釘を伴った墓坑を検出した。平成23年8月に実施した再度の予備調査では、同じトレンチ2および3を開けて精査したところ、3トレンチにて3つの墓坑の可能性のある遺構が確認された。

(2) 基本層位

調査対象地の南西側に設定した幅1.2m、長さ9mの試掘坑で、西側では深さ約1mで鉄釘を伴った墓坑1ST002と不明遺構1SX003を検出した。東側半分は地山面の深さを探るため地表下1.6mまで下げたが、ここでも釘を伴った墓坑1ST001を検出している。

トレンチ内での基本的な層序は近現代の遺物を含む表土層の下に、山が崩壊したような花崗岩風化土による2次層の黄白色層があり、その下に鎌倉期頃の中国産陶器壺などを持つ厚さ40cm以上の厚い灰茶色土層がある。その下に全体を覆う明褐色土があり、その下面に1ST001や1ST002が検出された。遺構は遺物を包含する茶灰色土層を基盤とし、地表下1.4から1.6mで花崗岩風化土の基盤層である淡明黄褐色土層に至る。

(3) 検出遺構

墳墓

1ST001 (Fig.130)

3トレンチの東側で確認された幅0.6m、長さ1.4m以上の長方形を呈す遺構で、内部から2個以上の酸化した鉄釘が確認され、木棺墓と考えられる遺構である。埋没土は淡灰褐色を呈す。長軸はほぼ南北の正方位に合う。

1ST002 (Fig.130)

3トレンチの西側で確認された幅0.7m、長さ1.3m以上の長方形を呈す遺構で、内部から酸化した鉄釘が確認され、木棺墓と考えられる遺構である。埋没土は淡灰褐色を呈す。長軸は1ST001と同様にほぼ南北の正方位を探る。遺構上面には鉄塊のほか、緑色片岩の円礫と平瓦片があり、墓坑北東側には長さ0.6m、幅0.3mに亘って炭が集積している箇所がある。

その他の遺構

1SX003 (Fig.130)

3トレンチの西側で確認された幅1m、長さ1m以上の隅丸長方形を呈す遺構で、埋没土は淡灰褐色

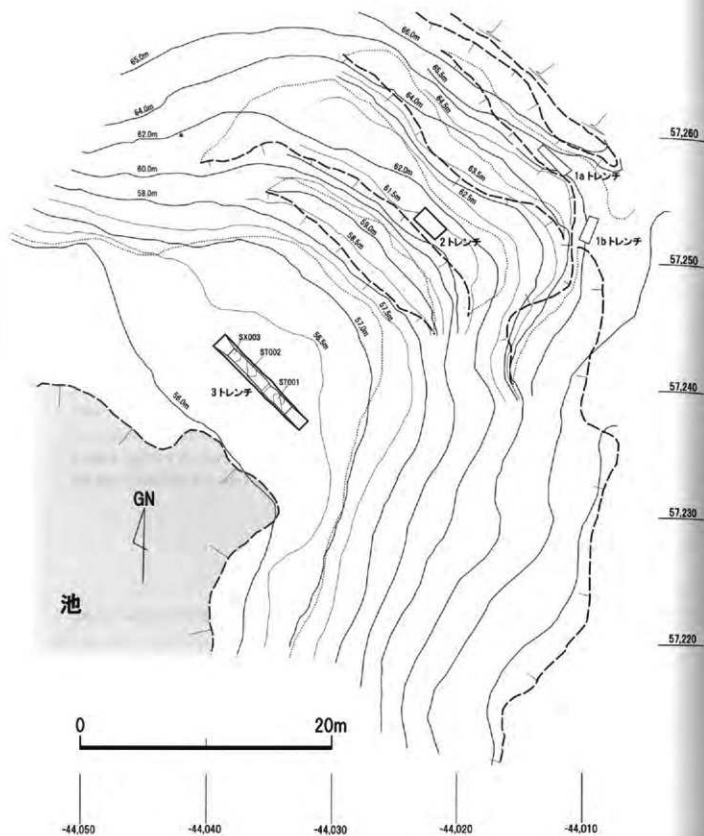


Fig.128 山ノ井遺跡第1次調査全体図 (1/300)

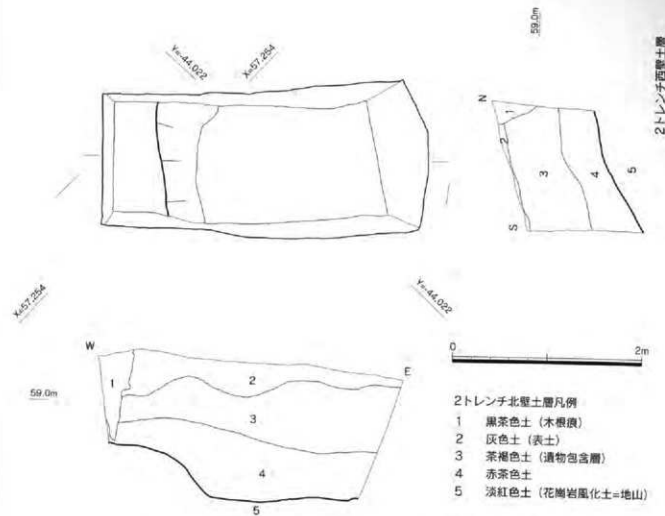


Fig.129 山ノ井遺跡第1次調査2トレンチ実測図 (1/40)

を呈す。遺構上面に緑色片岩の円礫が乗っている。1ST002同様に南北に長い墓坑である可能性もある。

(4) 出土遺物

2トレンチ出土遺物 (Fig.131)

土師器

小皿 a (1) やや肉厚の体部で、摩耗のため調整などは不明。焼成は良好で淡褐色を呈する。底が平坦であり余り段階の製品か。

須恵器

甕 (2) 胴部の小片で、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で硬質。外面に縦格子目のタタキがあり、内面には同心円の充て具痕跡がある。外面は淡灰色、内面は黒灰色を呈する。厚みから小型の部類に属すものと考えられる。

石類

円礫 (3, 4) 緑色片岩の自然石で扁平な円礫状を呈す。観世音寺周辺の丘陵地、原遺跡 (天台系山岳寺院)、宝満山遺跡群などで中世墓の標石として使用されている。石材は至近には無く、太宰府側と

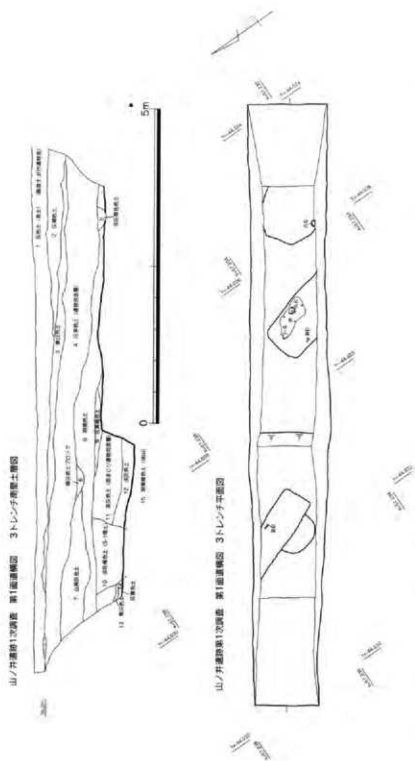


Fig. 130 山ノ井遺跡第1次調査3トレンチ実測図 (1/60)

四王寺山の対面にある糟屋側から調査されたものと考えられる。

3トレンチ表土出土遺物 (Fig.131)

龍泉原系青磁

坏 III-1a (5) 透明感のある青緑の釉が厚くほどこされたもので、体部の下位が屈曲し、高台は先細りする形状を呈す。

3トレンチ明褐色土出土遺物 (Fig.131)

中国陶器

壺 (6) 胴部下半の部位で、内面にロクロ目が顕著に見られる。胎土は淡赤褐色で、ややざらざらで褐色粒が多少含まれるB系のものである。

3トレンチ灰茶色土出土遺物 (Fig.131)

須恵器

坏 c (7,8) 屈曲する体部と底部の境近くに低い幅のある台形を呈す高台を持つ。焼成は硬質で淡灰色を呈す。大宰府土器編年III期の8世紀中頃の所産か。

土師質土器

すり鉢 (9) 淡黄灰色のしまりのない酸化焼成の胎土を持ち、内面縦方向に摺り目がわずかに残る。13世紀後半以降の所産。

石類

円礫 (10~14) 緑色片岩の自然石で扁平な円礫

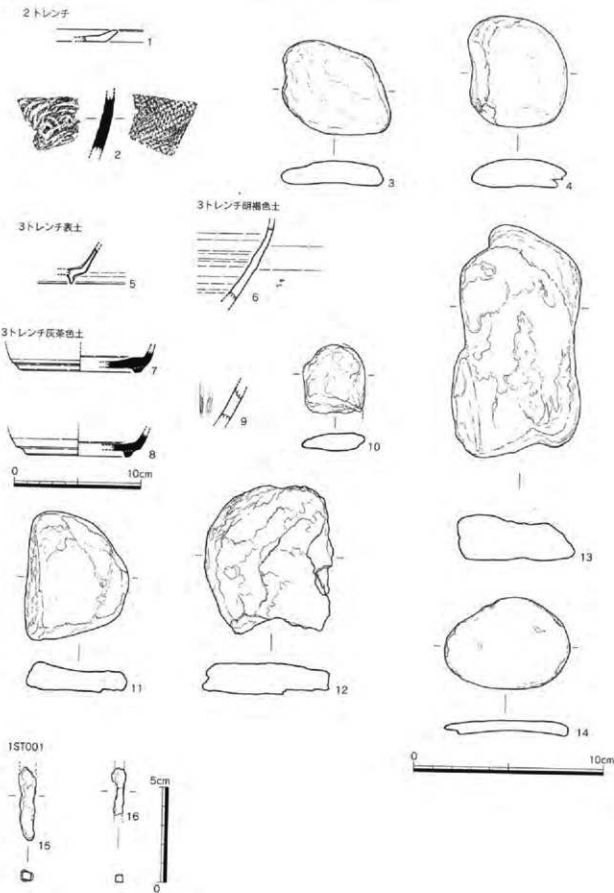


Fig.131 山ノ井遺跡第1次調査出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

状を呈す。特に人為的な加工が認められるわけではないが、12は下半が破砕されたような状態で欠損する。

墓

1ST001出土遺物 (Fig.131)

金属製品

鉄釘 (15, 16) 15は長さ3.9cm以上で幅は0.9～0.6cmの大きさのもので、先端部になるものか、錆が進行し膨張気味である。16は長さ2.5cm以上で幅は0.4cmを測る。

(5) 小結

本調査地は南に開いた狭小な谷とそれを取り囲む丘陵からなるいわゆる「谷地」であり、その中央の平地に於いて本棺墓群が発見された。

本棺墓は中国華南産陶器壺を有す土層である灰茶色土層に覆われており、太宰府地域の中世墓の付帯要素である緑色片岩の円礫を持ち、火葬の段階以前であることから鎌倉時代後期までに形成された遺構と判断される。

中世観世音寺の周辺ではこのような「谷地」が鎌倉時代に至って活発に土地利用が進んだことが発掘調査によって明確になっており、推定金光寺跡、安養院跡、崇福寺心宗庵跡例などでは、谷地に主体施設としての建物群、その後背丘陵にその主体者が営む奥つ城としての墳墓群が発見され、一つの定型化した遺跡構造を持っている。

今回の山ノ井遺跡での発掘調査では丘陵裾部において中世墓が確認された。その墳墓には観世音寺子院群周辺の中世墓に特有の円礫状の緑色片岩が伴っていた。円礫状の緑色片岩の分布を地表観察で確認したところ「山ノ井」の丘陵全体に広がっており (Fig.132)、既に史跡指定された西側隣地の丘陵地と同様の遺跡環境であることが判明した。

本遺跡の「谷地」の南側の前面は、現在では日吉神社南東側の観世音寺区の小集落になっているが、「大野城太宰府旧蹟全図北」(註1)ではこの箇所に観世三名水の一つである「五色ノ井」と「エソタダイリ」(ヤクドウ)と並んで山裾に「サストアト」と記載されている (Fig.133)。この「谷地」の墓地経営の主体者が観世音寺座主であった可能性が指摘され、観世音寺子院群中に置いても重要な位置を占める場所と言える。

本遺跡のある山ノ井の丘陵地は観世音寺子院群の中では北東を占め、禪宗寺院である横岳山崇福寺との寺域境の要にあり、さらに観世音寺座主との関連が指摘される。このことから本来は史跡指定地に含まれるべき場所と考えられる。県道側から見た史跡観世音寺及び子院群とそれに連なる特別史跡大野城跡をつなぐ重要な緑地帯としての存在価値を合わせて考える時、保全に努めるべき丘陵地と考えられる。

註1) 「大野城太宰府旧蹟全図北」の画像掲載については歴史資料所有者の木村敏英氏にご配慮を頂いた。記して感謝いたします。

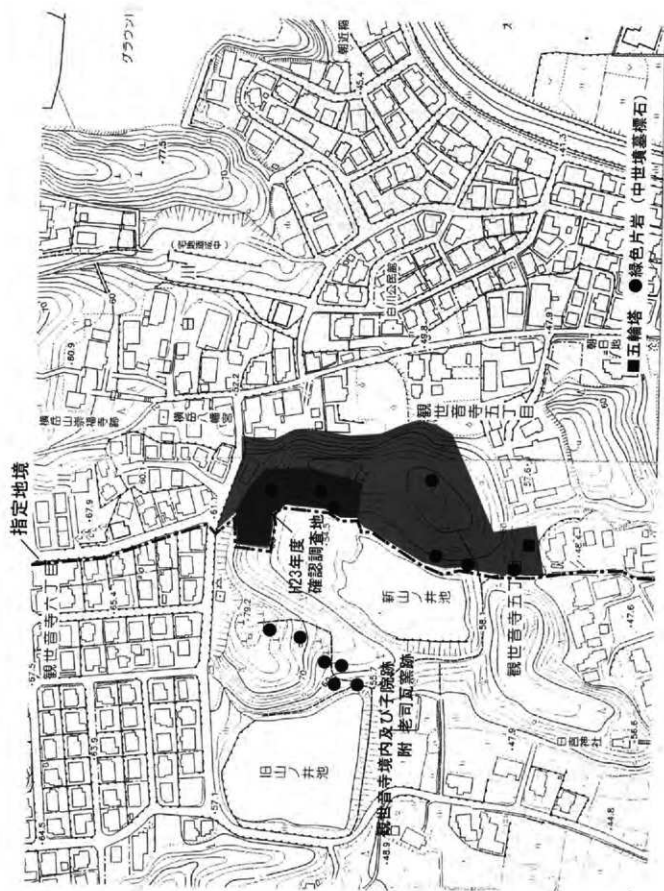


Fig.132 山ノ井丘陵の遺物分布図



1. 山ノ井遺跡調査地点位置図



2. 『大野城太宰府旧蹟全図北』の観世音寺



3. 「ザスノアト」と山ノ井

Tab.17-1 山ノ井遺跡第1次調査 遺構一覧表

遺構番号	遺構番号	種類	施設
1	1371000	本館基	3トレンチ
2	1371000	本館基	2トレンチ
3	1320003	本館基裏側	3トレンチ

Tab.17-2 山ノ井遺跡第1次調査 出土遺物一覧表

3トレンチ	鏝
瓦葺部	小皿 4
石階	円筒(緑色片石) (2)
3トレンチ南側土	
遺構部	坪・c2
土階部	赤土
穴埋部	砂土
石階	円筒(緑色片石) (2)
3トレンチ中央部土	
瓦葺部	片? (瓦割) (1)
3トレンチ北側土	
遺構部	坪・c2
土階部	赤土
土階上層	砂土
石階	円筒(緑色片石) (2)
3トレンチ北土	
遺構部	坪・b4
S-1	
瓦葺部	瓦葺 (2)

Fig.133 山ノ井遺跡の地理的環境

V. 特論

大宰府条坊跡第 210-2 次調査出土五輪塔空風輪について

高橋 学・西野元勝

はじめに

今回報告した条坊跡 210-2 次調査（以下、条 210-2 と略す）において、現地表面に集積されていた石塔群を 210-2SX030 としてとりあげた。本文中に遺構としての概要は記しているため、細かい説明は繰り返さないが、そのなかで特に注目されるものとして、五輪塔の空風輪 2 点をあげたい。この五輪塔の残欠である空風輪に注目する理由としては、その大きさと見事な造形があげられる。考察の手続きとしては、五輪塔の観察の上から導くことができる情報をまず抜き出し、それらを手がかりとしてその位置づけを考えていきたい。

五輪塔の名称としては、現地で集積群群に向かって左側（西側）に位置するものを No.1 として、右側（東側）に位置するものを No.2 として記述していく。

(1) 各塔の概要

石製品 (Fig.135、Pla.5-2、6-1・2)

五輪塔(1,2) No.1 と No.2 ともにわずかに欠けたところはあるが、完形に近い五輪塔空風輪である。空風輪は分割できるものではなく、一体で削りだしている。ともに表面は時間の経過による風化が進行している。表面に梵字が刻まれていない、いわゆる無種子の五輪塔である。

No.1 は、頂部と柄の一部を欠損し、残存高 44.5 cm を測る。柄を除いた高さは 41.3 cm、石材は、薄いピンク色の粒子を含む花崗岩製。(註 1) 腕状の風輪に、滴状の空輪が乗る。空輪の最大幅 31.0 cm に対し、風輪の幅は 35.0 cm と風輪がやや広い。柄は円柱形で、高さ 3.5 cm であり、空風輪の高さに対して低い。空輪の底面も内輪側にえぐっており、古相を呈す。空輪の形状に注目すると、明瞭な肩をもたずきれいな円弧を描いている。これらの特徴から、13 世紀末～14 世紀初頭のものと考えられる。

No.2 は、頂部と柄の下部に一部欠損し、残存高 45.3 cm を測る。柄を除いた高さは 40.2 cm、石材は微細な黒色粒子を多く含む花崗岩製。(註 2) 腕状の風輪部に、滴状の空輪部が乗る。空輪の最大幅は 30.0 cm、風輪の最大幅は 32 cm。空輪は 1 に比べてやや肩が張り出す。風輪上部には傾斜がつき、空輪と風輪の間の溝はしっかりと彫られている。柄は円柱状で、高さ 5 cm と No.1 に比べて高い。形態的な特徴から判断すると、No.2 は No.1 の空風輪を真似て製作した可能性がある。14 世紀前半のものと考えられる。

(2) 形状・法量からの位置づけ

条 210-2 出土の五輪塔空風輪は、どちらも太宰府市域の石塔を知る上で重要な資料である。そのため、ここではその位置づけを形状・規模の面から検討する。

No.1 は、近畿地方を中心に分布する所謂「中央形式」といわれるものである。石材も兵庫県御影石の可能性があり、近畿からもたらされた可能性が指摘できる。九州で 14 世紀以前の御影石製大型五輪塔としては、五大種子の四転が配されているなど違いがあるが、長崎県平戸市所在の神応寺跡五輪塔（大渡長者の墓）の 2 基が知られるのみである。(Fig.136 左画像参照) そのため、No.1 は九州では

条 210-2 次 SX030 石塔 No.1

条 210-2 次 SX030 石塔 No.2

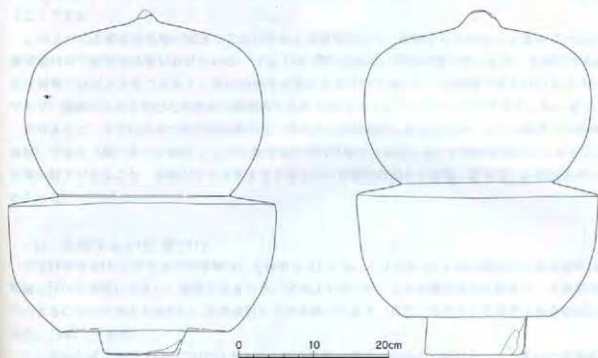


Fig.135 条坊 210-2 次 SX030 出土石塔実測図 (S-1/5) (西野作図)



長崎県平戸市 神応寺跡五輪塔 (西野撮影)



福岡県太宰府市
戒壇院境内五輪塔 (西野撮影)

Fig.136 五輪塔画像

数少ない御影石製大型五輪塔であるといえる。

No.2は、石材が花崗岩製のため、凝灰岩製や砂岩製と比較すると、在地で製作された可能性が高いと考えられる。No.2の特徴としては、風輪上部に傾斜がつき、空輪と風輪の間の溝が深く彫られていることである。

この2つの五輪塔空風輪と関連して注目される五輪塔として、現場から350mしか離れていない成増院境内の五輪塔空風輪があげられる。(Fig.136 右の五輪塔) 風化が進んでいるが、花崗岩である。表面観察ではピンク色ではなく、黒色の粒子が混じる花崗岩であった。空風輪の高さはおよそ40cmであり、風輪の丸みを帯びた形状から時期的には条210-2のNo.1に近いものと考えている。(註3)

参考までに、太宰府市域で最古の五輪塔は、京都市北村美術館にある伝宝満山出土五輪塔(平安時代後期)である(狭川真一1998)。この五輪塔は太宰府市域では産出しない阿蘇塔結凝灰岩であること、火輪の軒下が反ること、水輪がナツメ形を呈するという形態的特徴から所謂「肥後型」の構成要素が認められる。

(3) 規模からの位置づけ

太宰府条坊210-2次出土の空風輪は、1は高さ41.3cm、2は高さ40.2cmと周辺の小型五輪塔の空風輪と比べて格段に大きい。部材であるため、全高は不明だが、他の五輪塔との比較から、五輪塔全体の大きさについて考えてみたい。各種資料から空風輪の大きさ(高さ)を主として基準に表を作成してみた。(Tab.18 参照)

この表からは、条坊210-2SX030出土の大型空風輪2基は、前述の比較対象としてあげた長崎県平戸市岩上町所在の神応寺跡五輪塔の数値に近いことがわかった。空風輪の大きさでの比較ではあるが、塔長の比率から考えると、最低でもこの五輪塔の塔長は、160cm程度はあったと思われる。空風輪が多少欠損していることから、本来42cm程度あったと仮定すれば、塔長180cm程度に復元できる。御霊神社、トーボージのデータを元に考えると、あながち外れてはいないだろう。塔長160cmと仮定しても、現在確認されている福岡県内の五輪塔では最大級の大きさになる。これより大きいものは県内では北九州市大興寺に所在する五輪塔である。地輪を欠いているが、無種子の大型品で7尺塔に復元可能という。花崗岩製で、造営時期は14世紀前半。同所にはほかにも同規模の五輪塔の残欠があるため複数の石塔があったことがわかっている。なお大興寺は律宗系寺院である。(註4)

(4) 成果と課題

ここまでわかってきたこととして、条210-2次で出土した五輪塔空風輪の特徴は以下の通りである。

1. 石材は花崗岩である。(搬入品の可能性が高いピンク色のものと、黒色粒子が混じるものにわかれる)
2. 無銘無種子である
3. 大きさの比較では県内でも最大級。九州一円でも30番内に入る。
4. 単独ではなく複数出土している。(註5)
5. 成増院境内五輪塔に同じタイプの火輪、地輪、水輪が確認できる。(註6)

これらの情報をふまえて、この五輪塔がこの地にあることの意味を考えていきたいと思う。まず、五輪塔の特徴(無銘無種子・大型である等)から、この五輪塔は律宗の影響でつくられた可能性が高いと考えた。これは、「律宗系五輪塔」と仮称されているものと同じである。(註7) 条210-2の発掘調査では13~14世紀と考えられる緑色片岩を使用した積み石墓が多く検出されているが、210-

Tab.18 九州大石塔表 (空風輪の大きさ比較)

番号	所在	所在地	時代	史料	材質	形状	高さ	風輪径	風輪径/塔径	空風輪径	空風輪径/塔径	空風輪径/塔径	備考
1	中津	大分県中津市大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	225.0	212.0	54.0	23.9	53.0	23.5	53.0	風文が、風輪径にほぼ等しい寸法で彫られている
2	津久井	熊本県津久井町	鎌倉時代	延喜式	麻石	207.7	25.7	57.5	28.0	43.0	19.6	43.0	同一塔
3	津久井	熊本県津久井町	鎌倉時代	延喜式	麻石	214.5	20.0	46.0	21.5	40.0	18.7	40.0	同一塔
4	大宰府	福岡県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	182.9	21.3	54.2	25.3	56.3	26.0	54.4	同一塔
5	大宰府	福岡県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	206.3	26.3	24.6	11.7	31.1	14.4	31.1	同一塔
6	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	232.7	21.1	43.0	18.6	37.5	17.1	37.5	同一塔
7	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	271.8	22.9	24.4	11.2	31.7	14.3	31.7	同一塔
8	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	206.6	22.0	42.0	20.5	25.0	12.2	25.0	同一塔
9	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	218.0	21.7	42.5	20.0	30.4	14.2	30.4	同一塔
10	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	229.7	21.2	20.6	9.7	26.8	12.2	26.8	同一塔
11	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	203.0	20.5	26.0	12.9	26.0	12.2	26.0	同一塔
12	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	194.2	15.7	28.2	14.7	24.4	12.2	24.4	同一塔
13	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	197.4	15.5	42.0	21.5	33.0	15.6	33.0	同一塔
14	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	193.3	15.3	36.4	18.8	33.4	16.5	33.4	同一塔
15	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	169.5	14.7	34.5	23.5	33.6	19.0	33.6	同一塔
16	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	221.0	18.0	24.0	12.2	25.0	12.2	25.0	同一塔
17	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	185.0	18.7	20.0	10.7	26.0	12.2	26.0	同一塔
18	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	182.0	13.0	40.0	20.0	27.0	13.5	27.0	同一塔
19	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	194.2	15.7	33.2	16.6	34.4	17.2	34.4	同一塔
20	石橋	熊本県石橋町	鎌倉時代	延喜式	麻石	170.8	15.7	29.8	15.0	29.4	14.5	29.4	同一塔
21	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	400	18.0	23.3	12.4	41.3	21.3	41.3	同一塔
22	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	378.2	15.1	37.6	18.6	34.7	19.3	34.7	同一塔
23	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	400	17.2	33.0	16.6	30.0	14.0	30.0	同一塔
24	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	102.8	16.2	26.0	12.9	26.8	13.0	26.8	同一塔
25	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	128.6	16.3	36.2	22.2	23.5	11.5	23.5	同一塔
26	大宰府	熊本県大宰府大字	鎌倉時代	延喜式	麻石	128.6	16.3	36.2	22.2	23.5	11.5	23.5	同一塔

2ST020のように大型五輪塔が設置されてもおおしき立派な石組みも見つかる。Fig.109の周辺地形図をみると、調査地は平野の奥まった山裾にあたり、現状でも平坦面が複数確認できる。これらを加味して考えると、条210-2の調査地、その周辺の平坦面には大型の五輪塔が立ち並び、その周辺は積み石墓が点在した光景が想像できる。

ここで五輪塔がいわゆる律宗系五輪塔であることに再度注目すると、13世紀～14世紀段階の条210-2次の調査地には律宗系五輪塔が立ち並んでいたことになる。つまり、それは律宗系寺院の墓所、いわゆる奥の院的な空間であったことを示しているのではないだろうか。

実は太宰府における律宗寺院の展開については、早くから八尋和泉氏が指摘している。(註8) その成果から、大宰府に所在する西大寺末寺としては、宰府最福寺の存在が知られていた。ただし史料からは推定される最福寺に関しては、朱雀信成氏が指摘するように、4つの最福寺が想定されている。(註9) ここで関係するのは、明徳2年(1391)および永享8年(1436)の西大寺末寺帳に記載されている「宰府最福寺」となる。最福寺の場所の推定には、「太宰府旧蹟全図本」が参考になる。これをみると成増院の北西の方向に「サイアツジ」とある。近辺は九州歴史資料館が過去に発掘調査をしており、掘立建物群や、庭園遺構が出土したほか、墨書碁石や卒塔婆が確認された。(註10) 最福寺の寺としての建物や関連施設は、大宰府史跡第7次調査で調査された遺構・遺物であった可能性が高いが、全面を調査したわけではないため、成増院の裏にあたる北側周辺が、最福寺であった可能性も十分考えられる。そう考えると、その後背地にあたる日吉神社の東側から条210-2次の調査地点までは、山に抱かれた山腹の平坦面が平つと続いていく。条210-2次調査地点から数百メートルという距離は近すぎず遠すぎずの適度な距離であり、最福寺と奥の院との距離関係だと考えても不具合はないだろう。「大野城太宰府旧蹟全図本」によれば、条210-2次の南西あたり、旧蔵世社の中心部に「サヌノアト」と記載があり、蔵世音寺、またその子院とのつながりを考えさせるものであることも興味深い。

狭川氏の指摘(狭川2012)にあるように、律宗系五輪塔が寺院の歴代住職の墓塔群であるならば、条210-2次調査地点は、最福寺の歴代住職の墓塔跡があったと考えられる。現在、成増院境内に安置されている五輪塔残欠の構成から考えて、最低三基の律宗系五輪塔があったことから考えると継続的な墓地利用があったことが推定できる。

成増院に点在する花崗岩の五輪塔については、元々は条210-2次の周辺場所にあったものが、最福寺の廃地に伴って管理が行き届かず崩壊したものを、いつの段階かは不明だが、成増院に持ち込んだものと考えられている。

今回、条210-2次調査出土の五輪塔空風輪の観察により、同調査現場が西大寺末寺最福寺の奥の院であった可能性を指摘した。今後の課題として、成増院の歴史的展開と律宗の関係、また蔵世音寺や同子院群内の歴史の解明、成増院内や周辺の五輪塔(石造物類)の詳細調査の充実があげられる。これらを調査研究していくことで、太宰府の中世を解明していくのではないかと考えている。その際には五輪塔をはじめとした石造物の分析が、大宰府の中世史解明の新たな手がかりになる感触を得たことは筆者にとって新鮮な喜びであった。(註11)

文末になったが、本稿作成にあたり多くの方に資料の提供とご教示を得た。(註12) 特に、財団法人元興寺文化財研究所の狭川真一氏には、図面データの提示、現地での指導や五輪塔の評価について重要な指摘をして頂いた。感謝申し上げる次第である。

註(1) このピンク色を写す花崗岩は、通常兵部卿六甲山産地産出の花崗岩と考えられており、御影石とも称されている。
 註(2) このような特徴をもつ花崗岩の産地は厳密にはわかっていないが、在地産と推定する考えもある。但し、厳密な石付産地の研究は迫ら

でおらず、今後の課題である。

註 (3) 戒壇院では、この五輪塔は「鳳真上の供養塔」として看板が立てられ紹介されている。石材の質と風化の具合や、形状の特徴から空無輪と火輪は同じ時期のセット関係と思われる。火輪には「開山大誓願」と追刻がされている。また、裾下部には古い層塔の石材が使用されている。今後、実測図の作成などを行っていく必要がある。五輪塔空無輪の形状はNo.1に近いが、石材の質はNo.2と共通する。

註 (4) 八尋氏、我川氏が指摘しているように、九州内での律宗系寺院には無輪子無輪の大五輪塔が伴う例が多い。たとえば、石塔院、旧淨光寺（浄光院蓮生寺）、玉泉寺、宝満寺墓地、大興禅寺があげられている。

註 (5) 単独の場合は、その墓地のシンボリックな意味がよいとされている。また、その場合は同規模の石塔は周囲には見られないことが多く周囲に墓が多く作られる。

註 (6) 戒壇院境内には、ほかに花崗岩製の五輪塔が点在しており、現状で14世紀代に作られたと思われる古手の五輪塔が、空無輪1、火輪2、赤輪2、地輪2点が確認できた。今後これらも実測図を作成して検討していく必要があるだろう。

註 (7) 狭川真一(2012)で、無輪無輪子の大型(15尺〜6尺以上)の五輪塔を「律宗系五輪塔」と定義している。

註 (8) 八尋和泉(1976)でふれられている。

註 (9) 朱重信編(2004)によれば、史料のみある最福寺は、1に西大寺末寺のもの、2に太宰府太皇太后院のもの、3に観世音寺末寺のもの、4に淨光院院のものか確認できるといふ。それぞれが一致するものか、併存したものか史料の範囲で不明であるとする。3の観世音寺末寺のものは、「筑前國風土記」に記載されている観世音寺四十九院の中にある「西園寺」との関連性がうかがえる。

1と3の寺が同じ寺をさすのであれば、観世音寺寺院群内に律宗寺院である最福寺があったと理解できる。「太宰府旧跡全図」に記載されている位置が正確だとすると、素210-2次の律宗系五輪塔と戒壇院境内の律宗系五輪塔の存在から戒壇院の北側素あたりには最福寺の推定地を考えた。以下、余談であるが、総記の記載中の四十九院のなかで、西園寺が2つ記載されて重複していることも単純なミスではなくて、何らかの意味があるかもしれないと考えられるのではない。余くの想像に過ぎないが、たとえば左方は、最福寺を示して重複してなく、最福寺と西園寺という2つの寺の伝承を首のみで伝えていく可能性も考えないといけないだろう。

註 (10) 西園寺推定地の調査情報は以下の通りである。調査名称：大宰府史跡第78次調査 遺構：池を伴う廻廊、礎石建物2棟、独立柱建物2棟。遺物：朝日文苑瓦片、位牌、卒塔婆、佛經。内容：中心となる建物は東西6間×南北2間以上の礎石建物。その南西に3間×3間の同時期の礎石建物に伴う(後に独立柱建物に建て替えられる)、3間堂か。出土遺物から14世紀中頃から16世紀代にかけて存在している。田小学は安養寺であるが、「太宰府旧跡全図」ではこの付近を「サイフクジ」としている。

註 (11) 本論の執筆分は、西野が1、各塔の概観、2.形状・法量からの位置づけ、の素案を作成して、それを元に高橋が、はじめ、3.規模からの位置づけ、4.成果と課題を加えて全体を構成したものである。最終的な年代判定や位置づけに関しては西野の意見を参考にしながらも、高橋が若干修正している。よって文責は高橋にある。

註 (12) Fig.136の五輪塔の西側脚縁に関しては、最教寺(長崎県平戸市)、戒壇院(福岡県太宰府市)それぞれのお寺から許可を頂いている。記して感謝いたします。

参考文献

- 多田隈豊秋 1975 『九州の石塔 上巻』財団法人西日本文化協会
八尋和泉 1976 『筑前飯盛神社神宮寺文殊堂文殊菩薩摩訶像および豊前大興禪寺如意輪観音像について』『研究論集2』九州歴史資料館
高倉洋彰 1977 『筑紫観世音寺子院小考』『研究論集3』九州歴史資料館
多田隈豊秋 1978 『九州の石塔 下巻』財団法人西日本文化協会
(財)元興寺文化財研究所 1995 『五輪塔の研究・平成六年度調査概要報告』
高倉洋彰 1996 『太宰府と観世音寺』海鳥ブックス18
狭川真一 1998 『附編 太宰府の中世石造物』『太宰府市史』建築・美術工芸資料編 太宰府市史編纂委員会
朱雀信城 2004 『市史だより180 四つのも最福寺(西福寺)』『太宰府市広報』
2004 『福岡県の地名』日本歴史地名大系第41巻 平凡社
九州歴史資料館 2007 『観世音寺-考察編』
狭川真一・松井一明 2012 『中世石塔の考古学 五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布』高志書院

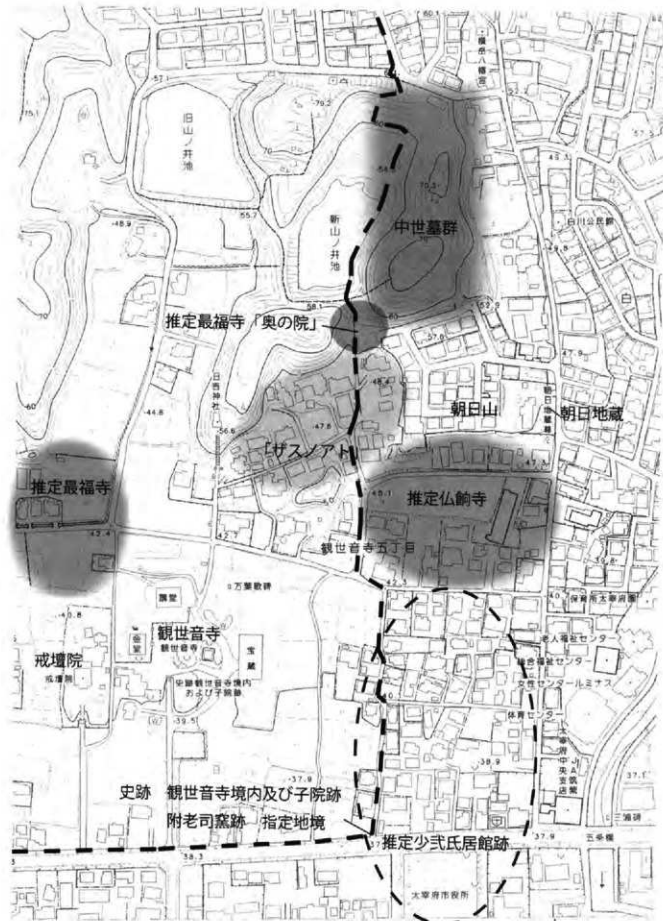


Fig.137 観世音寺寺院群の展開

VI. 総括

今回の報告書では、大字山ノ井、大字朝日地区を中心とした地域で行った埋蔵文化財発掘調査の成果について報告をしている。

山ノ井地区では、まず条210次として、朝日山を調査した。ここでは12世紀代の墓群、13～14世紀に使用されていた長大な堀が確認できた。墓からは12世紀代の陶磁器や土器と共に鏡や鉄などの副葬品が出土している。丘陵の頂部に所在する墓は、南に開けて平野を見渡せる眺望の良い地点に構築されていた。また、300枚の備前銭も出土している。これらはすぐ南側の御所ノ内地区の中世遺構群(少武氏の推定居館関係遺構群)との関係も考えられる。墓群に関しては観世音寺院群との関係も立地からうかがえて興味深い。条210-2次では中世墓群が検出された。特論で論じているように、この条坊210-2次調査地点は西大寺末寺である宰府最福寺の奥の院であった可能性が高い。もしそうであれば、奥の院を発掘調査した大変珍しい事例となる。この最福寺は、観世音寺院の1つであった可能性もある。山ノ井遺跡は『大野城太宰府旧蹟全図北』に「サスノアト」と記載された地域の北部にあたる。今回の発掘調査で中世墓が検出されたことにより史跡観世音寺および寺院群と密接に関係している可能性が指摘できた。

朝日地区では条193次、283次、284次の調査を行った。条193次では、石組基礎建物、壁建ちの建物や、礎石板を用いる大型の掘立柱建物が2棟、土塀の可能性のある遺構等、特徴的な遺構が集中して検出されている。また、井戸の断面観察になるが複数面の遺構面も確認された。この地域は、調査地周辺の地理的歴史的環境でも触れているとおり、観世音寺49寺院の1つである仏願寺の推定地であった。条193次で検出された遺構・遺物などは寺院跡に関係するものであった可能性が指摘できる。条283・284次は隣接しており、朝日地区の東端にあたる。それぞれ土地は削平されて遺構の残りが悪いが、大宰府条坊割に関わる区割りと思われる段落ちが検出されている。その他は13～14世紀段階の遺構が多く、少武氏との関係性が考えられる。

以上のように、山ノ井地区、朝日地区とも中世段階の観世音寺院群や少武氏に関係する重要な遺構が検出された重要な地域であることがわかった。過去の調査例をみても両地域の地下には全面にわたって遺構が良好な状態で残存していることが明白である。

このことから山ノ井地区と朝日地区は隣接する「史跡観世音寺境内及び寺院跡附老司瓦窯跡」と同様の価値を持ち、将来的には史跡に指定され、保存していくべき地域と考える。

写真図版

写真図版には、遺構全景と遺物の一部を掲載している。
その他の遺構写真および遺物写真は、附録のCDに収録している。
遺物写真に記載している番号は、Fig番号-Fig内の通し番号となっている。

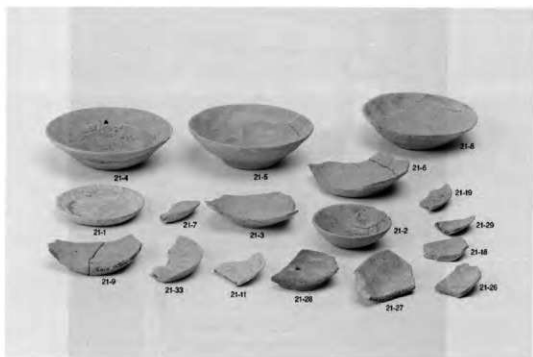


Pla.1-1 条坊跡第193次調査 全景 空中写真(上が北)



Pla.1-2 条坊跡第193次調査 SX224 (南から)

Pla.2

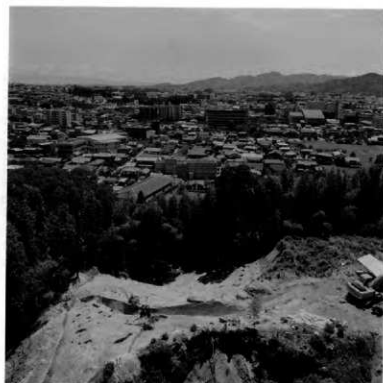


Pla.2-1 条坊跡第193次調査 SB010a・b・c・d・050茶褐色土、080a・b・c・d出土遺物



Pla.2-2 条坊跡第193次調査 茶色出土遺物

Pla.3



Pla.3-1 条坊跡第210次調査調査区より南を望む 空中写真(上から南)



Pla.3-2 条坊跡第210次調査 SX035 完備状況(西から)



Pla.4-1 条坊跡第210次調査 ST010 淡茶色土出土遺物



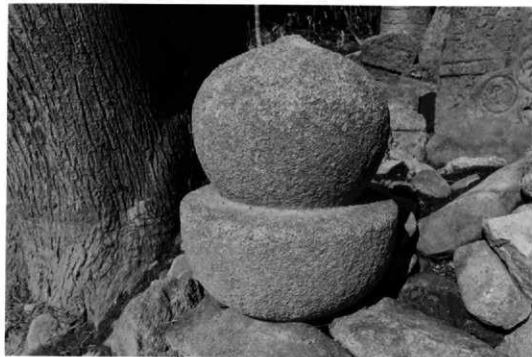
Pla.4-2 条坊跡第210次調査 SX001 明茶色土出土遺物



Pla.5-1 条坊跡第210-2次調査 全景 空中写真(上が北)



Pla.5-2 条坊跡第210-2次調査 SX030 現況状況詳細(南西から)



Pla.6-1 条坊跡第210-2次調査 SX030五輪塔空風輪 No.1



Pla.6-2 条坊跡第210-2次調査 SX030五輪塔空風輪 No.2



Pla.7-1 条坊跡第283次調査 全景 空中写真(上が南)



Pla.7-2 条坊跡第283次調査 SE005完備状況(東から)



Pla.8-1 条坊跡第283次調査 SX015 暗灰色土出土遺物



Pla.8-2 条坊跡第283次調査 SK025 出土遺物



Pla.9-1 条坊跡第284次調査 全景 空中写真(上が南)



Pla.9-2 条坊跡第284次調査 SK001 完掘状況(西から)

Pla.10



Pla.10-1 条坊跡第284次調査 SE010 黒灰色土・黄灰色土出土遺物



Pla.10-2 条坊跡第284次調査 SK001 黄灰色土出土遺物

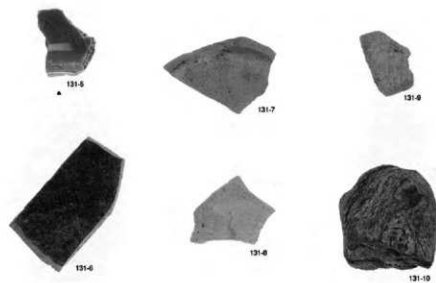
Pla.11



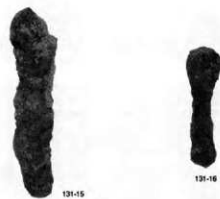
Pla.11-1 山ノ井遺跡第1次調査 調査区全景(南から)



Pla.11-2 山ノ井遺跡第1次調査 3トレンチ近景(東から)



Pla.12-1 山ノ井遺跡第1次調査 3トレンチ出土遺物1(表)



Pla.12-2 山ノ井遺跡第1次調査 ST001出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ださいふじょうほうあと
書名	大宰府条坊跡 43
題名	大宰府条坊跡第193・210・210-2・283・284次調査、山ノ井遺跡第1次調査
シリーズ名	大宰府市の文化財
シリーズ番号	116集
編著者	高橋学、山村信英、宮崎高一、西野元勝
編集機関	大宰府市教育委員会
所在地	福岡県大宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2013(平成25)年3月28日

よりのな 所収遺跡名	発坊 【随山指定案】	よりのな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
ださいふじょうほうあと 大宰府条坊跡 第193次	左第1条9坊	大宰府市 観世音寺	402214	21050-03	56950.00	-43869.00	897047	19970629	570	専用住宅建設
ださいふじょうほうあと 大宰府条坊跡 第210次	左第1条8・9坊	大宰府市 観世音寺	402214	21050-010	57024.578	-43872.981	2000047	20000309	3798	宅地造成
ださいふじょうほうあと 大宰府条坊跡 第210-2次	左第1条8坊	大宰府市 観世音寺	402214	21050-010-2	57068.075	-44064.785	20001225	20000309	193	宅地造成に伴う 公園整備
ださいふじょうほうあと 大宰府条坊跡 第283次	左第2条9坊	大宰府市 観世音寺	402214	21050-283	56920.0	-43853.0	20100806	20100901	178	専用住宅建設
ださいふじょうほうあと 大宰府条坊跡 第284次	左第2条9坊	大宰府市 観世音寺	402214	21050-284	56930.0	-43822.0	20100902	21000300	201	専用住宅建設
山ノ井遺跡 第1次	発坊外	大宰府市 観世音寺	402214		57250.0	-44030.0	20100801	20100802	2000	重要遺跡調査

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
大宰府条坊跡 第193次	都城跡	奈良・平安 鎌倉・室町	基の柱礎、石ノ井ノ遺跡、 石ノ井遺構(遺物基礎)	土師器、輸入陶磁器、瓦葺土屋、 土師土屋、朝鮮半島の遺物陶器	観世音寺49号棟の1つ 仏龕舎(ふつしょうじ)の所在地。
大宰府条坊跡 第210次	都城跡	平安・鎌倉・ 室町	竪、竪、土坑	土師器、輸入陶磁器、中世瓦、瓦葺 草文瓦葺、磁器(500枚×3)	朝日山の石段部
大宰府条坊跡 第210-2次	都城跡	平安・鎌倉	竪	土師器、輸入陶磁器、瓦軸頭、 石輪軸頭(磁器)	大黒五輪頭の磁水輪(2点)出土。
大宰府条坊跡 第283次	都城跡	奈良・平安・ 鎌倉	井戸、土坑、段落ち	土器、陶磁器、瓦	13世紀後半の遺構中心。少土器との類 推性。発坊前跡の可能性が認められる。
大宰府条坊跡 第284次	都城跡	平安・鎌倉	井戸、土坑、段落ち	土器、陶磁器、瓦	覆平されておらず遺構が現存。
山ノ井遺跡 第1次	寺院	中世	竪	土師器、瓦、 円筒状の緑色片岩	「大宰府遺跡発見記」ではこの場所(観世音寺本 のついで)と記述/後にこの場所(ヤシダ)の とある(2008年)に「P57」に記述されている。

大宰府市の文化財第116集

大宰府条坊跡 43

—大宰府条坊跡第193・210・210-2・283・284次調査、山ノ井遺跡第1次調査—

平成25(2013)年3月28日

編集 大宰府市教育委員会文化財課

発行 〒818-0198

福岡県大宰府市観世音寺1丁目1番1号

印刷 大成印刷株式会社

〒812-0892 福岡市博多区東那珂3丁目6番62号

太宰府市の文化財第 116 集
大宰府桑坊跡 43

大宰府桑坊跡第 193
山ノ井遺跡第 1 次調査

太宰府市教育委員会

平成 25 年度
(2013)

